
おぢばにおかえり

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おぢばにおかえり

【Nコード】

N5967C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

おぢば、つまり天理市に住んでいる大学生中村千里。彼女と高校生阿波野新一君の二人を中心とした天理教の小説です。所々に天理教の教えが出てきます。

第一話 はじめましてその一

おぢばにおかえり

第一話 はじめまして

はじめまして、わたし中村千里といいます。天理大学人間学部宗教学科一年です。天理高校を卒業して今は奥華詰所という場所から大学に通っています。

私は家が天理教の教会で高校からここに住ませてもらっています。まだまだ未熟な者ですが勇ませてもらっているつもりです。天理教では頑張るということを勇むと言っんです。

その天理教のこととかですが。今からお話させて頂きますね。ええと………。

あつ、すいません。お客様です。今詰所の事務所の受付にいるんですが誰か来られました。………また彼です。

「すいませ〜〜〜ん」

如何にも軽そうな男の子の声。黒い詰襟の天理高校の制服と青いビニールのカバンを持っています。背は高くて痩せていて薄茶色の髪に二重瞼で細長い顔。また来たのね。

「あの、君」

「はい」

不機嫌そのものの声で応えてあげます。今日は何しに来たのかしら。

「人を探しているんだけど」

「どんな方ですか？」

「あの、背は一五〇位で」

はいはい、どうせわたしはチビですよ。何か小学校高学年で止まってしまうってそれ位しかありません。仇名も『チビちゃん』とか言

われてきました。私の名前は『ちさと』と読みます。それで『ちつちゃん』とか『ちつち』とか言われてきましたがこんな仇名で呼ぶ人もいます。もう馴れました。

「髪は黒いストレートのショートヘア」

「黒のショートですね」

子供の頃からこの髪型です。自分では気に入っています。何気に伸ばそうかな、とも考えていますけれど。

「そうそう。それでね」

「他には何か？」

ムツとした顔で聞いてあげます。もうわかっていますから。

「目は二重の垂れ目で小さめで」

ええ、垂れ目ですよ。しかも少し小さいし。垂れ目は気にしてません。……実は胸がないのと同じ位。けれどそれはあえて自分では言わないですけれど。

「顔が白くてね。それで名前は」

「名前は？」

どうせ私のことですけれど。いつもいっつも失礼しちゃいます。

「中村千里さんです」

「中村千里さんですね」

「うん。ちよつと呼び出して欲しいんだけど」

「……何か用？」

眉を顰めさせて言いました。彼にはよくこうした態度を取ります。

「今日は」

「ああ、先輩」

けれど彼の態度はあらたまりません。相変わらずの様子です。

「そこにいたんだ。わからなかったよ」

「嘘でしょ。最初からわかっていたのに」

毎日ですから。もうわかっています。いい加減にして欲しいです。

「だって。小さいし」

「貴方が大きいの」

ジロリと彼を見上げて言いました。本当に背が高いから。私なんてつむじを上から覗き込まれたことがあります。それでつむじの形がどうかまで言われたことが。

「私は別に……あまり」

「まあまあ。小さくても気にしない気にしない」

「阿波野君が言ってるんですよ」

またムツとした顔で言い返しました。本当に頭にきます。

第一話 はじめましてその二

「今だっていつもだって」

「だってさ。その方が可愛いし」

えっ!?

「女の子はね。低い方がさ」

「な、何言ってるのよ」

何か。怒る気が失せてきました。何かこれもいつものような。

「阿波野君、そんなこと言っても私は」

「それでさ、先輩」

急に話を変えてきました。これもいつものことだったりします。

何かにつけ本当に調子がいいんです。全く困ったものです。

「実は神殿について来て欲しいんだけど」

「神殿に？」

天理教の神殿のことです。天理駅から商店街を昇ってその終わりに見えてきます。とても大きな神殿で最初見た時は何かとったりもしました。

「主任先生が先輩呼んで欲しいっていうから」

「それ早く言いなさいよ」

いつもいつも。何で大切なことを言わないのよ、本当に困っています。

「それで。主任先生は何処？」

「だから俺が案内するから」

「いいから。早く行かないと」

「だってさ。一緒に来てくれて言われたから」

「えっ!？」

今度は思わず声が出ちゃいました。意外な展開でしょうか。

「一緒に？阿波野君と私が？」

「うん。主任先生がそう言っただけさ」

「何かしら」

首を捻らずにはいられません。主任先生は土井先生という方でも真面目で温厚な人です。長い間ある教会の教会長をしてらして皆から一目置かれています。ちなみに天理教ではキリスト教みたい教会と呼びます。大教会があつてその下に分教会が何段階かであるんですよ。私の実家もそうした教会の一つです。

「二人でなんて」

「夫婦揃つてつてやつかな」

「それはみかぐらうたでしょ」

みかぐらうたは天理教の教典の一つです。十二の歌からなつていていまして今彼が言つたのはそのうちの一節なんです。

「それに私新一君の奥さんじゃないし」

「じゃあお姉さん？」

「馬鹿言いなさい」

年下だからつて。何を言い出すのやら。いつつもいつつも。

「私は妹が二人いるけれど弟はいないのよ」

「俺弟がいるけれど」

「そんなこと聞いてないでしょ」

聞いていないのに言つのがこの阿波野新一君なんです。全く困っています。

「夫婦だの弟だのつて。縁起でもない」

「縁起でもないんだ」

「まだ十九よ」

大学に入つたばかりです。まだまだこれからって言われているのに。

「それに新一君十七じゃない。何が夫婦よ」

「あつ、そうか」

「そうよ」

話しているうちにさらに頭にきてきました。

「それにしても。主任先生本当に仰つたのよね」

「だから俺と先輩と二人でっ」

「何だよ」

溜息が出ました。本当に嫌になります。こうした何かに不満を持つたりするのを天理教では『ふそく』と呼んでいます。

「新一君となんて」

「とにかくさ、呼んでるし」

これは本当みたいです。行かなくちゃいけないのは事実みたいです。

「行こう、早く」

「ええ、けれど」

事務所を開けたら。そう思っていると。

第一話 はじめましてその三

「ああ、いいよ」

「白石さん」

事務所には私の他に何人かいてくれるのが常です。今は白石さんという方がいてくれています。とても大柄で力持ちの人です。

「俺がいるから。阿波野君と一緒に行っておいで」

「そう言われるんでしたら」

「うん。じゃあ阿波野君御願いね」

白石さんはそう新一君に声をかけました。その時の彼の顔ときたら。

「了解です」

物凄く嬉しそうです。まるでピクニックに行くみたいに。どうしてそこまで楽しげなんだか。思わずそう尋ねたく思ったりもします。

「じゃあ先輩」

「わかったわ。じゃあ」

溜息を殺して彼に応えます。そうして事務所を出て。

「行きましょう」

「うん。じゃあ」

「……また仕掛けてきました。」

腕を組もうとしてきました。こうしたこともしょっちゅうです。

「調子に乗らないの？」

「今日も駄目なの？」

「今日も明日も駄目よ」

「じゃあ明後日は」

「ずっと駄目に決まってるでしょ」

古い考えて言われるでしょうけれど腕を組むなんて恋人とだけですよね。私実は今までもずと彼氏とかいなくて経験も全然ないんですけれどそれでもこうしたことは大切にしたいんです。まして私は

教会を継がないといけないですし。何かいつもいつもお気楽な新一君が羨ましいって思う時もあります。これは彼には言えないですけれど。

「腕を組むなんて」

「じゃあ手を繋ぐのは？」

「もつと駄目よ」

ふざけないでと言いたいです。そんなこと。

「言っておくけれど肩抱いたりしたら手つねるから。覚悟しておきなさいよ」

「いいじゃない。今頃そんなことでさ。いちいち言わなくても」

「言うわよ。それに私と神殿まで行くだけでしょ」

不機嫌な目で新一君を見上げて言いました。本当に背だけは高いです。そのせいで頭のとっぺんを見られてあれこれ言われるのは気持ちいいことじゃないですけれど。

「デートじゃないでしょ、違う？」

「僕はそれでもいいけれど」

「私はよくないの」

本当に真面目にしなさい、って言いたいです。

「とにかく行くわよ。いいわね」

「わかったよ。じゃあ神殿までね」

「二人で行くだけね」

何度も言葉に釘を入れてから二人並んで行きます。長い商店街を進んで今から神殿です。

第一話 完

第二話 神殿その一

第二話 神殿

おぢばの商店街は長いです。けれど一直線なので迷うことはないです。

雨の時なんかはアーケード街なのでとても楽です。だからここを歩くのは好きです。これで何かと手間のかかる男の子を連れていなければもつといいんですけれど。

「何かこの商店街も慣れてきたね」

「慣れたの」

「俺さ、住んでるとこ結構田舎だしさ」

新一君は奈良の田舎の方に家があるそうです。そこから通っています。天理高校は全国から集まるので寮があるのですがそれでも奈良県内から通う人も多いんです。全体の半分位がそうじゃないでしょうか。

「こんな長い商店街ってあまり歩かなかったから」

「そうなの」

何か私にはわからない話です。私の実家は須磨で神戸には長い商店街も多いですから。こうした話は実感がありません。

「だからさ。慣れるまでに時間がかかったよ」

「私は別にだけれど」

「そういえばあれだよね」

私の方に顔を向けて言ってきました。

「先輩って子供の頃からずっと天理……いやおぢばに帰ってきてたんだよね」

ここは人間創造の場所である元の場所です。それを『おぢば』と呼びます。人間を創った言うならば故郷ですからここに来ることを『帰る』って言うんです。

「ええ。こどもおぢばがえりとか祭典で」

こどもおぢばがえりは毎年夏にやるお祭りです。七月の末から十日程します。色々な催しやパレード、花火とかがあつてとても楽しいです。祭典は毎月あるものと決まった日に行われるのがあります。それも何時かお話させて頂きますね。

「結構帰つてたけれど」

「で、高校は寮だったし」

「それは貴方も知つてるでしょ」

また言葉をとんがらせました。嫌な思い出があるんです。

「毎日夜に前まで来てたんだから」

「あれは偶然だって」

「嘘じゃない、そんなの」

天理高校の寮は幾つかあります。そのうち普通の女の子は東寮という場所に住むことになっています。ちなみに男の子は北寮という場所です。

「大体駅から全然違う場所にしかも夜に」

「だって通学路だから」

「電車通学で!？」

駅から全然違う場所に毎日来ていたんです。本当に迷惑でした。

「嘘ばかり。部活も忙しくなかったのに」

「用木コースだったし」

天理高校は二つのコースがあるんです。普通の教養コースっていうコースと用木っていう天理教のことを深く勉強させてもらうコースと。私は教会の娘ということもあつて用木コースでした。ちなみに新一君も何故か用木コースでした。

「勉強もしていたし」

「高校の図書館で？」

「他には大学の図書館とかさ」

天理大学の図書館は凄く大きいです。蔵書がかなりあります。

「あそこで」

「毎晩夜までしたいたの」

「今でもそうだよ」

何でも彼優等生らしいです。信じられないですけど。

「ずっと」

「真面目ね」

「だって暇だし」

すっかりさつきとは矛盾することを言ってます。けれどそんなの気にしないです、彼は。

「先輩に会うまで」

「ほら、やっぱり嘘だったじゃない」

わかつていましたけれど。

「何で私なのよ」

「何でかな」

「迷惑していたんだから。止めて欲しかったわよ」

「俺はそうじゃないけれど」

勝手ですよ。すごい自分勝手なんです、彼。だから困ってるんです。

「だから別にいいじゃない」

「ふざけないでよ。大体ねえ」

またキツと睨んでいます。

「私は新一君とは一緒に歩きたくも」

「あつ、着いたよ」

気付けばもう商店街を出ていました。目の前にすごく大きな和風の建物が見えます。そこが神殿なんです。

「主任先生ここにおられるから」

「わかったわ」

話を誤魔化されて何か不愉快ですけどとにかくそっちに考えを移します。

「それで何処におられるの？」

階段をあがって神殿の構内に入ってお辞儀をします。それから新一君に尋ねます。

「主任先生は」

「さあ」

すっごい無責任な返事ですね。本当にこんなのです、いつもい
つも。

「何処かな」

「何処かなってちよつと」

また怒ってしまいました。だって呼んでるっていうから来たのに。
「何処であつたのよ」

「西の礼拝場」

神殿は四つの礼拝場があります。東西南北です。他には『おやさ
ま』と御呼びする教祖であられる中山みき様がおられる教祖殿と『
みたまさま』、祖霊が祭られている祖霊殿があります。渡り廊下
にお庭もあつて本当に広い場所なんです。

「その入り口だったけれど」

「おられる？」

「いや、全然」

新一君は目をこらして見ます。彼は目はいいんです。目は。

「おられないみたい」

「何処に移られたのかしら」

「先輩わかる？」

「わかるわけないでしょ」

何で私に聞くんでしょう。本当にわかりません。

「私が聞きたいのに」

「いや、何か勘で」

「勘ってちよつと」

このいい加減さが。何処までこんななんでしょう、この子は。
「そんなのでわかるわけないでしょ」

「だって先輩シヨートヘアだし」

「それがどう関係あるのよ」

かなりわからなくなってきました。彼の言っていることが。

「いやさ、髪がアンテナになって」

「それってあれでしょ」

はい、やっと言いたいことがわかりました。漫画の話だったんですね。

「ゲゲゲの鬼太郎よね」

「うん。わかる？」

「わからないわよ」

わかったら凄いです。人間じゃないですよ。

「そんな能力ないし」

「じゃあ何処におられるんだろ」

「とにかくここにおられるのよね」

それは念を押して聞きます。

「じゃあ携帯でメール送って」

「うん・・・ってほら」

急に音楽が鳴りました。この曲は。

第二話 神殿その二

「これって……何の曲よ」

何か明るい曲です。見れば新一君の携帯からです。

「どっかで聞いたような」

「ああ、これ仮面ライダーブイスリーの曲」

仮面ライダーって。何でそんなのを。

「仮面ライダー!？」

「だってこれラルフ様の曲だったんだよ、応援歌」

また話がわからなくなってきました。ラルフ様って誰なんでしょう。

「ラルフ＝ブライアント様の。知ってるよね」

「誰よ、それ」

冗談抜きで知りません。何処の誰なのか。

「近鉄バファローズの選手だった。知らないんだ」

「だって私阪神ファンだし」

神戸生まれですから。当然ですよ。あの縦縞のユニフォームも甲子園も大好きです。

「バファローズはちょっと」

「そうなんだ。すごいホームラン打ってたんだぜ」

「その人の応援歌だったの」

「そういうこと。あつ」

携帯を見て声をあげました。

「主任先生からのメールだ」

「何処におられるの？」

彼に聞きながら携帯を覗き込みます。見たら。

「教祖殿？」

「そつみたいだよ」

新一君が私に答えます。

「じゃあそつちに行こう」

「わかったわ。それじゃあ」

「うん」

こうして私達は教祖殿に向かいます。中庭を通って直接です。そこに入ると入り口に白い髪でしつかりとした背筋の背の高い初老の方がにこにここと笑って立っていました。主任先生です。

「やあ、よく来てくれたね」

「いえ、そんな」

主任先生のにこやかな笑顔に応えて言いました。

「先生、先輩でいいですよね」

「うん」

主任先生は新一君に応えて言います。

「中村さんでないかね。駄目だから」

「私なんですか」

「そう、中村さんでない」と

何のことかわかりません。思わず首を傾げてしまいました。

「あの、私でなければって」

「実はね。私の孫が来ているんだけど」

「先生のですか」

「そうなんだ。三人いてね」

「はあ」

先生の言葉に頷きます。何か横では新一君が妙ににこにこしているのが気になります。

「よかったら孫達におぢばを案内してくれないかな」

「お孫さんのですか」

「主任先生急な仕事が入ったらしいんだ」

また横から新一君が言います。また変ににこにここと笑っています。何が楽しいのかわからない位に。どうしてそんなに笑っているんでしょう。

「それで急にお墓地の方に行かないと行けなくて」

「お墓地に」

神殿から少し北に行った場所にお墓地があります。教祖や歴代の天理教のトップであられる真柱様、本席といって天理教を導いて下さった方の御一人である飯振伊蔵先生のお墓なんかがあります。他には教会の方や信者の方々のお墓もあります。

「だから俺達と呼ばれたってわけ」

「そうだったの」

「いや、実は困っていたんだ」

主任先生はまたにこやかに笑って私に言いました。

「本当にね。急に信者の方々が来られて」

「はあ」

「いや、阿波野君だけじゃ彼が苦勞するなと思ったら。中村さんを推薦してくれて」

えっ！？今の言葉は聞き捨てなりませんでした。

「悪いけれど頼むね。私が帰るまでの間」

「わかりました」

ジロリと新一君の方を見て答えます。何かすっごい腑に落ちません。

「それじゃあね」

「はい」

「行つてらっしゃい」

新一君と私で先生を見送ります。その時お孫さん達と一緒にになりました。

教祖殿から祖霊殿に行く廊下で。私は新一君に対して言いました。私は小さいお孫さんの一人の手を引いています。新一君は二人です。

「ちょっと」

「あのさ、先輩」

私が言おうとしたらその前に言ってきました。

「ちょっと聞きたいんだけど」

「こうしていると俺達あれだよね」

「人の話は聞きなさい」

ムツとして言ってやりました。いつもいつも。

「聞きたいことがあるんだけど」

「家族みたいだね。子供の多い若夫婦」

「なっ」

それを聞いて思わず声が詰まりました。いきなり何を言っのって
感じです。

第二話 神殿その三

「何よそれ、そもそも新一君まだ十七じゃない」

ムキになって言いました。

「それで結婚って。大体私はまだ勉強中だしそもそも何で新一君なのよ」

「冗談だって」

軽く切り返されてしまいました。

「冗談ってちよっと」

「まあ未婚のカップルってところかな」

「……いい加減にしなさい」

今度は本気で頭にきました。毎回毎回。

「何が未婚よ、私はキスだってね」

「それ俺も」

また切り返してきました。本当にこっぴどいのは上手いです。

「俺だってそうだよ」

「そんなのどうでもいいわよ」

本気でそう思いました。誰が新一君のなんか。

「私はね、結婚するまではそんな。それなのにどうして子供なんか」

「だから例えだって」

「例え!？」

「そつ、例え」

軽い口調で言います。

「そんなに気にすることないじゃない。単なる例えで冗談なんだから」

「だったらいいけれど」

それでも凄い腑に落ちないですけど。機嫌が悪いままです。

「とにかくね。私は」

「主任先生のお孫さんの相手しなきゃね」

「そ、そうね」

また先に言うことを言われました。彼はこうしたことはほんとうに上手いんで困ります。本当にこういうのだけは上手いんです。

「それはそうだけれど」

「それでさ、先輩」

いつもの軽い笑顔を私に向けてきました。

「祖霊殿参拝するんだよね」

「ええ、まあ」

もうすぐ目の前にあります。前後を参拝する信者さんが通ります。

「そうだけれど」

「じゃあ行こうよ」

「最初からそのつもりだけれど、私は」

神殿に來たらやつぱり礼拝場と教祖殿、祖霊殿は行きたいです。

時間がなければ礼拝場だけになりますけれど。よく回廊を膝当てをして拭いておられる方がいますけれどこの人達もひのきしんをしておられるんです。簡単に言うと奉仕でしょうか。『日の寄進』と書くとも言われています。おみちではかなり重要な教えです。

「行くのよね、新一君も」

「だから來てるんじゃない」

その軽い口調で答えてきます。

「でしょ？だから」

「わかったわ。それじゃあ」

彼に応えて言います。

「行きましょう。いいわね」

「うん。それじゃあさ」

新一君は私の言葉を受けて主任先生のお孫さん達に顔を向けます。その顔を見たら笑顔で優しい感じで子供達に接しています。私に対してとは全然違います。

「あの中に入ろうね。いいね」

「はあい」

「わかりました」

「うんうん、子供は素直でいいな」

「本当ね」

その言葉には頷けます。主任先生のお孫さん達は皆よくできた子供達です。横にいる大きな子供とは全然違って。

「何処かの誰かさんとは違って」

「それ誰？」

「さあ」

惚ける新一君を見てまた言います。

「誰かしら」

「わからないよね」

やっぱり惚けたままです。

「何処の誰やら」

「まあいいわ。じゃあ」

祖霊殿の前まで来てお辞儀をしてから中に入ります。ここは中山家の方々、教会本部に勤めておられた先生方の祖霊が祭られています。全部で三つの場所があります。

「参拝しましょう」

「うん。じゃあ」

新一君も私と一緒にお辞儀をして中に入りました。そうして参拝の後で神殿の西の方から出て広い道を通って詰所に帰ります。右手に憩の家があります。天理教が作った病院です。

そこを右手に見ながら歩きます。白い道を二人。子供達を連れて。

「すぐに終わったね」

「まあ神殿に参拝するだけだったし」

新一君は相変わらず子供達の手を引きながら答えます。両手にそれぞれ子供達の手を持っています。私は残る一人の手を。

「そりやまあ早く終わるかな」

「そうね。じゃあ後は詰所で」

「ねえ先輩」

新一君は急に私に声をかけてきました。

「何？」

「お腹空いてない？」

「まあ言われると」

お昼から結構経っています。それでお腹は結構減ってきていました。

「新一君は？」

「俺も」

新一君も答えます。考えたら彼から話を振ってきたんですからこれは当然と言えば当然でした。

第二話 神殿その四

「お腹空いてきたよね。それでさ」

「ええ」

「たこ焼きかい？ 焼き食べない？」

「たこ焼きかい？ 焼き？」

「どっちも商店街に店があります。味は中々いいです。天理の名物の一つでもあります。私も新一君もずっと食べています。」

「そう、どっちか。どうかな」

「私は何か」

「けれど私は首を傾げて答えました。」

「もつとあっさりした方がいいかしら、今は」

「じゃあ甘いものとかは？」

「今度はこう提案してきました。」

「アイスクリーム、いやソフトとかさ」

「じゃあソフトね」

「これも商店街にいいのがあります。たこ焼き屋さんが一緒にやっ
てるんです。」

「それだとこの子達も食べるわよね」

「そうそう。僕も好きだし」

「新一君には聞いていないわよ」

「またむっとなつちやいました。彼に対しては別です。」

「まあ言いだしっぺではあるわね」

「その言いだしっぺはお金ないんだ」

「私もよ」

「そんなこと言っつていつも持つてるんです。彼はお金とかそうしたこと
は本当にしっかりしているんです。それでいつも何か買ったり食
べたりしています。」

「だから自分のは自分でね」

「ちえつ、厳しいなあ」

「それ位しつかりしなさい」

ある意味しつかりしていますけれど、彼は。

「他人に出させない。あるんだったら」

「なかつたら」

「その時は仕方ないけれど」

あれ、何でか顔を新一君から背けてしまいました。ちょっとあさつての方を下に見てしまいます。声もどうにも小さくなってしまいます。

「それでも。今はね」

「まあこれは冗談だし」

「本当？」

また彼を見て問い掛けます。

「そうは思えない口振りだったけれど」

「まあそういうことにしておいてよ、ここは」

「それはこれからの心掛け次第ね」

そう言っておきます。

「新一君の」

「これでも結構いい心掛けしてるって言われるんだけど」

「何処がよ」

絶対に嘘です。有り得ません。

「でまかせばかり言う癖に」

「先輩は厳しいなあ」

「新一君だけは別」

厳しくしないと。つけあがりますから。

「だからいいわね。ソフトは自分持ちよ」

「はいはい」

「子供達のは私が出すから」

「あれ、先輩が」

何か意外といった感じで私の方に顔を向けてきました。また微妙

な感じです。

「だからお金があるからよ」

「そうなんだ。俺が出そうと思ってたのに」

「いいわよ、それは」

それは断りました。

「だって私が先輩だし。それは」

「いや、この場合は」

「お姉さんの言うことを聞きなさい」

さっきの言葉を逆に使って言ってやりました。

「いいわね」

「いいんだ」

「そうよ、いいのよ」

無理矢理押し切ってやりました。

「よかつたら新一君のも出してあげるわよ」

「あつ、僕のはいいよ」

何故か謙遜してきました。

「その分のお金はあるしさ」

「さっきと言ってること逆じゃない」

どうしたんでしょう、一体。

「どうしたのよ」

「いやさ、やっぱりさ」

何か私から視線を逸らして話をします。さっきの私の顔と似た感じになっているのは気のせいでしょうか。

「こういうのは。あれだよ」

「あれ？」

「自分の分は自分で出さないと。女の子にはね」

「そうなの」

「そうだよ。それに」

私から視線を逸らしながら言葉を続けます。

「先輩はさ。やっぱり」

「やっぱり？」

「その。つまりさ」

言葉が詰まってきました。何が言いたいんでしょう。

「あれだし。その」

「言ってる意味がわからないんだけど」

怪訝な顔をして彼に言いました。

「何が言いたいのよ」

「あつ、何でもないよ」

急に誤魔化してきました。かなり変な感じです。

「何でもないから。とにかくソフト買おう」

「ええ」

よくわからないまま彼の言葉に頷きます。それでソフトを子供達の分まで買ってあげました。

「はい」

子供達にソフトを渡して食べながら商店街を進みます。その途中でまた新一君が私に話し掛けてきました。

「じゃあ今日はこれで」

「帰るの」

「うん、また明日ね」

「来なくてもいいから」

すぐにそう言い返してあげました。

「忙しいと邪魔だし」

「そんな冷たいこと言っただ」

「当たり前でしょ」

この言葉も口癖になってきました。困ったことです。

「そもそも詰所にはいないんだし」

「時々泊まってるじゃない」

「押し掛けてね」

本当に時々詰所に泊まるんです。もう自分の洗面用具とか置いてるそうです。部屋も半分自分の部屋まであるし。図々しいとしか言

うしかありません。

「主任先生達の好意に甘えないの」

「じゃあ先輩と一緒に部屋は？」

「怒るわよ」

はったおすわよ、と言いつうになりましたがそれは止めました。

立腹を覚えましたけれど何とかあと一歩のところで踏み止まりました。

第二話 神殿その五

「新一君と一緒にの部屋なんて。絶対に願ひ下げよ」

「俺はいいけれど」

「冗談じゃないわよ」

この言葉も本当に口癖になってます。

「私は男の人とは一緒にの部屋には」

「そうなんだ」

「それも結婚してからよ」

本当にそう決めています。それまではっていうのはやっぱり古い
でしょうか。

「旦那様になる人だけしか一緒にには」

「凄いな、何か」

新一君もそれを聞いて言います。

「そんなに真面目なんて。今頃何ていうか」

「悪い？」

きつと見返します。

「それが」

「別に」

ところが新一君はソフトを食べながら軽く返してきました。

「人それぞれだし。そんなのは」

「いいの」

「俺はね。それは別に」

そう答えてきました。

「いいと思うけれどさ」

「そうなの」

「じゃあそれは俺かな」

「馬鹿言わないでよ」

何を言うかと思えば。こんなことばかり言うし。

「何で新一君とよ。ふざけないでよ」

「ふざけてるように見える?」

「ええ」

それ以外に思えません。他にどう思えっというんでしょう。いつもいつもふざけてばかりでこっちも立腹し通しです。それじゃないっていうのに。

「少しは真面目にきなさい」

「厳しいなあ」

「厳しくて結構」

またきつとして言ってやりました。

「新一君みたいなふざけた子にはね。いいわね」

「はいはい」

「はいは一回」

どんどん保護者めいてきました。それに自分でも気付いて妙な気持ちです。

「わかったわね」

「はい。さて、着いたし」

「あれ、もう」

気付けばもう詰所の門の前です。詰所ひのきしんの梶本さんがお花にお水をやっています。太った白髪のお爺さんです。

「早いわね」

「話していたからね。あつ、梶本さん」

「あつ、デートしてたんだ」

「なつ、そんな」

梶本さんにいきなり言われてまた顔が真っ赤になりました。冗談じゃありません。

「あの、梶本さんそれは」

「はい、そうなんです」

「えっ、ちよつと」

また横から新一君が言います。軽やかに笑って大嘘をつきます。

「ちょっと子連れで。未来の練習に」

「うん、それはいいことだね」

「あの、梶本さん」

たまかねて根岸さんに言います。

「そんなのじゃないです。だって私主任先生に呼ばれて」

「先輩八重歯見えてるよ」

「うっ」

私八重歯あります。それも何か子供っぽいって言われます。そう言われるので気にしていますけれど。可愛いつて言ってくれる人もいたりします。

「口開くから」

「新一君が言うからじゃない」

それもこれも。

「だからよ。失礼するわ」

「いつも仲がいいね」

すると側から梶本さんが笑ってきました。

「陽気ぐらししてるやん」

「違います」

天理教の目標は陽気ぐらしといえます。簡単に申し上げますとお互いが互いの良いところを伸ばし合って足りないところは補い合う。そうして助け合って一緒に生きることです。親神様は人がそうして生きるのを見て共に楽しもうと考えられて私達人間を御創りになられたんです。ですから天理教の教えの中でも最も重要なものの一つなんです。

「だって新一君……いえ阿波野君いつも私を困らせてばかりで」

「困らせてま〜〜〜す」

全然反省していません。こんな子なんです。

「先輩に何かと」

「ほら、本人もこう言っていますし」

「ははは、それでいいんだよ」

梶本さんはそれを聞いても笑います。

「助け合いだからね」

「はあ」

助け合いも大切な教えですけど。何かこの場合言われてもいい気持はしないです。

「そうですか」

「まあ中に入って」

中に入るように言われます。

「疲れたろ。休みなさい」

「わかりました」

「先輩、お茶」

「甘えるんじゃないのっ」

また八重歯が出ました。

「それ位自分で入れなさい」

「だって先輩が入れてくれたお茶が一番美味しいから」

「そんなの変わらないわよ」

むっとして口を閉じました。本当に。

「とにかく中に入るわよ」

「はいはい」

「じゃあわしも一休みするかな」

梶本さんも手を止めて腰を伸ばしながら言いました。

「一服してと。じゃあ千里ちゃん」

「はい」

「お茶ね。阿波野君の分も」

「えっ!？」

また顔を顰めてしまいました。

「入れてあげて。いいよね」

「どうも根岸さん」

横から新一君が笑顔で言います。子供達の相手をしながら。

「御馳走になります」

「じゃあ御願いね」

「わかりました」

「いやあ、先輩の入れてくれたお茶が飲めるんだ」

『彼は』すごく楽しそうです。

「よかったよかった」

「全く」

また溜息が出ます。

「どうしていつもこうなるのよ」

「これもいんねんってやつかな」

天理教の教えでいんねんと心づかいにより出来上がっていくものです。前世や親からのつもり積もったものが現われることを言います。いいいんねんを白いんねん、悪いものを悪いんねんと言います。種時に例えますと良い種と悪い種があつてそれを撒くことでそれがいんねんというものになるんです。

「やっぱり」

「困ったいんねんよ」

新一君から目を離してまた溜息です。

「何でよりによってこんなに手のかかる子が」

「俺って子供だったんだ」

「背は高いけれどね」

それは認めます。私がちっちゃいせいもありますけれど。

「全く」

「じゃあ子供だから何かお菓子頂戴」

「またそうやって事務所にたかつて。信者さんから頂いたものなの
に」

「まあまあ」

「まあまあじゃないの。一人でどれだけ食べるのよ」

何か新一君と一緒にだといつもこうです。結局覚えているのは彼にあれこれ言ったことだけ、子供達の相手をする方がずっと大切なの

に自分が嫌になります。本当に背が高いだけの子供の相手をするのは困りものです。

第二話 完

2007・9・8

第三話 高校生と大学生その一

第三話 高校生と大学生

私は実家は教会です。八条分教会という奥華大教会直属の教会です。

奥華は結構大きな方の大教会で下にある分教会の数は三百近いです。私の実家はその直属です。子供の頃は何でこんなに自分の家は広くて変なものが一杯あるんだろうって思ったりもしました。

中学までは実家で育ちました。実家のすぐ側にある八条学園に中学校まで通っていました。それで高校からおぢばに帰ることになったんです。

天理高校で三年。何かあつという間でした。入学したと思ったら卒業でした。それで大学は天理大学です。家を継がなければいけないから宗教を勉強させてもらっています。そうしたことあつて今は詰所に住まわせてもらっています。

この詰所は各地から帰って来た信者さんや修養科生といって三ヶ月天理教のことを勉強させてもらいに帰って来ている方、そして本部に勤めておられる方が住まれるところです。私は大学生ですがひのきしんを手伝わせてもらうということで特別に住まわせてもらっています。

うちの詰所はお庭も建物もかなり広くて大きいです。やっぱり三百近くも教会があるとそれだけで人も多いからです。

建物も二つあつて本館と別館があります。私は本館にいます。あの新一君は言うまでもなくこちらによく来ます。ええ、今日もなんですよ。

「それで今日ですね」

「へえ、そんなことがあつたの」

事務所のロビーで炊事の井本さんとお話しています。とても小柄で額に黒子があります。それがチャームポイントです。杉山さんも

教会の方で結婚される前は秋藤さんといいました。いずれ教会長の奥さんとなられる方です。御主人はこの詰所で働いておられます。

「そうなんですよ。大学に入ったらですね」

「大学に来てたの」

私はそれを聞いて否が応でも不足を感じずにはられませんでした。

「で、何しに来てたのよ」

「いや、単に遊びに」

新一君は例によって軽い調子で答えます。

「それで来ただけだけど」

「遊びに、ねえ」

それを聞いてまずは目をやぶ睨みにさせて彼を見ました。

「何の遊びかしら」

「いや、綺麗なお姉さんいないかなって」

それでいつもこんな返し言葉です。

「それでまあ。大学に入ったんだけれど」

「それでいたの？」

不足を言葉に込めて尋ねました。

「どうせ次から次に声かけてたんでしょ」

「その前に先生に怒られてさ」

「まあそうでしょうね」

想定範囲内ってことでしょうか。天理高校の生活指導は結構厳しいですから。

「柔道の山村先生に」

「よかったわね、山村先生で」

何か山村先生の名前を聞いて嬉しくなりました。凄く怖い天理高校の体育科の先生の中でも特に怖い先生です。柔道部の顧問で全国区の柔道部を指導している人なんです。

「で、投げ飛ばされたの？」

「いや、怒鳴られただけ」

「何だ」

それを聞いてかなりがっかりです。プールにでも投げ込まれて頭を冷やせばいいのに。

「それだけだったの」

「何を馬鹿なことやってるかってさ。心狭いよね」

「それは阿波野君が悪いわよ」

井本さんの奥さんが笑って新一君に言います。

「そうですね」

「だって。堂々と制服で大学生の娘に声をかけてたんでしょ？」

「っていうか探してたんですよ」

「誰をよ」

今度は私が尋ねました。

「いや、先輩を」

「私を？何で？」

「いや、学校の勉強を教えてもらいに」

「嘘でしょ、それ」

またやぶ睨みになって彼を見ます。

「絶対に」

「まあ嘘だけれどね」

「やっぱり。本当にこんなのはっかりで。」

「うそついでしょこれ嫌いよ」

「ここで彼に天理教の教えを言っただけでした。」

「そんなことしているとまたほこりが積もるわよ」

「ほこりかあ」

「そう、ほこりよ」

天理教では悪いことを八つのほこりと言います。をしい、欲しい、にくい、かわい、よく、こうまん、うらみ、はらだちの八つです。

特にこうまんやはらだちがよくないとされています。

「そういうことばかりしていると大変なことになるわよ」

「そうかあ。じゃあ止めるか」

「ついでに大学に来て変なことするのも止めなさい」
そう彼に言ってやりました。

「いいわね」

「本当に俺って無茶苦茶言われるなあ」

「当たり前よ」

何を言うかって思ったら。

「やることをすることやらんばらんなのに」

「そうかな」

本当に自覚がないんですよね、彼は。だから言っんです。

「俺これで結構真面目なんだぜ」

「寝言は起きて言うものじゃないわよ」

また言ってやりました。

「それを覚えておきなさい」

「先輩は厳しいなあ」

「新一君だけは別よ」

実際にそうしています。私実は後輩には凄く優しい先輩だっって言われてきました。けれど彼にだけは本当に別なんです。あんまりですから。

「わかったわね」

「わかりたくないなあ」

「その反論なのよ」

わかっててやってるんでしょうか。

「そんなのだから駄目なのよ」

「じゃあ真面目にやればいいんだよね」

「ええ」

あれっ、私の言葉が届いたんでしょうか。内心びっくりです。

第三話 高校生と大学生その二

「真面目に。そうでしょ？」

「そうだけど」

言われるとこっちが不安になってきました。いつもがいつもです
から。

「できるの？」

「本当に真面目にするよ」

また言います。

「真面目にね。じゃあ明日」

「明日なのね」

新一君を見上げて尋ねます。

「本当にやるのね」

「勿論だつて。じゃあね」

新一君はいきなり帰ろうとします。ところが。

「ああ待つて阿波野君」

事務所から井本さんの御主人が声をかけました。小柄で若作りの
方です。黒縁眼鏡が淒く似合っていていい感じの人です。

「はい？」

「これから何処行くんだい？」

「いや、適当に」

いきなり真面目にするつて言つた側からこの発言がもう極めてい
ますよね、いい加減なんだから。

「ブラブラと遊ぶつもりですが」

「八木か桜井行く？」

「いえ、天理で」

八木と桜井はどちらも近鉄線の駅のことです。この辺りじゃ結構
大きい駅でして遊ぶ場所とかもそれなりにあります。けれど私は滅
多に行けません。詰所で忙しいからです。

「遊ぶつもりですけれど」

「何か買う予定ある？」

「本屋で。漫画でも」

「あつ、それだったらね」

彼が漫画を買うと聞いてすぐにお金を出してきました。

「サンデーとマガジン買って来て欲しいんだけど」

「サンデーとマガジンですか」

「うん。いいかな」

井本さんは結構漫画が好きなんです。私もそれなりに読んだりします。実は結構男の子が読む漫画が好きですけどこれは内緒ですよ。

「わかりました。先輩は？」

「私？」

「うん。何がいいかな」

「別にないけれど」

首を右に傾げて答えます。

「別にね」

「じゃああれ？小学生のファッション雑誌とか」

「……怒るわよ」

言うと思っていましたけれど。どうせ小柄です。

「何で私が小学生なのよっ」

「また阿波野君はそんなこと言っつて」

また横から井本さんの奥さんが笑顔で言います。

「駄目よ、先輩からかつちゃ」

「いやあ、冗談ですよ」

「冗談でも許せないわよ」

口を膨らませて言い返しました。

「幾ら私が小さいからって」

「だから見つけ易いしね」

また変なことを言い出しました。

「見つけ易いつて?」

「あつ、何でもないよ」

もつとわからないことに急に誤魔化してきました。やっぱりわからない子です。

「だから気にしないで」

「わかったわ。それじゃあね」

「うん。じゃあこれで」

「行つてらっしゃい」

一応声はかけました。

「車に気をつけてね」

「じゃあサンデーにマガジンに」

「チャンピオンレッド御願いね」

井本さんの奥さんがここで言いました。

「シグルイと聖闘士星矢Gとジャイアントロボ好きだから」

「俺も好きですよ」

新一君は今の漫画三つ聞いてすぐに言葉を返しました。

「じゃあそれもですね」

「ええ、御願い。はい」

井本さんの奥さんもお金を新一君に手渡しました。何かそれ見ていたら私も雑誌が欲しくなりました。それで彼に言いました。

「私もいいかしら」

「あつ、小学生のファッション雑誌でしたっけ」

「本当に怒るわよ」

また言い出したんでむつとして見返しました。

「漫画よ。いい?」

「ジャンプとか?」

「いえ、それじゃなくて」

ジャンプは最近読まなくて。それで今は。

「マガジンZ御願いね」

「先輩もマニアックじゃない?それって」

「まあそうかも」

自分でも女の子が読む雑誌じゃないかなって思っんですけれど。

この前たまたま新一君が読んでるの見ていたら好きになったんです。

「けれど。いいでしょ？」

「別にね。僕も好きだし」

元々彼が買っていましたし。何か仮面ライダーとかウルトラマンとか真剣な顔で読んでいたんです。学校でもかなり読んでるみたいです。

「それじゃあそれだね」

「ええ、御願い」

お財布からお金を出して手渡します。

「じゃあね」

「うん。じゃあ………って」

彼が出ようとしたら目の前に。その山村先生がいました。すっご

い威圧感のある風貌の角刈りの方が堂々と立っておられました。

第三話 高校生と大学生その三

「山村先生……」

「ここにいたか阿波野」

新一君を見て言います。

「探したぞ」

「あれ、俺なんですか」

「御前以外に誰がいるんだ」

山村先生は真一君を見据えたままでした。

「ちよつと来い」

「さっきのことですか？」

それ以外にないですよ。けれど山村先生がそのまま来るなんて

「それは終わつたんじゃ」

「何が終わつとるかっ」

先生の声が怒鳴り半分になりました。

「御前はわしから逃げたんだろうが。それで追い掛けてきたんだ」

「あらら、それはまた」

「わかつたら来い」

有無を言わせぬ口調です。

「いいな」

「あの、何処にですか？」

「別に殴るわけじゃない」

山村先生は案外生徒を殴ったりはしません。そりゃ怒ると怖い人なんですけどね。

「叱るだけだ」

「結局同じじゃないですか」

「全然違うじゃない」

私は横でそう呟きました。

「ってというか制服で大学の女の子ナンパしようとしたらそりゃ」

「そう、それだ」

やっぱり山村先生もそれを言われます。わかっていましたけれど。

「それで話があるんだ。来い」

「いずれ機会をあらためて」

「馬鹿か御前は」

今の言葉は私も先生と同じことを思いました。

「そんなことができる筈がないだろう」

「やっぱりそうですか」

「わかつたら来い、いいな」

「わかりました。じゃあ場所は」

「別に殴るわけでもないからな。そうだな」

「詰所の部屋なんかどうですか？」

ここで井本さんが先生に提案されました。

「空いてる部屋結構ありますし」

「いいのか？それで」

「ええ、どうぞ」

井本さんは何故か笑っています。けれど新一君を笑うような人では決してないです。それが私にはかなり不自然に思えました。内緒ですけど。

「阿波野君もそこでいいわよね」

「俺は何処でもいいですよ」

怒られるっていうのにこの態度。本当にある意味大物です。

「それじゃあ」

「ああ、来い」

ぐい、と首根っこを引っ掴まれます。先生と新一君はそんなに背が変わりはしないんですがそれでも圧倒的な差があるように見えます。

「部屋は五階が空いてますから」

「何処でもか」

「はい、何処でも」

「あつ、いいこと聞いた」

新一君は首根っこをひつつかまれて猫みたいにぶら下げられているのに全然余裕の顔で言いました。わかってるんでしょうか。わかってないですね、絶対に。

「じゃあ五階で先輩と」

「私が何!？」

「いや、何でも」

「そこから先は五階で聞く」

先生はそのまま新一君をエレベーターの方に連れて行って言われます。

「わかったな」

「じゃあそういうことで」

新一君はそのまま連れて行かれました。それから暫く私は井本さんの奥さんとあれこれお話をしていました。新一君についてです。

第三話 高校生と大学生その四

「本当に困った子ですよね」

「あら、そうかしら」

奥さんは御主人と一緒に私の言葉に笑って返します。何でなんでしょう。

「私は別にそうは思わないけれど」

「僕もだね、それは」

御主人もそう言われます。

「いい子じゃない。詰所に来てひのきしん手伝ってくれてるし」

「本当は真面目な子だよ」

「そうでしょうか」

その言葉には思い切り懐疑的になりました。首を捻らずにはいられませんが。

「私は全然思えないんですけれど」

「まあ彼は素直じゃないからね」

御主人はまた笑って言われます。

「そういうところは」

「素直じゃないんですか？」

「そう思わない？」

「ちよつと」

首を傾げて答えます。

「そうは思わないですけど」

「気付かないかしら」

奥さんはふと言ってきました。

「あの子のそうしたところ」

「素直じゃないっていうかやんちゃです」

私はそう思います。

「もっと言つと子供です」

「ふふふ。そう思うの」

奥さんは私の言葉を聞いてわた笑います。

「千里ちゃんは」

「そうじゃないんですか？」

「あれで結構大人よ」

奥さんの言葉の意味がわかりません。何処がそうなのか。

「はあ」

「よく見ればわかるんじゃないかしら」

「そうは思わないですけど、どうしても」

「まあよく見てね」

奥さんはまた仰います。御主人も私の顔を見て笑ってます。何故
なんでしょう。

「そのところは」

「一年ずつと見せられてますけれど」

高校三年からずっとです。入学式でいきなり出会って。その時からあんなのだったんですよ。所属が同じ大教会だってわかった時は
凄く嫌でした。

「ああしたところばかり」

「ほら、鏡」

奥さんがふと仰います。

「ここは何て呼ばれてるかしら」

「鏡屋敷ですよね」

「そうよ」

よく言われることですがいぢばは鏡屋敷です。自分の心やいんね
んを映し出す場所だって言われています。そういえば私も怒りつぽ
いところをよく見せられているような。新一君のああしたいいい加減
なところばかり見せられて。

「だから。色々と鏡を見て」

「ええと、この場合は」

自分を見るんじゃないくて。

「彼の色々なところを見てね」

「ううん」

思わず首を捻ります。そういえば何となく思うところですけど、
「おみちについては真面目でしょうか」

「そう。わかったわね」

そういえばひのきしんは真面目にしています。それどころか急に
志願してきてすっごく頑張ったりします。かなり気紛れに出て来ま
すけれど。

「そういうところとか」

「けど私にだけ」

からかってくるんですよね。それもしょっちゅう。

「それはそれで」

「はあ」

「よく見ていればいいから」

「何かあれですね」

そこまで聞いてまた思うことです。こう思うのって嫌なんですけ
れど。

「新一君私の弟みたいですね」

「あはは、そうね」

奥さんはそれを聞いて笑われます。

「やんちゃだしいい加減だし」

「あまり気持ちのいい考えじゃないですけど」

本当にそうです。よく言われるんでその度に本当に嫌な想いをし
ます。

「確か千里ちゃんはご兄弟は」

「妹が二人です」

一回中村って苗字で三人姉妹なんで中村紀洋さんのお子さんと同
じだって言われました。それを言ったのはあの新一君なんですが。

「じゃあ男の子は」

「いないです」

何故かわからないですけど親戚で女の子ばかりって私のところだけなんです。これもいんねんなんでしょうか。いんねんは色々あるんです。いいのは白いんねん、悪いのは悪いんねんって呼ばれています。

「じゃあ丁度いいじゃない」

「そうそう」

「よくないです」

俯いて言いました。

第三話 高校生と大学生その五

「あんな子弟にいたらって思ったら」

「まあまあ」

「これも巡り合わせと思って」

「そうですか」

「ほら、そんなこと話してるうちに」

奥さんがエレベーターの方を指差します。するとその扉が開いて山村先生と新一君が戻って来ました。何か凄い早さです。

「あれ、もうなの」

「話すこと話したしさ」

新一君は軽い調子で私に言います。

「だから」

「怒られてたんじゃないの？」

「いや、全然」

彼は答えます。

「そんなことは」

「先生、そうなんですか？」

私は思わず先生に尋ねました。てっきりそうだと思っていたら。

「ああ、最初は何かと思ったがな」

先生もそう仰います。すつごくおかしな流れです。

「いや、そういうことならいい」

「いって先生」

「中村」

次に私に顔を向けてきます。

「はい？」

「御前も大事にしるよ」

「大事につて？」

話が全然わかりません。ついつい首を傾げてしまいました。

「あの、どういうことですか？」

「あつ、先生」

ここで新一君が笑って先生に声をかけます。

「その話は」

「おっと、そうか」

先生は新一君に言われて笑って言葉を返します。

「それだつたら止めておくか」

「ええ、そういうことで」

話が全然読めません。何が何なのかさえわからないうちに話は終わりました。それで先生は私と新一君に対して別れを告げるんです。

「じゃあな、二人共」

「は、はい」

「どうも」

戸惑つてゐる私と能天気な新一君。思えば凄い対比です。私はよくわからないままに先生に挨拶を返しました。先生はもう詰所から帰ろうとされています。

「おい阿波野」

最後にまた新一君に声をかけます。

「頑張れよ」

「了解」

ぴつと敬礼みたいな挨拶を右手でして先生に返礼してます。そういうところが本当に軽くて子供っぽいです。本人自覚してるかどうかはわかりませんが。

先生は帰られました。そうしてそれを見届けた新一君は井本さん夫婦と私に顔を向けて思い出したようにして言うのでした。

「じゃあ漫画ですよね」

「あつ、そうだったわね」

奥さんがそれに気付いて声をあげます。

「じゃあ。御願いいね」

「はい。先輩ですよね」

「ええ、私も」

私もふと思い出しました。彼のことを見ていると他のことが綺麗になくなっちゃいます。

「御願いますわ」

「お釣りは返すからね」

「当然よ・・・いえ」

ここでふと考えが変わりました。

「別にいいわ。あげるわ」

「あれ、いいんだ」

「今日だけよ」

首を少し右に傾げさせて言います。

「特別サービスだから」

「ふうん。じゃあもらっておくね」

「ええ」

「じゃあ井本さん」

それを受けて井本さんご夫婦に声をかけます。

「そういうことで。はい」

「ご夫婦にはちゃんとお金を返しています。まあ常識ですね」

「これで」

「で、これからどうするの？」

新一君がお金を渡し終えたのを見てからまた声をかけます。

「帰るの？」

「まあ八木にでも行こうかな」

ふと首を傾げてから言いました。

「それか桜井かな」

「奈良には行かないの」

「家から逆になるからね」

そう答えてきました。

第三話 高校生と大学生その六

「結構楽しいけれど」

「西大寺とかも行かないの」

「あそこも結構好きだけれど」

「やっぱり遠いから」

奈良は北の方が結構開けていて南はそうじゃないんです。それで遊ぶには北の方がよかったです。新一君は結構田舎にいらしんでそうした時は苦労するみたいです。おぢばはゲームセンターとかそういう場所はないんでこうした時結構困ったりするんです。といつても私はそうしたお店は殆ど行かないんでわからないんですけれど。UFOキャッチャーはしますけどね。

「家に帰るんなら行かないね」

「そうなの」

「よかつたら先輩どつか案内してよ」

「馬鹿言いなさい」

本当に馬鹿言いなさいです。

「この前みたいに本屋さんで特撮の本でも読んでいなさい」

「あつ、馬鹿にするんだ」

私に抗議めいて言います。

「特撮を。あれは素晴らしい文化だよ」

「それはそれでいいのよ。何で私が新一君と一緒に」

「ちえつ、じゃあどつかで時間潰すか」

「北寮でも行って来たら？」

天理高校の男の子の寮です。東寮よりずっと大きいんです。天理高校は男の子と女の子の割合が大体三対二程度です。もつとあるかも。そのせいだと思いますけれど。

「結構行ってるんでしょ？あそこ」

「お酒持って行ったら怒られるしさ」

「ちょっと待ちなさい」

聞き捨てならない言葉でした。何を言うかと思つたら。

「お酒つて何よ一体。そんなのやつたら駄目に決まってるでしょ」

「そうだよ。やつぱり制服だと」

「そういう問題じゃないわよ」

思いきり怒ります。

「未成年がお酒飲んだら駄目に決まってるじゃない」

「固いことは言いつこなじじゃない」

「あのね。そんなのだから」

「皆あまり守ってませんよね」

新一君は井本さんご夫婦に話を振ってきました。ご夫婦も天理高校出身なんです。

「やつぱり」

「まあね」

「私服でだけれど」

「ほら」

「ほらじゃないわよ」

私はまた新一君に言い返しました。

「何処までいい加減なのよ。お酒なんて」

「煙草はやらないよ。クスリも」

「どちらも当然でしょ」

特にクスリなんて。言語道断です。

「本当にねえ。そんなのすぐに止めなさい」

「じゃあ家に帰ろうつと」

「それでどうするのよ」

「まあ一杯」

「………本当に反省しないわね」

いい加減呆れます。毎度毎度本当に。

「まあまあ。じゃあまた明日」

「そのまま二日酔いで倒れて先生に怒られなさい」

「了解。それじゃあ」

相変わらず軽い調子で帰って行きます。呆れる私の視線を軽々とかわしてです。あの軽さだけは本当に真似できません。悪い意味で羨ましいです。

第三話 高校生と大学生その七

次の日。私は午後から授業でした。それで自転車で学校に行くと
「あつ、先輩」

急にあの軽い声が聞こえてきました。

「こちこつち」

「昨日言われてもう来たの!？」

声の方にそう言いながら向き直りました。

「どつという頭の構造してるのよ、ちよつと」

「まあよく見てよ」

「よく見てつて何をよ」

「僕の服装さ。よく見て」

「服!？」

「そうそう、見てよ」

服つて。そういえば私服です。大学は私服だから気付きませんでした。

「どつしたのよ、それ」

「だから着替えたんだ」

新一君はにこにこ笑って答えます。

「それで来たんだけれど」

「ひよつとしてわざわざ持つて来たの?」

「うん」

返事はあつけらんとしていました。どうやらそのようです。

「制服では駄目なんでしょ?だから」

「山村先生はそれでいいって仰つてるの?」

「全然オーケー」

先生も甘いんだから。この子は甘くしたら余計につけあがるのに皆甘くします。そういう私もあれなんですけれどね。残念なことに「いいんだつてさ」

「何でそうなったか凄い不思議なんだけれど」

本当にわかりません。昨日それでわざわざ詰所にまで来られたのに。どういった天変地異があったのか私は凄い不思議に思いました。「何だよ」

「それは企業秘密」

「全然わからないわよ」

「じゃあ国家機密」

もつとわかりません。とにかくこうなった理由が凄く謎です。しかもよく見れば新一君をこの学校で見る時って。

「先輩目立つし」

「そこで私なの？」

「中学生に見えるから」

「大きなお世話よっ」

また背のことです。ついでに顔のことも。童顔で小柄なのをまた言われます。どうせ私は小さいし小柄ですよ。いつもいつも言うんだから。

「けれど制服じゃまずいからね」

「で、着替えて」

「俺着替えるの早いしさ」

「ってよく見たら」

単に制服の上脱いだだけです。黒いカッターを着ています。少し見たら得体の知れない組織の少年構成員です。彼の服の趣味がわかりません。

「凄い格好よね」

「ネクタイもしてみようかなって思ってるんだけど。黒の」

「止めなさい」

それはすぐに止めました。

「ナチスドイツになるわよ」

「っていつか黒シャツ隊かな。ムッソリーニの」

どっちにしろろくなものじゃありません。全体主義なんて。

「けれど悪くないでしょ」

「似合っではいるわね」

悔しいけれど彼スタイルいいんです。背が高くてすらりとしているし顔立ちだつて。って私ったら何でこんなことを。今の言葉は気にしないで下さいね。

「黒が似合うのはいいわね」

「赤も好きだよ」

「けれど赤いネクタイは駄目よ」

「また何で」

「滅茶苦茶派手じゃない」

そう言葉をかけました。

「赤だなんて。やっぱり派手にならない方が」

「面白くないなあ、そんなの」

「そもそも新一君の服ってあれよ」

実は彼の私服を見たのはこれがはじめてじゃありません。何度かあるんですがどれも。

「派手過ぎるのよ。青いコートに白いシャツに赤いマフラーとか」

「それよかったでしょ」

「遠くからでもわかったわよ。何処にあんな服あったのよ」

よく考えたらフランスの国旗の色です。最初見た時はびっくりしました。

「いや、普通にユニクロで」

「ないわよ、あんなの」

しかもその組み合わせは。有り得なかったです。

「とても。それで何でここに来たの？」

「ここに来た理由？」

「そうよ。何かいつも来てるけれど今日のは何？」

「先輩を見るに」

「帰りなさい」

速攻でこの言葉が出ました。

「何考えてるのよ」

「何って駄目？」

「全く。何を言い出すのかと思ったら」

悪い冗談です。いつもの。

「ふざけていないで学校に戻ったら？今日平日じゃない」

「いや、今日は午前で終わりだし」

「家に帰ったら？」

それならそれでこう言い返します。大体いっつも遊んでばかりですし。

「それでゲームでもしていなさいよ」

「それだったら詰所でもできるし。まあ特にさ」

「ああ言えばこう言うね、本当に」

いつものことですが。全く困った子です。

第三話 高校生と大学生その八

「私これから授業なのよ。だから」

「あれ、意地悪だなあ」

「意地悪も何も講義出ないと何にもならないじゃない」

真面目に出ないといけませんよね。何か彼はあまり真面目に授業受けているようには見えないですけど。本当に不真面目なんだから。

「そうでしょ」

「折角先輩に会いに来たのに」

「また来なさい」

あれ、何でこんな言葉。

「四時になったら詰所ね」

「あつ、四時に」

「それかここだね」

また何か勝手に。言葉が出ちゃいます。何でなのでしょう。

「待ち合わせでどう？それだと文句ないでしょう？」

「じゃあ大学の食堂の前で」

「じゃあそこでね」

また自然に言葉出ます。私こんなこと思ってもいないのに。

「付き合つてあげるから」

「じゃあ何処に行くの？やっぱりデートに」

「馬鹿言いなさい」

今度は思つた言葉が出ました。

「新一君とデートなんて」

「あつ、千里」

「誰とお話してるの？」

後ろから友達が声をかけてきました。高校時代から、つまり寮でも一緒だった子達です。つまり新一君も知ってるんです。かなりま

ずいです。

「誰でもないわ」

慌てて言い繕います。

「誰でもないから」

「誰でもないからって。何だ」

「阿波野君じゃない」

「お久しぶりです、先輩方」

新一君は軽い調子で彼女達に挨拶をします。

「どうしたの、ここに来て」

「あのですね」

新一君は彼女達にも話をします。私にとってかなりまずい流れです。

「実は中村先輩に会いに」

やっぱりこう言いました。

「来たんですけれど先輩が冷たくて」

「あら、ちっちもやるじゃない」

「そうよね。何も知らない顔して」

「ちょ、ちよつと」

慌てて反論します。

「それはないでしょ。私は呼んでもいないし」

「そうなんですよ。先輩冷たいから」

新一君はここぞとばかりに言います。しまった、って思いました。今ここで呼んでないって言っても意味ないんですよ。彼が勝手に来てるんですから。

「それで僕仕方なく」

「年下殺しね」

「やるわね、ちっち」

皆私の方を樂しげに見て言います。あからさまにからかってきます。

「来たんですけれど。それですな」

「うんうん」

「どうしたの、それで」

まずいことに皆新一君の方にいつちゃってます。私完全に孤立無援です。彼の話になるといつもこうなるのが本当に嫌で不思議です。「後で待ち合わせすることになりました」

「でかしたっ」

「少年、お見事」

やっぱり新一君の肩を持っています。わかっていましたけれど。

「それで場所は？」

「時間は？」

「その大学の食堂の前で四時」

「わかったわ」

「その時間までにこの娘連れて来たらいいのね」

話は完全に新一君の望むふうです。私のことはもう皆聞いてもきません。

「じゃあお姉さん達も協力してあげるから」

「任せておきなさい」

「すいません」

すいませんじゃありません。これで完全に逃げられなくなりました。確かにあれですお、私逃げることは好きじゃないですし最初からそのつもりでしたけれどこうして外堀埋められると。何だか非常に嫌な気分になりますよね。そういうことです。

第三話 高校生と大学生その九

「それじゃあ先輩四時に」

「・・・・・・ええ」

惘然として答えます。

「わかったわ。それで」

「いやあ、よかったよかった」

最後に新一君の能天気な声を聞かされました。

「おかげで今日は先輩とデートだ」

「頑張つてね阿波野君」

「この娘奥手だから」

皆相変わらず新一君の味方です。何時の間にかデートにまでなつてゐるし。

「リードしてあげないとね」

「ええ。そういうことで先輩」

「わかったわ」

多分苦虫を噛み潰した顔になっていました。そうならざるを得ませんでした。

「じゃあね」

「ええ。それじゃあ」

軽い調子で言い出しました。

「ちよつと時間潰してきますんで」

「別にそのまま忘れてもいいから」

私は彼に言いました。

「別にね」

「阿波野君、四時よ」

「場所は大学の食堂の前ね」

そうしたらまた。彼女達が言うんです。完全に新一君の味方になつちやつてます。何か私つて彼絡みの話になると急に孤立無援にな

っちゃいます。どうしてもなんでしょう。

「わかったわね」

「了解っ」

ぴっと右手で敬礼みたいに挨拶をしてきました。

「じゃあその時間にね、先輩」

「期待しないで待っておくわ」

「期待して待っているよ」

ああ言えばこう言うって本当に彼のことを言うんでしょう。本当に何から何まで次から次に言葉が出ることです。そりゃ私が口下手なせいもありますけれど。

「じゃあそういうことでね」

そのままどっかに消えます。ずっと私の前に出なかったらいいのに。そうすれば清々するんですけどね。けれどそうなたら・・・

「じゃあちっち」

また友人達が私に声をかけてきます。

「講義行きましょう」

「さぼってたらそのままデート忘れかねないしね」

「忘れたいわよ」

むっとして言い返しました。全く。

「新一君とデートなんて。何でそんなこと」

「まあまあ」

「それにさ。ひよっとして」

一人が私に聞いてきました。

「何？」

「ちっちってひよっとしてデートはじめて？」

「そういえばあれよね」

他の子達も今の言葉でふと気付いたように声をあげます。

「ちっちって一年二年の時は彼氏いないし」

「そうよね」

引つ掛かる言い方です。一年二年はわかりますが何で三年はないんでしょう。大体私は十九年ずっと彼氏なんかいませんけれど。だって私やっぱりあれなんです。そりゃ古い考えですけどお付き合いでするなら御一人とずつとがいいですから。

「じゃあ今までずつと?」

「デートとか経験なし?」

「悪いの?」

横目から皆を見上げて尋ねます。顔がちょっと赤くなっていたかもです。

「ないわよ。だって」

「じゃあいい経験じゃない」

「そうよね」

皆そう言つて笑顔で頷き合います。

「行つて来なさいよ」

「女は度胸」

「けど」

ここで何か恐いものも感じました。

「新一君も男の子だし。若い男の子と二人きりだなんて」

「考え過ぎよ」

こう言つたらそう返されました。思いきり笑われて。

「心配御無用」

「あの子だつたらね」

「そうかしら」

かなり疑わしい言葉にしか聞こえませんでした。正直。

「私はそうは思えないけれど」

「精々唇までじゃない?」

「手を握つただけとか」

「唇って」

そう言われて今度は顔が確実に真っ赤になりました。冗談じゃありません。

「嫌よ、私キスだつてね、まだなんだから」

「自分で言わないの」

「本当に奪われても知らないわよ」

「あっ」

失言でした。今度は皆に完全に呆れられてしまいました。

「しまった・・・・・・」

「とにかくね」

皆呆れながらも私に言います。

「四時よ、いいわね」

「それまでは講義を受けましょう」

「え、ええ」

皆の言葉に頷きます。何はともあれまずはそちらです。けれど四時は絶対にやって来ます。それを思うと憂鬱になりますが時間からは逃げられないんですよね。どうなるやら。

高校生と大学生 完

2007・9・20

第四話 大学の中でその一

大学の中で

天理大学は天理高校のすぐ隣にあるのですが大学としてはあまり広くはない感じです。けれど結構色々なものがあって何かがないとかで困ることはありません。

図書館も大きいですし食堂も立派です。施設も他にかなり充実していて私はかなり満足しています。これは高校でも同じです。天理高校はかなり過ごし易い学校です。

「これでねえ」

四時が近付いています。最後の講義を終えた私は皆と一緒に新一君の待っている食堂の前に向かっていました。かなり不本意ですけれど。

「新一君がいなかったら」

「そんなに彼のことが気になるの？」

「いきなりよ」

不機嫌な顔で言葉を返しました。大学の廊下は普通の学校の廊下と同じです。

「その小さい子って言われたのよ、入学式で」

「ああ、阿波野君が学校に入った日ね」

「そうよ。いきなり」

口に波線を作って言いました。

「しかも新入生と間違えて」

「それはわかるわ」

友達の言いたいことは嫌になる程わかります。何が言いたいのかも。

「だってちつち」

「小柄で童顔だから？」

「ええ。今だつて下手したら小学生に見えるわ」

「小学生……」

かなり落ち込ませてもらう言葉です。これも新一君にしょっちゅう言われます。

「天理小学校にいても不思議じゃないし」

「そんなに低い！？私」

「言わなくてもわかると思うけど」

「それはそうだけれど」

けれど言われるとかなりショックです。小さくて悪いかとも思ったりします。

「まあねえ。彼背は高いし」

「牛乳好きだそうだしね」

友達の一人が言いました。

「そのせいかしら」

「私豆乳だけれど」

私実は豆乳が好きです。牛乳も嫌いじゃないですけどどっちかっていうと豆乳が好きだったりします。そういえば牛乳を頑張って飲んだりもしましたけれど全然背は伸びませんでした。

「駄目かしら」

「ああ駄目駄目」

速攻で駄目出しを受けました。

「やっぱり牛乳じゃなきゃ」

「そうなの」

「そうよ。背は伸びないわよ」

「飲んでも伸びなかったけれど」

それを友達にも言いました。

「結局」

「ちっち寮でも豆乳ばかりだったじゃない」

高校時代のことを言われました。お風呂上りはいつも豆乳でした。

「全部牛乳だったら違ったんでしょうけれどね」

「そうね。けれどそういえば」

また高校時代の嫌な記憶が蘇ります。昨日のように。

「あの時もいつも豆乳飲んでいたような」

「阿波野君いつも来てたわね」

「そうよ」

ああ、思い出ただけで嫌になります。おかげで私の高校三年の時は新一君にずっと振り回されっぱなしだったんです。今もですけど。

「いつつもいつつも夜の東寮のところまで来て」

「せんぱーーってね」

「よくまあ毎日」

「何でいつも来たのかしら」

それがどうしてもわかりません。自宅生なんだから素直に自宅に帰ればいいのに毎日毎日わざわざ夜に来ていたんです。北寮の男の子達と一緒に。

「本当に」

「ってわからないのね」

「こりゃ困ったことだ」

皆急に私に対して言いだしました。

「！？何が？」

「何がってちつち」

友達の一人がきょとんとする私に対して呆れたような笑みを浮かべて言ってきました。

「そういうのもわかりなさい」

「苦労するわよ」

「それも彼がね」

「彼がねって」

これはわかりました。私に言ってるのじゃないですから。

「新一君が？」

「そうよ」

「ほんつとうにわからないのね」

「って何がよ」

本当にわかりません。皆何を言いたいんでしょう。

第四話 大学の中でその二

「どうして新一君が苦勞するの？私が困ってるのに」

「ああ、気付かないならいいわ」

完全に呆れた顔で話を打ち切ってきました。

「それはそれで」

「そうなの」

「で、お化粧はしてるわね」

一応は。メイクは薄めが好きですけれど。

「感心感心。髪も服もきちんとしてるし」

「コロンもね」

「コロンは別に」

つけてないです。毎日お風呂に入ってるだけで。それで充分ですよね。

「つけてないけれど」

「じゃあはいっ」

「きゃっ」

いきなり友達の一人が霧吹きに入れた香水をかけてきました。

「これでいいわね」

「ローズ！？」

「そうよ、薔薇よ」

香水をかけた友達がにこりと笑って私に告げました。

「これで武装完了」

「後は相手をノックアウトするだけね」

「ノックアウトね」

それを聞いて急に私の中で物騒な気持ちが沸きました。

「是非そうしたいわ」

「こらこら」

そう言ったらすぐに怒られました。

「そんなこと言わない」

「おみちの人でしょ」

「それはそうだけれど」

それでもなんです。新一君に関しては。

「それにね。ちっち」

「何？」

話が微妙に変わってきた感じがしました。

「ノックアウトするならね」

「ええ」

「拳じゃないのよ」

そう言ってきました。

「拳じゃないって？じゃあ何で？」

「女の子でしょ、あんたも」

今更って言葉でした。言うまでもないことです。

「そうだけれど」

「じゃあ答えは出てるじゃない」

「！？」

その言葉に首を傾げます。

「答えが出てるの！？」

「そうよ。女の子じゃない」

友達は楽しそうに笑って私に言います。けれどそれがどうしてもな
のかさえ私にはわかりません。

「だからよ。女の子のやり方で」

「どうするの？」

「そこは勉強」

ここで突き放されました。よくわからないまま。

「自分で考えなさい」

「もっともちっちに關しては阿波野君限定でそんな必要ないでしょ
うけれど」

「余計わからないんだけれど」

本当に。何で新一君限定なのか全然わかりません。そもそも皆が私に何を言いたいのかさえさっぱりわからないです。何なんでしょう。

「何が何なのか」

「それがわかるのも勉強」

「いいわね」

「そうなの」

「わからないでも行くっ」

いきなり急かされました。

「多分新一君待ってるわよ」

「だから」

「だからってもう？」

まだ少し早いです。それであの時間にルーズな新一君が待ってるなんて。そんなことないでしょって言おうと思ったたらまた言われてしまいました。

「絶対待ってるから」

「ねえ」

皆で言います。

「だからちつちも急ぐ」

「折角のデートなんだしね」

「デートって」

また口を尖らせてしまいました。

「そんなの。私は」

「いいから来るっ」

「さもないと怖いわよ」

「わかったから」

手まで掴まれました。こうなつては反論も何ありません。私は本当に仕方なく新一君のところに向かいました。本当に仕方なくですから。そこは誤解しないで下さいね。

第四話 大学の中でその三

それで食堂の前に行くと。本当にいました。

「ねっ、いるじゃない」

「私達の言った通りに」

「別にいなくてもいいのに」

心からそう思いました。

「それでもいるのね」

「まあ文句言わない」

「デートでしょ？笑って」

「だからデートじゃないし」

それだけは否定します。何があっても。

「大体新一君って」

「阿波野君が何？」

「二つも下じゃない」

それを言いました。

「二つもよ。弟みたいな相手なのよ」

「弟ねえ」

！？何か失言だったでしょうか。腕を組んでムキになった顔で言ったんですがその顔を皆に見られています。さらにおかしな感じが。

「やっぱりそうなんだ」

「よっ、この年下殺し」

「なっ、なっ、なっ」

自分でも顔がどんどん真っ赤になっていくのがわかります。年下殺して。言っていないことと悪いことがあるっていうか。そもそも私は別にですね、変なことは。

「私の何処がなのよ。年下殺して何か悪い女の人みたいに」

「それがわかったらちっちは一皮剥けてるってことなんだけれどね」
「全く」

「ほら」

ここで一人が新一君を指差します。

「阿波野君こっちに気付いてるわよ」

「そうね。手を振ってきてるじゃない」

「気付いたの。向こうも」

「まあ今の話は聞かれてないから」

また一人が私に言います。

「それは安心していいから」

「そうそう。どんち行けばいいから」

「何でこうなるのよ」

むすつとした顔を作りました。とにかくすつごく面白くない気分です。そんな私に対して新一君は嫌になる位朗らかに手を振っているのです。

そんな彼の前に来ると。やっぱり心の底から楽しそうに私に言うのです。

「先輩、待ってたよ」

「待ってなくてもよかったわよ」

私はそう彼に言い返しました。

「別に。頼んでもいないし」

「まあまあ」

むすつとする私を宥めてきました。そして。

「隠さなくてもいいから」

「あのね、別に隠してなんか」

「じゃあ阿波野君」

ここで皆が私と阿波野君に言いました。

「この娘任せだから」

「好きにしていから」

「わかりました」

そして新一君も皆のその言葉に朗らかに応えます。それにしても今の言葉は。

「好きにしていって何よ」

「だから男の子に任せなさいって」

「こういうことはね」

「いやあ、そういうわけにはいかないですよ」

新一君が調子に乗って言います。声でそれがわかります。

「先輩ですし。やっぱりあれですよ」

「年上だから？」

「はい」

なーーーーんか年上って言葉に嫌な響きを感じます。さっきから年下だの年上だのって。あのですね、私実は年上の人の方がいいかな、なんて思ってるんですよ。それで背が高くて涼しげな顔の人で。これは普通に私の好みなんですけれど。そりゃあれです、新一君だって顔は悪くないし背は高いし。けれど・・・・・・年下だし何か弟みたいだって・・・・・・うわ、弟って言葉はなしです。さつきも言ってしまったけれど別に弟だから親近感があるとかじゃないですから。手間がかかるってことですよ。誤解しないで下さいね。

「やっぱり立てたいですよね」

「立てたいんならそのまま帰って欲しいわ」

はつきり言ってやりました。

「それが一番嬉しいから」

「じゃあ俺の家まで一緒に帰りましょう」

「何馬鹿なこと言ってるのよっ」

ドサクサに紛れて。毎度のことですが。

「あんたの家に行っても何にもすることないでしょ!？」

「あるじゃない」

「ねえ」

後ろから皆が言います。

「ちっちゃ、教えてあげなさい」

「お姉さんでしょ」

「ちよつと、何をよ」

また話がわからなくなりました。教えてあげるって何を。

「ああ、先輩そいうのは駄目なんですよ」

「って何で新一君が答えるのよ」

「だって。先輩あれでしょ？」

ここでまた私に言うんです。

「まだキスも何も」

「ちよつと、それがどうしたのよ」

「自分で言う？」

「ほんつとくに嘘つけないわね、この娘」

また後ろから皆が言います。今度は呆れた声で。

「だから。教えるも何も」

「えっ、ちよつとそれって」

やつと話がわかりました。そのせいで顔がすぐに真っ赤になります。体温も急に暑くなってまるで真夏みたいに感じてしまいます。

「ひよつとして。だから」

「やあつつとわかつたみたいね」

「鈍感ねえ、相変わらず」

「まあそれはおいおい」

「おいおいじゃないわよっ」

また新一君に言い返します。

「いい！？ちよつとでも変な動き見せたらひっぱたくからね」

「わかつてるよ。それはそうとさ、先輩」

「ええ」

話が少し穏やかになります。私は全然心中穏やかじゃないですけど。

第四話 大学の中でその四

「行こう、デートに」

「それでも行くのね」

この神経には参ります。本当に図太いというか。

「うん。何処がいいかな」

「言われるとちよつと」

困ってしまいます。そこまでは全然考えていませんでした。

「甲子園とかは？」

「おぢばから離れるじゃない」

何でそこでそんなのが出るのやら。甲子園は高校の時応援で随分行きました。天理高校は野球部が強いんで。カチワリが美味しいですよね。

「おぢばじゃないと駄目よ。甲子園なんて一泊じゃない」

「それもいいかも」

「よくないっ」

また言つてやりました。

「ふざけたこと言つと巨人帽被らせて一塁側に行かせるわよ」

「先輩、そりゃないんじゃない？」

「だったらふざけないのっ」

本当に。手間がかかる子です。

「怒ってるんだから、私」

「はいはい、りつぷくはそこまで」

すぐに友達からおみちの言葉で突っ込みが入りました。

「機嫌をなおしてデート開始ね」

「ちっちも笑つて」

皆で私に対して言ってきます。

「にっこりと。笑顔は表札よ」

「わかつてるけれど」

おみちの言葉を出されると。どうにも言えません。

「阿波野君もね……. ってもう笑ってるか」

「僕はいつも笑顔ですよ」

本当に何処までも晴れやかな笑顔です。憎々しいまでに。

「先輩と一緒になら」

「うう…….」

「そういうことで。じゃあちっち」

「私達はこれでね」

「って何処に行くのよ」

姿を消そうとする皆に対して問いました。

「ってデートなのに私達がいてどうなるのよ」

「ねえ」

当然といった調子で私に言います。

「ささ、後は若い人達だけで」

「仲良くね」

「お見合いじゃないのよ」

何かすっごい引つ掛かる言い方をまた。こんなばかりですけれど。

「それに私達コンパだし」

「軽く飲んでくるから、これから」

「あつ、そっちもいいですね」

何故かここで新一君が笑顔になります。

「お酒飲めますね」

「未成年が何言ってるのよ」

彼、お酒大好きです。詰所で何かと飲んでいます。梶本さんや井本さんの御主人と。皆が勧めるんですがそもそも彼も断りません。それについても困った子です。

「お酒なんて。そんなのだから山村先生にも睨まれるのよ」

「まあまあ」

「まあまあじゃなくてね」

何で彼に対してはこんなにお説教するのか。自分でも不思議なんです。

「そんな態度がほりになるのよ」

「先輩は厳しいなあ」

「そう?」

「ねえ」

後ろで皆が新一君の言葉に首を傾げます。

「正直ちっちは優しいわよ」

「それでもまあ」

何故かまた私の方を見て笑ってきます。

「阿波野君だけには別かも」

「諸般の事情でね」

「事情って」

また変な言葉が出て来ました。

「何なのよ、また」

「それはまあ言わないってことで」

「ねえ」

「じゃあ後は僕の予想ですね」

それで新一君が変なこと言うのはいつも通りですけど。それにしても。

「そういうことで」

「じゃあ阿波野君」

「デート頑張ってね」

「はいっ」

ここで新一君に言うのが。すっごく腑に落ちないです。

「頑張ります、絶対に」

「別にそんなのいいわよ」

私が言う言葉も決まっていました。

「期待していないし」

「そっいう時こそやるのが猛牛野球なんだけれど」

「全然知らないわ」

そもそもパリーグは。私あまり知らないです。

「期待していようがしていなかるうが絵になる野球をするチームなら知ってるけれど」

「ああ、阪神」

「そういうこと」

やっぱり阪神はいいですよ。あの勝っても負けても、しかもどんな勝ち方負け方でも絵になるって。そんな球団阪神しかありませんよね。

「やっぱりそれよ」

「じゃあデート場所は野球部の練習を」

「それもちよつと」

何か余り気分が乗りませんでした。

「今は見たくないわ」

「じゃあラグビー部？」

「それもねえ」

そつちもあまり見たくない気分でした。気が乗りません。

「悪いけれど」

「じゃあ何処にしようかな。ええと」

「じゃあアーケードでも歩いたらいいじゃない」

ここで友達の一人が私達に言ってきました。

第四話 大学の中でその五

「アーケードを!？」

「そつ、商店街のね」

にこりと笑って言います。確かに悪くないですけど何か。

「それもちよつと」

私はその言葉にも首を捻りました。

「もつと他に」

「じゃあ適当に二人で歩いたら?」

別の友達はこう提案してきました。

「そついうデートもいいわよ」

「そつなの」

そついうの全然わかりません。だつてしたことないですから。

「そつよ。阿波野君はどうなの?」

「僕ですか?」

「そつ、何か考えてるかしら」

「ええと」

珍しく困つた顔を見せていました。滅多に見られない顔です。

「そつだなあ。ここはやっぱり」

「好きにしたら?」

私は突き放すようにして新一君に言いました。

「変な場所じゃなければ何処でも」

「じゃあホテル」

「……はつたおすわよ」

絶対に言うと思っていました。本当に。

「そんなの。旦那様とじゃないと」

「だそつで」

「阿波野君、そこまではまだ先よ」

「はい」

「はいじゃないの」

またそこで言うんだから。すぐ調子に乗る。

「全く。新一君とだなんて縁起が悪い」

「いや、やっぱり後輩だし」

全然後輩らしくないですけどね。それこそ初対面の時から。

「こういうのは教えてもらわないと、俺が」

「一体何を教えるのよっ」

今の言葉は本気で頭にきました。

「私が新一君に何を」

「だから恋のレッスン」

「冗談じゃないわよ」

腕を組んでむくれた顔で新一君から顔を背けました。

「水でも被って反省しなさいっ」

「先輩厳しいなあ」

「厳しいも何もね」

段々りつぶくが増していきます。それが自分でもわかります。

「だから私は結婚するまではキスも何も」

「だから阿波野君チャンスなのよ」

「わかるわよね」

ここでまた。友達が新一君に言うんです。どっちの味方なのかわかりません。今のところは確実に新一君の味方になっていきますけれど。

「唇ゲットしたら勝利は決まりよ」

「後はそのままゴールインだから」

「ゴールインってねえ」

今の言葉ははっきりと耳に入りました。私耳はいいですから。

「何でそう新一君に色々言うのよ」

「応援してるから」

「そうそう」

新一君をです。とんでもない話です。

「阿波野君、できれば今日決めなさい」

「未来のお嫁さんよ」

「ですね」

まあた言うんですから。この子は。

「じゃあ奥さん」

「二度とその言葉使わないで」

けれど。あまり悪い気はしないです。本当なら今までで一番怒る言葉なんですけれど不思議とそうじゃありませんでした。むしろ受け止められる感じです。どうしてなのでしょう。

「いいわね」

「わかりました。じゃあ今からデートに」

「仕方ないわね」

少し溜息を出して応えます。

「行きましょう。ただ」

「ただ？」

「手をつないでも駄目よ」

最初の段階で釘を刺しました。

「いいわね、そうしたらすぐにはったおすから」

「男は強引によ」

「そしてそのままゴールイン」

「そこ横から言わないっ」

また友達を注意しました。

「新一君が本気にしちゃうでしょ」

「あつ、それは大丈夫です」

また新一君が言ってきました。

「俺ムード重視派ですから」

「ムード？」

「そう、ムードです」

いきなり何馬鹿言ってるのよと思いました。新一君が。
「先輩と二人きりですしね」

「気持ち悪いと言わないのっ」

二人きりだのムードだのって。何されるか不安になりました。

「仕方なくなのよ、私は」

「まあまあ」

「まあまあじゃないわよ」

何かまたデートに行きたくなりしました。実は私今までデートなんてしたことなかったですし。そのはじめての相手がどうして新
一君なんでしょう。

「帰るわよ、詰所に」

「じゃあ送りますね」

「いいわよ」

一緒に帰るんですから同じです。本当に狙ってるんだかいらないんだか。

「そんなの」

「まあとにかくお邪魔虫はこれで」

「退散するわね」

「えっ、ちよっと」

皆が帰ろうとするので慌てて声をかけます。

第四話 大学の中でその六

「もうなの？」

「もうって」

「四時は充分回ったし」

「それはそうだけれど」

腕時計をちらりと見ます。確かに時間でした。

「それでももうちょっといないの？」

「だから」

「デートなのよ」

また楽しみに私に言います。

「それでどうして私達がいるのよ」

「そつ、若い者同士で」

「それはデートの言葉じゃないでしょ」

お見合いの言葉だって私にもわかります。やっぱり縁起でもないです。

「結局。新一君と一緒になのね」

「どうも、先輩」

「じゃあいいわ」

いい加減私も観念しました。

「行きましょう。場所は」

「俺が案内しましょうか」

「いいわよ、それは」

何かここで変にお姉さんみたいな気持ちになりました。やっぱり妹が二人いるせいでしょうか。それに信者さんや他の教会の子供さんの相手もしてきましたし。そうした相手をするのって馴れているんです。こんな背だけ高い子供は知らないですけれど。

「私が案内するから。おぢばのことは新一君より知っているし」

「それはまたどうも」

「よっ、姉さん女房」

「年下キラー」

「その二つは絶対に言わないでっ」

八重歯を出して友達二人に怒りました。

「仕方なくなんだから」

「はいはい」

「まあ私達はこれでね」

「えっ、帰るの」

「帰るのってねえ」

「だから言ってるじゃない」

私の言葉に呆れた顔を見せてきます。何を言ってるのって感じで。

「私達はお邪魔虫だって」

「もう邪魔はしないから」

「じゃあ私これから」

ちらりと新一君を見ます。やっぱり嫌になる位にこにこと笑って
ます。

「二人きりじゃない」

「デートだから当然でしょ」

「今更あれこれ言わないの」

「うっ……」

「それじゃあね」

本当に足を向こうに向けだしました。

「後は二人で」

「ごゆっくり」

こうして完全に二人になりました。横には相変わらず新一君がい
ます。

その彼が。にこにことしながら私の方に来て。言っんです。

「じゃあさ、先輩」

「何処行くの？」

「あれ、それは先輩がエスコートしてくれるんじゃない」

さっきの話の流れでした。私の方がずっとおぢばを知ってますから。住みだしてもう四年目です。長いようで短いですけど月日はそれだけ経っています。

「違うの？」

「こっぴうのは普通はね」

相変わらずの調子の新一君に言います。

「男の人がするものだけねど」

「じゃあ居酒屋でも」

「そう言つと思つたわよ」

いっつもいっつも。ふざけるんだから。

「駄目よ、やっぱり私が案内するわ」

「どうもどうも」

「本当に世話がやけるんだから。自分で何かしたら？」

「これでもしてるよ」

何処がなんでしょう。次から次に出まかせばかり言うくせに。まんまユースケ・サンタマリアさんです。外見はともかくキャラクタ―はそのままだと思います。

「先輩の見えないところで」

「常に心掛けてるって言いたいよね」

「そついうこと」

また出まかせなんですが。口を開けば出まかせです。

「だからさ。安心していいから」

「末の妹より安心できないわよ」

まだ小学生の子よりも。手間がかかるんですから。

「まあいいわ。じゃあ行くわよ」

「それで何処？」

「何処つて言われても」

「そこまで全然考えてません。考えられませんでした。とりあえずね」

それでも何とか口には出します。

「何処か行きましょう」

「ミスタードーナツとか？」

駅前にあります。結構そこでドーナツ買います。

「あそこでまず、とか」

「そうね。遠いけど」

学校から駅まで結構あります。自転車を通う人も多いです。

「それじゃあまずはそので」

「うん、それじゃあ」

「遠いけれどね」

そのことに少し溜息です。

「何か嫌なの？いつも通ってる道じゃない」

「道はね」

歩きはじめながら答えます。もう横には新一君がいます。

「別に構わないけれど」

「俺も一緒にいるのに」

「それが嫌なの」

そういうことです。はじめての正式なデートの相手が新一君だなんて。これがおみちびきだしたら親神様はどういう思し召しなんでしょうか。天理教ではそうした人と人の出会いとかをおみちびきと言います。思し召しは親神様のお考えですね。

「全く。皆も何で新一君を応援するんだか」

私のことは全然お構いなしで。あれでも友達！？と思います。

「わからないわ」

「それが俺の人徳なんだって」

すっごい図々しい言葉ですよ。

「誰からも慕われる」

「勝手にそう思ってたなさい」

もう処置のしようがありません。

「とにかく。約束は約束だしね」

「じゃあまずドーナツを」

「ドーナツねえ」

何かここでふと考えが変わりました。

「それもどうかしら」

「て何かあるの？」

「いえね」

もう夕食時ですし。何かふと考えが。

「詰所に戻って御飯にする時間だけれど」

「えっ!？」

それを聞いた新一君の声、顔ときたら。全くの別人でした。特に顔です。何かこの世の終わりが来たって感じの顔でした。天理高校が甲子園の予選で智弁高校に負けた時みたいな。そんな顔になっちゃいました。

「じゃあ帰るの!？あの、その」

「だから」

何でこんな顔になって狼狽しきった声になっているのかわかりませんが。とりあえず携帯を出しました。

「九、一、三つて入れたら？」

「何よそれ」

それでも変な突っ込みは忘れない新一君です。その番号で何があるのやら。

「とにかく。今日は外で食べるって連絡するから」

「じゃあデートするんだ」

「約束は約束だから」

約束破るのは嫌いです。ですから。

「一緒に食べましょう、いいわね」

「うん、うん」

やたらと嬉しそうに頷いてきます。

「じゃあこれからいざ」

「ってこらっ」

どさくさに紛れて肩を抱こうとしてきます。

「そんなことしたらひっぱたくって言ってるでしょっ」

「あつ、駄目なんだ」

「駄目よ、絶対に」

また八重歯を出しちゃいました。

「とにかく清く正しく、でいきたいから」

「明るく楽しく陽気ぐらしじゃなくて」

「こんな時だけ言わないのっ」

都合よく。

「私の肩を抱いていいのは未来の旦那様だけなんだし」

「厳しいね」

「とにかく。行くわよ」

デートをするだけでも何かあれなのに。あれこれと図々しいんだから。

「わかったわね」

「うん。じゃあ一緒にね」

何だかんだで私の横に来ました。これ位はいいですけど。何はともあれ新一君とのデートがはじまりました。はじまるまでにこんなに大騒ぎするものでしょうか、デートって。

「まずはソフト食べようよ」

「はいはい」

また馬鹿なことを言うのの相手をしながら黒門に向かいます。そこから神殿本部を見ながらデートをはじめたのです。

第四話 完

第五話 彩華ラーメンその一

彩華ラーメン

神殿から商店街を二人で歩いていきますけれど。人目が気になります。

「誤解されないかしら」

「誤解って？」

「だから新一君と歩いてよ」

それが凄く不安です。こんなことで変に思われたら困るところではありません。

「何て思われるか」

「あれ、僕は平気だけれど」

新一君はそうでしょうけれど。それでも私は違うんです。

「先輩とデートだってはつきり言えるし」

「何でそう能天気なのよ」

それが不思議でなりません。

「私、初めてのデートだしやっぱり」

「僕だって初めてだよ」

「あれ、そうだったの」

そういえば何か言っていたような。憶えていないですけど。

「初めて同士でいいじゃない」

「そういう問題じゃなくてね」

そう新一君に言い返します。

「私が言いたいのは。他の人達が私を見て」

「恋人同士と思われるとか？」

「それよ」

それが凄く不安で心配なんです。

「誤解されたら困るわよ」

「いいじゃない、同じ大教会所属だし」

「たまたまでしょ」

最初それ知った時はそれこそ我が目を疑いました、はい。

「同じ高校の先輩後輩だし」

「それもたまたまでしょ」

入学式の時から全く。

「これも奇しきいんねんだって」

「悪いんねんね」

はつきりとそう言えます。何でこんないい加減な子が。

「今もこうしてデートしてるし」

「仕方なくでしょっ」

何か腹が立つてきました。

「新一君があんまりしつこいから」

「じゃあもつとしつこく言ってさ」

「今度は何よ」

何か急に左手を見てきました。

「さっき言ってたさ、ほら」

「さっきって？」

「だからソフト」

言われてやっと思ひ出しました。

「ソフトクリームね」

「好きね、ソフト」

そういえばそうです。新一君は私と一緒にの時はいつもソフトクリームを食べてるんです。商店街のソフトクリームをです。今ふと気付きました。

「太るわよ、食べ過ぎると」

「先輩もね」

また余計な一言を。

「あまり甘いもの食べてると」

「そんなに食べてないけれど」

「けれど好きでしょ、甘いもの」

「まあそれはね」

自覚してます。ドーナツもケーキも大好きです。あとチョコレイトなんかも。太るのと虫歯には結構気をつけていたりします。やっぱり健康第一ですから。

「だけど新一君私より食べてない？」

「そうかな」

自覚はないみたいです。

「まあ男と女の子じゃ食べる量が違うしね」

「それはね」

これはわかります。

「そうだけれどね」

「まあとにかくソフトをね」

そっちに話を戻してきました。

「食べようよ。口が寂しいし」

「わかったわ。じゃあ何がいいの？」

「バナナ」

オーソドックスでした。

「白ね」

「今日の先輩の下着の色だよね」

「えっ、ちよっと」

な、何で知ってるんでしょう。今日はズボンですし上着もちゃんと着て絶対にわからない筈なのに。

「何でそんなの知ってるのよ」

「あれっ、そうだったんだ」

言った本人がかなり驚いた顔になっていました。

「冗談で言ったのに」

「えっ!？」

・・・しまった。またやっちゃいました。

「そうだったの」

「当たり前じゃない。何で俺がそんなこと知ってるの」

「そうよね」

ですよね。有り得ないです。

「驚いて損しちゃった」

「けれど今日の先輩白だったんだ」

また楽しそうに言います。

「可愛い感じ？似合うと思うよ」

「どうでもいいでしょ、そんなの」

出しちゃった言葉はもう返ってきません。自分でもとんでもない失敗をしちゃったってことはわかってます。よりによってこの子に。またしてもです。

「次その話出したらソフト買ってあげないから」

「そう言うとか何かお母さんみたいね」

「それでもよ」

ここは強引に押し切ることにしました。

「下着の色とかどうでもいいし」

「俺はそうじゃないけれど」

「新一君は関係ないのっ」

これ以上この話をして私が墓穴掘るだけです。とにかく終わらせることにしました。

第五話 彩華ラーメンその二

「わかったわね」

「わかったよ。じゃあバナナね」

「ええ」

結局新一君にバナナおごることになりました。私も同じバナナを頼んで二人並んで歩きながら食べだしました。ソフトは相変わらず美味しくてとても甘いですけれど。

「これから下りるんだよね、商店街を」

信号のところで待ちながら私に声をかけてきました。

「ここからずっと」

「だってミスタードーナツ行くんでしょ？」

そう新一君に言いました。

「だったらやっぱりこのまま」

「何かさ、かなりお腹空いたし」

ここで急に言ってきました。

「ラーメン食べなくなっただけけれど」

「ラーメン！？」

「うん。駄目かな」

「別にいいけど」

ラーメンですか。何か大学の食堂で結構食べているんであれですけど。

「けれどあれよ」

ちよつと気になることがあったんで。それを新一君にも言います。

「あそこ行くのならちよつと早いわ」

「早いかな」

「そうよ、五時からじゃない」

こう言いました。

「ちよつとそこまでは」

「じゃあさ。駅の向こうに行かない？」

「駅の向こう？」

「そこにもあるじゃない」

新一君はこう私に言ってきました。

「お店が」

「ああ、そういえばそうね」

言われて思い出しました。ありました。

「遠いけれど」

「遠いのは別にいいわ」

私はそう新一君に言葉を返しました。

「ほら、途中に詰所あるからそこで自転車借りて」

「そういえば先輩今日は自転車じゃないんだ」

「ええ、ちよつとね」

実は学校にはいつも自転車なんですけれど今日は違いました。気分を変えて歩いていっただけなんですけれど。たまにこうした日もあります。

「じゃあ先輩の自転車で行こうよ」

「新一君は？」

「だから大丈夫なんだって」

根拠が全くないとしか思えない笑みを私に向けて言ってきました。

「そこはね。僕に任せてよ」

「新一君に？」

話を聞いただけですつごく不安になる一言でした。

「大丈夫なの？」

「いいからいいから」

私の話なんて全然聞かずに。話を続けます。

「じゃあそれでね」

「ええ」

思いきり不安ですが頷きました。

「わかったわ。そのかわり変なことしないですよ」

「変なことつて？」

「わからなかったらいいわ」

そういえば別に。自転車で何かできるわけでもないですね。自分で言った言葉が変だったって気付きました。

「じゃあまずは詰所ね」

「そうよ。ラーメン食べるんならね」

こうしてとりあえず詰所に行くことになりました。そこで私の自転車を出すと。

「僕が運転するから」

新一君はこう言ってきました。

「えっ、新一君の自転車は？」

「そんなのいないし」

何かまた変なことを言います。

「二人乗りでいこうよ」

「二人つて」

「俺が運転するからさ」

勝手に話を決めちゃってます。

「いいよね、それで」

「私の自転車なんだけれど」

抗議めいた口調で言い返しました。

「何でそれで新一君が？」

「じゃあ先輩が運転する？」

不意に私に言ってきました。

「先輩が」

「それは当然でしょ」

私はきっぱりと言い返しました。

「私の自転車なんだし」

「けれど僕が後ろに乗るんだよ」

それも勝手に決めちゃってます。だから私の自転車なのに。
「先輩が運転して。無理じゃない？」

「うつ」

確かにその通りです。私小さいし彼は大きいし。それで私が運転するっていうのははっきり言って無理があるなんてものじゃありません。

「だからだよ」

「新一君が運転するのね」

「今度はバイクでね」

「バイクは駄目でしょ」

天理高校はバイクは絶対駄目です。ひょっとして。

「わかってるの？」

「まあ免許も持っていないけれどね。大学は入ったらサイドカーでも」

「サイドカー？」

また変わったのを持ち出してきました。

第五話 彩華ラーメンその三

「普通のじゃなくて？」

「だって仮面ライダーカイザ好きだし」

また仮面ライダーでした。近鉄とライダーばかりなんだから。はつきり言ってその辺りも子供です。でっかい子供です。

「それで先輩が横にね」

「それはお断りするわ」

だから何で新一君と。

「自転車でもあれなのに」

「じゃあ止める？」

何でここですっごく残念な顔になるのか。歩いていけばいいのに。

「それじゃあ」

「今日は特別よ」

その顔見ると。断れません。私も甘いんでしょうか。新一君のそんな顔を見るとどうしても許してしまいます。胸が痛くなる気持ちも入って。

「いいわね」

「よかった。じゃあすぐに行こうよ」

私の言葉を聞くとすぐに機嫌を完全になおしちゃいました。すぐにね」

「ええ。駅の向こうの彩華だよ」

「そこなんですよ？」

また新一君に問います。

「今空いてるのは。だからよ」

「うん。それじゃあ乗って」

もう私の自転車に乗って後ろに乗るように言ってきます。

「飛ばすから」

「安全運転で行きなさいよ」

自分の自転車の後ろに乗りながら注意します。新一君の身体に後ろからしがみついて。上半身はべったりといった感じで新一君の身体にくっつきまゝ。

「商店街だって人多いんだし」

「そうだね。そっちの方がデートの時間多いし」

「じゃあ早く行つて」

それだと思えがすぐに変わりました。

「短い方がいいから」

「僕は長いのがいいけれど」

「私は違うのっ」

運転をはじめた新一君に言い返します。

「少しでも短いのがいいんだし。それに」

ここで詰所の入り口をチラリと見ます。

「他の人にこんなとこ見られたら」

「梶本さんおられないね」

「おられなくていいのよ」

おられて見られたらと思うと。気が気ではありません。

「何だつて思われるじゃない」

「だからデートだつて」

「それが嫌なのっ」

ああ、また怒っちゃいました。新一君と一緒にいつもこうです。

立腹は禁物なのに。最近それで八重歯が目立つようになったって言われています。八重歯も気にしてるんです。

「何で新一君なんかと」

「未来の旦那様とデートしてると思えば？」

「……天理ダムまで一緒に行く？」

殺意まで感じました。正直に言います。

「何なら」

「何でそこに？」

「ダムの中に放り込んであげるわよ」

半分本気でした。

「何で新一君が私の未来の旦那様なのよ。私の未来の旦那様はね」
「うん。どんな人？」

「加藤和樹さんみたいな人よ」
「ファンなんです。すっごく格好いいから。他には外国の方でトラボルタさんとか。あとアントニオ猪木さんに阪神の鳥谷さん。趣味が散らばってますけれど。」

「容姿はまあ置いておいて。とにかく真面目でおみちを奇麗に通ってる人よ」

「やっぱり僕じゃない」

「何処がよ」

全然違います。新一君が？って感じですよ。

「またふざけて」

「ふざけていないけれどさ」

「それがふざけてるのよ」

そうとは思えません。

「本当に。とにかくね」

ここにずっといると危ないです。行くように急かします。

「行くわよ。いいわね」

「うん。じゃあお姫様」

「お姫様じゃないし」

何かまた新一君のペースです。

「彩華まで」

「ええ」

そのまま自転車で駅の向こうまで行きました。新一君の身体にしがみついてですけれど何か風を感じながらで。気持ちいい感じでした。

あっという間に到着でした。自転車だと本当にすぐです。

「ここだよね」

「ええ、ここよ」

彩華の前です。赤いお店の外が結構目立ちます。

「じゃあ入るわよ」

「うん。じゃあ僕は」

お店の入り口でメニューを見ていました。

第五話 彩華ラーメンその四

「特大頼むから」

「特大ね。わかったわ」

その言葉にこくりと頷きました。

「他には何もいらないの？」

「後でドーナツも食べるんだよね」

「あつ、そうね」

言われて思い出しました。そうでした。

「だからそれだけね」

「わかったわ。それにしてもいつもながら食べるわね」

男の子ですし。やっぱりそれは当たり前ですね。

「私は。何か少食だけれど」

「だから小さいんだ」

「ほつといて」

気にしてるんですから。八重歯と胸と背は本当にどうしようもないです。

「食べる子は育つしね」

「それ以上育ってどうするのよ」

ただでさえ仰ぎ見ているのに。これ以上なんて。

「頭の方は成長しないのに」

「気にしない気にしない」

「ちよつとは気にしなさいっ」

またお姉ちゃんな言葉になってしまいました。妹達にもこんなことは言わないのに。

「今二年よね」

「そうだよ」

私より二つ下ですから当然そうなります。残念ですが留年したなんて聞きませんし。

「一年の頃から全然変わってないじゃないの」

「それは先輩の気のせいだよ」

「そうは思わないけれど」

心の奥底からそう思います。

「何処が？」

「気付かないところで成長してるの」

また大嘘です。

「ほら。男子三日会わねばって言うじゃない」

「そうなの」

この諺は知りませんでした。

「そういうこと。僕だって変わってるんだよ」

「三日どころか毎日会ってるけれどそうは思わないわ」

本当に毎日なんです。私が高校の頃から。入学式の時からです。そこから毎日毎日。夏のおちばがえりの時もお正月の時も何故か会いましたし今はわざわざ詰所に来て。何なんでしょう。

「だから気付かないだけだって」

「絶対に気付かないと思うけれど」

「じゃあ。見てみる？」

何か急に声が真面目になった感じでした。

「今から」

「ど、どうしたのよ急に」

急に真面目な声になったんでびっくりしちゃいました。

「別にいいわよ」

「そう。じゃあさ」

すぐに元の雰囲気になりました。何なんでしょう。

「行こう。ラーメン食べに」

「え、ええ」

まだびっくりしたままでしたけれど頷きました。

「それじゃあ」

「飛ばすよ」

そう言ってペダルに足をかけます。

「しっかりつかまっついていてね」

「だから安全運転よ」

新一君に注意します。

「さつきから言ってるじゃない」

「お腹空いたし」

「それでもよ」

注意しておかないと。危ないです。

「車多いのに」

「車の方からよけてくれるよ」

「馬鹿言いなさい」

何でこんな考えになるのか。理解不能です。

「そんなこと言ってるって本当に……きやつ」

「先輩、行くよ」

話の途中でもう運転をはじめちゃいました。危つく舌を噛むところでした。

「ちょ、ちょっと」

「このまま一気に行くから」

人の話なんて聞いちゃいませんでした。

「それでいいよね」

「だから安全運転でしょ」

怒って言い返しました。

「そうじゃないと許さないから」

「あっ、じゃあ」

急に運転が穏やかになりました。

「そういうことで」

「わかってくれたらいいけれど」

動きが急に穏やかになって。後ろにいる私の方が驚きでした。こんなに素直じゃないんですけれど。今回に限ってどうしたんでしょうか。

けれどやっぱり自転車は速いです。あっという間にその彩華ラーメンの前にまで来ました。ここのラーメンって本当に印象的なんです。どう印象的かというと。

「それでさ」

私達はテーブルに向かい合って座りました。そこで新一君が言ってきました。

「大蒜入れてね」

テーブルの端にあるおろし大蒜を入れた容器を指差して言います。ここのラーメンは大蒜味でしかもテーブルにも大蒜を用意してあるんです。

「どかつと入れてね」

「それはいいけれど」

私も大蒜は嫌いじゃないです。ですからそれは本当にいいんですけれど。

「何？」

「後でいいの？」

そう新一君に尋ねました。

「後でって？」

「ほら、誰かと待ち合わせとかしてないわよね」

「別に。家に帰るだけだし、もう」

「そうなの」

「そうだよ。それにさ」

ここでまた言います。

「俺の一番大事なのって今だし」

「今!？」

「そう、今」

私の顔を見て笑って言います。

第五話 彩華ラーメンその五

「今が一番大事だから。だからここでよかつたら別にいいんだ」

「だったらいいけれど。それでも」

「ここでまた気になることが一つ。」

「その大事なことって何？」

「それは内緒」

「けれどそれは言いませんでした。」

「悪いけれどね」

「何か気になるわね」

「気にしない気にしない」

笑って誤魔化してきました。

「大したことじゃないしね」

「大事なことなの？」

「変な話ですよ。大事なことだって言うのに大したことじゃない
つて。」

「どういうことよ、それって」

「まあそれは食べながら」

ここで注文していたラーメンが来ました。新一君は特大で私は並です。それを比べるだけでかなりの違いがあります。お店の人も間違えることなく私の前に並を置きます。

「それじゃあ」

「うん」

私がいただきますの音頭を取りました。手を合わせて。

「いただきます」

「いただきます」

手を二回叩きます。天理教のいただきますです。

それからラーメンを食べはじめますが新一君の食べっぷりと言ったら。やっぱり高校生の男の子なんだなって思います。

「よく食べるわね」

「ラーメン好きだし」

「いえ、ラーメンだけじゃなくて」

それを本人にも言います。

「他のを食べる時もそうじゃない」

「そうかな」

「そうよ。けれどそれがいいわ」

自分でも少し笑ってるのがわかりました。

「見てる方が気持ちよくなつて」

「気持ちよく？」

「美味しそうに食べるからよ」

そう言つてあげました。

「だからね。私も」

「そうなんだ。それよりも先輩」

「何？」

「早く食べないと」

こう私に言つてきました。

「のびちやうよ、麺が」

「あつ、そうね」

言われてこつちもやつと気付きました。

「先輩食べるの遅いし」

「そうかしら」

その自覚はないですけど。そもそも新一君つて食べるのかなり早いから。あまりどころか全然噛んじやいないんじゃないかなつて思っています。

「だからさ。早く早く」

「わかったわ。それじゃあ」

それを言われてラーメンを食べます。コシがあつて美味しいです。そこに新一君が。

「はいっ」

どかつとした感じで私のラーメンにおろし大蒜を入れてきました。
「ちよつと」

あんまり多かつたんで。麺を食べながら顔を顰めさせました。
「入れ過ぎでしょ」

「気にしない気にしない」

またこの言葉です。

「僕なんかもつと入れてるし」

「そういう問題じゃないでしょ」

そんなに入れたら後で。

「喉が渴くし匂いだって」

「いいじゃない。僕だってそうなんだし」

「よくないわよ」

新一君はいいでしょうけれど私が困るんです。

第五話 彩華ラーメンその六

「大蒜の匂い詰所であんまりさせても」

「それは皆じゃない」

ああ言えばこう言うで全く。

「皆このラーメン食ってるんだし」

「それはそうだけれど」

彩華はチエーン店なんです。ですからおぢばのあちこちにお店があります。屋台でやっていたりもするんですよ。昔は天理高校の近くにもありました。

「けれど。やっぱり」

「それに皆わかってるし」

「わかってるって何がよ」

突っ込まずにはいられませんでした。

「また随分と引っ掛かる物言いね」

「だから俺と先輩のこと」

変なことを言い出しました。

「私と新一君？」

「だからさ、こうして一緒にラーメン食べる位の仲だって」

「そんなの普通じゃない」

そうですね。それを何でやたらと強調するのか。

「何かおかしい？」

「いや、それって」

新一君の態度が急におかしくなりだしました。今までとは違った意味で。

「あの、つまりさ」

「だってラーメン位誰だって」

私はまた新一君に言いました。

「一緒に食べるんじゃないの？」

「それはそうだけれどさ」

「新一君どうしたのよ」

あんまり様子がおかしいんで言いました。

「急に慌てだしたっていうか何ていうか」

「いや、別にさ」

やっぱりおかしいです。その態度が。

「別に何もないけれど」

「じゃあいいじゃない」

それでも焦ったままです。

「それで。そうでしょ？」

「ま、まあね」

焦った声のまま私に答えます。

「じゃあまたね」

「時間があればまたね」

ラーメン位なら。別にデートじゃなければ。

「いいわよ」

「うん、それじゃあ」

私がこう言うともた態度が変わりました。今度は急に機嫌がよく
なった感じです。

「また一緒にね」

「ええ。じゃあ次は」

話の本題です。何かそこに行くまでに随分時間がかかった感じで
すけれど。

「ミスタードーナツよね」

「うん。そういえば先輩ってさ」

「何？」

「ドーナツとラーメン好きだよね」

こう言ってきました。

「よく食べてるけれど」

「おちばっていえば彩華だし」

それこそ子供の頃から食べてます。何かと言うとよく連れてもらっていました。

「駅前のミスタードーナツも昔からあったし」

「ああ、昔からあったんだ」

「知らなかったの？」

「だって俺ここに帰ったのって中学生の時から始めてだったし」

「そういえばそうだったわね」

そうなんです。新一君はそれまでおぢばに帰って来たことは一度もなかったそうなんです。こんな騒がしい子がいればすぐにわかりますけれど。

「ミスタードーナツは何回もあるけれどね」

「チェーン店だしね」

これは言うまでもありません。私の実家の近くにもあります。

「それにしても。早いわね」

「急にどうしたの？」

「もう食べ終えたの」

見たら。井には麺も具も全くありません。奇麗に食べちゃってます。

「ラーメンの特大を」

「これ位普通でしょ」

「そうかしら」

新一君の返事に首を傾げます。

「そうは思わないけれど」

「先輩が遅いんじゃない？」

そのうえで逆にこう言い返してきました。

「まだ大分残ってるじゃない」

「遅いかしら」

言われるとそうかも、なんて考えます。

「まあいいかな。そこは人それぞれ」

新一君は急にリベラルになりました。

「僕は待つからさ。ゆつくりと食べてよ」

「悪いわね」

そう新一君に謝ってから食べるのを再開します。その間に新一君は漫画を持って来て読みだしました。見れば何かや九万がみたいです。

「野球？」

「うん、最近この漫画読んでるんだ」

何か表紙を見たら随分派手なユニフォームです。何処かで見たような。

「バファローズをメインにした漫画でさ」

「またそこなのね」

本当に近鉄が好きなんだなあ、って思います。今あのチームは親会社は違うのに。

「やっぱりあの豪快な野球がいいんだよ」

「巨人だって豪快よ」

「あそこは問題外だよ」

新一君は急に不機嫌な顔になりました。

第五話 彩華ラーメンその七

「あんなのは野球じゃないよ。何処かの將軍様の私物だしさ」

「そこまで言うのね」

新一君はとにかく巨人が嫌いです。おぢばも関西にあるので当然のように巨人嫌いな人が多いです。私も素直にいいマスト巨人は嫌いです。けれど新一君のアンチ巨人ぶりはもう極端です。

「清原もいたし」

「今清原そのバファローズにいるじゃない」

「それも嫌だからあの球団応援しないんだよ」

不機嫌そのものの声で答えてきました。

「あんな奴さつさと引退すればいいのにさ」

「ああ、あまり清原悪く言わない方がいいわよ」

私は新一君にそう忠告しました。

「何で？」

「奥華って大阪にあるわよね」

「うん」

大阪には天理教の教会も信者さんもかなり多いです。教祖が『大阪はおぢばの玄関やで』と仰ったこともあってそうなったんです。近鉄上本町駅に黒門が飾られたこともあったそうです。ここでまた近鉄の名前が出るんですけれど。

「それも堺とか岸和田の方にかなり教会が多いから」

「ああ、清原の地元」

「だからよ。清原は地元じゃ人気あるから」

どうやらそうらしいです。私は知らないんですけれど。

「気をつけてね、そこは」

「そんなの関係ないよ」

けれど新一君の態度は相変わらずです。

「僕は清原が嫌いなんだから。あんな奴の何処がいいんだよ」

「それに人を悪く言うのも」

しかも今新一君完全にはら立ちですし。困った子です。

「よくないわよ」

「俺巨人嫌いだから」

それでも顔を顰めて言います。

「あそこだけはね」

「そういえば新一君って嫌いな相手にはどんな言うわよね」

彼の悪いところです。普段は悪口なんて言わないのに嫌いな相手には本当にしつこい位に言うんです。私も何回も注意しているんですけれど。

「それよくないわよ」

「よくないのはわかってるけれどさ」

顔を顰めさせて言いました。

「それでも。特にあいつはね」

「清原さんそこまで嫌いなもの」

「それに別にいいじゃない」

ふと顔を元に戻して言ってきました。

「岸和田とか堺ならさ」

「何でいいのよ」

また変なことを言います。意味がわかりません。

「どうして？」

「だって先輩神戸でしょ」

「!？」

その言葉に目を顰めさせました。

「神戸だからって何？」

「だから。俺将来は先輩と」

「ふざけるとミスタードーナツなしよ」

もうそこから先は言わせませんでした。

「いいわね」

「わかったよ。先輩は厳しいなあ」

「厳しいも何もそんな悪ふざけは聞かないわよ」
いつもこんなことばかり言いますけれど。本当にふざけてばかり
なんですから。

第五話 彩華ラーメンその八

「じゃあ止めるよ」

「わかつたらいいわ。それで」

随分あちこちに飛んじやいましたけれど話の本題です。

「ドーナツよね」

「そうそう、それぞれ」

何かの真似みたいですけど突っ込みませんでした。

「早く行こうよ、もうなくなっちゃうよ」

「なくなっちゃうよってねえ」

また勝手なことを言います。

「そもそもここに来たのも新一君が」

「過ぎたことはどうでもいいじゃない」

これです。何処まで勝手なんでしょう。

「だからさ」

「行くのね、今から」

「また後ろに乗って」

すつと立ち上がって私に言ってきました。

「それでいいよね。答えは聞いてないからさ」

「……それは聞くものよ」

こんな調子なんだから。答えは聞いてないって何考えてるんでしょう。

「じゃあ答えは？」

「いいわよ」

それしかないですし。慥然として答えました。

「そういうことでね」

「そういえば先輩と一緒にドーナツ食べるのってはじめだったっけ」

「いえ、違うわよ」

これははつきりと覚えています。

「ほら。高校の時」

「ああ、あの時」

新一君は私の言葉に思い出して頷きました。

「おちばがえりの時だったよね」

「そうよ、詰所で。他にもあったかしら」

「そんなに食べてたっけ」

「私ドーナツ好きだから」

他にはケーキとかシュークリームとか。甘いもの大好きです。

「新一君いつも私にまわりついてるし」

「いや、それは気のせいだよ」

気のせいには思えないんですけれど。高校三年になってからずっと新一君と一緒にいて困ってるんです。私は保護者じゃないのに保護者扱いにされたり。

「先輩の」

「そうかしら。あっ」

ここであることに気付きました。

「よく考えたら一緒にミスタードーナツに行くのははじめてよね」

「ああ、そうだったんだ」

新一君はそれを聞いてやっと納得した顔になりました。

「だからはじめてだったんだ」

「そういうことだったのね」

「うんうん。それじゃあさ」

新一君はにこにここと笑って私に言ってきます。

「また僕が運転するから」

「何かそれも楽しそうね」

「だってさ」

「だって？」

また何か言いだしました。余計なことを。

「先輩が僕に抱きついてくれるから」

「あつ」

そうでした。言われてそれに気付きます。

「じゃあそれが狙いで」

「おっと、失敗したかな」

「失敗も何も。ちよつと」

顔が真っ赤になります。それが狙いだっただなんて不覚でした。

「抱きついていたら胸も」

「やっぱり小さいね」

「こ、この」

身体が震えてきます。まさか。まさか。

「許さないわよ、本当に」

「いやあ御免御免」

「御免じゃなくてね」

「それじゃあさ」

「何よ」

それでも新一君の話を聞くことにしました。何故か聞いちゃうんです。

「お詫びにドーナツは僕がお金を」

「仕方ないわね」

何でここでこう言っちゃうんでしょう。不思議と許しちゃいます。

「それじゃあそういうことで」

「うん。それじゃあ」

新一君も笑顔で応えます。実はですね、内緒ですけどこの笑顔見ると。かなり失礼千万なことを言われても許しちゃう結果になります。私が甘いんでしょうね。

「ミスタードーナツ行くよ」

「ええ」

こうして私達は最初から決めていたミスタードーナツに行きました。何だかんだとあった気がしますがまずは楽しいはじめてのデートでした。

第五話

完

2007・10・13

第六話 レポートその一

レポート

「それだけ?」

「それだけけど」

次の日私は皆にかなり強引に昨日のことを言わせさせられました。大学の食堂でこのことを話しています。白い食堂でかなり綺麗なですよ。

「悪い!？」

「面白くないわよねえ」

「ねえ」

皆顔を見合わせて無責任なことを言います。

「それではい終わりなんて」

「何なのよ」

「どうすればよかったのよ」

私にしては短かったのに色々あったデートなんですが。それでこんなことを言われるのは正直かなり心外だったりします。何なんでしょう。

「それは決まってるじゃない」

「デートよ」

皆かなり楽しそうな笑みを浮かべて私に言ってきます。

「最後まで、ね」

「詰所にはお布団もあるしデートのご褒美に」

「ちょ、ちよっと」

ああ、また顔が真っ赤になってくのがわかります。何でいつもいつも顔がすぐ赤くなるんでしょう。しかもこれもいつもですが新しい君のことです。

「何よそれ、結局そういう話になるの?」

「あのね、ちつち」

友達の一人が呆れた目で私に言ってきました。

「あんたの歳で彼氏一人もいないって何？」

「しかもその暦十九年」

他の友達も言ってきました。十九年ってつまり私が生きている間なんですけれど。

「何考えてるのよ」

「それでキスもまだなんて」

「全然いいじゃない」

何でこんなことを言われるのか甚だ心外でした。

「そんなの別に。だから私は」

「結婚するまでって」

「今時こんなこと言う女の子がいること自体が驚き」

あげくにこんなことをいつも言われます。

「何、それ」

「新一君可哀想」

「新一君が可哀想なのね」

「そうよ」

何でこうなるのかすっごくわからないですけど。こうした場合いつも悪者になるのは私で。新一君は何だかんだで愛されているんです。

「可哀想じゃない」

「可愛いしね、彼」

「可愛いつて」

その言葉に無意識のうちに眉が顰められちゃいました。

「何処がなのよ」

「それは何時も側にいるから思わないだけよ」

「そうそう」

「いつもって言うけれどね」

何かまたまた頭にきてきました。

「新一君が勝手に来るんだし。こっちは迷惑してるのよ」

「そうは言っけれどね、ちっち」

「あのね」

何か今の言葉に皆ムキな顔になってきました。

「あんなに一人を見てる子ってねえ」

「いないわよねえ、普通」

「何が言いたいのよ」

あの、本当にわからないんですけれど。たまには他の女の子のところにに行けばいいのに。そう思っているんですけれど向こうが勝手に来ますし。

「あんなのが一緒にいてもね。困るだけだし」

「こりゃ駄目だわ」

「そうみたいね」

何か急に匙を投げた感じになっちゃいました。それも皆。

「自分で気付くべきだけれど」

「それもねえ。肝心のちっちがこんなのだと」

「だから何が言いたいのよ」

全くわからなくてイライラしてきました。はらだちですね。

「わからないんだけど、私」

「まあわからないならそれでいいから」

「そういうこと」

「全く」

皆何を言っているんでしょう。何はともあれその話は終わることになりました。

「とにかくね、ちっち」

「ええ」

「少しは考えなさい」

「少し以上にね」

「ちゃんと考えてるわよ」

だからわからないんですけれど。皆の言っていることが。それでも皆は私を見ています。それも責める目になっちゃっています。

「本当に」

「だからもういいわよ」

「そうそう」

「それよりね」

話が別の方向に行きました。

「この後どうするの？」

「どうするって？」

「参考館でも行く？」

不意に一人がこう提案してきました。天理教の博物館です。色々な資料があつて勉強に役立ちます。場所は大学のすぐ側です。天理高校と向かい合っています。

「レポート書かないといけないし」

「ええ、いいわよ」

私も同じなんで頷きました。そうしたこと結構参考館を使っています。何かと側に資料が揃っているんで天理大学は勉強し易い場所です。

「じゃあそれでね」

「決まりね」

「ええ。それじゃあ」

皆で参考館に行きます。何か珍しく勉強をしようって学生らしい気分です。とりあえず中に入るまではそのままの気持ちでいました。

第六話 レポートその二

「さてと」

中に入ると友達の一人が声をあげました。

「まずは台湾のコーナーね」

「そうね」

台湾にも教会がありましてそういうこととかあつて台湾の民族コーナーもあるんです。天理教は世界のあちこちに教会があります。関係ないお話ですけど。

それで台湾のコーナーに行くと。何か騒がしいです。

「誰かしら」

私はそれを聞いて眉を顰めました。

「参考館で騒ぐなんて」

「禪だっただな、ここも」

「あの」

それで騒がしい方に注意しました。

「ここでは静かにしてくれませんか？」

「あつ、すいません」

！？この声は。

「すいませんってひょっとして」

「あつ、先輩なんだ」

もうここでわかつちやいました。何でここに！？

「暫くぶり」

「ちょ、ちよつと」

「ちつち」

声が大きくなったところで友達に肘でコツンと突かれました。私
が大声出したら何にもなりませんから。うっかりしてしまいました。

「声、わかつてるわね」

「ええ、御免なさい」

そうですね。落ち着かないと。それでも。

「それにしても」

「やあやあ、奇遇だね」

本人が向こうからやって来ました。またやけににこにこしています。

「昨日も会ってね。それで今日もなんて」

「全く。何でもこんなところで」

新一君が来ます。学生服を来ています。何でもここにまでいるのか。本当に訳がわかりません。

「会ったよ」

「いや、たまたまさ」

そのにこにことした顔で言ってきます。

「ツレと遊びに来ていて」

「そうだったの」

遊びにですか。新一君らしい。

「それでなのね」

「うん。先輩は？」

「勉強よ」

不機嫌な顔を新一君に向けて答えました。

「レポート書かないといけないから」

「ああ、そうだったんだ」

「それで来たら。いるんだから」

「お導きだよ、親神様の」

そう言われると反論しにくいですが。それでもかなりふそくを感じちゃいます。いつもいつも何かっていうと会ったのが本当にわからないです。

「そうよね」

「やっぱりね」

またここで皆が周りから言います。どうして皆新一君の方の味方になるんでしょう。

「だからね、ちっち」

「私達はこれで」

「えっ、ちよつと」

皆急に何処かに行こうとするんで慌てて声をかけます。

「何処に行くのよ」

「いや、お邪魔虫はこれだと思って」

「だからよ」

「だからよって」

そのまま何処かへ行こうとします。

「何処に行くのよ、レポートは？」

「だから別行動なんだって」

「そうそう」

皆にこにこと笑いながら言います。しかも新一君に対しても。

「阿波野君、頑張つてね」

「応援してるわよ」

「また新一君に」

何かいつもいつも新一君に対して。新一君の肩ばかり持つのが本当に訳がわかりません。しかも私の前でかなり露骨になんて。どういふつもりなんでしょう。

「じゃあ僕もツレに言ってきますんで」

「ええ、早いうちにね」

「それで後は」

また皆が新一君に言います。

「二人でまたデート」

「これも親神様のお導きよ」

「お導きなのかしら」

私は全然そうは思えません。こつこつのを腐れ縁って言うんじやないかっていつも思います。それもおみちの教えではお導きって言うんですけれどそれでも。

「はいはい、だからちっち」

「今日も頑張つてね」

皆どつかへ行っちゃいます。ついでに新一君も。

「帰ろうかしら」

ふと思いました。けれど何か気が変わって残りました。このまま帰ってもよかったですけれど。どうしても自分でもわからないです。

暫くしてその新一君が戻って来ました。にこにこした顔で。

「お待たせ」

「待ちたくはなかったわ」

無然とした顔と声で答えました。

「何でこんなところでも新一君と」

「まあいいじゃない」

それでも新一君は相変わらずににこにこした声で。こんなに楽しそうなのが全然わかりません。私はいつも迷惑しているっていうのに。

「これも何かの縁で。お導きで」

「新一君もそれ言うのね」

皆と同じことを。まあおちばにいますからですけど。

それでもまあ。一緒にいるし。新一君に声をかけました。

第六話 レポートその三

「いいわ。とりあえずレポートの都合もあるし」

「見ていくんだ」

「そうしないと駄目だから」

「私はそれを答えに選びました。」

「いいわね。けれど」

「けれど？」

じつと見据えてくると平気な顔で言い返してきました。

「肩とか手に触れてきたら。絶対に怒るから」

「寂しいなあ、それって」

「寂しくなんかいいわよ」

私は別にです。そもそもどうして新一君なんかといつも一緒に。

「僕はいつも先輩と一緒にいたいのに」

「何でよ」

「内緒」

にこりと笑って言ってきました。

「言わないよ」

「何よ、急にそんなこと言って」

また変なこと言います。何か私に対してだけ変だっていうのが井本さんご夫婦のお話ですけれど。何故かそれを仰る時の井本さんご夫婦も笑っておられますけれど。

「変な子ね、全く」

「まあまあ。けれど二人になったんだし」

「肩とか持ったら駄目よ」

一応釘を刺しておきます。何するかわかりませんから。

「いいわね」

「わかってるよ。それよりさ」

新一君は釘にもめげずに言ってきます。

「これで二回目のデートだね」

「二回目!？」

何か結構一緒に歩いてる気がしますけれど。それでも何か二回目になっていきます。

「だってこの前が最初だし」

「そういえばそうね」

言われて気付きます。何か何回も一緒に歩いていますけれどデートはじめてでした。考えたらかなり不思議な話なんですけれど。

「じゃあ。二回目ね」

「仕方ないわね」

この前デートしたばかりですけど。それもいいでしょうか。

「それじゃあいいわ」

「先輩も素直になればいいのに」

「あのね」

今の言葉にはかなりりつぷくを覚えました。何、その台詞。

「何で私が素直になるのよ。違うでしょ」

「あれ、そうじゃないの？」

向こうも向こうで何で、って顔です。作ってるんじゃないでしょうか。

「先輩が素直じゃないから僕だって」

「新一君がどうしたっていうのかしら」

「つつい勇んでしまっただけけど」

「勝手に言いなさい」

何に勇んでいるんでしょう。かなりふざけています。

「とにかく。デートよね」

「うん」

それでも二人しかいないから仕方なくですけど。何はともあれデートになります。

「コースは私に任せて」

「先輩が？」

「何回か来たことあるし。それに」

「ここからが重要です。というより本題です。」

「レポートのこともあるから見なくちゃいけないものが多いのよ」

「そういえばそうだったね」

「新一君と違って色々大変なのよ」

「これは事実です。」

「そのところわかって欲しいものね」

「ふうん」

「ふうん、て。本当にお気楽なんだから。」

「それじゃあ。行くわよ」

「レポートって何処のことについてレポートするの？」

それは新一君には関係ない気がしますけれど。何か聞いてきました。

「よかつたら教えてよ、先輩」

「古代中国史だけれど」

「大体春秋時代のことです。」

「そこについてね。少し」

「ああ、だったらさ」

「何かあるの？」

「うん」

「にこりと笑って答えてきます。何かあるんでしょうか。」

「ここもいいけれど別の場所も行くといいよ」

「別の場所！？」

「そう言われて目を少しパチクリさせました。」

「何処に？」

「やっぱりレポートでもいい点貰いたいよね」

「ええ、まあ」

「これは当然です。合格してはいおめでとう、っていうのは今一つ好きじゃないんです。やっぱり完璧にやらないと。それで頭が硬いって言われることもあります。」

「だったらさ。図書館にも行くといいよ」

「天理図書館に!？」

「まあそこが一番いいかな」

新一君はほんの少し考えた後で答えてきました。

「絶対あるだろうしね」

「あるって何が？」

「図書館にあるのは本だよ」

新一君は笑って言います。

「だからさ。中国古代の本とか」

「それなら本屋さんとかに」

「違うんだって、先輩」

私の顔を見てにこりと笑います。

「古典があるんだよ、ちゃんと」

「古典っていうと」

そこからは私も知ってます。新一君が何を言いたいのかもわかります。

第六話 レポートその四

「あれ？史記とか戦国策とか」

「そうそう、そういうのも読んで書くといいよ」

「読めるの？」

「うん、簡単に」

またわからないことを言ってる、と思いました。中国の古典なんてそう簡単に読める筈がないのに。それでも新一君は言っんです。

「おふでさきやみかぐらうたの原本よりもね」

「あれよりも？」

おふでさきやみかぐらうたは教祖がお書きになられたものですけど元々直接筆でお書きになられたものなので普通の印刷の本と比べて読みにくいところがあります。それで今ではちゃんと活字印刷にしているものが出されています、

「そうだよ。だって日本語訳されてるものがあるから」
「へえ」

これはびっくりです。そんなのがあるんですね。

「それ読んだらいいよ」

「そうね」

凄くいいことを聞きました。それなら。

「じゃあ後で図書館に行くわ」

「時間あるの？」

「ないかも」

ここを見てからだとかかなり危ないです。残念なことに。

「じゃあ明日にでも行けばどうかな」

「ええ、じゃあそうするわ」

新一君の提案に頷きます。それならいいですね。

「そういうことね」

「うん。じゃあ今日はここで僕とデートだね」

「仕方ないわね」

ちよつと微笑んでしまいました。いいことを教えてもらったから。それだといいですよね。

「いいわ」

「やっぱ先輩は優しいなあ」

「こうした場合優しいって言うのかしら」

ちよつと違うんじゃないかな、と思いますけれど。

「まあまあ」

「まあいいわ。それじゃあ行くわよ」

「うん」

「それにしても」

歩きはじめてから新一君の方をちらりと見ました。

「何？」

「色々知ってるのね」

そう彼に言いました。

「そんなのあるの知ってるなんて」

「まあたまたまね」

新一君は笑って答えました。

「うちに本があるから」

「何か凄なお家みたいね」

私の家はやっぱり教会ですから天理教とか宗教関係の本が多いんです。お父さんもお母さんもおみちの人ですからそういう本が集まるんです。私や妹達は漫画とかライトノベルが多いです。

「新一君のお家って何やってるかわからないけれど」

「普通のサラリーマンだよ」

新一君はあつさりと答えてきました。

「別に何の変わりもない」

「普通のサラリーマンの人からこんな子が出て来るなんて」

突然変異でしょうか。真剣にそう考えました。

「それでどうするの？」

私の言葉が無視して言ってきました。

「その本使うの？」

「よかつたら」

私もそういう本があるのなら是非使ってみたいです。だからそれに頷きました。

「御願いできるかしら」

「じゃあ図書館だね」

「何か話が大きくなってるわね。それにして」

「何？」

「史記よね」

私はそれについて言いました。

「そうだけれど？」

「学校の授業で出て来たわよね」

古典とか世界史で。覚えなければならなかったなので今でも覚えています。東寮の中で苦勞して勉強した記憶があります。勉強中に新一君が下から大声で私を呼んだのはもっと覚えています。

「確か」

「だって有名な古典だし」

新一君もそれを言います。

「やっぱり出るよ」

「そうよね。それって実際に売られてるの」

「そうだよ。だから図書館にね」

「わかったわ。それにしても色々な本があるのね」

それをあらためて実感しました。いえ、本当に世の中って色々なものがありますね。

「色々な人もいるし」

「先輩みたいな小さい人も」

「背は関係ないでしょ」

またそれを言ってきます。どうせチビですよ。

「別に、またそれを言うんだから」

「御免御免」

「今度言ったらデート中断だから」

「えっ!?!」

えっ!?!って。急にこの世の終わりみたいな絶望しきった顔になりました。

「そんな。それだけは」

「それだけはって」

そんな顔を見たらこっちの方が驚きます。

「何よ、その顔」

「それだけは止めて欲しいんだけれど」

新一君は泣きそうな顔で私に言ってきます。

「駄目!?!やっぱりそれは」

「止めて欲しいの?」

「だってさ。その、つまり」

どうしてこんなに慌ててるんでしょう。別に出直すわけでもないのに。天理教では死ぬことを出直すと言います。一旦死んで生まれ変わるって考えて下さい。

「折角一緒にいるんだし。俺だって別に悪気があって言っただんじやないし。先輩と、その」

「わかったわよ」

本当に泣きそうなんで。弟を泣かせたような気持ちってこんなのでしょうか。小さい頃妹達を泣かせたことはありますけれどその時より胸が痛むような。何でこんな気持ちになるんでしょう。

第六話 レポートその五

「わかったから。泣かないよ」

「いいの？」

「いいわよ」

「つつい苦笑いになりました。

「だから泣かないの。いいわね」

「別に泣いていないよ」

「嘘仰い」

今度は優しい笑みになったような。自分でもわかります。

「そんな顔していたわよ」

「気のせいだつて」

もういつもの新一君に戻っています。

「気のせいだから。じゃあデートだよね」

「ええ。それで今度はね」

「うん」

「台湾のコーナーに行くわよ」

「ああ、あそこね」

何か知ってるみたいです。

「やっぱり中国だから？」

「つていうかね」

また新一君に答えます。

「中国と台湾の違いも書かないといけないし」

「色々あるんだ」

「大学生だつて色々あるのよ」

これは本当のことです。といつても高校の時よりはずっとないですけれど。高校の時って何かと色々ありましたから。特に三年になつてからは。

「だからね。いいわよね」

「僕は別にいいよ」

やけに従順で気持ち悪い位です。

「先輩と一緒にならね」

「そうなの。よかったわ」

「だってさ」

すぐにまたいつもの笑顔になって言います。

「先輩と一緒にいられるんだし」

「いつもそれ言うわね」

いい加減聞き慣れてきました、はい。

「気にしないでいいけれどね」

「じゃあ気にしないわ」

何なんでしょう、この子のこれって。高校三年からのことなんですけれど。

とにかく台湾のところも見回って。それで終わりでした。私達は参考館を出ました。

その入り口で。新一君はまた声をかけてきました。

「これからレポート書くの？」

「それは明日からね」

そう新一君に答えます。

「図書館でその本を読んでからよ」

「そうするといいね」

新一君も私の言葉に頷いてきました。

「特に急がないんだよね」

「提出は一週間後よ」

私はそう答えました。

「ワープロでだから手書きよりも早いし」

「ふうん」

「だから間に合うのよ。明日の夜からかかるわ」

「ワープロってことはあれ？詰所の」

「いつも使わせてもらってるのよ」

申し訳ないですけど。主任先生や井本さんご夫婦の好意で。

「そうだったんだ」

「何か今回はかなりいいレポートが書けそうね」

「俺のおかげだね」

「そうね」

今回はその通りなんで。新一君の顔を見上げて笑いました。

「感謝するわ」

「いやいや、御礼は別にいいけれど」

「私何も言っていないけれど」

少しむっとなりました。この図々しさが本当に。

「何でそんな話になるのよ」

「違うの？」

「違うわよ」

そのむっとした顔のまま答えました。

「御礼はさ」

「それでも言うのね」

自分勝手なんだから。いつもいつも。

「お姫様だっこさせてくれたら」

「明日身上思い切り受けなさい」

何かあった時に親神様から身体に色々と受けることを身上と言います。天理教の教えでは怪我や病気もこれにあたります。

「よくそれで今まで何もなかったわね」

「日頃の行いがいいから」

「何処がよ」

ああ言えばこう言う。それでよくもまあって思います。

「とにかくさ。御礼だけれど」

「何がいいのよ」

仕方ないわね、って感じです。段々本当に弟みたいになってきたような。一番上の妹よりも実は年上なんですけれど。

「今余りお金ないわよ」

「お金じゃなくても御礼はできるよ」

「お姫様だっこはなしよ」

ええと、そうそう風と共に去りぬでしたよね。あんな感じのだった。何かこういうの思い出す私も結構趣味が古いんでしょうか、

「そんなの。絶対に」

「だったら。別のでもいいかな」

「別の？」

「明日もデートとか」

いきなり話を決めてきました。

「それだと駄目かな」

「デートって。図書館で？」

「うん」

楽しそうににこにここと笑って私に言います。

「本を探すついでにさ」

「本を探すだけじゃない」

たったそれだけなのに。何を言っているんでしょう。

「それだけだけれどいいの？」

「別に。結構だよ」

「今回は欲張りじゃないのね」

「だってもう満足してるし」

「だったらいいけれど」

実は新一君って結構無欲です。意外と何が欲しいかとかは言いません。甘えん坊なのは本当ですけれど。

「じゃあ明日ね」

「うん、また明日」

笑顔で私に言います。

「今日はこれでね」

「もう帰るの」

「僕も忙しいから」

すぐに嘘だとわかる言葉でした。

「じゃあこれで。また明日」

「何に忙しいのよ」

「ゲーム」

ほら来たって感じです。

「今やり込んでるから。それでね」

「そうだったの」

「そういうこと。スパロボね」

スパロボ！？何なんでしょう、それって。

「スーパーロボット大戦パーフェクト。これが凄く長くてさ」

「長いってどれ位よ」

「二百話以上あるんだ」

「………本当に凄いわね」

世の中色々なゲームがあるものですけれどそんなに長いゲームもあるんですね。シナリオを考えるだけでかなり大変そうなのがわかります。

第六話 レポートその六

「今やつと五十話なんだ」

「まだまだこれからね」

「そうなんだ。今からそれをやるから」

「そう言つて立ち去ります。」

「また明日」

「それで何処でゲームするの？」

不意にこう尋ねたのは新一君がよく詰所でもゲームをするからです。本当に図々しいっていうか主任先生達も優しいっていうか。甘やかしたら駄目な子なのに。

「僕の家だよ」

「だったらいいけれど」

「本当は先輩の側がいいんだけど」

「馬鹿言いなさい」

またそんなこと言つて。

「今日のところはこれでね。今から忙しいがな」

「まあ頑張りなさい」

そんな話をして別れました。そうして次の日。学校の講義が終わると図書館の前に行きました。天理大学の図書館はかなり大きくてしかも蔵書もかなりあります。

その前まで行くともう新一君がいました。にこにことした顔で立っています。

「少し遅かったね」

「何かデートのはじまりみたいな言葉ね」

少し前に見たドラマを思い出しました。

「それって」

「あつ、そうかも」

それでこうした言葉を聞くとすぐ笑顔になるんですから。どうし

たものでしょう、この子だけは。

「まあ図書館でのデートも悪くないよね」

「悪くないの」

「そうそう。たまには静かにね」

一人でそんなことを決めています。私はどうなるんでしょう。

「楽しむのもいいじゃない」

「言っておくけれどね」

ふざけた調子の新一君に言います。

「学校のレポートについてだから。デートが本来の目的じゃないわよ」

「わかってるって」

わかっていないのがはつきりとわかります。そういう子ですし。

「それじゃあ入ろうよ」

「ええ」

ずっと彼のリードのまま話が進みます。気付いたらもう図書館の入り口の階段を登っていてそこから中に入って。それで中の閲覧室でもう新一君が出してくれたその本を読んでいた。見たら日本語で書かれた分厚い本です。

「何か思ったより簡単な翻訳ね」

「この本はそうなんだ」

新一君は私の横にいます。そこから私に説明します。

「わかりやすくてね。いいんだよ」

「そうね。私でもわかるし」

「中国の古典はこの平凡社のが一番いいんだ」

そう私に教えてくれます。

「ここになら絶対にあると思ったけれどやっぱりね」

「予想通りだったのね」

「うん」

にこりと笑って私に言います。

「そうだよ。わかりやすいでしょ、本当に」

「ええ、とても」

おかげで頭の中にもすぐに入っていきます。気付いたらもうレポートも進んでいるような。そんな気分にもなってきました。

「これでレポートは大丈夫だと思うよ」

「そうね」

私も笑顔になって。新一君の言葉に頷きます。

「おかげでね。有り難うね」

「それで御礼はさ」

新一君はまた調子に乗った顔を見せてきます。すごく嫌な感じ です。それを顔にも出していますけれどそれでどうにかなる子じゃないんですよね。

「御礼？」

「うん。ほつぺたでいいから」

「ほつぺたって？」

「だからさ」

何かここまでにやけた笑いつてそうはないでしょう。とにかく何か変な期待をしているのがわかります。どうせ言うことは決まっていますけれど聞いてあげることにしました。

「それで何？」

「キスなんだけれど」

「そう、キスなの」

わかっていましたけれど。よりによって図書館で言いますかこの子は。

「駄目かな。御礼はまあささやかなもので」

「はったおすわよ」

一言で済ませてあげました。

「馬鹿言つてると」

「冷たいなあ、先輩は」

「キスなんて何考えてるのよ」

また八重歯が出ちゃいました。自分でもわかります。

第六話 レポートその七

「あのね、何度も言うけれど私はキスは」

「旦那様になる人だけでしょ」

「そうよ、わかってるじゃない」

わかってて言うところが新一君です。本当にふざけています。

「わかっていたらその御礼は引っ込めるの。いいわね」

「簡単なことだしね」

めげずに言ってきました。そもそも新一君の辞書に反省とか懲りるとかいう単語はないみたいです。どんな辞書を使っているのかはわからないですけど。

「簡単なこと？」

「そうだよ、僕が先輩のさ」

「旦那様になるっていうの？」

「そう、いざなぎのみこと」

親神様のご守護は大きく分けて十ありまして。これを十全の守護といいます。そのうちいざなぎのみことは人間男一の道具、種の理です。簡単に言うと男の人ですね。それに対するのがいざなぎのみことですけれどこちらは人間女一の道具、苗代の理です。簡単に言うとなりの人です。

「だったらいいよね」

「何処までふざけてるの？」

そうとしか思えません。十七の子が言う言葉じゃないです。まして私もまだ十九です。何で二歳も年下の子にこんなこと言われるんだか。頭の中からレポートのことが完全に消えちゃいそうですけれども何とか覚えておきました。

「それで何処まで本気？」

「完全に本気だよ」

「また詰所で梶本さんと飲んでいたの？」

今度はお酒かと思いました。けれど違うみたいです。

「あのね、若い時からそんなに飲んでもと」

「飲んでないよ。何か先輩ムキになり過ぎだよ」

「そうさせてるのは何処の誰よ」

思わずそう突っ込みました。

「いつもいつも訳のわからないことばかり言って」

「気にしない気にしない」

「とにかくキスは駄目よ」

それはもう私が決めました。

「わかったわね」

「それじゃあ何がいいの？」

「そうね。最近ソフトクリームばかりだし」

何でかわからないけれどそればかり食べてる気がします。気のせいでしょうか。

「パンケーキでどうかしら」

「パンケーキ？」

「そうよ、大学の食堂の」

甘いものばかりですけど。好きなんです。

「それでどう？」

「先輩も一緒なんだ」

「そうだけれど」

そう新一君にも答えます。

「それがどうかしたの？」

「じゃあそれで御願い」

新一君は笑顔になります。何かそれだけで満足だっていった感じの顔になっています。私がいることが何かあるんでしょうか。

「是非ね」

「わかったわ」

とにかくそれで納得してくれるのならそれに越したことはありません。話が簡単にまとまって私としてもいいことでした。妙に引つ

掛かりますけれど。

「じゃあここを出たらね」

「うん。すぐに終わらせてね」

「それにしてもねえ」

あらためて新一君を見て溜息をつきます。

「最近私お金食べ物にばかり使ってるんだけど」

「そうかな」

新一君は全然自覚ないみたいです。

「気のせいでしょ」

「気のせいじゃないわよ」

そう新一君にも言い返します。

「実際にソフトクリームとかラーメンとかそのパンケーキとか」

「そういえばそうかな」

「新一君と一緒にいるせいよ」

無然とした顔をして言っただけでした。

「どうということよ、これ」

「気にしない気にしない」

「まあいいけれどね。けれど花の十九歳が」

また溜息が出ます。新一君を見ているとどうにも。

「こうして何か訳のわからない子といつも一緒に。何やってるんだろ」

「何か嫌？」

「別に嫌じゃないけれど」

だからじつと見詰めないの。そういう目で見られたら困るっていうか。急に子犬みたいな目になって。こうした目にたまになるんです。ああ、弱った。

「それでもよ。節度をね」

「じゃあいいんだよね、僕が側にいても」

「ええ」

仕方なくそう答えてあげました。

「ただ、節度は守ってね」

「うん」

とても嬉しそうに頷きます。

「そういうことなら」

「全く。本当に困った子なんだから」

これも何回思ったことやら。二人の妹よりもずっと手間がかかるなんて思いませんでした。男の子で手間がかかるって聞いていたけれど。

「じゃあ後でパンケーキね」

「うん」

そう話を決めてレポートの勉強を終わらせました。それから食堂でパンケーキを食べてその日は詰所に帰ることになりました。帰り道も新一君と一緒にです。

「これで今日は終わりなんだね」

「ええ、そうよ」

彼に答えます。

「後は詰所でレポート書いただけだけれど」

「あそこで書けるの？」

「書けるわよ」

何か変なことを言うなと思いましたがけれど答えました。

「ちゃんと」

「そうだったんだ」

「そうよ。そこは安心して」

そう彼に言っただけです。

「いつもそうしてるし」

「そういえばさ」

ここで新一君は私に尋ねてきました。

第六話 レポートその八

「何よ」

「先輩って宿題とかはいつも真面目にしているよね」

「まあそれはね」

昔からです。子供の頃から宿題を忘れたことはないです。

「いつもメモしてるし」

「真面目だね」

「やっぱりね。色々あるから」

そう新一君に答えます。

「お父さんとお母さんに教えてもらったのよ。何かあったらメモしておきなさいって」

「ふうん」

「家が教会だから。色々あるでしょ」

こうも言います。うちの家は何かと信者さんが出入りするのになたが何を御願いしたりしているのかメモを取っておかないといけないんです。

「だからよ」

「そついうことだったんだ」

「それに高校でもね」

高校時代のこと言います。

「メモしておくと役に立ったし」

「その宿題とか部活だよね」

「そついうこと。わかったかしら」

「うん、まあ」

新一君は私の言葉に頷きました。

「一応はね」

「何か少し不安な返事ね」

その返事を聞いて言いました。一応ってどういつことなんでしょう

うか。

「大丈夫なの、本当に」

「何か本当にお姉さんみたいだよ、それじゃあ」

「そうさせてるのは誰よ」

また新一君に言い返します。

「手間がかかるんだから。妹達だつてちゃんとメモは取ってるわよ」

「僕には必要ないしね」

急にこんなことを言ってきました。

「メモなんて」

「それはまたどうして？」

「頭に全部入るから」

自分の頭を指差して笑います。

「それもすぐに」

「嘘でしょ」

毎度毎度のいい加減差を見ていたらとてもそうは思えません。

「それって」

「まあたまに忘れることもあるけれど」

「しょっちゅうでしょ」

少なくとも私にはそう思えます。だからいい加減なんです。

「それって」

「まあそれに先輩がいてくれるし」

「私が？」

「そう。代わりに覚えておいてくれている人が」

私の方を見て笑って言ってきます。

「だから安心しているんだ」

「そんなことするつもりないし」

冗談じゃありません。だからどうしてそんな考えができるのか。

凄く不思議です。

「大体ね。他人をあてにしないの」

「助け合い助け合い」

またおみちの言葉で切り返してきます。

「そうじゃない。だからさ」

「それも自分で努力してのこそよ」

それを全然しようとしないうんですから。だから困るんです。

「それ。わかってるのかしら」

「勿論」

その癖返事はいつもこうで。根拠もないのに。

「わかってるって、それは」

「わかっていたら自分でしなさい」

「あれ、放任主義」

「違うわよ」

そもそも私って他の人、妹達にはあれこれ言わないんですけれど、どついうわけか新一君に対しては全然違うようになってしまっています。

「新一君があんまりにもだらしなからよ」

「何か僕って評判悪いんだ」

「少なくとも私から見ればね」

こう言い返しました。手間のかかる子です。

第六話 レポートその九

「全く。入学式の時からねえ」

「ああ、あの時」

私も新一君もあの時のことは今でもはっきりと覚えています。とにかく一生忘れられないような思い出です。当然いい思い出ではないです。

「あの時は本当にねえ」

「失礼だったわよ」

口を尖らせて言ってやりました。

「何、そもそもね」

「だって本当のことじゃない」

またにこにこして私に言います。

「先輩が小さいのは。あの時から」

「これでも小学生の時は背が高い方だったのよ」

「またまたそんな」

全然信じていないのがすぐにわかる言葉でした。

「そんなこと言っても」

「本当よ。それがね」

五年か六年の頃から伸びなくなっただけです。丁度成長期に。牛乳だって飲んだんですけれど全然駄目でした。体型は基本的にあの時のままです。

「新一君は昔からそんなの？」

「背が低いって言われたことないよ」

羨ましい。おまけにスタイルもいいし顔だって中々だし。悔しいけれどそれは認めます。

「そう。よかったわね」

「うん。先輩をお姫様抱っこできるだけのはあるしね」

「何でそこで私？」

訳がわかりません。

「しかも風と共に去りぬじゃあるまいし。お姫様抱っこなんて」
「先輩古い映画知ってるね」

今度はこう切り返されました。

「また随分と」

「そうかしら。名作だとは思っけれど」

古いのは事実ですけどそれ以上に名作だと思います。私はそっちだと思っているんですけど新一君は違っているみたいです。

「まあいいや。それでさ」

「ええ」

「そもそもおちばって小さい人多いし」

「あつ、そうね」

言われてみればそうです。今それに気付きました。

「何かそういう人多いかも」

「ここに来てすぐに気付いたんだ」

新一君は私にそう答えます。

「小柄な女の人が多いかもってね」

「よくそんなことに気付いたわね」

ある意味感心です。

「それもすぐに」

「女の子ってすぐ目につくし」

「結局それなの」

実に新一君らしいです。そんなことだろうと思いましたがけれど。

「まあそうだけれどさ。天理高校だってそうだよね」

「うちの学校は阪神ファンと小柄な女の子が名物だってこと？」

「そうかも」

考えたら凄い不思議な話です。全国から集まるから差があつて当たり前なのにどういうわけか阪神ファンばかりですし女の子も。何故なんでしょう。

「近鉄ファンから見たらね」

「そもそもまだ近鉄なんて」

「だってオリックスなんか死んでも応援しないし」

まだこんなこと言っんです。オリックスと巨人が負けた日は新一君の機嫌のいいこと。けれど朝神殿に行く前に詰所までスポーツ新聞を持って来るのは止めて欲しいんですけれど。

「僕の血にはバファローズレッドの血が流れてるしね」

「またそれは変わった血ね」

そんなものがあるだけでびっくりです。

「僕だけだろうね、それは」

「そうでしょ、幾ら何でも」

そういえば天理高校でもここまでの近鉄ファンは他にいません。制服の下にどうやって作ったのか知らないですけど三色のユニフォーム着てたこともあります。確か番号は二十だったような。それをえらく自慢していたのを覚えています。

「今時あの三色のユニフォーム着ている人なんて知らないわよ」

「あの帽子も今でも持ってるよ」

新一君はまた笑顔で言います。

「やっぱりあの帽子だよね」

「私は縦縞だから別に」

阪神の帽子が一番じゃないかなって思っています。やっぱりファインですし。

「あの帽子って女の子にも似合うし」

「そうなの」

これは初耳でした。新一君の勝手な解釈でしょうけれど。

「小さな女の子にもね」

「そういうことね」

私に目を向けてきたので成程と思いました。

「けれど。本当に小さな女の人多い場所だと思うんだけど」

「全国から集まるのに」

「やっぱりあれかな」

新一君はふとあることに気付いたような顔を私に見せてきました。そうして言います。

「親神様も教祖も小柄な女の子が好きなのかな」

「そんなの聞いてないわよ」

これも初耳です。そんなことは教典にも書かれていないことですしそもそも天理教は人の容姿は一切問題にしない宗教ですけれど。

「それはないわよ、絶対に」

「そうかな。それにしても」

「第一新一君大きいし」

これもまずあるんじゃないかなって思います。大きい人から見れば誰だって小さく見えます。そりゃ私は小さいですけどね。自覚しています。

「それもあるんじゃないの？」

「いや、だつてさ」

また私を見ての言葉です。

「それでも先輩を最初見た時はそりゃ」

「ええ、覚えてるわよ」

絶対に忘れません、あの時のことは。

「何が何でもね」

「そうなんだ、そんなに」

「全く。最初から失礼だったんだから」

勝手ながらこれから高校の時のことをお話します。卒業したのはほんの少し前だったのに凄く大昔に思えるんですけど。今からお話しますね。

2
0
0
7
.
1
0
.
2
9

第七話 学校に入ってその一

学校に入って

卒業したのはこの前ですけど入学したのは当然ながらそれより三年前です。もう三年にもなるんだなあ、としみじみ思ったりします。

天理高校での試験を終えて暫くして合格通知が来てそれからまた面接に行つて。その間詰所と自宅を行き来していました。

「これから色々あるわよ」

私と一緒に来てくれているお母さんが私に言いました。よくそっくりの母娘だつて言われます。実は私はお母さん似なんです。お母さんもやつぱり小さいです。

「色々？」

「ええ」

詰所の部屋の中で私に言いました。

「高校の三年と、若しかして大学の四年かしら」

「四年？あつ、そうか」

そこは言われて気付きました。

「天理大学があるからね」

「そうよ。大学も行けたら行くのよ」

お母さんは私にそう言います。

「勉強になるし。それに」

「それに」

「お母さんもそこでお父さんと知り合つたのよ」

お母さんも天理教の人なんですけれどもお父さんとは別の大教会の系列でしかもお父さんより一つ上で。だから高校では知り合いじゃなかったんです。同じ天理高校だったんですけれど。

「いい出会いもあるしね」

「出会い、なのね」

「人と人の出会いも親神様のお引き寄せなのよ」

お母さんはにこりと笑って私に言いました。

「千里はそれを勉強するといいわ」

「学校のよりも？」

「そうね。それは二番目」

うちではまずおみちのことが最初で。学校のお勉強は二番目なんです。けれど恥ずかしい成績じゃ自分で嫌なんでそっちは自分で頑張っています。

「二番目でいいから」

「そうなの。いつも通り」

「そう。だからまずは色々な人を知りなさい」

にこりと笑って私に言いました。

「わかったわね」

「わかったわ。いよいよ明日なのね」

「制服の準備は出来た？」

「うん」

それはもう済ませています。制服も鞆も教科書も全部準備ができています。何時でも行けるって感じです。

「入学式、晴れるといいね」

「そうね。桜と黒門を見ながらね」

そんなことを詰所で話しました。あと一日だけお母さんと一緒にいられるけれども明日の夜からは違うんだ、そのことを心に刻みながらその日は寝ました。これからどうなるか物凄く不安でした。泣きたくもなりましたけれどそれを必死に堪えて。

次の日朝御飯を食べて身支度を整えて。そうして黒門をぐぐりました。お母さんと二人並んで。

「この黒門もこれからは毎日くぐるのね」

「ええ、毎日よ」

「今までは本当に年に何回かだけだったのに」

「不思議？」

「何か信じられない」

私は黒門をくぐりながらお母さんに答えました。もう天理高校の制服を着ています。何気に好きな制服ですけどちょっと地味かな、って感じもします。

「これから毎日見るなんて」

「嬉しい？」

「よくわからない」

私はお母さんにそう答えました。

「何て言ったらいいか。何て言うんだろう」

「何か今の千里ってあの時のお母さんと同じね」

「お母さんと」

「ええ。お母さんもそうだったわ」

にこりと笑って私に言ってきました。

「どうなるか。物凄く不安だね」

「そうだったの」

「誰だってそうなのよ」

またにこりと笑って私に言うのでした。

「凄く不安で。けれどそれに何とか耐えて」

「そうしてやっていくのね」

「そうよ。これから本当に色々あると思うわ」

お母さんは黒門の前を見ました。そのずっと前に天理高校があります。瓦の屋根で何か普通の校舎とは随分違ったお屋敷みたいな建物の。テストで行ったからそれはもう知っていました。

「それでもね。頑張るのよ」

「頑張っていけるかしら」

やっぱりそれが不安になりました。

「私、これから」

「お友達ができるわ」

お母さんはまずはお友達を出してきました。

「寮にいるわよね」

「うん」

それももう決まっていた。それが一番不安なんですけれど。
「色々とお友達ができてね。やっぱりこれも最初は凄く不安なんだけれど」

「今の私がそうよ」

お母さんにもそのことを言います。

「怖い先輩とかいないかしら」

「絶対いるわよ」

やっぱり。そうだと思いました。

「それでも。優しい人も一杯いるから」

「だったらいいけれど」

「だから。安心していいわ」

にこりと笑って私に告げてきました。

「そんなに酷いことにはならないかしら」

「本当!？」

それが全然信じられませんでした。寮生活って何かとんでもないしきたりとかあるんだって聞いているのでそれが怖くて。正直今ここから逃げ出したい気持ちもあります。

「悪いけれどそれは」

「信じられないのかしら」

「ちよつと」

それを正直に答えました。何だかんだで歩いているうちに信号を越えて。天理大学の下に近付いてきました。本当にもうすぐです。

第七話 学校に入ってその二

「その為のお友達だし」

「それはそうだけれど」

「だから。安心していいわよ」

またにこりと笑って私に言うのでした。

「親神様も教祖もおられるのよ」

「そうね」

それを思い出しました。っていつか今まで忘れていた私があるんです。

「じゃあ」

「安心していいのよ。御守護を下さるのだから」

「そうよね」

お母さんの今の言葉で気がかなり楽になりました。

「だったら」

「そういうことよ。安心してきたでしょ」

「うん」

「何かあったらお父さんとお母さんも帰って来るから」

こつも私に言うてくれました。

「わかったわね」

「わかったわ。それじゃあ」

「とりあえず。入学式の後一緒に何か食べましょう」

「お好み焼きがいいのだけれど」

おぢばでは何故か和食を結構食べます。おうどんとかお好み焼きとか。今日はお好み焼きが食べたい気持ちでした。

「駄目かな」

「そう思つて詰所には頼んでないわよ」

「えっ、そうなの」

読みが早いって言いますか。これには正直驚きました。

「じゃあお好み焼きね」

「うん」

そんな話をして二人でお好み焼きを食べた後で東寮に行くのですが。何か神殿の前で後ろからやけに騒がしい男の子の声が聞こえてきました。

「何かしら」

「新入生じゃないかしら」

私達はそんな話をしました。

「けれどそのわりには声が」

「中学生かしらね」

お母さんはその声を聞きながら述べます。

「この感じは」

「そうかも。あれっ」

何か聞こえてくるその男の子の言葉も。少なくとも新入生の感じじゃなかったです。それどころかおぢばに帰って来たのもはじめてって感じの声でした。

「うわ、何か凄い神殿だな」

「そうだろう？ はじめて見たんだよね」

「うん、俺こんな凄い神社見たのはじめて」

神社って。間違える人いますけれどそれをここで言うのは。

「凄いよ、これ」

「言っておくけれどここは神社じゃないよ」

一緒にいるのはおみちの人でしょうか。すぐに彼に突っ込みを入れています。

「神殿なんだよ」

「そうなんだ。あれっ」

何かここで他のものに興味が移った感じです。声だけ聞いていますけれどそれが伝わってきました。けれど何か凄く軽い感じでそれがあまり好きになれません。

「あの制服の人達は」

「あれが天理高校の生徒なんだよ」

「へえ、何か小さい子が多いね」

それって私のこと！？本当に失礼な子のようにです。

「それに可愛いし」

少し機嫌をなおしてあげました。

「いい感じだね。何かこの学校に入りたくなつたよ」

「ははは、それはいいね」

お断りよつて思いました。何であんな子が。声だけ聞いているんですけれど。

「じゃあ帰つて勉強しよう」

「二年後ここで笑つていられるようにね」

「お母さん」

そんな話をずっと聞いた後で。私はお母さんに言いました。もう神殿の南玄関の前を通り過ぎていよいよ東寮です。あとは一直線らしいです。

「天理高校って真面目な学校よね」

「そうよ」

お母さんは当然よといった感じで私に答えてくれました。

第七話 学校に入ってその三

「おみちの人を育てるんだから。当たり前じゃない」

「けれど今の後ろの子って」

「まだ合格するかどうかわからないわよ」

お母さんはにこりと笑って私に言いました。

「それに世の中色々な人がいるじゃない」

「ええ」

これはわかります。私の家の教会にも本当に色々な人が来ますし。中には白いタキシードで黒いマントを羽織ったとても怪しい人もいます。一回だけ着てその後教会にお巡りさん達が大勢やって来たのを覚えています。何でも自衛隊の基地に巨大ロボットを殴り込ませたとかで。とんでもない人もいるものです。

「八条さんみたいな方もおられるでしょ」

「そうよねえ」

八条さんは昔大財閥で今は世界的企業の会長さんです。まだ若くてとても綺麗な顔立ちの人です。礼儀正しくて謙虚で時々私の家の教会に参拝に来てくれます。実は私が中学校まで行っていた学校の理事長さんでもあられます。私の住んでいる町も八条町っていいますけれどこの人の家があるから名付けられたそうです。須磨区にあります。

「あんな素晴らしい方もおられるし」

「困った子もいるじゃない」

「人それぞれなのね」

「そういうことよ。それも勉強することね」

お母さんは言います。

「学校のだけじゃなくて」

「色々勉強しないといけないのね」

「わかったかしら」

「寮でも。それを勉強するのね」

私はそう思いました。それを言つと何かこれからのことが余計にわからなくなりました。

「本当に。寮でも一杯色々な人がいるし」

「ふうん」

「それはそれで面白いって思う時がきつとあるわ」

「けれど」

ここでまた。不安を感じました。

「大丈夫かしら、本当に」

「先輩や同級生の人達のこと？」

「それもあるけれど」

不安はそれだけじゃないです。

「お父さんともお母さんとも離れて。ずっとだから」

「毎月二十六日には帰るわよ」

月次祭の時は毎月おちばに帰っています。それが我が家です。

「その他にも機会があれば」

「会えるのね」

「だから寂しくない筈よ」

「だといいけれど」

そうは聞いてもやっぱり不安で仕方ありません。これからどうなるかって考えて。それでどうしようもなく不安になっています。

「三年間。それから多分大学の四年間」

一口に言つても本当に長いです。

「楽しみなさい。いいわね」

「このおちばを」

「それで。できたら」

お母さんは何故かここで私の顔を見て笑いました。

「旦那様を見つけないさい」

「何よ、それ」

急にそんなことを言われたで思わず笑ってしまいました。何でそ

ここで旦那様が出るのかわかりませんでした。

「旦那様って」

「夫婦揃ってでしょ」

天理教の基本です。夫婦仲よくです。

「だからよ。千里もいい人が見つければお母さんも安心なんだけ
ど」

「安心って。私まだ十五なのに」

空に吸われる十五の心。石川啄木でしたっけ。

「まだそんなの先よ、ずっと先」

「そうかしら。ひよっとしたら」

それでもお母さんは私に言います。

「高校で年下の彼氏を見つけて。お母さんみたいに」

「お母さんって年下好きだったの」

「うちの家は代々そうよ」

実はお母さんの家ではお婆ちゃんも曾お婆ちゃんもおばさん達も
どいううわけか皆年下の人と結婚しています。凄いいんねんです。
悪いいんねんじゃないですけれど。

「千里も多分ね」

「私の好みって福山さんただけねど」

他には俳優さんだと内藤剛志さんとかアイドルだとトキオの長瀬
さんとかスマップの香取さんとか特撮だとオダギリさんとか半田健
人とか。そういう人達がタイプです。背の高い人が好きかなあ。

「そういう人は」

「うちの家系は代々小柄だから背の高い人がいいのかしら」

「うっ、そういえば」

お母さんの家系は女は皆小柄です。これも天理教だからでしょう
か。おみちの女の人ってとにかく小さい人が多いような気がします。
「そうかも」

「千里は子供の頃結構大きかったのに」

お母さんは少し残念な顔になりました。

「やっぱり。これもいんねんかしら」

「小柄のいんねん？」

おかしいんねなんですよけれど。私も背が低いのは気にしています。けれどそれが遺伝じゃなくていんねんっていうのは何か不思議です。

「変な話ね」

「悪いんねんじゃないけれどね」

「そうだけれど」

それでも何か腑に落ちません。背が低いのがいんねんっていうのは。

「だから背の高い人に憧れるとか」

「そういえばお母さん日曜の朝はいつも」

「羨ましいわ」

ここで本当に羨ましがる顔になっていました。

「あのヒロインの女の子も一七〇近いのよね」

「そうらしいわね」

最近までやっていた仮面ライダー龍騎です。この頃やっていたライダーはそれでした。お父さんと妹達が好きなので観ていました。

「私の家系なんて一五五越えないのに」

「私は越えると思ったんでしょ」

「それがねえ」

またふう、と溜息をつくお母さんでした。

「結局小さいままだから」

「何かもう背の話止めない？」

そろそろ東寮が見えてきました。見れば何か学校の校舎に似た感じですよ。思ったよりも小さいので少し驚きました。

第七話 学校に入ってその四

「あれ、少し」

「小さいでしょ」

お母さんもそこを言います。

「ええ。男の子の寮って確か」

男の子達の寮はお墓地に行く時に側を通りますから知っていますけれど何個も大きな建物があつて随分大きいです。それと比べたらずっと小さいです。

「数が違うから」

「そうなの」

「天理高校って女の子少ないのよ」

そういえばクラスに入つた時もそんな感じでした。妙に女の子が少なかったような。普通は半々つてところなのに男の子と女の子の割合が三対二つてところでした。もっと少なかったかも。

「だからね。これだけの大きさなの」

「そうだったの」

そういう事情でした。何はともあれここに三年間です。

「それじゃあお母さんはこれでね」

寮の門の前まで来たらお母さんは帰ろうとします。

「時々来るから。またね」

「うん。これでお別れなのね」

そう思うと寂しいやら悲しいやら。不思議な気持ちです。

「もう。これで」

「だから帰って来るから」

お母さんも寂しそうな私に気付きました。それで私に苦笑いを浮かべてきました。

「そんな顔しないの。いいわね」

「うん」

お母さんの言葉にこくりと頷きました。

「わかったわ。それじゃあ」

「じゃあね、千里」

最後の挨拶でした。これでお別れです。

「またね」

「うん。けれど」

「待つて」

そこから先は言わせてもらえませんでした。不意に私の口が閉じられました。

「そこから先は言ったら駄目よ」

「え、ええ」

頷くしかできませんでした。話せないから。

「会えないわけじゃないから」

それで終わりでした。お母さんは帰って私は残って。たった一人で寮に残されました。

「一人になったんだ」

この時程寂しい気持ちになったことはありませんでした。本当にこの寮に一人になって。これからどうなるんだろうって思いました。その私に。誰かが声をかけてきました。

「ねえ」

見れば私より二つ上でしょうか。淡い茶色の髪に白い肌をした人がいました。何か優しい顔立ちをしたとても綺麗な人です。見れば天理高校の制服を着ています。私の先輩みたいです。やっぱり背はあまり高くないのが凄く気になりますけれど。

「どうしたの？ 新入生の子かしら」

「あつ、はい」

私はその人に答えました。何が何だかわからないまま。

「そうですけれど」

「そう。名前は何でいうの？」

「中村です」

私はおどおどして答えました。何がなんだかかわらないまま。

「中村千里っていうんですけれど」

「あらっ、中村さん？」

その人は私の声を聞いて思わずといった感じで声をあげました。その時何でこの人私のこと知っているんだろうって本当に不思議でした。

「貴女が中村さんなのね」

「そうですね」

何がなんだかわからないまままた答えました。

「それが。何か？」

「これから宜しくね」

今度はこう言ってきました。

「あっ、はい」

同じ寮だからこう言われたのかと思いました。がそれは違いました。

「一年間だけれど」

「はい、宜しく御願います」

「部屋とか。わからないわよね」

その先輩は明るくて優しい笑顔でまた私に言いました。

「案内してあげるけれど。どうかしら」

「けれどそれは」

「いいのよ」

私が断ろうとしたらこい言ってきました。

「私もこれから入るんだし。いいわね」

「いいんですか」

「助け合いよ」

またおみちの言葉が出て来ました。

「だから遠慮することはないの。いいわね」

「そうですね」

「礼儀は必要だけれどね。困った時はお互い様よ」

何かとても優しい感じの人です。見れば見る程綺麗です。しこんな

人本当にいるんだなって思いました。おぢばの女の人って綺麗な人が多いですけどそれでも。

「だから。来て」

「はい」

その先輩に案内されて寮の中に入って。それである部屋に辿り着きました。

「ここが貴女の部屋よ」

「確か三人部屋ですよね」

それはもうお母さんから聞いていました。天理高校の寮は一年、二年、三年で三人で住むことになっています。お母さんが教えてくれました。

「そうよ。一人が私」

「えっ!？」

今の言葉には思わず啞然としました。嘘でしょ、って感じです。

「後の一人はまた来るから」

「そうだったんですか」

「驚いた？」

先輩はまたにこりと笑って私に尋ねてきました。何か本当に綺麗な顔で。女の子の私が見ても驚く位です。色が白くて目がキラキラしてて。こんな綺麗な人いるんだなあ、って感じです。

「は、はい。とても」

私は思わず正直に答えました。

「まさかとは思いましたけれど」

「名前は長池っていうの」

「長池さんですか」

「ええ、宜しくね」

何か凄く覚え易いです。そういえば同じ苗字のプロ野球選手がいたような。

「わかりました。じゃあ長池先輩」

「先輩はいいから」

「じゃあ。長池さん」

「ええ」

そうやり取りをします。とても気さくな人でした。それだけで随分救われた感じになりました。やっぱり一緒の部屋の先輩がいい人だと全然違いますから。

「これから宜しく御願います」

「何かあったら私に言ってね」

また気さくな感じで言ってくれました。

「わからないことも」

「はいっ」

後で二年の方も来られて三人ですぐに仲良くなれました。とりあえずこの人達と一緒にだと大丈夫ね、安心して一日目が終わりました。

第七話

完

2007・11・4

第八話 はじまってからその一

はじまってから

寮での生活ははじめての集団生活なので色々戸惑いましたけれど。先輩達が皆とても優しいし同級生ともすぐ仲良くなれて幸先よいスタートでした。けれど。

「あの、ちよつと」

教室で女の子がスポーツ新聞を読んでいます。これにはかなり驚きました。自宅から通っている子ですけれど幾ら何でもこれは。

「学校でそれ読むのはまずいんじゃないの？」

しかも女の子が。けれど彼女は平気な様子で私に答えてきました。

「これ借り物なの」

「借りたいの」

「ええ、あつちの男の子からね」

見れば彼もスポーツ新聞を読んでいます。しかもデイリー。それだけで彼が何が目的でスポーツ新聞を買ったのかわかってしまいました。

「借りたいのよ」

「そつだったの。何も言われないの？」

「何もつて？」

逆に尋ねられました。

「何がよ」

「いや、だから」

かえって私が戸惑って。変なふうになってきました。

「おかしくないかなあつて」

「何処が？」

こうも言われました。

「阪神の結果見ているだけなのに」

「阪神の」

「そうよ。勝ったかどうかね」

楽しそうに私に言いました。何か本当に何も悪くないって感じで、そりゃ校則にも学校の中でスポーツ新聞読むとかは書いていまして、んでしたけれど。

「それを見ているだけじゃない」

「まあそうだけれど」

「誰にも迷惑かけていないわよ」

それも確かです。新聞読んでるだけですから。

「それにこれ自宅用のスポーツ新聞だし」

「それって何かあるの？」

これにはわかりませんでした。スポーツ新聞って自宅用とかそんなのがあるんですか。

「あるのよ。あのね」

「うん」

「いやらしい記事がないのよ」

「いやらしい!？」

そう言われても何が何なのか。ついつい首を捻りました。

「何、それ」

「何ってあんた」

呆れた顔で言われました。

「だから、スポーツ新聞よ」

「うん」

「中に風俗とかそういう記事があるじゃない。そのことよ」

「あつ」

言われてやっと気付きました。そうです、スポーツ新聞ですから、そつした記事は常です。やっと気付いて何かもう顔が真っ赤になるやら。全然わかりませんでした。

「だからなのね」

「そついうこと。わかったわね」

「え、ええ」

「それがないからいいのよ」

「そうだったんだ」

「それでだ」

そのうえで私に言うてきました。

「あんた野球に興味ある？」

「ええ、まあ」

その問いにはすぐに答えることができました。それでしたら。

「一応は」

「何処のファン？」

「阪神よ」

やっぱり阪神ですよ。そこ以外応援する気になれません。子供の頃からずっとあの縦縞のユニフォームを見てきていますし。やっぱり阪神です。

「じゃあ昨日の結果気になる？」

「ええ。勝ったのかしら」

「負けたわ」

彼女は残念な苦笑いで私に言いました。

「残念だけれど」

「そうなんだ。何だ」

「がっかりした？」

「とてもね」

ここでも本気で答えました。

第八話 はじまってからその二

「負けたの」

「しかも巨人相手に」

「余計に気分が悪くなつたわ」

「やつぱり巨人には勝たないと駄目ですよ。あの会長もユニフォームも補強のやり方も大嫌いです。私のいる大教会は清原の地元岸和田にも教会が多いですけどそれでも巨人は昔から嫌いです。周りも殆どの人がアンチ巨人でお父さんもお母さんもそうです。」

「朝から悪い話ね」

「東寮つて朝は気持ちよく起きられるんじゃないの？」

「その娘は不意に笑つてこう言つてきました。」

「確か朝は」

「ええ、ハイジの曲よ」

「目覚ましの曲はアルプスの少女の曲なんです。それでいつも起きています。係りの娘が曲を決めるんですけれど殆どの年がこの曲らしいです。」

「それで起きてるんだけれど」

「じゃあ目覚めはいいでしょ」

「まあね」

「これは本当です。朝からあの曲だと本当に気持ちがいいです、」

「私の兄貴なんてあれよ。六甲おろしで起きるんだから」

「それはまたあれね」

「朝から黒と黄色の縦縞つていうのも。胃もたれになりそうです。」

「止めるつて言ってるんだけれど。虎だつて言つて聞かないのよ」

「そんなに阪神が好きなの」

「俺の身体には阪神液が流れてるつて言ってるわ」

「阪神液!？」

「また随分聞き慣れない言葉です。けれどもそれが何なのかはすぐ」

にわかりました。阪神って言えばやつぱり。関西にいたら離れられません。

「黒と黄色の液体らしいわ。それが流れてるんだって」

「ふうん。じゃあ弱かった時は大変だったのね」

「いつも荒れていたわよ」

予想通りでした。

「いつも負けていたから」

「やつぱり」

「そんな兄貴だから。止めないのよね」

「大変ね、そんなお兄さんだと」

「あんたはどうなのよ」

ここでクラスメイトが私に話を振ってきました。

「私!？」

「見たわよ、ハンカチ」

くすりと笑いながら私に言ってきました。

「黒と黄色の。阪神のやつよね」

「あちゃ~~~~」

思わず声が出てしまいました。本当にこう思いました。

「見たたの」

「偶然だけれどね。ファンなんでしょ」

「そうよ」

最初からわからないかしらと思いますけれど。

「だから負けたら寂しいし」

「でしょうね。そのハンカチは何処で買ったの？」

「信者さんからの頂きもののなの」

信者の方の一人に凄い熱狂的な方がおられて。天理高校に入る時に頂きました。何時でも阪神も忘れないようにって。

「それでだけれど」

「何か楽しい信者さんね」

「実家神戸だから阪神ファンの人多いのよ」

これは本当です。そういえばおみちの人で巨人ファンって凄くないです。これはそもそも天理教が関西にあって関西に信者さんが多いせいですけど。

「奈良だってそうよ」

「そうなのよね」

これも本当です。奈良も阪神ファン多いです。パリーグは地域ごとに分かりますけれどここは確か近鉄の場所だったような。確かそうだった筈です。パリーグ詳しくないんで。

「だから。別におかしいわけないでしょ」

「それでも驚いたわよ」

また彼女に言いました。

「女の子がスポーツ新聞なんて」

「大阪じゃ競馬新聞よ」

「嘘……」

流石にこれは信じられませんでした。

「本当！？それって」

「大阪を舐めたらいけないわよ」

ちなみに大阪はおぢばの玄関口と言われています。教祖がそう仰り立教して間もない頃に末娘のこかん様を大阪に行かせたこともあります。

「昔は阪神グッズ専門店が難波にあったし」

「それって凄いわね」

「道頓堀もあるしね」

優勝したら飛び込むあそこですね。それは知ってます。

「西宮とあそこは阪神ファンの聖地よ。玉造に住んでる選手もいたし」

「詳しいわね」

話を聞いていて驚きました。そこまで知ってるなんて。

「ファンじゃ当たり前じゃないの？」

「当たり前？」

「そうよ」

平然とした調子で私に言ってきました。

「これ位は」

「そうかなあ」

「そうだって」

「なあ」

何か他の皆もやって来て私に言います。どうやら私は阪神ファンといってもまだまだ浅いようです。まさか皆がここまで知っているなんて。

「あんたも阪神ファンならもっと勉強しなさい」

こうまで言われました。

「わかったわね」

「何かそれって変なような」

「おみちと同じよ」

何故かここでおみちが出て来ました。ちょっと訳がわかりません。

第八話 はじまってからその三

「勉強しないと駄目なものよ」

「そうかしら」

「そうなの。関西で阪神はね」

「わからなくてもわかってこと？」

「そういうことよ」

「だそうです。全然納得いきませんけれど。」

「わかったらこの新聞読む？」

「ええ」

「そういえばちっちのおうちって新聞は何？」

「毎日だけれど」

「読売じゃないのね」

「それはないわ」

お父さん、いえお爺ちゃんが大のアンチ巨人なんで毎日にしました。何かその時永田雅一がどうとか言っていたそうですけれど誰なのやら。

「だってうちの家も皆」

「アンチ巨人なのね」

「そうなの。それにあそこの社長が嫌いな家族が多くて」

「それって多分このクラスもよ」

そうでしょうね、って思いました。ここは関西です。関西で巨人の人気はかなり低いです。それでもファンがいることにはいますけれど。

「まあ人の悪口を言うのは」

「おみちとしてあれよね」

この娘も教会の娘さんなのでそうしたことには厳しいです。やっぱりちゃんとした教会の娘さんってそうした躰が昔からされていることが多いです。

「やっぱり」

「そういうこと。けれど褒めるのはいいから
そう言ってまた新聞を見はじめました。」

「久し振りに打線が打ったのよねえ」

「へえ、本当に久し振りね」

「最近あまり打たないから」

何かそれが阪神の伝統だそうで。ピッチャーの球団だって。

「打ってくれるとね。有り難いわ」

「そうよね、やっぱり打たないと」

打ってくれないと勝てません。私が甲子園で散々見てきた試合です。

「どうしようもないわよね」

「そういえばうちの高校もどうかしら」

不意に話がそっちに行きました。

「天理高校の？」

「ええ。今年は甲子園に行けるかしら」

「それは相手次第じゃないの？」

私は首を少し傾げさせてこう答えました。

「やっぱり。相手が強かったら」

「それなのよね。智弁がいるから」

「郡山も」

この二校と高田高校でしょうか、天理高校野球部の奈良でのライバルは。彼等を倒さないと甲子園には行けないのが毎年です。

「敵も毎年強いわよねえ」

「向こうも甲子園出たいしね」

言うまでもないことですけどね。

「必死で練習してると思うわよ」

「敵もさるものね」

彼女は少し溜息をついて述べました。

「困ったことに」

「毎年甲子園出られたらいいのにね」

私もそう思います。あの白と紫のユニフォームを見るのが大好きです。あのユニフォームに憧れて子供の頃は野球部に入りたいなんて無茶を思っていたりもしました。

「それは簡単じゃないわね」

「そういうことね。まあ甲子園はまだ先だし」

彼女はそう言うと言と新聞を収めてきました。そしてそれを私の前に出してきました。

「読む？」

「あつ、いいわ」

それは断りました。

「もうわかったから」

「そうなの。それじゃあ」

「ええ。それにしてもうちの学校ってやっぱり阪神派なのね」

「だから。関西よ」

それが第一の理由でした。

「阪神で当たり前じゃない」

「やっぱり」

「天理教自体教会が大阪とか奈良に多いし」

奈良はやっぱりおちばがありますから信者さんも教会も多いんです。そして大阪はおちばの玄関口なので。人口も多いこともあって天理教の教会の十分の一があるそうです。

「そうなるわね」

「そうよねえ。けれど阪神かあ」

「ちっちゃだってファンじゃない」

「それはそうだけれど」

さつきからお話している通りです。それは否定しません。

「何かなあ、って思っ」

「何かなあって？」

「あまり神戸にいた時と感覚が変わらないのよ」

少し慣れてきたせいでしょうか。寮での生活も学校でも不思議とお家にいるのと変わらない感じに思えてきました。実家が教会なのでそのせいかも知れませんか。

「何でかしら」

「阪神だけじゃなくて？」

「そうなの」

私はこう答えました。

「不思議よね」

「それはちっちが教会の娘さんだからでしょ」

そうしたらこう返事が返ってきました。私が考えていたことと同じです。

「そうなるのかしら、やっぱり」

「そうなるわ。ほら、おみちはここに入ってはじめての人だっているじゃない」

「ええ」

そうしたクラスメイトも多いんです。私みたいな娘もいればそうじゃない人も。おみちの入り方はそれぞれでこれについてはわかっているつもりです。

「そうした人はまた違うこと言うわよ」

「でしょうね。それもわかってるつもりだけれど」

「実際に感じると違うでしょ」

「ええ。じゃあそうした人達は」

ここでわかりました。

「私とは全然違う感触なのね、やっぱり」

「特にあれじゃない？」

また言われました。

「何も知らないで寮に入った人なんかは」

「そうよね。かなり戸惑うわよね」

何せ周りはおみちの人ばかりで。それで自分は何も知らないで急に二十四時間おみちのことばかりになるとかなりのショックを受け

るのは間違いありません。実際にそうした人もいます。

「そうした人にこそ」

「色々と助けてあげてよね」

「わかってるじゃない」

にこりと笑って言われました。

「感心感心」

「何か今の言い方って」

微妙に引く掛かるものがありました。

第八話 はじまってからその四

「子供に言うみたいね」

「だってちつち小さいから」

それは余計です。それに。

「あんただってそうでしょ」

すぐにこう言い返しました。彼女も小さいですから。私よりは高いですけど。

「小さいのは」

「ちつちよりは高いわよ」

やっぱり。こう言ってきました。

「それでもね」

「どうせ私は小さいわよ」

何かこの台詞中学生の時から言っています。気にしていますけれどもどうにもなりません。

「けれど仕方ないじゃない」

「気にしない気にしない」

「気にするように言っているのは誰よ」

「まあまあ」

そんな話をしているうちに授業です。ホームルームがなくていきなり授業です。あとうちの学校には下駄箱というものがありません。そのまま靴で校舎に入ります。だからお掃除の時砂が多かったりします。

授業が終わって部活が終わって。寮に帰る前に参拝です。

「今から帰るの？」

「あつ、はい」

長池先輩が隣に来てくれました。凄く優しい顔で笑っています。

「そのつもりですけど」

「デートとかはしなくて」

「デートなんてそんな」

全然考えたこともありません。この学校に入ってから本当に。

「彼氏なんて」

「いないの」

「はい、やっぱりそういうのは」

ここで先輩に言いました。

「結婚する人ですよ」

「何、それ」

先輩は私の言葉を聞いて急に笑いだしました。

「結婚するまで、というか結婚する人としてかデートしたり彼氏になつたりとかしないの？」

「駄目ですか？」

「駄目じゃないけれど」

黒門に向かう暗くなりかけの道で二人で話をしています。道が紫色になっていてお空は青と赤、白から少しずつ黒くなりだしています。何もかもが黒の中に消えようとしています。そんな中で二人で話をしています。

「ただ」

「ただ？」

「随分硬い考えね、それって」

先輩はくすりと笑って私に言うのでした。

「今時そんな人がいるんだって思ったわ」

「そんなにですか」

「そうよ。まだそんな人がいるんだって驚いたわよ」

「はあ」

「まあちつちらしいかな」

そのうえでこうも言われました。

「真面目で。私なんかにはとても」

「先輩も真面目じゃないですか」

長池先輩って奇麗で優しいだけじゃないんです。とても真面目な

人でもあります。それが私の同級生達からは怖いって言われたりもしますけれど。

「そんなことは」

「私だって真面目なだけじゃないわよ」

それでもこう言ってきた。何か寂しい感じで笑いながら。

「色々あったからね」

「色々ですか」

「ええ。まあそれは何時かね」

今はお話してくれませんでした。

「話させてもらうかも。けれど今は許してね」

「許すも何も」

そんなの私が言えた義理じゃないです。とても。

「そんなのないですよ」

「そう、優しいのね」

先輩は私の言葉に笑みを返してくれました。それもとても優しく。

「ちっちゃって」

「そうでしょうか」

「ええ、とてもね」

また私に言います。

「優しいわ。優しすぎる位」

「そうでしょうか」

「自分ではわからないものよ」

「こうも言われました。」

「そういうことってね」

「はあ」

「けれど。気付く人は気付くから」

「そんなんですか」

「それでそれに気付いた人は」

どういうわけでしょうか。先輩の顔が微妙に寂しくなりました。そうして私に言います。

第八話 はじまってからその五

「絶対に優しくしないと駄目よ」

「絶対に？」

「ええ」

その寂しい顔で。私に言うのでした。

「さもないとね。大変なことになるわ」

「そうなんですか」

「ええ、そうよ」

私にまた言います。

「絶対にね。それはわかっておいて」

「わかりました」

何かよくわからないけれど頷くことにしました。先輩の仰ることです。

「それでは」

「わからないわよね」

そんな私の心を見越したように先輩が言ってきます。

「やっぱり」

「いえ、それは」

「隠さなくてもいいのよ」

また先手を打って言われました。

「そういうことは」

「それは」

「怒らないから」

こつとも言われました。

「言わなくていいわ。いいわね」

「わかりました」

そこまで言われたら仕方なく。頷くことにしました。それに本当にわかりませんでしたし。

「そうなんですか」

「私も最初はわからなかったのよ」

その寂しい顔でまた私に言います。

「誰が本当にいい人か悪い人かって」

「ですか」

「いい人だって時には悪いこともするわ」

こうも言います。

「誰にだって間違いはあるのよ」

「人間ですからね」

「けれどそれでね」

また私に言います。

「その間違いに気付いた時にどうするかなのよ」

「そうするか、ですか」

「ええ、それが大事なの」

寂しい顔はそのままです。何かあったのがわかります。

「そこがね」

「そうですね。それはわかりますけれど」

「ただ」

先輩は寂しい顔から悲しい顔になりました。

「気付かないかも知れないけれど」

「気付かない」

「そうよ。自分ではね」

こう言います。

「中々気付かないものなのよ、自分では」

「それはわかります」

私にも経験ありますし。自分が知らないうちに他の人を傷つけて
いてってことは。それで大変なことをしてしまったって後悔したこ
ともあります。

「私も」

「ちっちゃもあるのね」

「はい、先輩もなんですね」

「ああ。あの時はね」

少し俯きました。そうして私に言います。

「いいと思っていたのだけれど。それが」

「それが」

「相手をとて傷つけていて。それで相手がどう思っているかってことに気付かなかったのよ」

「そういうことがあったんですね」

「詳しいことは言えないけれどね」

それは言おうとしないのでした。先輩にとっても辛いことなのかわかります。

「そうしたことがあったのよ」

「ですか」

「だから。ちつちも気をつけて」

声が優しいものになりました。そうして私にまた言ってくれます。

「そういうことがないようにね」

「はい」

先輩の言葉にこくりと頷きました。

「そうします」

「それじゃあこれから」

「これから？」

「何か食べに行かない？どうかしら」

「何かですか」

そう言われてみると。お腹が空いてきています。育ち盛りなのでやたらとお腹が空きます。けれどそれでも背が大きくならないのが不思議です。

「どうかしら。ドーナツでも」

「あつ、いいですね」

ドーナツ好きなので。願ってもない言葉でした。

「それじゃあ駅前のミスタードーナツですよね」

「ええ、行きましょう」

明るい顔になって私に言ってくれました。

第八話 はじまってからその六

「おごるから」

「いいですよ、そんなの」

私も苦笑いになって先輩に言いました。

「気を使ってもらわなくても」

「いいのよ、私も何か食べたいし」

「そうなんですか」

「やっぱり。育ち盛りじゃない」

これは確かです。私も先輩も。だからこそ今お腹が空いています。

「だからよ。気にしないで」

「だったらいいですけど」

「何かちつつてさ」

ここで先輩の言葉の感じが少し変わりました。

「はい？」

「真面目なだけじゃないのね」

「そうですか!？」

「優しいわ。それに温かい」

「温かいですか」

何かそう言われたのはじめてでした。お父さんとお母さんには子供の頃から人には優しくしなさいって言われてきましたしそれを心掛けてきたってこともあります。それに私も困っている人を見たら放っておけません。これが私のしょうぶんなんでしょうか。

「そうよ。それっていいことだし」

「そうですか」

「女は日様よ」

ここでおみちの言葉が出ました。

「だから。女の子は温かくないと駄目なのよ」

「それお父さんとお母さんにも言われました」

これは本当のことです。それで女の子は太陽だから人に対して温かくなりなさいって言われています。明るい心で元気よくとも。

「いいご両親ね」

先輩は今の私の言葉に顔を綻ばせました。

「その通りよ。そうあるべきなのよ」

「ですか」

「そういう点ではちっちは凄いわ。私なんかより」

「先輩は」

「前ね、とても酷いことをしてしまったから」

けれど先輩は私の言葉を否定して。また悲しい顔になって仰るのでした。

「私は温かくはないの。そういう人間なのよ」

「そうは思わないです」

それは絶対に違うと思いました。先輩みたいに優しくて温かい人はそうはいません。外見は一見したら冷たい感じがしますけれど本当は全然違います。

「私は」

「そう言ってくれると嬉しいわ」

何か私の言葉に落ち着かれたようでした。

「有り難う」

「いえ、そんな」

「その御礼もしなくちゃね」

また話が戻りました。

「だから。いいわよね」

「はい、先輩が仰るなら」

まだ悪い気はしますけれどもそれでも。先輩が誘って下さるんですし。

「御願います」

「ここって結構甘いもの多いわよね」

先輩は今度は食べ物についてお話を始められました。

「ソフトクリームとか」

「私あそのソフトよく食べます」

商店街のソフトクリーム、大好きです。

「凄く美味しくて」

「ちっちも甘いもの好きなのね」

「先輩もなんですか」

「ええ、大好きよ」

また明るい笑顔になってくれました。やっぱり先輩は明るい笑顔であってくれないと。何かそうじゃないととても嫌です。女の子の私が言うのも何ですが凄く綺麗なんですから。

「それじゃあ最初はソフトクリームかしら」

「最初は、ですか」

「ええ。まずはそれを食べて」

予定が変わっちゃいました。けれどそれもいい感じです。先輩におごってもらってから図々しいですけどやっぱり。あのソフトが食べたいですから。

「それから駅前ね」

「わかりました」

「ドーナツは何を食べようかしら」

先輩はそれについても考えます。考える顔もやっぱり綺麗です。それに背も私よりもあって。私があんまりにも小さいんだと思いますけれど。

「飲み物は紅茶ね」

「そうですね」

これはわかります。私も紅茶派ですから。

「ドーナツには」

「そうなのよ。そういえば」

「はい？」

「ちっちって寮じゃいつも豆乳よね」

「あっ、はい」

先輩の今の言葉に答えます。

「そうですね」

「どうして豆乳なの？」

そこを先輩に聞かれました。

「前から思っていたけれど」

「駄目ですか？」

「あつ、駄目とかそういうのじゃなくてね」

それは違うみたいです。豆乳だから駄目っていうのはやっぱりないです。

「どうしてかしらつて。牛乳飲む娘が多いから」

「私豆乳好きなんです」

第一の理由はこれです。

「それに」

「それに？」

「豆乳飲むと胸が大きくなるそうですね」

「胸が？」

「はい」

そう先輩に答えます。

「そう聞きましたけれど」

「そういえば私も聞いたことがあるわ」

先輩は首を捻られました。記憶を調べている感じです。

「キャベツとかもよね」

「キャベツも意識して食べてます」

「アイドルの誰かがそんなこと言っていたような」

それです。それを聞いて豆乳を飲んでいるんですね。

「効果あるのかしら」

「あると思いますけれど」

「牛乳の方がよくないかしら」

先輩にこう言われました。

第八話 はじまってからその七

「それだと」

「そう言われたこともあります」

「それも昔からです。小学校高学年の頃から。」

「けれど」

「あえてそれをしてきているのね」

「そうです。一応牛乳も飲んでいますけれど」

「それで効果はどう？」

「どうでしょうか」

その問いには首を捻るしかありませんでした。

「その辺りは」

「わからないのね」

「はい、今のところ効果はないです」

悲しいことに。背も胸ももっと欲しいのに。

「どうしましょう」

「そのまま続けてみたら？」

先輩のアドバイスはこうでした。

「それでも」

「続けるんですね」

「豆乳も牛乳も身体にいいしね」

それもそうです。少なくとも最近全然身体の調子が悪いってこと

はありません。

「やってみたらいいわ」

「わかりました。それじゃあ」

「それにしても。あれね」

ここで先輩は私をちらりと見て言ってきました。

「背の高いちっちゃってちょっと想像できないけれど」

「これでも子供の頃は普通より大きかったんですよ」

「そうだったの」

「はい。それが」

成長が止まっちゃったんです。それで今は。

「こんなふうに。何でなのでしょう」

「ひょっとしてお母さん小さいのかしら」

「はい」

お母さんの家系は皆小さいです。本当に。

「女の人は皆」

「それよ、だからよ」

遺伝だつて言われました。

「遺伝だからそれは」

「仕方ないでしょうか、これって」

「何でかわからないけれどうちの高校も小さい娘多いわよね」

「そうですね」

これはずっと前から思っていました。それだけじゃなくてそもそもおぢばにいる女の人全員がそうです。何でかわかりませんが小さい人が多いんです。

「私もそうだし」

「先輩もですか？」

「大きく見えるのかしら」

「はい」

私にはそうとしか見えません。

「先輩背もあるし。だから余計に」

「私だつて小さい方よ」

けれど御本人はそう仰います。

「実際のところはね」

「そうなんですか」

「わからないのもまあ仕方ないけれど」

「はあ」

「女の子同士じゃ結構わからないかもね。私も小柄なのよ」

「ですか」

「やっぱり私も背が伸びなかったの」

神殿の南門のところで一礼して。そのまま神殿に向かいながら話を続けます。

「結局はね」

「中学からですか？」

「そうね、その辺りから」

先輩もそうらしいです。

「伸びないのよね、どうしても」

「ですよ、どうしても」

これは私もですから本当によくわかります。けれど。

「それでも先輩は」

ちらりと先輩の胸をここで見ました。

「胸も」

「大きいって？」

「はい。大きいじゃないですか」

「別にそうは思わないけれど」

こういうのって自分では気付きませんよね、本当に。

「そうかしら」

「そうですね、大きいです」

綺麗でスタイルもよくて。私なんかと全然違います。

「それだけで男の子寄ってきませんか？」

「甘いわね、ちっち」

神殿に入る前に一礼してから私に言ってきました。勿論私も一礼しました。

「男の子もそう簡単じゃないのよ」

「そうなんですか！？」

胸が大きいのがいいんじゃないんですか。それはかなり意外でした。やっぱり胸が大きい方がいいに決まっていると思っていたんですけれど。

第八話 はじまってからその八

「そこは人それぞれなのよ」

「それぞれなんですか」

「そうなのよ。大きい方が好きな子もいれば」

「小さい方が好きな子もいますか」

「そういうこと。わかったかしら」

「ううん」

思わず首を傾げてしまいました。南礼拝堂の階段を登りながら。

「そうなんでしょうか」

「まあそれも何時かわかるわ」

先輩は首を捻る私に言いました。

「男の子も難しいものだってね」

「実は私」

ここで私は先輩に言いました。

「先輩は同級生とかが好きですよね」

「そうね、嫌いじゃないわね」

にこりと笑って私に言ってくれました。

「けれどそれがどうかしたの？」

「私、どういうわけか昔から年上の人が好きなんですよ」

「へえ、そうなの」

「はい」

そう先輩に答えました。そうして礼拝堂の中に入ります。あちこちで参拝して座りづとめをしている方がおられます。座りづとめというのは正座して手で行うもので天理教のお手振りの中で一番よくするものです。私達もそれをしに今ここに来たんです。

「俳優だったら竹之内豊さんとか」

「いいんじゃないの？」

「村上幸平さんとか天野浩成さんとか」

「背の高い人が好き？」

「それもあります」

それは本当です。だから特撮系の俳優さんが好きだったりします。皆さん顔やスタイルだけじゃなくて背も高いから。テレビで観る度にうらやましくて仕方ありません。

「けれど頼りになる人がやっぱり」

「ちっちはそうは見えないけれど」

適当な場所で正座しました。礼拝堂の中は柱が並んでいますがこの一つのすぐ側に座りました。二人並んでです。

「見えないですか？」

「私の考えだけけどね」

「ええ」

何か凄い気になります。先輩の次の言葉が。それは。

「ちっちって年下の方が合うかも」

「そうですか!？」

それには正直頷けませんでした。

「私はそれは」

「何となくよ」

先輩はそう断ってきました。

「何となく。けれどね」

「はい」

「ちっちしつかりしてるし。面倒見いいし」

「面倒見いいですか？」

「いいじゃない」

今度はこう言われました。

「優しいし。それにお姉さんだったわよね」

「そうです」

先輩にはもう最初の顔合わせでお話しています。私が三人姉妹の長女だって。ですから将来は教会を継がないといけなかったりします。

「そついうのもあるから。年下の方がいいんじゃない？」

「私年下の子は」

正直好きにはなれません。やっぱり年上のしっかりした格好いい人が。そうそう、仮面ライダー龍騎に出ていらした時の黒田アーサーさんなんか好きでした。

「頼りないし弟みたいだし」

「母性本能をくすぐるかも知れないじゃない」

「それはないです」

はつきり否定できました。

「お姉さんでも妹ばかりですよ。それでどうして弟なんて」

「嫌なのね」

「欲しいのはお兄さんです」

誤解招く言葉かも知れませんが。こう言いました。

「他はいらないです」

「あらあら、どうにも厳しいのね」

「別に私を好きでいてくれるんならそれが一番ですけれど」

不思議と昔からいざって時になると顔はいいって感じです。大切なのは性格なんだってというのは子供の頃からお父さんとお母さんに言われています。ですから確かに好みのタイプはありますけれど私を好きでいてくれたら誰でもいいです。……。ただ、今まで告白とかしてくれる人はいなかったですけれど。

「そこもちつちらしいわね」

「そうなんですか」

「私なんてあれよ」

先輩はまた少し寂しい顔になりました。

「そんなのわからなかったから」

「わからなかったから」

「まあ。ここで言ったら駄目よね」

けれど途中でお話を止められました。

「ここではね。参拝するところだし」

「そうでした、参拝ですよね」

「ええ。まずは食べる前に」

「参拝を済ませてから」

「行きましよう。それでいいわね」

「はい、宜しく御願います」

こうして座りづとめをしてから駅前に行きました。そうして二人でソフトとドーナツを食べました。けれど何か色々先輩と二人でそれからもお話しました。

先輩は凄くいい人です。それでもそのいい人になるまでに何か色々あったようです。辛かったことや後悔したことも。それを聞くつもりはありませんけれど先輩も凄く色々なものを持っていることに気付かされました。人は一日ではその人にはならないのですね。

第八話

完

2007・11・17

第九話 座りづとめその一

座りづとめ

天理高校では毎朝神殿に集まります。そこで出席も一緒にとりま
す。

まずは朝御飯を食べ終えてそれから寮を出ます。朝はお掃除とか
もあつて寮を出る時にはもう完全に目が冴えています。

「この前ね」

「どうしたの？」

同じ学年の娘に声をかけられてそれに顔を向けます。歯磨きとお
顔を洗つて少しお化粧をしながら話をします。

「このアイシャドーあるじゃない」

「ええ」

見れば黒いアイシャドーです。何か少しだけ目立つ位の。

「これ、クラスの男の子に言われたのよ」

「何て？」

「疲れてるの？つて」

そこまで言つて口を尖らせてきました。

「何それって感じじゃない？」

そうして不平を私にぶちまけてきました。

「アイシャドーよこれ。それで疲れてるつて」

「何かそれって鈍感ね」

私はその話を聞いてそう答えました。

「朝の短い時間で頑張つてお化粧してるのにね」

「そうよ、その点男は気楽でいいわよね」

その娘はさらに口を尖らせて不平を言います。

「何もしなくてもいいんだし」

「女の子より手間がかからないのは確かよね」

「そうよね。女の子って何から何まで」

手間がかかるしあれこれとしないといけないし。本当に大変です。
「下着だつて気を使わないといけないし」

「そうそう」

「この前ね」

ここで話が変わりました。私はファンデーションを塗っていてその娘はアイシャドーです。随分と丹念にアイシャドーをしています。
「お手ふりの時間あつただけけれど」

「何かあつたの？」

天理高校は天理教の学校ですから天理教の教義の時間があります。それを専門に教えておられる先生もおられます。その教義の中には天理教の踊りのものもあります。これがお手ふりです。座りづとめといつて座つてするものと立つてするものの二つがおおまかにあります。立つてするものにはよろづよ八首と十二下りの二つの系統があります。覚えるのは人によっては中々大変だったりします。

「その時何か男の目がおかしかったのよ」

「ふんふん」

「それがどうしてかつて思つたら」

話しているうちにその顔がどんどん曇つていっています。

「見られていたのよ」

「見られていた？」

「そうなのよ。足広げていて」

ああ、何かそれを聞いてすぐに何かあつたのわかりました。もうそこまで言われれば。

「それで」

「見られていたのね」

「そうなのよ。その日は白だつたけれど」

「丸見えだったのね。向こうから」

「そういうこと」

なのでした。お手ふりの時間は男の子と女の子が別れますからついつい自分達が踊っていない時はおしゃべりをしていて油断して。

そうなっちゃうんです。

「何か向こうがやけに私見てるなあって思ったら」

「うわ、それは間違いないわね」

よくあることですが。やっちゃうんです。

「見られてるわよ、確実に」

「そうなのよねえ。しかも」

「しかも？」

「その時三角座りだったのよ。それってやっぱり」

「見られてるわねえ」

その姿勢をすることが多くて、女の子同士だと。だからそれで。

「失敗したわ」

「気をつけてね。向こうはそれを期待してるんだし」

「ええ。見られたことは仕方ないけれど」

その娘もそれは諦めていました。見られたのはもう戻らないです。

第九話 座りづとめその二

「これから気をつけるわ」

「そうして。あとね」

「ええ」

ここで話は私のことになりました。

「この口紅どうかしら」

「いいんじゃないの？」

私の口紅にこう答えてくれました。

「似合ってるわ。その赤」

「唇が気になるのよ」

私は一番気にするのはそこです。アイシャドーはこれといってですけれど。

「昔から」

「ちつつちつて唇綺麗なのに？」

彼女は私の言葉に首を少し傾げて言ってきました。

「それで？」

「綺麗かしら」

実は私にはその自覚はないです。ただ気になるだけで。

「元々色もいいし。そんなに気にすることないと思うわよ」

「だといいけれど」

「それよりもちつつちは」

ここで話を変えてきました。

「背ね」

「それは言わないでよ」

またこれを言われてムツとします。

「一番気にしてるんだから」

「努力もしてるのにね」

毎日豆乳を飲んでもそれは彼女だけでなくクラスの皆知って

ます。寮の皆も。

「伸びないわね」

「だから悩んでるのよ」

これは本当のことです。否定できません。

「どうしたものかって」

「無理じゃない？」

素っ気無く行為割れました。

「背が伸びるのは」

「何よ、それ」

言われると。これだけはどうしても否定したくなります。実際にそれを否定しました。

「背が伸びないっていうの？私が」

「ええ」

「また随分とはつきり言うわね」

あんまりにもはつきり言われたのでこっちもこれといって言い返す言葉がありませんでした。それに悪意もないのがわかっていましたから。

「けれどそうじゃない」

「伸びるわよ」

私は少し意固地になってこう言い返しました。

「絶対にね」

「伸びると思っているのね」

「当たり前じゃない」

また言います。

「努力してるんだし」

「それは認めるけれど無理だと思うわよ」

「遺伝だから？」

「ええ。だってちつちのお母さんの家系ってあれなんですよ？」

これは彼女にも話しています。その通りですけれど。

「じゃあやっぱ無理よ」

「無理ってそれは」

「諦めた方がいいわよ。それに小柄なのって全然悪いことじゃないし」

「当たり前じゃない」

それが悪かったら世の中大変なことになります。幾ら何でも小さいからって悪いということにされたらお話になりません。それを言ったら私のお母さんだって。

「それが理由になるわけないでしょ」

「そうよね。おまけに」

「おまけに？」

「芸能界でも案外小さい人多いじゃない」

これは本当ですけど。安達裕美さんとか千秋さんとか。正直に言いますと御二人共好きです。ベテランの方ですと浅香唯さんなんかも好きです。

「だからよ。そんなに気にすることは」

「そういうものかしら」

「それにおぢばは」

またこの話が出ました。

第九話 座りづとめその三

「というかおみちの女の人自体が小さい人多いしね」

「それはね。気付いてるわ」

言うまでもないことでした。もうわかっています。

「だから気にすることはないっていうのね」

「小学生に間違えられてもね」

「それは冗談じゃないわよ」

制服着ていないと本当にわからないらしくて。それで実際に何度も間違えられています。

「お母さんだって私と一緒にいた時にね」

「何て言われたの？」

「妹さんお連れしてるんですか？よ」

小さいからそう言われたんです。お母さんが若く見えるのもあつて。

「これってあんまりよね」

「そうかしら。お母さん若いのね」

「まあそれはね」

それは否定しません。

「けれどそれでもよ。皆から代々小さい小さいって言われてて」

「受け入れられないのね、それは」

「だから豆乳飲んでるんじゃない。あと牛乳も」

「努力は何時か何かの形で実を結ぶわよ」

「だといいいけれど」

本当にそうになったら。切実に願います。

「ところでお化粧終わったわよね」

「それはね」

もう終わりました。後は行くだけです。

「それじゃあ行きましょう」

「何か慣れてるけれど」

彼女は急に溜息をつきだしました。

「毎朝だからね」

「おつとめのこと？」

「ええ。正直嫌だなあつて思う時あるのよ」

困ったような苦笑いを浮かべて私に言います。

「毎回毎回つて」

「そうかしら」

別に私はそう思いませんけれど。

「ちっちは真面目だからね」

「真面目つていうか生まれてからずっとだったから」

私の家は教会なんで。けれどそれって彼女も同じなんですけれど。天理高校はやっぱり教会の息子さんや娘さんも多いです。そうした子供を教えるのも学校の目的の一つですから。

「私はそうは思わないけれど。それは」

「私もそうだけれどね」

彼女もそれを認めます。

「けれどねえ。何かかつたるい感じ」

「朝からそんなこと言わないで」

「そうよね」

私の言葉に頷きました。

「そういうことで。それじゃあ」

「行きましよう」

私は彼女を誘って寮を出ます。出る時に行つて来ますと挨拶をするのが決まりです。それを済ませてから向かうのは神殿です。一年生は西の礼拝堂のところに集まります。

そこに来てみるともうクラスの子達がかかり集まっています。そうしてあれこれと話をしています。

「昨日の仮面ライダー剣どうだったよ」

「ああ、橘さんがな」

ドラマというか特撮の話をしているのは自宅の子達です。寮生はテレビ観られないのでこうした話題にはかなり疎くなるのが悲しいです。小耳に挟みながらクラスメイトのところに行きます。

「おはよう」

「おはよう」

挨拶を交わして皆と話をします。下は小石なんで座れないので立つかしゃがみこんで話をします。しゃがみこむと何か格好が悪い感じなので私は立ったままですけれど。

「何か昨日あったのかしら」

「何が？」

話をしていると不意に中の一人が言い出しました。

「いや、自宅生の子が色々と騒がしいのよ」

「自宅生の子が？」

「何かあつたみたいよ」

そう私達に言います。

「誰かが結婚したとか離婚したとかじゃないかしら」

「誰なのよ」

「さあ。そこまでは」

わかるわけ 아닙니다。とにかくそうした世間のことは全然わからないのが寮生ですから。おかげでもう浦島太郎みたいな気分になりかけています。

第九話 座りづとめその四

「わからないけれどね」

「けれど何かあったのね」

「何なのかしらね」

そんな話をしていると。不意に自宅生の娘が一人こっちにやって来ました。何か待っていましたってタイミングでこちらとしては有り難いことでした。

「あつ、丁度いいわ」

中の一人が言いました。

「彼女に聞けばいいわね」

「そうね」

皆その言葉に頷きます。こうして彼女に何があったのか聞くことにしました。

「ねえねえ」

「自宅生の子達だけれど」

そう彼女に皆で声をかけます。

「何かあったの？」

「事件でもあったの？」

「事件って？」

けれどこの娘は事件と言われると目をキョトンとさせてきました。

「何、それ」

「何、それって」

「何か自宅生の子達が騒がしいから」

「何かあったのになって思ってた」

私達はそれぞれこう彼女に問い掛けました。やっぱり何かあったのか凄く気になるからです。一体何事なのか、というのが本音です。

「どうしたのよ」

「誰かが結婚したとか？」

「ああ、あれね」

彼女はここであろうやく何のことだか気付いたようでした。私達の言葉を聞いてしきりに頷きます。

「あれのことね」

「あれ？」

「じゃあやっぱり何かあるのね」

「これが別に大したことじゃないのよ」

けれど彼女はここでのこりと笑って私達にこう言ってきました。

「別にね」

「けれど何なのよ」

「気になるわよねえ」

「ねえ」

私達は顔を見合わせてこう言い合いました。

「それで教えてよ」

「何があつたのよ」

「ミスタードーナツの新メニューよ」

彼女はそのにこりとした笑みのまま私達に言ってきました。

「ミスタードーナツの！？」

「ええ、新しいドーナツね」

これはこれで、凄く興味をそえられるものでした。私達も女の子ですし甘いものには目がありません。ましてミスタードーナツなら駅前にもありますし。すぐに手が届きます。

「チョコレート味のだけねど」

「チョコレート味ですって」

「何か聞いただけで」

食欲が出ます。さっき朝御飯を食べたばかりなのにもうお腹が空いてきました。

「それが滅茶苦茶美味しいのよ」

「滅茶苦茶なのね」

「ええ。一度食べたら忘れられない位にね」

また私達に言います。

「確か駅前でも売っていたわよ」

「じゃあ決まりね」

「そうね」

それを聞いて何かをしない娘はいません。私達だってそうです。

「そのドーナツをね」

「買って食べると」

「それね」

それしかありませんでした。誰が、寮長先生が何と言っても。

「そうかあ、ドーナツだったんだ」

「何かと思ったら」

「事件だとも思っただの？」

自宅生の娘はそう私達に聞いてきました。

「ひよつとして」

「まあね」

「だって。こんな大騒ぎだし」

そうじゃなければ何だと思います。てっきり誰かが結婚したのか離婚したのかって思いました。けれどそれがドーナツだったということでした。

「そうかあ、ドーナツなのね」

「それにしてもさ」

「ここで私達は言います。」

「何か私達って結構ドーナツ食べてるよね」

「結構以上よ」

私なんてしょっちゅうです。何かまたドーナツ食べてるなって自分で思う時もあります。

「何であれなのよね」

「そうそう、他にはソフトクリームね」

商店街の。他にはたこ焼き今川焼きにいか焼きと。買い食いには困りません。

「あととは何と言っても」

「彩華ラーメン」

「あれ美味しいの？」

今度は自宅生の娘が尋ねてきました。目を少しパチクリとさせています。

「何か大蒜の匂いや味や凄いつて言われているけれど」

「それがいいのよ」

「一回食べてみればいいわ」

私達はそう彼女に勧めました。

「男の子なんかも多いし」

「食べたら病みつきになるかもよ」

「ふうん、そんなになのね」

あまりあのラーメンを知らない感じですが。それが私達にもわかります。

「じゃあ一度行ってみるわ」

「デートだと後があれだけれどね」

「大蒜の匂いがね」

「えっ、デートで!？」

それを聞いて声をあげたのは私です。思わず目をぎょつとさせました。

「デートで行くの？あそこに」

「ってちっちはいないからでしょ」

「普通に行くわよねえ」

「ねえ」

どうもそうらしいです。私の知らなかった衝撃の事実でした。デートであのラーメンを食べに行くなんて。

「そうだったんだ」

「ちっちは早く彼氏見つけなさい」

「きつといい人いるわよ」

「そうかしら」

そう言われても何かそうは思えません。私的には。

第九話 座りづとめその五

「何かあまり」

「顔いいんだし」

「小さいし可愛いし」

「小さいのは余計よ」

それを言われると弱いです。気にしていますから。

「それがいいんだけれど」

「小さいのが？」

「ええ」

むすつとした顔を作って言い返しました。

「気にしてるの、本当に」

「まあ確かに小さいけれど」

「あのね、だから」

「けれどそれがいいんじゃない」

そうしたらこう言われました。

「その小さいのがね」

「どういうことよ、それ」

「だから言っただまよ」

何か言葉の意味がわかりません。何それ、って感じです。

「そういう方が好きな男の子も多いのよ」

「そうなの？」

私にとっては信じられない話です。ずっと背の高いモデルさんとかに憧れていましたから。伊東美咲さんなんか凄く好きだったりします。

「人それぞれじゃない、そういうのって」

「うつん、そうかしら」

その言葉には腕を組んで考え込みました。

「私はそうは思えないけれど」

「思えないのね」

「そうよ、キャンノット」

冗談めかして英語を入れました。

「そういうふうになるかしら、本当に」

「信じる信じないは別だけれどそうよ」

また言われました。

「それはわかってよね」

「あまりわからないけれど」

すぐにこう答えました。

「そう言われても」

「それで彼氏がいないとか思っていないわよね」

「別にそれはないわ」

そんなことは特に思っていないません。というか彼氏が欲しいと積極的に思ってもいいです。その辺りは結構いい加減かも知れませんが

「だって。私別に今欲しいとかは」

「ちっちゃってそういうところ無欲よねえ」

「ねえ」

横から皆に言われました。

「ちよつとはそこも努力すればいいのに」

「したら？」

「そんなの私の勝手でしょ」

少しムツとした顔になって皆に言い返しました。

「別にそんなのは」

「そうだけれどね」

「けれどちっちゃに合う彼氏っていったら」

何か勝手に皆で話をします。私の意見は完全に無視して。

「年下!？」

「あつ、それいいかも」

そうしてこんな答えが出ました。

「ちっちゃには似合うわよね」

「ええ、しっかりしているし」

「だから何でそうなるのよ」

またむすつとした顔を作ってクレームを入れました。

「私は年下の子には興味ないのよ。それでどうしてそうなるのよ」

「だってねえ」

「似合うんだし」

「どうして似合うのかもわからないけれど」

それに今話していることがどうにも現実のものになりそう。幾ら何でも中学生と付き合うなんてできません。やっぱり少し年上の人が方が。……。けれどあれですよね。それでも弟みたいな子の側にいてあげて色々としてあげるのも悪くないかなあ、なんて思ったりも。

「だから、ちっちがお姉さんだからよ」

「性格的なもののなのよ」

「そうかしら。私ってどちらかというと」

お父さんやお母さんには甘えていますし妹達の面倒を見てはいますけれどそんなに五月蠅くはないです。甘えん坊で妹に近いかなと自分では思っています。

「妹だけれど」

「外見はね」

「けれど中身は」

「中身かしら」

「自分ではそういうのはわからないのよ」

「そうそう」

皆の顔が笑っていました。

第九話 座りづとめその六

「ちつちなんか特にそうだし」

「意外とねえ」

「意外とっていかかなりってやつ？」

「かなりって何なのよ」

皆私に凄く何か言いたいのわかります。けれどそれが何かまではやっぱりよくはわかりません。

「とにかくね、私は」

少しムキになって言い返しました。

「今は彼氏は別にあれだしそれに年下は」

「はいはい」

「わかったから」

「………本当はわかってないでしょ」

皆の言い方でそれがはつきりとわかります。

「全く。困るわ、そんなの」

「困るも何もねえ」

「これもやっぱり親神様のお引き寄せだしね」

「それで年下の子がちつちの彼氏になるならなっただ」

皆また笑いながら私に言ってきます。

「仕方ないんじゃない？」

「そういうこと」

「凄く不満なんだけれど。ずっと」

本当に。ここまで言われるのもかなり癪ですし。

「だからふそくは感じないの」

「いつも言われているじゃない」

「うう………」

「それにねえ」

また言われます。しかも今度は。

「ちつち幼く見えるしあれよ」

「あれって!？」

「その年下の子と同級生に見えるかもよ。下手したら向こうが年上なんてことも」

「そんなの冗談じゃないわよ」

本当に冗談ではありません。

「またそっちに話がいくんだから」

「気にしない気にしない」

「さて、それじゃあ」

ここで一人が腕時計をチラリと見ます。

「そろそろ時間ね」

「あつ、そうなんだ」

「もう」

本当にもうつ!？って感じです。朝は何かと慌しくて神殿の前に集まってこうして話をするだけですぐに時間が過ぎてしまっています。

「ほら、先生だって集まってるし」

「じゃあそろそろね」

「ええ」

こんな話をしているとすぐに集合の声がかかりました。それで一年生は一年生で皆で集まってそれから先生が出席を取ります。

それが終わると神殿にあがります。毎朝の座りづとめです。皆神殿の中で並んで正座してあしきをはるうて、ちよいとはなし、たすけせきこむの三つをします。ここで大事なのはあしきをはるうては二十一回、ちよいとはなしは一回。たすけせきこむは三回を三回して合計九回行うということです。ここが大事なんです。

私達一年生は西の礼拝場でそれをしますが入る時も大勢なんだから混雑します。そこで男の子に言われたことは。

「うわっ、何か急に」

「急に。何？」

「背が低くなつてない？」

何でいきなり朝からこんなことを言われるんでしょう。

「どうしたの、急に小さくなったように見えたよ」

「そんなわけないでしょ」

急に小さくなるなんて絶対にないです。何処かのネコ型ロボットの道具で小さくなったのならともかく。

「どうしてそう見えるのよ」

「いや、靴を脱いだらさ」

その男の子は私に言います。確かに靴の分だけ背が大きくなっていましたけれど。それでも別にシークレットシューズでもないです。し変わらない筈なんですけれど。

「すつごく小さくなつたなあつて」

「そんなことあるわけないじゃない」

その子に言い返します。

「靴は別に何もしていないわよ」

「靴は？」

「ええ、靴はね」

本当のことなんでそう答えました。

「だって。かえって歩きづらいし」

「歩きづらいねえ」

「ああした上げ底とかの靴って結構大変なのよ」

だから私は好きじゃないです。ちよつとつまづいたらそれで足をぐねったりして大変なことになるからです。だから私は靴は普通の靴にしています。

第九話 座りづとめその七

「だから履かないの」

「そうなんだ。それにしてもさ」

「何？」

「上げ底靴のことよく知ってるよね」

「……またやっちゃいました。自分から言わなくていいことまで言っちゃいました。」

「履いたことあるんだ」

「あるけれど。おかしい？」

「いや、別に」

その子はこのことには別に何も言いませんでした。

「僕はそうは思わないけれど」

「だったらそれでいいじゃない」

少し開き直って言葉を返しました。

「でしょ？ だったら」

「まあね。けれど」

「何よ」

女の子達との話から少しムツとしているのが今も言葉に出ています。

「中村さんってそんなに背が気になるんだ」

「そうよ。御願いづとめはしていないけれど」

御願いづとめとは親神様教祖に何かを御願いする為にするおつとめです。十二下りまでする場合もありますが普通は座りづとめで済ませます。

「かなり切実なのよ」

「気にし過ぎじゃないの？」

あっけらかんとした声で言われました。

「それって」

「自分じゃないとわからないのよ」

「こういうのって。そうですね。」

「わかる？それ」

「だってさ。この高校だけでもあれだよ」

礼拝堂の前で一礼して。それから中に入ります。中でも少し話が続きます。

「中村さんより小さい娘結構いるじゃない」

「その皆に追い抜かれそうなのよ」

これも本当のことです。縁起でもないです。

「わかる？伸びないのよ」

「それはまた」

「とにかく背のお話は終わり」

「何で？」

「私の席に来たからよ」

丁度私がいつも座る場所でした。ここまで来たら座るしかありません。

「じゃあ。話は後でね」

「教室で？」

「ええ、そこで御願い」

「わかったよ、それじゃあ」

「ええ」

こんな話のやり取りを最後にして自分の場所に座りました。そのまま正座です。座りづとめは足に問題がない限り正座するのが決まりです。

そのまま暫く待っていると合図があつて礼拝堂の中央に一礼します。そこにあるのはかんろだいと言います。親神様が世界をお創りになられた元の場所で陽気ぐらしが果たされたその時には上から甘露の水が降りてくると言われています。

そこに一礼してから頭を上げて座りづとめを行います。それが終わってまた一礼してそれから教祖殿と祖霊殿の方にも一礼して最後

にまたかんろだいに一礼して終わりです。こうして天理高校の一日がはじまります。長いようであつという間です。

座りづとめ

完

2007・11・29

第十話 登校その一

登校

座りづとめが終わるとやっと登校です。まずは神殿の前に皆で集まります。

「今日の授業だけれど」

「ああ、教義の時間があつたわよね」

天理教の教義の時間です。天理高校は天理教の学校なのでそうした授業もあります。これは天理教学園高校も同じです。確か天理中学校や小学校でもこれは同じです。

「はっぴ、持つてる？」

「鞆の中にあるわよ」

私はそう答えました。ておどりだとはっぴを着ないと駄目なのです。天理教の人は大抵はっぴを着ています。黒くて背中に天理教と書いています。それで衿のところに何処の所属かを書いてあります。おぢばでは皆着ています。私も実家が教会なのでいつも着ていましたし今もです。

「そうなの。私は確か」

「忘れたとか？」

「多分学校にあるわ」

ちよつと心配な返事でした。

「多分ね」

「なかつたらどうするの？」

「借りるわ」

皆忘れた時はそうします。忘れる人は忘れます。

「その時はね」

「そうなの」

「どうせ皆同じじゃない」

ここで出た言葉がまたその通りです。

「はっぴなんて。天理高校の」

「そうなのよね。男の子のも女の子のも」

これは天理高校のだけじゃなくてどこのはっぴも同じです。はっぴは誰もが同じものを着ます。それで天理教の人だっですぐにわかります。

「だったらいいじゃない。ただちっちは」

「何？」

「小学生用のにしたら？今のはっぴ大き過ぎるわよ」

「ほっというよ」

またこの話です。今日は特に言われる感じがです。

「大きくてもいいのよ。その分温かいし」

「そうなんだ」

「そうよ。それに大き過ぎるって程大きくないでしょ」

そう反論しました。

「だったらいいじゃない。そうでしょ」

「まあそうだけれどね」

彼女もそれに納得してくれました。

「それにしてもあれよね」

「今度は何？」

「ちっちつてはっぴ似合うわよね」

そう私に言ってきました。

「正直言つて。そうよね」

「そうかしら」

私にはそんな自覚はないです。それに自分がおしゃれだと思っただけでもないですし。

「似合ってるわよ。何か可愛らしくて」

「褒めても何も出ないわよ」

こつ言葉を返しました。

「悪いけれど」

「悪いのは承知よ。そうじゃなくてね」

「ええ」

「黒が似合っつてことよ。ほら、寮でも黒いジャージとかズボンじゃない」

実際に何となく黒は好きな色です。他には青とか白も好きですけれど。

「あれ似合ってるわよ、結構ね」

「そんなに？」

「ええ。何か黒は似合いそうにないんだけど」

これは前にも言われたような。確かお母さんに意外と黒が似合っつて言われたことがあったような気がします。はつきりとは覚えていないですけれど。

「それがね。どうしてだか」

「どうしてかしらね」

やっぱりこれも自分ではわかりません。何故でしょう。

「スタイルがいいから？」

「悪いけれど胸ないわよ」

これもコンプレックスになっています。特に高校に入ってから。

先輩はおるか同級生の娘なんて皆かなり胸があります。それなのに私は小さくて。長池先輩なんか綺麗なだけじゃなくて胸だつて凄いです。それで私はとても小さくて。それが気になって仕方ありません。

「そういう問題じゃないのよ」

「違うの？」

「そういうこと、スタイルは胸だけじゃないわ」

そうしてこう言われました。

第十話 登校その二

「他の部分だつてね」

「余計に自信がなくなるんだけれど」

他にも自信はありません。幼児体型だと自分では思っています。

「それ言われたら」

「脚奇麗じゃない」

「そうかしら」

それも自覚はありません。今はじめて言われました。

「それにお尻だつて」

「大きいって？」

「程よくね。ウエストだつて細いし」

「つまり胸だけないって言いたいのかね」

どうも悪いように悪いようにって考えいています、自分でもわかりません。

「バランス悪いじゃない、それだと」

「そうかしら。ちっちゃって全体のバランスがいいのよ」

「自分ではそう思わないけれど」

「それにね。胸だつて」

ここでその胸のことを言われます。

「大きいのがいいってわけじゃないのよ」

「そうなの」

「小さいのが好きだつて人も多いみたいよ」

「本当！？」

言われてもそれが本当だとは思えません。やっぱり女の子は胸だつて思うんで。雑誌とかだといつも言っていますよね。それでそうとは思えないんですけれど。

「そうよ。そこは人それぞれ」

「そうは思えないけれど」

「ちつちが知らないだけよ。そこは人それぞれ」
またそれぞれだって言われました。

「胸が小さいのが好きだって人見つければいいじゃない」

「自分で胸見せてどうって言うの？」

「それやったら変態だから」

それはすぐに否定されました。

「絶対に止めなさいね」

「しないわよ、そんなこと」

したら大変です。中学三年になってやよスポーツブラから離れられたって位なのに。今もとにかく胸が背と同じ位小さくて困ってるんですから。

「自然と向こうから寄って来るしね」

「それ言ったら虫みたいね」

「当たり前よ、女の子は花よ」

ここで何か面白いことを言われました。

「それで男の子は蜂なんだから」

「蜂なの」

「そうよ、だから気をつけろって言われたわ」

一体誰にでしょうか。彼女のそうしたことがやけに気になりました。

「お母さんにね」

「あんたのお母さんって何気に凄いこと言うわね」

「悪い男には気をつけろって昔から五月蠅いのよ」

「ふうん」

「うちのおじさん、今うちの上の教会の後継者なんだけれど」

彼女のお母さんは教会の奥さんです。実家の教会のすぐ下の教会に奥さんとして入ったんです。実家の教会はお母さんのお兄さん、彼女のおじさんが継いだらしいです。

「今は全然だけれど昔は凄い女好きだったらしいから。それを見ていてね」

「碌でなしだったのね」

「昔はね。今は真面目になったけれど」
何気に凄い話です。

「とんでもない人だったんだから」

「そんなに？」

「天理高校でも有名だったらしくて」

私達の先輩だったようで。それを聞くと何だかなあって思います。

「大学でも遊び人で。泣かした女の百や二百って」

「最悪ね、それって」

「他にもお酒にギャンブルにつて。凄かったらしいのよ」

「そんな人が教会継いで大丈夫なの？」

他の人のこととはいえ。これは流石に無視できませんでした。

「そんなので」

「今はなおったのよ」

だそうです。

「結婚してからね。普通になったらしいけれど」

「若気の至りってやつかしら、それって」

「どうもそうらしいわ」

それでも酷い話ですよ。話を聞く限り最低です。そうした遊び人や家族に暴力を振るうような人は大嫌いなんです。男の人は優しくない駄目ですよ、やっぱり。

「それにね」

「まだ何かあるの」

「結構恐妻家なのよ」

「奥さんが怖いの」

「そうなの、家に行ったらいつも奥さんの言いなりで」

あらま。そんな凄い人をそうさせる奥さんも凄いですけど。

「随分大人しいわよ。実質的に将来は奥さんが会長さんになるわね」

「そんなに凄いの」

「綺麗な人だけれどやり手ね」

彼女はこうも言います。

第十話 登校その三

「この人は普通の家の人だったんだけど」

「それがまたどうしておじさんと結婚したの？」

「お見合いしらわ」

天理教の教会の家ではこれも結構多いそうです。

「お見合いなの」

「そうなの。それで一緒になったそうだけれど」

それで奥さんに頭が上がらなくなっただって。何があっただんでしょう。

「今じゃ完全に大人しくなつて。お母さんも驚いているのよ」

「そうだったの」

「それ見てるとやっぱり思うのよ」

ここまで話してまた私に言ってきました。

「おみちつてあれよね」

「うん」

「女の人が凄く大事よね」

「それはね。当たり前って言えば当たり前だけれど」

「ええ」

だって教祖が女の方なんですから。言うなら教祖は私達のお母さんに当たります。そうした方なんです。

「それでも教会なんか男の人が会長でも」

「結構奥さんが大変よね」

「そうなのよ。私お兄ちゃんがいるし弟もいるけれど」

「男兄弟なのね」

「私だけ女だね。それで教会継ぐことはないでしょうけれど」

女の子でも教会を継ぐことがあります。基本的には男の子が継ぐのですけれど天理教では女の子でもそうして教会長になったりします。

「やっぱりおみちの人と一緒にになったら」

「話が随分早くない？」

それを聞いて思いました。

「それって」

「けれどもうそろそろ結婚できる歳だし」

「けれどね」

もうすぐ十六歳ですけど。それでも高校生ですからそれは想像出来ません。

「やっぱりね。その可能性って高いじゃない」

「まあね。私だって」

ここで自分のことを考えます。

「教会継がないといけないし」

「それで天理高校に入っただんでしょ？」

「ええ、そうだけれど」

その為におぢばの学校に入りました。将来の為に。

「だったらちつちも。やっぱり」

「それはわからないわよ」

困った顔をして答えました。

「そりゃ結婚したら旦那様はおみちの人になってもらうしかないけれど」

「だったら最初からそうした人だと余計にいいじゃない」

「それとこれとは違うわよ」

それはそうじゃないんじゃないかな、と思ひまして。それでこう言葉を返しました。

「恋愛結婚したいのよ、私」

「あら、ロマンチストなのね」

「そうじゃなくて」

もっと困った顔になったのが自分でもわかります。何かまた話が私にとってドツボになっていつてるような。どうしてもこうした話だとそうなってしまう気がします。

「やっぱりそうした感情がないと上手くいかないものでしょ、夫婦って」

「ずっとないかね」

「だからよ。特に最初が大切だから」

これは子供の頃からお父さんとお母さんに言われてきました。立ち上がりの悪い人もいるけれど最初が肝心だって。だから私は最初に一番頑張ることにしています。

「結婚とか夫婦だってそうじゃないかしら」

「かもね。何かちつちらしい話ね」

「私らしいかしら」

「ええ、真面目だから」

私は真面目な女の子で通っています。自覚はまあ一応はあります。そうした考え持つてるんなら大丈夫だと思うわよ」

「だといいいけれど」

「ちつちだといいい奥さんになれそうだしね」

「そうかしら」

「特に旦那さんが年下とかそうした頼りないタイプとかだったら」

「またそれ!？」

その話になるとまたかと思いました。だから私は年下の子には興味ないのに。

「似合うからね」

「似合わないわよ、どうしてそうなるのよ」

溜息混じりに反論しました。もう学校に向かって歩いていて黒門を越えたところです。

「年下年下って。しかも皆で」

「何なら天理中学校の男の子に声かけてみたら?」

「それやったら一発で問題じゃないっ」

冗談じゃありません、誰がそんなこと。

第十話 登校その四

「絶対にしないわよ、彼氏だって特に募集していないし」

「誰か立候補してきたらどうするの？それじゃあ」

「その時はね」

私だって相手が名乗り出て来たら。それが誰でもやっぱり悪い気はしませんしやっぱり。かなりいい気持ちでその立候補を受けちゃうかも知れないです。知らない、ですけどね。

「私も。それは」

「それが年下だったら？」

「何が何でもそのシチュエーションにこだわるのね」

しかも皆。いい加減聞き飽きてきました。

「お姉さんだからいいじゃない」

「そういう問題じゃないでしょ」

それと好みはまた別です。

「私だって好みっていうのがあるんだから」

「怒ったの？」

「りっぷくよ」

おみちの言葉で返しました。

「全く。朝から皆随分と言うわね」

「ちっちゃって言い易いのよ」

「言い易いつて？」

「別にからかい易いとかそういうのじゃないから安心してね」

「からかわれてる気もするけれど」

「それとはまた違うから」

だといいですけど。そんな気がしてなりません。

「安心してね」

「わかったわ。それにしてもね」

「ええ」

私の言葉に応えてくれます。

「何かしら」

「どうして私が言い易いのよ」

次に聞くのはそこです。気にならない筈がありません。

「全然そうは思えないけれど」

「雰囲気よ」

「雰囲気!？」

「そうなの。ちっちゃって優しいし」

「それで？」

「ええ。後は」

もつと話しました。

「人の話は何でも聞いてくれるじゃない」

「それでなのね」

「そういうこと。だから皆あれこれからかったりするけれど」

「やっぱりからかってるじゃない」

「だから人の話は最後まで聞いてよね」

今度は私が言われます。何かあべこべになっちゃっています。

「それでも相談持ちかけられたりすることも多いわよね」

「そうね」

これは自分でもわかります。私に話を持って来る人って中学校の時から多いです。今でも結構あります。寮生活って色々ありますから。それで相談を持ちかける娘が多いんです。私も私で長池先輩に色々話を聞いてもらったりしていますけれど。これは皆同じだと思います。

「とにかく話し易くて。それでね」

「それでなのね」

「悪いことじゃないじゃない」

必死な感じでこう言ってきました。

「それも。でしょ？」

「まあそうだけれど」

一応はその言葉に納得します。確かに悪いことじゃありません。
「けれどね」

「何？」

「からかわれるのは好きにはなれないわよ」
「少しりつぶくした顔で彼女に言いました」

「私だってね。それはね」

「わかってるけれどね」

「わかってやっていたようです、それも皆」

「それでも言い易くて」

「それは止めて欲しいわよ」

「まあまあ」

「ここで私を宥めてきます」

「別に嫌ってるわけじゃないからいいじゃない」

「嫌われてはいないのね」

「当たり前でしょ。私だって色々と助けてもらってるし」

「そうかしら」

「自分では自覚はありません」

「そんなつもりないわよ、私には」

「そうねえ、ちっちゃって」

「ここで何か言いたそうでした」

「周りのことはすぐに気がつくけれど自分には」

「自分には？」

「あつ、何でもないわ」

「そこから先は言おうとはしませんでした」

「気にしないでいいから」

「何か無理な話だけれど」

「だから気にしない気にしない」

「そんな話をしている間に何時の間にか学校の前です。四角い校舎に瓦の屋根。思えば随分と変わった形の学校だと思います」

「気にしたら負けよ」

「負けよって」
話を続けながら門の中に入ります。皆も同じです。

第十話 登校その五

「そういう問題じゃないんじゃないの？」

「何か今日結構機嫌悪い？」

「悪くしたの誰よ」

また彼女に言い返します。

「参拝前からあれこれって。言われていたら誰だってね」

「はらだちは駄目じゃない」

「わかってるわよ」

おみちの言葉を聞くとどうしても黙ってしまいます。そこが辛いところです。

「わかってているけれどね」

「どうしてもってことかしら」

「そうよ、いつもいつも」

学校の中は外に比べて少し暗いです。前にもお話しましたけれど下駄箱はなくてそのまま靴で入ります。だからお掃除の時は砂や土が目立ちます。

「これもさっき言っただけどね」

「じゃあ今日はこれまでにしておくから」

「ずっとにしてよね」

また怒った調子で言い返します。

「冗談じゃないから」

「わかったわよ。ところでちっち」

「今度は何なの？」

言葉の調子が変わってきていました。それで私も落ち着いて尋ねます。

「今度の教義の授業だけれどね」

「ええ」

彼女の言葉に応えます。

「何下り目だったかしら」

「ええと、確か」

それを言われて自分の中で記憶を辿ります。

「三下り目だったかしら」

「じゃあ扇必要よね」

「そうね」

ておどりに扇を使う場所もあります。この三下り目と四下り目、あと最後の十二下り目なんかです。はっぴで練習する時は帯に挟んで、月次祭の時は着物の中に入れていきます。それを出して使います。扇はおぢばのお店で売っています。教会にもあります。

「じゃあそれも借りないと」

「持つて来ていないの？」

「教室に置いてたらいいけれど」

また首を捻って言ってきました。

「どうかしら」

「あまり教室に置いておくのよくないわよ」

ちよつと先生みたいなことを言ってしまった。

「二部の人だつて教室使うんだし」

「わかつてるけれどね」

天理高校は一部と二部があります。一部はお昼で二部は夜間です。どちらも天理高校生なんですけれど二部の人には夜間ですからお昼はお仕事があります。おぢばの中で色々なお仕事をされています。天理高校は一つじゃなかったりするんです。

「それでもついつい」

「ずばらつていうの、それって」

「そう言うのならそう言つていいけれど」

何か開き直ってきました。

「ものぐさなのは本当だし」

「東寮つてそういうの厳しい筈よね」

何でも私が今いる東寮は軍隊より凄いです。実際に毎朝起き

るのは早いですし色々決まりごと一杯あります。少なくともお家にいるのは全然違います。学校にいる時にやっと一息つけるって位物凄い一面があったりします。話には色々聞いていましたけれど。

「それでどうして」

「気を抜くところで抜かないと」

「それが学校ってこと？」

「他に何処があるのよ」

逆にこう言われました。

「それにちつちだって大丈夫なの？」

「私？何で？」

「だってちつちの部屋の三年生の人って」

彼女の顔が怪訝なものになってきました。そうして言うのは。

第十話 登校その六

「長池先輩よね」

「ええ、そうだけれど」

「あの人凄く怖いじゃない」

その怪訝な顔で言うのでした。

「一年の時だって同級生の人と凄くやり合ったそうだし今だってきついし」

「怖い？きつい？」

私には夢みたいな話でした。全然そんなことは考えられません。

「そうかしら」

「そうよ」

ここで私達は教室に入ります。そうして彼女の席で話を続けます。彼女の席はロッカーの側です。そこではつぴとかをゴソゴソと探しながら話を続けます。

「厳しいし怒った顔凄く怖いし」

「優しい人だけれど」

少なくとも私はそう思います。一緒の部屋ですからよくわかるつもりです。

「そんなことないわよ」

「本当！？」

「嘘言って何になるのよ」

私はこうも言いました。

「何にもならないじゃない」

「それはそうだけれど」

「ただでさえ東寮って厳しいけれど」

これは本当のことです。幹事の先生達も決まりも先輩達もかなり厳しいってことは聞いていましたけれどその通りです。それはもう軍隊みたいだって言われる程です。

朝は早くからお掃除で先輩達のスリッパを揃えたりとか朝御飯の時間は殆どなかったりとかそんなのは当たり前で。お菓子の食べ方も厳しい人だっています。

それでも長池先輩は全然厳しくないです。穏やかな人ですしそのことはとても有り難く思っている程です。いつも親切にしてもらっていますし。

「長池先輩はそうじゃないわよ」

「本当に!？」

「私一緒の部屋にいるのよ」

これが根拠になります。

「その私が言うんだから問題ないじゃない」

「まあそうだけれどね」

「少なくとも長池先輩は違うわよ」

それをまた彼女に言います。

「穏やかな人よ。とても綺麗だし」

「確かにそれはね」

彼女も綺麗って言葉には素直に頷いてきました。

「凄い綺麗よね。色白で目がキラキラしてて」

「髪の毛だつてね」

先輩は髪の毛もいいんです。

「薄い茶色でふわふわした感じでね」

「結構三年の人って綺麗な人多いわよね」

「高井さんもそうだしね」

「あの人なんか凄いじゃない」

彼女はまだロッカーを探しながら私に促してきます。天理高校のロッカーはかなり変わっていて和風で全部同じ段になっています。そこが普通の学校とは違います。

「最初見た時びっくりしたわよ。女優さんみたいって」

「目が大きくてね。はっきりしていて」

「そうよね。他にも綺麗な人って」

「先輩達の間にはかなりいるわよ」

おぢば全体で結構以上に美人の人は多いです。まあ小柄な割合がその中でかなりありますけれど。私はその中でかなりのものだって言われています。

「いいわよねえ。羨ましいわ」

「ええ。それはね」

私も同じ意見です。羨ましいってものじゃありません。

「ところで見つかったの？」

「ええ、あつたわ」

いい答えが返ってきました。

「ロッカーの中に。扇も」

「よかったじゃない」

それを聞いて私もほっとしました。

「なかつたらどうしようかって思っていたわよ」

「どうしようかって借りればいいじゃない」

これを言ったらこう返されました。

「それだけじゃない、結局のところは」

「あまりそういうのって好きじゃないのよ」

私は左手で頬杖をついて少し眉を顰めさせました。

「貸し借りっていうのはね」

「お堅いわね、そういうところが」

「それでもよ」

私はまた言いました。

「後で面倒なことになり易いからね」

「考え過ぎよ、それは」

「そうかしら」

「そうそう、人生気楽に」

「また気楽過ぎるわよ、あんたは」

こう言い返しますすけれど反省してないのがわかります。全く全然反省しないんですから。東寮はとても厳しいところですけど

こつした娘もやっぱりいます。

何はともあれはっぴが見つかってよかったです。話がそっちに行きました。

第十話 登校その七

「そういえばこのはっぴだけれどさ」

「ええ」

「何着持つてるの、ちっちは」

「私？」

「ちっちの家も教会じゃない」

それではっぴはお家にも随分あります。私も小さな頃から着ています。アルバムとかにはっぴを着て笑っている子供の頃の私の写真もあります。

「だからかなり持つてるんじゃないの？」

「今は四着かしら」

少し首を傾げて答えました。

「学校に二着でしょ」

「意外と少くない？」

学校に二着と言ったらこう言われました。

「それって」

「そう？」

「だって外に出る時も寮の中でもいつも着るじゃない」

そういう決まりになっています。だから外に出ても何処の学校の子なのかすぐにわかるようになっていきます。これは所属の教会についてと同じです。

「それで二着って」

「じゃあもう一着か二着か持つておこうかしら」

「それがいいわよ。それで実家にもう二着あるのね」

「そういうこと。家じゃおつとめとかひのきしんの時以外は着ないわよ」

「それはね」

彼女もそれには納得した顔で頷いてきました。

「わかるわ」

「ええ。やっぱり普段は着ないわよね」

「ここはまた特別なのよ」

そう言いながら自分の席に戻ってきます。そうして話に言ってきます。

「はっぴがメインだからね」

「天理教だってそれでわかるしね」

「けれどこれっておぢばとか教会だけなのよね」

彼女は少し困ったような顔でこう話すのでした。

「そこから離れたらもう」

「全然見ないわよね、ローカルって言えばローカルかしら」

「ローカルっていうかね」

首を傾げさせてまた言ってきます。

「独特よね。天理教独特」

「知らない人がおぢばに来て最初に驚くのそれらしいわよ」

真っ黒なはっぴを着た人が一杯いるんで驚くそうです。ここは一体何なんだと。これは教会も同じで私も子供の頃にそれを友達に言われたことがあります。

「私はそうは思わないけれど」

「それはやっぱり教会の子供だからよね」

「ええ、そうね」

これはわかります。

「結局のところ。だからおみちのことも」

「最初から頭に入ってるわよね」

「少しだけけれど」

「少しでも最初からないのとは全然違うわよ」

こう答えたらこう言われました。

「天理教のこと何も知らないで入る子だって多いんだし」

「自宅の子とかそうよね」

「自宅生っていつでも何か派閥っていうかそういう分かれるものは

あるわよね」

彼女はふとした感じで話してきました。天理高校の生徒は大きく分けて自宅生と寮生っていう二つの系統があります。けれど自宅生の中でもさらに二つある感じなのです。

「天理中学からの子と」

「高校から入った子よね」

「その二つも全然雰囲気違うわよね」

「ええ、そうよね」

私はその言葉に頷きます。

「天理中学からの子もおみちのことは知ってるけれど」

「そうじゃない子は知らない子が多いわね」

「そういう違いってあるわよね、やっぱり」

「けれどあれ？」

ここで私はふとした感じで言いました。

「教義のテストじゃやっぱり」

「そうなのよ、何も知らないから必死に勉強するから」

ここが肝心です。努力ですね。

「成績は自宅生の子の何も知らない子の方がよかったりするのよね」

「そうなのよね」

「ちっちはそれでも教義の点数いいじゃない」

「そうかしら」

自分ではその自覚はあまりありません。何でこんなことわからなかったんだろっ、ってテストの後で後悔することもあります。ちなみに東寮での勉強はその態度についてもかなり厳しいです。入る前はシャーペンシルの音でさえ注意されるって聞いていました。けれど長池先輩はそれについては何も言わない人で助かっています。

「だからそれはいいじゃない」

「自分では不満があるのだけれど」

「それでもよ。成績いいのってやっぱり」

悪いことではないの言うまでもありません。それに私は天理高

校から天理大学に進むように言われているので推薦もらえるだけの成績がないといけないのでそれなりに頑張らないといけないのです。それは私が一番よくわかっていゐるつもりですけれど。

第十話 登校その八

「悪いことじゃないわよ」

「そうよね」

「それでさ、次の英語のグラマーだけれど」
「どうしたの？」

話は今度は英語に向かいました。

「わからないところあるのよね」

「何処なの？」

「ええとね」

鞆の中から教科書を出してきました。そうしてそのページを開いて。

「ここの単語。どういう意味かしら」

「ああ、そこはね」

そのページを見て答えます。

「こういう意味になるのよ」

「そうだったんだ」

「そうなの。私も最初全然わからなかったのよ」

天理高校は英語には五月蠅いです、あと国語。大学は語学がかなり充実しています。世界に布教するのがその目的だからです。

「どうやって訳すのかね」

「そうよね。全然意味が通らないっていうか」

彼女も困った顔で言います。

「ここだけでもわからなかったのよ」

「そこだけ？」

「ええ、そこだけ」

それを聞いて少し驚きました。私はこの章は全然わからなかったからです。それでここだけなんて。正直凄いいことだと思いました。
「わからなかったただけけれど」

「そうだったの」

「何か驚いてるの？」

「え、ええ」

その問いに答えます。

「そうよ。私全然わからなかったし」

「全部！？」

「全部じゃないけれどかなり」

彼女にもそれを言います。

「わからなかったわよ」

「そうだったの。ちつつて英語の点数もいいのに」

「それでもよ」

私はここでも彼女に答えました。

「ここかなり難しいから」

「そう？私はその一つの部分だけだったけれど」

彼女は首を傾げて言ってきました。

「他は全然普通にいけたわ」

「そうだったの」

「ちつつが難しく考え過ぎなんじゃないかしら」

それで今度はこう言われました。

「ただ単に」

「そうかしら」

「そうよ。真面目なのもいいけれどね」

くすりと笑つての言葉です。

「たまには簡単に考えるのもいいわよ。そうすれば答えが出るから」

「簡単になのね」

「そう、力を抜いて」

いつも固く考え過ぎだつて言われますけれど。先輩達にも。

「柔らかく考えていけばいいのよ」

「努力しているつもりだけれど」

「まだまだ」

そうらしいです。

「全然よ。そんなのだから彼氏もできないのよ」

「だから何でそっちに話がいくのよ」

私は彼女に抗議しました。

「全然違うじゃない」

「そういうのが駄目なのよ」

「駄目って？」

「すぐにあれが違うこれが違うって言い出すでしょ、ちっちは」

何かそれが駄目らしいです、私の場合は。

「そうじゃなくてね、穏やかに受け止めたり」

「するのがいいっていうの？」

「そういうこと。わかったかしら」

「ううん」

その言葉には首を捻ります。

「そうなのね」

「そういうこと。じゃあそろそろよ」

「んっ!？」

その言葉を聞いて腕時計を見ると。先生が来る時間でした。

「授業は真面目に聞いているのはいいことよ」

「有り難う」

「私は寝ちやうこと多いけれどね」

「私もだけれどね」

実際のところ東寮の生活ってとてもきつくて厳しいんです。ですから学校や部活だとかかなり息を抜いちゃったりします。それでついうとうとってしちゃうんです。

「実は」

「けれどできるだけ寝ないで」

「頑張ろうね」

そう言い合って授業に入ります。いつもこんな毎日です。

第十話

完

2007・12・11

第十一話 おてふりその一

おてふり

登校する時としてから少しあれこれクラスメイトと話したおてふりですが。これはそれ専用の教室ではつぴを着てやります。ですから学校でもはつぴを着ている子はちらほらといます。

授業自体はかなり差の出るものです。知っている子はかなり知っていますがそうでない子は全然なので。特に自宅生で高校から入っている子はかなり戸惑っていたりします。

「ここがこうなるの？」

「そう、それでね」

授業の前の休み時間に聞いてくる娘がいたので教えてあげます。

この娘はその高校から入った娘です。

「ここをこうするのよ」

「何か全然わからないわ」

「最初はね。困る人多いのよ」

困惑した顔になるその娘に言います。ちなみにおてふり教室は畳です。ですから皆靴を脱いで休む時は座って休みます。そうした教室です。

「慣れていないから」

「そうなんだ」

「慣れるしかないのよね、実際のところ」

私はこうも彼女に言いました。

「数やってね」

「何か大変そう」

「大変なのは大変ね」

これははつきりと言っしかありませんでした。

「十二下りまであるしね」

「そんなにあるの」

「ええ、そうなのよ」

どうやらそれも知らないみたいです。私みたいに教会ですつと育つてきている娘には常識なことも他の娘にはそうでないんです。これは子供の頃からわかつていたことですからここではそれを特に実感します。

「だから数やつて覚えるしかないのよ」

「大変そう」

「まあ人に合わせて踊ってもいいし」

これ重要です。ておどりは皆でします。男三人女三人です。合わせて踊るのが大事なんです。早過ぎても遅過ぎても駄目なんです。

「その辺りは見ながらでもいいわ」

「見ながらでないとできないわよ」

「それでいいのよ」

こう言つてあげました。

「それこそが大事なんだから。いいわね」

「何となくわかったようなわからないような」

「そういうものよ」

彼女にまた言いました。

「ておどりつて。一度にはわからないのよ」

「やっぱり数やるしかないのね」

「そういうこと。私だって子供の頃からやっていたから」

「子供の頃から？あつ、そうか」

彼女はそれを言われて気付いたようでした。

「教会の娘さんだったわよね」

「そうなのよ」

「何かそれって凄い特別な感じね」

彼女は私に言いました。

「教会の娘さんって」

「そうかしら」

私には実感がないんで。そう言われてもよくわかりません。

「私家が魚屋でしょ。そういうのないから」

「ふうん」

「お魚持ってておどりってないじゃない」

「それはちよつとね」

想像がつかないです。天理教ではよく出て来るのは農作業や大工仕事にちなんだ言葉です。これは元々教祖が農家の奥さんだったのと本席様の伊降飯蔵先生が大工さんだったからです。他にも理由はありますが大体これが元になっていると教えられました。

「考えられないわね」

「何か向こうじゃ扇持って変なことしてるけれど」

見ればそうです。男の子達が何かしています」

「我等夜叉一族百八人」

「全て夜叉姫様の下に対等な筈」

扇を左手に持って操りながら言っています。あれは確か。

「随分古い漫画の真似しているわね」

「知ってるの？」

「ええ、ちよつとだけれど」

お父さんの持っている漫画であつたので覚えているんです。

「昔の少年漫画よ。ほら、あのボクシングとか聖衣着て戦う漫画描いていた人の」

「ああ、あの人の」

「何であんな真似してるんだろ」

私はそれを見て首を傾げる他ありませんでした。

第十一話 おてふりその二

「わからないわね」

「テレビでやってるんじゃないの？」

私の疑問に対する彼女の返答はこうでした。

「最近深夜でも面白い番組多いらしいし」

「テレビねえ」

寮生活では全然縁のないものの一つです・

「最近全然観ていないんだけれど」

「やっぱり寮じゃそうなんだ」

彼女は私の言葉を聞いて言ってきました。

「全然自由とかないっていうし先輩も凄く怖いって聞いてるし」

「先輩はそうでもないわよ」

私はそれは否定しました。

「とても優しいわよ」

「本当!？」

「ええ、本当よ」

そう彼女に答えました。

「だからそんなに生活は苦しくないけれど」

「そうなの。ところでさ」

「何？」

ここで彼女の言葉が変わりました。

「さっきから視線が気になるんだけれど」

「視線って？」

「ちよつと」

ここで私の耳元に口を近付けてきました。

「男の子よ。見て」

「男の子って？」

「何かちらちらとこっち見ていない？」

「そう?」

私にはそうは思えません。気のせいとしか。

「気のせいじゃないかしら」

「だったらいいけれど」

「そうよ、気にしないでいいわよ」

私はこう答えました。見てみましたけれど別におかしなところはありません。彼女の考え過ぎじゃないのかしらって思いました。

「全然見ていないし」

「そうだったらいいんだけどね」

「ええ。こつちだって……って」

見たら何人かが。座っているのはいいんですけど。

「あの、ひよつとしたら」

「わかったでしょ」

また彼女に耳元で言われました。

「何が言いたいのか」

「そうね。じゃあやっぱり」

「見られてるわよ」

またこう言われました。

「それも確実にね」

「何とかしないと」

「今注意するしかないかしら」

彼女は怪訝な顔でまた私に言います。

「やっぱりこれって」

「注意するしかないわよね」

私もそれに頷きます。答えながら自分の座り方も見て気をつけます。

「下手したらもつとまずいことになるわよ」

「今、ギリギリよね」

その娘を見ながらの言葉でした。

「あの態勢だと」

「付け根までかしら」

私もその言葉に応えます。

「あれだと。けれどそれはそれで」

「危ないわよね」

「危ないっていうレベルじゃないんじゃない」

それもかえって。考えれば考える程危険なものがあります。

「やっぱり」

「じゃあ言うわね」

「ええ、御願いね」

彼女の言葉に頷きます。こうして彼女に教えると顔を真っ赤にして慌てて姿勢を正しました。流石に本人もまずいつて気付いたからです。

「これでいいわね」

「ええ。それにしても気をつけないと」

これは私自身にも言う言葉です。

「片膝立てていたらそれこそスカートがね」

「そうね。それにしても」

ふと疑問が。

「何でそんな格好するのかしら。向こう側にちゃんといるのに」

「そういううちだったって」

「私も？」

「座る時結構危ないわよ」

「えっ……」

これには絶句でした。本当にそうだったらまずいなんてものじゃありません。ひょっとしたらもう見られてるかも、なんて考えちゃいました。

第十一話 おてふりその三

「それって私も」

「きわどい場面あるから」

「よかった。じゃあ見られてないのね」

「とりあえずはね」

それを聞いてまずはほっとしました。

「けれど気をつけなさいよ。東寮の娘って」

「何かあるの？」

「かなり無防備になってるわよ」

かなりきつい言葉でした。その東寮にいる人間にとっては。

「そう……かしら」

「そうよ。見なさいよ」

ここでごつち側にいる女の子達を見回すように言ってきました。

「無防備な格好の娘って」

「そうね。確かに」

寮にいる娘ばかりです。そういえば向こう側の男の子達も北寮にいる子はどちらかというと無防備なように見えます。というか態度が砕けています。

「寮にいる娘が多いわね」

「何でかしら」

彼女はそれを言ってから首を傾げさせました。

「これって」

「さあ。それにしても私も気をつけないと」

自分でそれを痛感しました。危ないなんてものじゃありませんから。

「見られるわよね」

「そうよ。教室の中で座っているときもね」

「気をつけろってこと？」

「スカートなのよ」

それを言われました。

「ちゃんと纏めないとそれこそね」

「危ないのね」

「ええ。見られたくないわよね」

「見せたくて見せるものじゃないわよ」

冗談じゃありません。何で下着にしろ足にしろ見せるんでしょう。小学校の頃スカートめくりされて相手を追い掛け回したことはありますけれど。

「当たり前でしょ、そんなの」

「そういうこと。わかっているのならいいわ」

「ええ」

「じゃあ。気をつけてね」

「わかったわ。それにしても」

ここでふと疑問が。

「何で寮生の子って無防備になるのかしら」

「よし、皆集まってるな」

それについて考えだしたら先生が教室に入って来ました。

「それじゃあはじめようか」

「はい」

「御願います」

こうして授業がはじまりました。まずは親神様教祖祖霊様に拝礼してから授業に入ります。それからおどりに入りました。授業の間もやっぱり休憩の時にておどりの説明をまだ慣れていない娘にします。

「扇はね。こうして」

扇を広げて説明します。

「こう持つといいのよ」

「そう持つのね」

「そうなの。そう持って」

その娘に言います。

「こう使うの。いいかしら」

「難しいのね。持ち方も」

「これも慣れるのよ」

「やっぱりそれなの」

「そうなのよね。ておどりって」

何か言うことは同じでした。それしかありませんでした。

第十一話 おてふりその四

「数やるしかないから」

「家でもやるのか？」

「そうね。私はそうしてたつていうか」

「ここはまあ事情が私の家の関係なんですけれど。」

「教会つてやったらいいと思うわ」

「わかったわ。教会ね」

彼女は私の今の言葉を聞いて頷きました。

「それじゃあ教えてもらつて数やつてみるわ」

「それがいいと思うわ。最近じゃDVDまで出てるし」

「そんなのも出てるのよ」

「ええ、奥華の教会には何処にでもあるけれど」

これは大教会ごとによつて違うみたいです。置いてあるところと置いていないところがあります。私の家がありますのでそれで勉強されている信者さんもおられます。

「そのところはね。それぞれね」

「ふうん」

「お店でも売つてるわよ」

これも教えてあげました。おぢばの商店街には天理教の服や道具、本を扱っているお店もあります。DVDもその中で売られているのである。

「だから買おうと思つたら買えるし」

「買つてみようかしら、それじゃあ」

「また随分真面目ね」

これには私が驚きました。

「自分で買つてまでするなんて」

「授業だしね」

これは彼女の答えでした。

「やっぱり真面目にしないと駄目じゃない」

「それはそうだけれど」

「何かちつちに真面目って言われるとは思わなかったわ」

今度は微笑んで言われました。

「ちつちにね」

「私は別に」

「だってクラスで一番真面目だから」

何かこう言われることが多いのは本当です。寮でも言われます。

「そのちつちに言われるなんてね」

「嬉しいとか？」

「それもあるけれど意外っていうか」

話がわからなくなりました。

「そんな感じかしら」

「そうなの」

「あとさ」

ここでふと話が変わりました。

「何？」

「ちつち、やばいわよ」

「やばいつて？」

「スカートよ、スカート」

耳元で囁いてきました。

「そのままだと」

「そのままって」

「正座か何かしなさいよ」

急に焦ったような声で囁いてきました。

「こんなところで三角座りなんて駄目よ」

「あっ……」

言われて気付きました。私も無意識のうちに。

「そ、そうね」

「やっぱり無防備になってるじゃない」

そのうえでこう言われました。

「気をつけても気をつけ過ぎることはないっていうのに」

「そういうもののなのね」

「そうよ。相手は獣よ」

それは言い過ぎだと思えますけれどよく聞きます。確かに向こうはいつも狙っていますからそれは気をつけないといけませんよね。
「よく覚えておいてね、そこ」

「そうね。くれぐれも」

「ただでさえスカートなんだから」

スカートはこうした時間問題になるんですよね。そういえばおぢばにいとズボンの女の人が多いと言われますが修養科の人達がそうだからです。他にも色々といひのきしんや学校の娘とかの場合もありますけれど。私達も寮の中では殆どジャージですから。

「気をつけてよね」

「うん。そうするわ」

ここまで言われたところで不意に彼女は話を変えてきました。

「ところでね」

「ええ」

その彼女の話聞きます。

「下着は何なの？」

「何なのって？」

「だから。色よ」

何かそちらの方に興味津々みたいです。目でそれがわかります。

「今日の色は何よ。白？ピンク？」

「聞こえるじゃない、声大きいわよ」

男の子の方をチラリと見て言い返します。流石にこれは聞こえたらまずいどころじゃないです。

第十一話 おてふりその五

「それじゃあね」

声を小さくしてきました。それでも聞いてきますけれど。

「どの色なの。ライトブルー？それとも黒とか」

「黒ってね」

流石にそれはないです。顔が赤くなりました。

「そんなの持ってないわよ」

「あら、大人しいのね」

「あんた持つてるのね、それじゃあ」

「一応はね」

高校生で黒だなんて何て大胆な。最近ティーバックの娘もいるそうですけど。

「着けたことはないわよ。勝負用だから」

「わかったわ。私は黒は持っていないから」

「じゃあ何の色なのよ」

「・・・・・・白よ」

下着は白が好きなんでそれを一番多く持っています。他にはこの娘が挙げた黄色とかライトブルーとかベージュとか。東寮はそういうところにも厳しいのでそうそう派手な下着は持っていないんです。

「清楚なのね、それじゃあ」

「清楚かどうかわからないけれどそうよ」

こう彼女に答えました。

「悪いかしら」

「別に」

それは悪くないと言ってきました。

「ちucci白が似合うしいわよ」

「それって下着が？」

「決まってるじゃない」

今の会話の流れだとそれしかありませんでした。

「そっちよ。スタイルもいいし」

「胸ないわよ」

自覚しています。背と同じで凄くコンプレックス感じています。

「言っておくけれど」

「馬鹿ね、スタイルって胸だけじゃないわよ」

けれど逆にこう言い返されました。

「足とかお尻だって」

「お尻って」

「ちっちゃってお尻の形いいじゃない」

「そう？」

自分では全然自覚ないんですけれど。お尻の形なんて今まで全然意識したこともありませんでした。今はじめて言われたことです。

「ウエストだって締まってるし」

「それは有り難う」

「足だって綺麗じゃない」

「足見せるの好きじゃないのだけれどね」

これは本当です。ですから制服の時以外はズボンかロングスカートです。大抵それなんでお母さんは中森明菜さんみたいだって言います。お母さんは明菜さんのファンなんです。

「それでも綺麗じゃない。その胸だって」

「だから小さいんだけど」

「小さくても形はいいじゃない」

また言われました。

「だからいいのよ。ちっちゃのスタイルは」

「あまり納得できないけれど」

口ではこう言いましたけれど実際は全然納得できません。とてもそうは思えないからです。

「まあまあ。それでね」

「ええ」

話は続きます。

「最近同じ部屋の長池先輩とか高井先輩のスタイルに目がいつてるでしょ」

「だってあの人達」

高井先輩というのは三年の人で長池先輩といつも一緒におられる方です。色が白くて目が大きくてぱっちりとしていて唇がとても赤くて。長池先輩とはまた違ったタイプの凄い綺麗な人です。最初見た時はアイドルかしらと思った位で。岡山の方の教会の娘さんです。「スタイルだつていいし」

「そうよね。それも凄くね」

「長池先輩は太ってるからって言われるけれど」
「何処がよ」

彼女はそれはすぐに否定しました。

「あんなスタイルの人って。タレントさん位よ」

「そうよね。凄いスタイルよね」

「絶対に謙遜よ。水着なんか着たら多分凄いわよ」

「水着ね」

「そう、水着」

彼女は言います。

「それ着たら凄いと思うわよ」

「下着姿見たことある？長池先輩の」

「お風呂場でね」

こう答えが返ってきました。東寮にもお風呂があります。やつぱり一年生は長い間入るだけの時間はありませんがそれでも毎日入っています。

「見たことあるけれどあれ男の子が見たら」

「一撃よね」

「そうね、それで終わりだわ」

それだけ先輩のスタイルがいいんです。本当に羨ましい。

「顔もあんなに綺麗だし」

「そうなのよねえ。親神様から二物も三物も与えられているわよね」
「だから羨ましいのよ」

何か先輩の話だとどんどん出て来ます。

「おぢばって本当に綺麗な人多いけれどね」

「何故かわからないけれど先輩に多いのよね」

「特に三年にね」

「そうそう」

彼女は私の言葉に頷いてくれました。

「私達は全然なのに」

「けれどいつもこうらしいわよ」

「いつもって？」

私の言葉に顔を向けてきました。

「三年の人はいつも後輩から綺麗な人が多いって言われるんだって」

「そうなの」

「私も先輩から聞いたのよ」

こう彼女に教えます。

「いつもこう言われていくらしいわ。天理高校の伝統らしくて」

「そうだったの。何か面白いわね」

「どうしてかはわからないけれどね」

「女の子って十八になったら凄い綺麗になるって言うけれど」

「諺でもあったわよね」

「確かね」

娘十八番茶もではなでしたっけ。誰かがそんなことを言っていた
ような。

第十一話 おてふりその六

「そのせいかしら」

「だと思っけれどそれだけじゃないんじゃないの？」

彼女はまた私に言ってきました。

「おぢばにいたら奇麗になるとか？」

「そうかも」

何故かそれに納得できました。

「実際に奇麗な人多いしね」

「そうよね。おみち通っている人もね」

彼女はまた言いました。

「おばあさんでも奇麗な人多いじゃない」

「あつ、それわかるわ」

ここで彼女の言葉に頷くことができました。

「わかるって？」

「あれなのよ。うちの前大教会長さんのお姉さんだけね」

「奥華のね」

「そうなの。今はある教会の会長さんの奥さんんだけど」

「その人が奇麗とか？」

「そうなのよ」

それを彼女に言います。

「七十近いのにとても。優しい人だし」

「優しいからかしら」

彼女はここでまたふとした感じで言ってきました。

「やっぱり」

「優しさとかってやっぱり顔に出るのね」

「歳を重ねればそうらしいわよ」

今度は私が教えられます。

「性格が顔に出て来るんだって」

「ふうん」

「だからいい生き方をしている人はね」

「綺麗な顔になるのね」

「勿論例外もあるけれどね」

それはわかります。顔が怖くても優しい人はいますから。そりやあつちの系列の方々になると顔も怖いけれど性格も怖くなりますけれど。

「そうなるものよ」

「じゃあいい生き方をするといいのね」

「そういうこと。まあそれにはおてふりもいいと思うわ」

「そうね」

これはわかりました。それもよく。

「おてふりつてやっているとか何か落ち着くのよね」

「そうなのよね」

彼女も私の言葉に頷いてくれました。

「少しずつね。けれど確実にね」

「覚えるのが大変だって言われているけれどね」

それは私には実感がないんであれですが。どうしても家が教会なんで子供の頃からしていましたから。それでもそうじゃない人からよくこう言われます。

「そういうものよね」

「うんうん」

「けれどね」

「ここでまた私は言いました。

「つつい油断してね。姿勢が」

「それなのよ」

またそちらに話がいきました。

「注意しないとね」

「そういうこと」

何かおてふりもいいですけどそれがどうにも気になるのです。

それを寮に帰って長池先輩にお話すると先輩は笑ってこう言ってくれました。

「そうなのよね、だからおてふりの時間って」

「油断できないんですね」

「そういうこと。私もそうだったのよ」

「先輩ですか」

「皆大体そうよ」

先輩はこう私に言ってくれました。

「つつい気が抜けてね」

「なっちゃんですか」

「ほら、寮じゃあれでしょ」

ここでも寮の話が出ました。

「皆ラフになるから」

「女の子ばかりですからね」

「人間ってそうなっちゃうのよ」

こう言って笑う先輩でした。

「男の子だけでもそうみたいだし」

「そうなんですかね」

「向こう側見てみればわかるわ」

授業の時の向こう側というと男の子達です。こっちをチラチラと見てくる。

「かなり碎けているわよ」

「向こう側ですか」

「けれど向こうはズボンだからね」

それがかかなり大きいと思います。ズボンとスカートですとそれこそ天と地程の差があります。

「それが全然違うから」

「ですね。何かずるいですよ」

「仕方ないわよ、それは」

私のずるいって言葉にくすりと笑う先輩でした。

第十一話 おてふりその七

「女の子なんだから」

「女の子だからですか」

「ズボンの制服ってないでしょ？」

「今度はこう言われました」

「女の子で。あるかしら」

「それはやっぱり」

「ないです。流石に見たことも聞いたこともありません」

「ないわよね」

「はい」

先輩の言葉に答えます。

「だからよ。それにね」

「それに？」

「女の子は日様よ」

ここでおみちの言葉が出ました。

「日様ですか」

「ええ。だからスカートの方がいいのよ」

「！？」

今の言葉の意味はさっぱりわかりませんでした。ついつい首を傾げてしまいます。

「それはどうしてですか？」

「スカートの方が男の子が寄って来るのよ」

「そうなんですか」

「可愛いってね。月様が側にいないと日様も駄目でしょ」

「それはやっぱり」

二つ一緒にいてこそですから。日様だけじゃ寂しいしその働きもかなり制限されてしまいます。月様は日様の光を浴びて輝きますが日様も月様がないと駄目なんです。

「だからよ。月様が側にいてくれないと駄目だから」

「まずはその為にですか」

「そういうこと。悪い男はスルーね」

「ですね」

これはわかります。変な人が来たらやっぱり困ります。けれどスカートはくだけで荻野崇さんみたいな人が側に来てくれたら何でいいんだろうって思ったりします。

「けれどあれよ」

「あれですか？」

ここで先輩は言葉を急に变えてきました。

「側に来てくれた月様をそのまま留めておくのが難しいのよ」

「そうなんですか」

「スカートだけじゃ駄目よ」

先輩はスカートは最初だけって言いたいみたいです。

「やっぱり心のなのよ」

「心ですか」

「日様は温もりを与えてくれるでしょ」

「はい」

これはわかります。学校の授業でもおみちでもいつも言われることです。

「だからよ。性格が優しくて暖かくないと駄目なのよ」

「男の人と一緒にいる為にはですか」

「ええ、そうなのよ」

何故かここで先輩の顔が少し悲しいものになります。

「私もね。それで色々あったから」

「色々ですか」

「そうなのよ。それはまた機会があれば話すわ」

「わかりました」

「ただね」

そのうえで少しだけ話してくれました。

「女の子は優しくならないと駄目よ」

「優しくですか」

「それが一番大事だと思うわ」

その少し悲しい顔で私に話してくれます。

「それを忘れたら絶対に駄目なのよ」

「絶対、ですか」

「私もね。高校に入るまでそれがわからなかったのよ」

先輩の顔がさらに悲しげになります。見ている私の方がもっと悲しくなる程です。

「それでもね。色々とあつて」

「色々ですか」

「辛いことだつてあるわ」

先輩は言います。

「その中でもね。自分がしてしまったことが原因だと余計にね。辛いよ」

「そんなにですか」

「ええ、そうなの」

こう私に話してくれます。

「だから注意してね。優しさを忘れないで」

「はい」

何処かで聞いたことのある言葉ですがそれでも凄くいい言葉だと思います。やっぱり人って優しさを忘れたら駄目だと思います。けれど何か。

「それは先輩」

「何かしら」

妙に引っ掛かるものを感じたので先輩に問い掛けました。

「それは誰に対してもですよね」

「そうよ」

先輩はすぐに私に答えてくれました。

「誰でも。それはいいわね」

「誰でもですか」

「そりや最初見た時はとんでもないっていう人もいるわ」
これはわかります。

「それでもね。最初に見たり話したりして判断したら駄目よ」
「それだけではですか」

「それだけじゃ人間はわからないのよ」
何か凄く意味深い言葉になっていつているのがわかります。

「よく見ることも大事。そのうえで」
「誰にも優しく、ですか」

「ええ。それを絶対に忘れないで」
私に教え諭すように言ってくれます。

「何があってもね。私がちつちに言いたいのはそれよ」
「私に、ですか」

「ちつちなら大丈夫だと思うけれど」
やっとにこりと笑って私に言ってくれました。

「そこところは」
「私はそんな」

何か言われて恥ずかしくなってきました。
「別にそんな。偉い人でも何でもないですし」

「偉くなくてもいいのよ」
また先輩に言われました。

「人にとって大切なのは一つだから」
「それが優しさ、ですか」

「それよ、それを忘れないでね」
「はい」

先輩の言葉にこくりと頷きます。何かおてふりでも優しい人は綺麗なおてふりをするって言われています。それだけは忘れないでいたいと思うのでした。

第十一話

完

2007・12・23

第十二話 制服その一

制服

天理高校の制服はあまり派手ではありません。男の子は黒の詰襟で女の子は濃紺のブレザーとスカートです。首のところのリボンとベストが特徴です。

「そういえばこの前ね」

「何？」

制服の話をクリックスメイトしていると急にその娘が言ってきました。

「長い金髪でベストの男の人見たわ」

「外国の人？」

「そうみたい。手袋してね、かなり格好よかったわ」

「ふうん」

おぢばには外国の人もよく帰って来られます。白人の人だけではなくて黒人の方もおられます。一番多いのは多分韓国の方だと思います。奥華大教会もアメリカに教会があります。それで詰所には日系アメリカ人の方もおられます。

「何をしている人かしら」

「俳優さんじゃないでしょうね」

何となくそう思いました。

「多分だけれど」

「どうしてそう思えるの？」

「その人って背が高くなかった？」

「ええ」

私の今の問いに答えてきました。

「結構ね。それに眼光が鋭かったし」

「それで筋肉質よね」

「よくわかるわね」

彼女はまた私の言葉に頷いてきました。

「その通りだけれど。それがどうかしたの？」

「その人にあまり近付かない方がいいわよ」

私はそこまで聞いて彼女に忠告しました。

「どうして？」

「その人そっちの筋の人だから」

それを忠告しました。

「アメリカの方の。いいわね」

「そっちの筋の人なんだ」

「間違いないわ」

その外見を聞いてわかりました。かなり危ないです。

「その人はね」

「よくわかるわね、そんなこと」

「つていうか龍虎とか餓狼とか」

私はそれを彼女に言います。

「そんな格好じゃない。確実に危ないわ」

「そうなんだ」

「どうしておぢばに帰っているのかわからないけれど。周りに黒い服の男の人いたでしょ」

「ええ、二人よ」

「こうも言ってきます。話はどんどん怖い方向にいつています。」

「それもわかつているのね」

「そのうちその人ビルから落ちたりするけれど何度も蘇るから」

「しぶとい人なのね」

「不死身かも。それにしても」

私はその人のベストについて考えました。

「ベストってのはお洒落としてはポイント高いわね」

「そうよね」

彼女も私の言葉に頷いてくれました。

「やっぱりね。ベストって決まるのよね」

「衣替えの間にも着られるしね」

実はこれも結構高ポイントです。

「意外とこれ重要よね」

「そうそう」

「その間ってかなり寒いしね」

「そういうこと」

寒かったり暑かったりしますから。それでベストが大事になります。私も結構寒いのが苦手なんでいつも重宝しています。お洒落にもなるし。

「あと私好きなのは」

「何？」

「このリボンよ」

にこりと笑って彼女に言います。青い紐状のリボンです。私はこれが好きなんです。

「これ、よくない？」

「よくないっていうか可愛い？」

彼女もまた私の言葉に頷いてくれました。

「ワンポイントだね」

「そうよね。可愛く見えるような」

「スカートの丈が長くないと駄目だけれどね」

「別にそれは」

私はそれにはあまり賛成できませんでした。私にしてはあまり脚は見せたくないんで。よく皆から綺麗な脚をしてるって言ってもらいますけれど。

「あまりね」

「別にいいのね」

「スカートはロングでもいいわよ」

私ははつきり言いました。

「くるぶしまであつても別にね」

「それはかえって駄目でしょ」

何か私の言葉に突っ込んでくれました。

「大昔の不良じゃない、それって」

「二十年か三十年前の不良じゃないの、それ」

そういえば古本屋の漫画で見たことがありました。超長ランの不良とか。こんなの知ってる私もかなりのものだと思いますけれど。

「それは幾ら何でも」

「そうでしょ？だからそれは駄目よ」

こう彼女に言われました。

第十二話 制服その二

「かえってね。まあうちの女の子の制服って下がズボンだと」

「そう、絶対に似合わないわよね」

「試しにスカートじゃなくてズボン佩いてみたことある？」

流石にそれはないですけど。何かこう考えただけで駄目なのがわかります。ベストとあとリボンじゃなくてネクタイだとどうかわかりませんけれど。

「ないわ」

「そうでしょうね。やっぱり似合わないから」

「セーラー服なら別にいいんだけどね」

私はここでふと天理中学校の女の子の制服を思い出しました。天理中学では女の子の制服はセーラー服なんです。ネクタイが白の。

「ブレザー、っていうかうちの制服のブレザーには」

「どう考えても似合わないわよねえ」

「だからそれは駄目よね」

「そういうことね」

そう話をします。

「けれどあれね」

それから彼女はまた言いました。

「何気に真面目な制服よね」

「そうよね、高校のも中学のも」

「あまり真面目過ぎて堅苦しいかしら」

彼女はこう言って笑います。

「それに何よりも」

「先輩のチェック？」

「そうそう、それそれ」

何かこの台詞後でテレビで聴くような。そんな感じがしました。「それもあるじゃない。寮だと」

「東寮ってそういうの凄く厳しいしね」

「ちっちの部屋もでしょ？」

「私の部屋も？」

「そうじゃないの？」

どうも私の部屋は先輩達がかんり厳しいって思われているようです。それを感じました。

「だって長池先輩じゃない」

「よく言われるけれど先輩って優しいわよ」

「全然そうは思えないんだけれど」

「これもよく言われます。長池先輩に関しては。」

「顔も雰囲気も怖いし。実際怒ると凄く怖いんですよ？」

「全然怖くはないわよ」

そしてそれを私が否定するのもいつものことです。

「凄く優しい人だけれど。怒らないし」

「本当？」

「ええ、本当」

私はそれを保障します。

「全然よ。かなりよくしてもらってるわよ」

「そうなの」

「そうよ。何か長池先輩ってかなり誤解されているみたいね」

「綺麗な人だけれどね」

これは皆言います。確かに先輩って綺麗ですから。

「制服も似合うし」

「そうよね」

これも当たっています。先輩の制服姿って女の私から見てもかなりいけています。

「先輩の制服姿ってねえ」

「いいっていうか」

「私実は参考になっているのよ」

こう彼女に言います。

「先輩の制服の着方」

「着方？」

「だから着こなし。それをね」

「参考になっているの」

「まず先輩の制服の着方って真面目じゃない」

「そもそも真面目に着るのが制服ですけれどその中でも先輩の着方って凄く真面目なんです。全てが折り目正しい着方なんです。」

「それを見てね。やっているのよ」

「ふうん、そうだったんだ」

「その真面目さがかなりいい感じになっているし」

「きりってした感じね」

言葉で言い表すとそうなると思います。それが先輩の綺麗さをさらに際立たせています。何か美人の人ってそういうところが本当に得だと思います。

「そうね。先輩ってどっちかっていうとあれじゃない」

「クールビューティー？」

「そうそう、それぞれ」

今度はこの言葉を私が言いました。

「だから真面目に着こなししているのが似合うのよ」

「何か本当に羨ましいわ」

これは私も心から思うことです。

「それって」

「先輩ってねえ。垂れ目だけね」

「そうよね」

実は長池先輩はそっちの方の目をしておられます。私も垂れ目のが少しコンプレックスになっているのでそれが何か共感あったりします。もっとも先輩は背は普通ですしスタイルもかなりいいんでそれは私とは全然違うんですけれど。何気に私結構自分の容姿にはコンプレックスがあります。小さいですし胸もあれですし。

「それでクールビューティーってあまりないわよね」

「どっちかっていうとその綺麗さってね
私もこれはわかります。」

第十二話 制服その三

「目が釣り目の人じゃない」

「そうよね。大体」

「北川景子さんとかね」

「あつ、そういえば」

北川景子さんと聞いて彼女はふと気付いたみたいです。

「何？」

「長池先輩ってその北川景子さんに似てない？」

「そういえばそうよね」

言われてふと気付きました。

「背も同じ位だったわよね」

「ええ」

北川景子さんが一六〇ですけど先輩もそれ位です。女の人では標準ですね。大体一五五なかったら小柄なんだと思います。私は一五〇ですけど。

「顔つきは」

「先輩は北川さんを優しくした感じよね。あと髪の毛を」

「もっと茶色にしてふわふわした感じね」

「そうそう。そうなるわよね」

「それ考えたら先輩って」

また気付きました。

「本当に綺麗なのね」

「高井先輩もそうよね」

御二人はよく一緒におられますけれど。美人ユニットです。

「それぞれタイプが違ってるけれどね」

「だから余計に目立つのよ。そういえばさ」

「何？」

話が変わりました。

「高井先輩って岡山の人よね」

「ええ、そうよ」

これは先輩から直接教えてもらったことです。

「岡山の教会の娘さんよ」

「それも結構大きな教会だったわよね」

「かなりね」

だから高井先輩はお嬢様になっちゃうんでしょうか。天理教の人は飾らないからそんなイメージはないんですけれど。

「大きな教会の娘さんのなのよ」

「そうだったんだ」

「あんたも教会の娘さんじゃない」

今日の前にいる彼女もそうです。地方から天理高校に来ている人は大体教会や布教所の息子さんや娘さんです。私もそうですし。

「同じじゃない」

「大教会違うし」

彼女はこう私に言いました。

「高井先輩のことは詳しくなかったのよ」

「そうだったの」

「それにしても岡山かあ」

何かそれに思うところがあるようです。

「いいなあ」

「いいの？」

「だって美味しいもの一杯あるじゃない」

理由はそれでした。

「桃だってマスカットだって」

「果物多いわね」

「あと黍団子にままかり」

そういえば多いです。神戸もその点では不自由していませんけれど。

「うちの兄貴がね、イギリスに布教に行ったのよ」

「イギリス、ねえ」

イギリスと聞いただけでおおよそのことは察しがつきました。

「壮絶だったって」

「食べ物がないのに」

「もう食べていられなかったそうよ」

やっぱりそれでした。イギリスといえば食べ物がいっぱいあれなことで本当に有名でしたから。

「どれ位かっていうとね」

「どれ位なの？」

「天理高校の一昔のお昼御飯レベルですって」

「それってかなりってことよね」

「ええ」

私に対して頷いてきました。

「それかもつと酷かったって言うていたわよ」

「うわ、凄いななんてものじゃないわね」

天理高校のお昼御飯は一昔前はかなり壮絶なものだったらしいです。私達もお米やおかずも信者さん達からの寄付からですから当然です。あと天理高校の施設も全部寄付からです。それがかなり凄くて天理高校の施設はかなり整っています。八条学園並です。

「それだと」

「それ考えたら岡山っていいじゃない」

岡山に話が戻りました。

「美味しいものが一杯でね」

「行きたいの？」

「行きたいわ」

答えはもう決まっていました。

「私の実家大阪だから近いし」

「大阪だったら別にいいじゃない」

話を聞いて心の中で何だと思いました。

「食い倒れだから別に」

「まあそうだけれどね」
これは本人も認めました。

第十二話 制服その四

「それでも。本場ものは違うのよ」

「高井先輩もそう言われるわね」

高井先輩は甘いものが大好きです。というか果物が好きで特にその桃やマスカットが好物なんです。

「味が全然違うって」

「神戸牛だってそうでしょ？」

「多分」

高いからあまり食べたことないからどうだと言えないです。大抵食べるって言えば輸入牛です。贅沢っていうのは宗教やっていたら駄目だと思います。

「そうだと思うわ」

「そうだって」

「食べたことあまりないの」

それを彼女にもはつきりと言いました。

「実はね」

「やっぱりそうなのね」

「外食も少ないしね」

教会にいとどうしてもそうなります。教会では皆さんに御馳走することが多いんでそれで自然とそうなって外では食べないんです。他の教会で食べることは多いですけど。

「そうよね。やっぱり」

「でしょ？まして神戸牛って本当に高いし」

これが最大の理由なんですけれどね。

「それよりあれよ。普通の牛肉で焼肉とか」

「そっち？」

「ステーキより焼くの簡単じゃない」

「そうね。皆でできるし」

最大の理由はここです。焼肉はだから好きです。

「だから神戸牛のステーキとかはね」

「他には関西は一杯あるけれど」

「たこ焼きとかきつねうどんとか」

あれ、何か安いものばかりみたいだな。自分で言うておいてですけれどそう思いました。

「お好み焼きとかね」

「兵庫だったら他には明石焼きね」

「よく知っているじゃない」

実は私の好きな食べ物の一つでもあります。

「私もあれ好きだから」

「そうなんだ」

「そういえば長池先輩も兵庫の人だったわよね」

「あつ、そういえばそうね」

言われて思い出しました。そういえばそうです。

「けれど山の方なんだったっけ」

「神戸から北にいつてね」

そう彼女に言いました。

「その人なのよ」

「兵庫っていつでも広いのね」

「兵庫はね。結構」

瀬戸内海だけじゃなくて日本海側にも出ていますし。かなり広い県だったりします。

「そうなのよ」

「じゃあちつちと先輩って同じ兵庫でも」

「ここではじめて知り合ったのよ」

ただしです。おぢばで聞いた話ですが。

「けれど地元じゃ有名な美少女だったらいいわよ」
「でしょうね」

彼女も私の言葉に頷きます。

「それはわかるわ」

「わかるの」

「奇麗だから」

やっぱり理由はそれでした。

「けれどそれ誰から聞いたの？」

「先輩が地元でも評判だったってこと？」

「そうそう、それぞれ」

またこの言葉が出ました。何か井上敏樹さんになった気分です。

「誰から聞いたのよ」

「佐野先輩から」

「佐野先輩からなのね」

「そうなの」

こう彼女に答えました。

「あんまり奇麗なんでタレント事務所から声がかかったこともあったらしいわよ」

「先輩だったらあるわよね」

それも普通に。奇麗にも程があります。

「それに小野先輩もね」

「奇麗よね」

「小柄だし」

私は佐野先輩とはじめて御会いした時まずそれが目についたんです。何か小柄で可愛いなあ、先輩なのに失礼だけれどなんて思いながら。

「佐野先輩も制服似合うしね」

「そうなのよね」

私は彼女の言葉に頷きました。

「特にブレザーがね」

「いいわよね、本当に」

「私は全然似合わないのよ」

「そう？」

けれど彼女は私の言葉にはあまり賛成しない感じでした。

「ちっちゃ似合ってるわよ」

「そうかしら」

「だってちっちゃ色白いし」

まず言われたのはそれです。それでも長池先輩や佐野先輩に比べたら色黒いんじゃないかな、って思っんですけどね。

「似合ってるわよ」

「そうかしら」

自分では実感がないです。

「だったらいいけれど」

「その制服を短くしたらもっと似合っわよ」

「それは駄目よ」

それについては私は賛成できませんでした。それには理由があります。

「私ミニは好きじゃないのよ」

「そうなの」

「脚、自信がないから」

脚線美には全然自信がないんです。というかスタイル自体が。

「嫌なのよ」

「そうなの」

「普通のスカートかズボンならいいけれど」

「ズボンねえ」

「だから天高の体操服は好きなのよ」

天理高校を略して天高と呼びます。私達の間では普通に呼ばれています。天理高校の学生を天高生と呼びます。おぢばじゃそれで通っています。

「あの紺のジャージがね」

「あのジャージが？」

私の言葉に顔を顰めさせる彼女でした。

「あれの何処がなのよ」

「だから身体のライン見えないから」

「それなのね」

「そうよ。それがいいのよ」

私にとってはそれが一番の理由です。

「そうじゃないの？だって中学とかだと」

「半ズボンとかスパッツとかよね」

流石にブルマーはないですけど。それでも半ズボンとかスパッツでも身体、特に脚のラインが出るんで凄く嫌なんです。

「それがどうもね」

「嫌なのね」

「ブルマーだったら死にたい気分になっていたかも」

「高校でそれやったらもうやばいでしょうね」

それは何となく、っていうかはつきりわかります。そもそも昔はそれで問題にならなかったんでしょうか。中学生でもかなり危ないでしょうに。

第十二話 制服その五

「絶対に怪しい奴が周りうろろするわよ」

「特に三年の人の授業中なんか」

「間違いないわね。それ考えたらプールが室内でもできるのって」

天理高校のプールは屋根が可動式なんです。それで天気の良い時は屋根が開けられるようになってるんです。正直かなり凄い感じ
です。

「そういうの警戒してかしら」

「宗教の学校だしね」

「ここ重要ですね。」

「そういうのに警戒しているのね」

「校則も他の学校に比べれば厳しいし」

「そうよね」

それで話はまた制服にも戻ります。

「ミニにしたりするのって駄目だしね」

「男の子だって極端な服ないしね」

「制服の下はわからないけれどね」

「そこは案外皆派手よ」

「そうなのね」

男の子に関してはそうみたいです。シャツのお洒落は重要ってこと
なのでしょう。私達は白いカッターでその下は地味な下着なんです
けれど。東寮は決まりごとが多くて厳しくて下着も色々と言われ
ています。

「見えないところでやってやっね」

「そういうこと。それにしても女の子のガードが固いわね」

「髪だって染めるのはね」

駄目なんです。やっぱり宗教の学校だからです。

「お化粧だってうつすら」

「その体育の服だつてそうだし」

「けれど水着はあれじゃない？」

当然女の子の水着です。

「競泳用の水着じゃない」

「ええ」

スクール水着じゃないんです。もつとも最近どうやらスクール水着にも怪しいマニアが多いっていいですけど。世の中どうなっているんでしょう。

「スタイルはつきりわかるからね」

「あれはあれでまずいかもってことね」

「先輩達なんか特に」

二年の方も三年の方も皆さんスタイルがよくて私達も上級生になればそうなるんでしょうか。その辺りは全然自信がないです。夢物語です。

「そういうのも考えてやっぱプールに屋根があるんでしょうね」
「でしょうね」

話はそこに戻りました。

「やっぱり」

「それにしても夏暑そう」

「ジャージが？」

「そう思うでしょう？やっぱり」

今度は話がそこに戻りました。

「あのジャージ生地が厚いから」

「服は大丈夫そうだけれどね」

「問題は夏よ。おぢば夏凄く暑いから」

ちなみに冬は凄く寒いです。盆地にあるので。

「むれそう」

「もうあれ着ていたら暑いしね」

まだ上着すら脱いでいないのにそうなんです。暑いこと暑いこと
つて。

「困ったことにね」

「露出少ないのは個人的にいいけれどね」

「男の子も道着大変そうだし」

「道着？」

彼女はそれを聞いても何のことかわからないようでした。

「何それ」

「柔道のあれよ」

わかりかねていた彼女にこう言ってあげました。

「あれも夏はかなり暑いらしいわよ」

「ああ、あれね」

彼女もそれを聞いてわかった感じでした。

「そうでしょうね、あれは」

「本当におぢばは夏地獄よね」

はつきり言つて神戸なんかよりずっと暑いんです。神戸は前が海、後ろが山なんて涼しいんです。まあ冬はそのせいで風が強くて困りますけれど。

「冬もだけれど」

「結構過ごしにくい場所だと思うわ」

彼女もそれを言います。

「正直言つてね」

「否定できないわね」

私も同じ考えです。

「さつきも言つたけれど」

「東寮朝早いしねえ」

夏は五時半起きです。ところがです。一年生はそれより一時間早く起きてそれで部屋のお掃除をしてそれから朝の点呼に並ばないといけないんです。何か噂では防衛大学よりも厳しいそうです。本当かどうかかわからないですけど。

「冬なんかどうなのかしら」

「さあ」

あまり考えたくありませんでした、正直。

第十二話 制服その六

「ひょっとしてこの学校三学期が短いのって」

「部活やってればあまりだけれどね」

天理高校の冬休みは一月、春休みも一月です。夏なんかは二ヶ月近くあります。ただし部活があればそれでおぢばにいることになります。特におぢばがえりの時が忙しいんです。あと三学期が始まるのも早くて一月五日からです。それはおせちひのきしんといって新年の催しに参加しないといけないからです。

「それでも長いのでやっぱり」

「夏と冬が地獄だからかしら」

「もつともその夏にこそ忙しいんだけれどね」

「まあね」

なおこれは私達だけではなくておぢばの人、いえ天理教の人皆がです。天理教で忙しいのは夏のおぢばがえりとお正月です。ついでに言えば二十六日もです。月次祭の。

「夏嫌よねえ」

「本当よ。男の子の目だつて気になるし」

「そうそう、それぞれ」

何かこの言葉皆使っているような。何故でしょう。

「白で薄いじゃない。つまり」

「ブラが透けちゃうのよね」

「しかも。目立つ色だと余計にね」

「ええ」

元々派手な色は着けられないですけどそれでも。実質的に白だけになっちゃいます。もつとも殆ど皆下着は白だけなんですけれど。理由は寮のしきたりです。

「下手したらショーツまで」

「それはないわよ」

私はそれは否定しました。

「どうしてそうなるのよ」

「狙われているのよ」

私が否定したらこう返してきました。

「狙われているって男の子から？」

「そうよ。スカートだって薄くなるでしょ」

「ええ」

何か話がまたそっちにきています。

「それで少しラフな動きをしたら」

「めくれたりするのね」

「そういうこと。それにも気をつけないとね」

「何か夏ってかなり気をつけないといけないのね」

「そうね。まあ逆に言えば」

ここで彼女はふと思わせぶりな笑みを見せてきました。如何にも何かよからぬことを考えていますよ、って感じの顔になっています。

「あれよ。男の子をゲットするには」

「何かそういうのって好きになれないけれどね」

私はそれは否定しました。

「駄目よ、そんなの」

「相変わらず真面目ね」

「真面目っていうかあれよ」

そしてまた彼女に言いました。

「やっていいことと悪いことがあるじゃない。そんな誘惑みたいなことを」

「本命の子を一人だけ誘惑するのはいいことよ」

中森明菜さんの曲？みたいなことを言い出してきました。中森明菜さんはお父さんとお母さんがファンなんです。昔の映像を見て私あんなに綺麗っていうか妖しくなれるのかなあ、って凄く不思議に思ったりもしますけれど。私も中森明菜さんは嫌いじゃないです。「そとうちのお母さんが言っていたわよ」

「一人だけなのね」

「そう、一人だけ」

色々な人にそんなのやったら確実にやばいですけど。

「そうらしいわよ」

「凄いお母さんね」

「それでお父さんゲットしたらしいのよ」

何かよくあるお話のような。

「学校の後輩だったお父さんをね」

「そういえばあなたのお母さんって」

「そうよ、天理高校から天理大学で」

つまり私達の先輩でもあるんですね。

「それで教会継がないといけなかったから」

「後輩を捕まえたの」

「捕まる方が悪いのよ」

凄く身勝手っていうかそのまま女郎蜘蛛っていうか。やっぱり中

森明菜さんの曲な感じに思えます。

「それに捕まってお父さんも幸せになったんだし」

「そうなの」

「といってもあれなのよねえ」

ここでふと話を困った顔で変えてきました。

「教会っていうか天理教って」

「何？」

「女の人の方が大変じゃない」

話はここでした。

「何かっていうと動いたり話を聞いたりするのって女の人じゃない？」

「そうなのよね」

これはお母さんを見ていてわかることでした。むしろお父さんの方が動いていないような気がします。それは大抵何処の教会でも同じのような。

「うちの家も会長はお父さんだけれど」

「お母さんばかり動いているのね」

「そうなのよ、完全な姉さん女房だけれどね」

「そういうことみたいです。これも天理教じゃよくあります。」

「お父さんはまあ。いるだけかな」

「いるだけって」

「けれど笑えないのは何故でしょうか。」

「そうなの」

「完全にお母さんが仕切ってるしね。全部」

「そういえばうちもかな」

「うちも結構。お父さんが会長なんですけれど大体のことはお母さんがしています。それを考えたら何か天理教の教会は結構そうした感じが多いんです。」

「何か」

「でしょ？そういうものだと思うわよ」

「彼女も言います。」

第十二話 制服その七

「天理教ってやっぱり女の人が強いわよね」

「男の人欠かせないけれどね」

なお天理教では婦人会というものがあります。他にも女子青年会なんていうのもあります。どちらも、特に婦人会はうちのお母さんも入っていて天理教を支えています。

「やっぱり女の人よねえ」

「その割には」

それでもふと思うことが一つ。

「何でそれで天理高校女の子少ないのかしら」

「あれっ」

実はそうなんです。天理高校は綺麗な女の子が多いですけど男の子との割合は大体三対二辺りで。どうしても女の子の方が少ないんです。それで男の子は天理教にいる他の女の人に声をかけたりしているのかも知れないです。その辺りはよくわかりません。

「そうじゃないの？何でだろ」

「そういえば」

私の言葉に彼女も首を傾げます。

「そうよね。どうしてかしら」

「これもやっぱり何かあるのかしら」

「修養科は女の人が多いそうね」

「らしいわね」

修養科は三ヶ月詰所に住んでそこから修養科の教室で天理教のことを勉強したりひのきしんをさせてもらったりするところです。私のお父さんも一回この人達の担任で教養掛といったのをしたことがあります。それは一月でその間お母さんが家のことは取り仕切っていました。そういえばお父さんがいなくても家は平気で動いていたような。お母さんがそれだけ凄いつてことでしょうか。

「確か」

「何でそれでうちの高校は女の子が少ないのかしら」
「私はこのことに首を捻るばかりです。」

「東寮だって小さいし」

「男の子の北寮なんてとても大きいのにね」

「そうよね」

「考えれば考える程わかりません。」

「どうしてかしら」

「まあ考えても答えは出ないかも」

「彼女が言いましたけれど私もそれに納得してきました。」

「これって」

「女の子にしては彼氏選び放題だし」

「どうしてそうなるのよ」

「何かしょっちゅうこんな話になります。」

「だって。男の子の方が多いし」

「おぢばは女の子自体が多いわよ」

「同時に大人の女の人も。恵まれてる環境なんでしょうが。」

「だから一緒でしょ」

「そうかしら、やっぱり」

「世の中甘くないみたいよ」

「何か大人ぶった言葉になっちゃっていますけれど。」

「案外。彼氏ゲットするのは難しいみたいよ」

「ちっちはどうなのよ」

「私？」

「ええ。どうなのよ、そっちは」

「私に尋ねてきました。」

「全然彼氏とかの噂ないけれど」

「私のことはいいじゃない」

「自分のことを言われると。かなり弱いです。」

「それは別に」

「よくないわよ。折角可愛いのに」

「可愛いって」

自分でも顔が赤くなるのがわかります。

「そんなことは。別に」

「別に、じゃないわよ」

けれどまた突っ込まれます。

第十二話 制服その八

「夫婦揃ってじゃない。しかもここまで話しておいてちっちだけ何もなしってのは駄目よ」

「駄目っていうか」

私は困った顔で答えます。

「私は。彼氏はそのまま」

「そのまま？」

「ずっと一緒にいたいだよ」

「それって結婚ってこと？」

彼女は私に尋ねてきました。

「そんなの考えてるの？もう」

「十六から結婚できるじゃない」

私はそう彼女に言いました。

「それだったら。やっぱり」

「それってかなり飛躍よ」

彼女は私に対して呆れた顔と声で言ってきました。

「何で彼氏がそのまま結婚なのよ」

「駄目かしら」

「駄目っていうかね」

また呆れた声になっていました。

「今時の考えじゃないわよ」

「それでもよ」

何か夢見る年頃なんでしょうか、私って。

「私は。やっぱり」

「凄いわね。そうした考えって」

今度も呆れられました。

「けれどどちらしいかしら」

「私らしいの」

「ええ。そうしたところってね」

今度は笑ってきました。何か随分と表情が変わります。

「らしくて。いいっていえばいいかも」

「はあ」

彼女の言葉に応えます。

「そうなの」

「そうなのっていつてもね」

そうしてまた言われました。

「実際そうなんだし」

「うつん、そうかしら」

「自覚はないのね」

「悪いけれどね」

本当にはないです。自分では本当にわからないものみたいです。

「あまり。っていうか」

「けれど実際そうした娘って今時あまりいないわよ」

これはよく言われる気がします。

「お堅いんだから」

「別におみちってそういうのは五月蠅くないけれどね」

一応色情のいんねんって言葉があって戒められています。けれど

正しい恋愛や結婚、夫婦生活は非常にいいことだとされています。

「昔からそう思っていたのよ」

「彼氏とそのままゴールインかあ」

彼女は少し上を見上げて言いました。

「実際にそれって理想なんだけれどね」

「そうでしょ？やっぱり」

「けれど。滅多にないわよ」

実際にそれはそうですけれど。

「高校時代の相手なんて結局別れるものだっていうし」

「あっ、それ違うから」

これは否定することができました。私にとって有り難いことに。

「うちの大教会にね」

「奥華よね」

「そうよ。二組もおられるんだから」

高校時代から一緒にそのまま結婚されたっていう方々が。ちゃんとおられるんです、しかも凄いことにそれが二組もあつたりします。

「だから実際にあるわよ」

「ちっちもそれを目指すの？」

「目指すかどうかはわからないけれど」

そこまでははっきりしません、まだ。

「けれど。相手はやっぱり」

「そのままずっと一人がいいのね」

「それに私を好きでいてくれる人だったらいいのよ」

容姿は確かに役者さんには求めますけれど。友井雄亮さんみたいに精悍な顔立ちの方もオダギリジョーさんみたいな方も好きですし。

「それだけで」

「ああ、それは駄目ね」

けれど今の言葉は笑って否定されました。

「どうしてよ」

「男は浮気するもの」

すぐにこう言われました。

「それも絶対だね」

「絶対につて」

今の言葉は。確かに否定できないものがありました。

「浮気は大抵男がするでしょ？」

「まあそうらしいわね」

お母さんの言葉だとそうです。言葉を漏らしていたのを覚えています。

「噂では」

「現実よ。ちよっと目を離すと危ないらしいわよ」

「ちよっとつて」

「浮気しなくても動かないとかお酒ばかり飲むとかギャンブルするとか」

「何か大きな子供みたい」

「そう、子供なのよ」

言いたいことはそこみたいです。

「相手は大きな子供なのよ。覚えておくのね」

「じゃああれなの？」

私はそれを聞いてまた彼女に尋ねました。

第十二話 制服その九

「女の子は皆お姉さんなの？」

「それがお母さんね」

話が一気に所帯じみたものになってきました。

「そう考えるのね」

「じゃあこの制服って」

自分の制服を見ながら言います。

「お母さんのエプロンと同じなのね」

「そう考えると急に可愛さがなくなってきたわよね」

「そうよね」

本当にこう思えてきました。

「エプロンと同じだって思うと」

「はっぴもそうよね」

今度ははっぴが話に出ました。

「あれだってひのきしんの時には絶対に着るし」

「そうなるわね」

「お母さんと同じだなんて」

「けれどよく考えたらそうかも」

彼女は少し首を考えて私に言ってきました。

「よく考えたらって？」

「だって。昔はあれよ」

昔のことを私に対して言うのでした。

「十六歳っていったらもう結婚していたじゃない」

「それで子供がいても不思議じゃなかったのね」

「教祖は十三歳で結婚されたじゃない」

教祖のお話も出ました。

「それ考えたら普通じゃないかしら」

「私達の歳で子供がいても」

「不思議じゃないわよね」

「何かそう考えたら」

急に話が制服の着こなしかからお母さんみたいな話になりました。まだ十六歳って考えていたけれどもう十六歳なのかも知れませんが。

「彼氏がいてもおかしくないのね」

「っていうか旦那様」

やっぱりここに話がいきます。

「私もちっちもね」

「じゃあ愛しの要潤さんなんかは」

どうしても特撮の俳優さんが好きで。特に仮面ライダーやってらした方が。

「どうかしら」

「ちっちまたつむじ見られるわよ」

いきなりこう言われました。

「要潤さんって背が高いじゃない」

「ええ」

確か一八〇は平気で超えていました。特撮の人って男の人も女の人も普通に背が高くて。男の人だと一七五を超えるのは普通です。私にとっては夢みたいな数字です。

「だからそれこそ」

「けれどあれよ」

私は少しむっとした顔になって言いました。

「子供ができたら二人の間で」

「そうはならないのよ」

「えっ!？」

今の言葉で思わず凍ってしまいました。

「どっちかになるんだって」

「どっちかっていうことは」

「そう、大きくなるか小さくなるか」

そんなことになったら。それこそ。

「おみちだとまあ女の子が小さくなるわよね」

「それって立派ないんねんじゃないっ」

思わずいんねんを口にしちゃいました。

「うちは代々女の人は小さいのよ。それが私の娘にまで続いたら」

「牛乳飲んだら？」

うわ、子供の頃からずっと言われてきた言葉です。

「かなりいいらしいわよ」

「ずっと飲んでるわよ」

今だってそうです。ちょっと何か飲んだりする時があれば。

「それでも伸びないのよ」

「豆乳は？」

「それもよ」

豆乳もいらいしんで飲んでいますけれど。それでもやっぱり。

「けれど全然なのよ」

「伸びないのね、本当に」

「お母さんだって小さいし私も妹達も」

「それはまた見事ないんねんね」

「でしょ？だから困ってるのよ」

多分これって私だけじゃないでしょうけれど。絶対おみちの女の

人は小さい人が多いです。とにかくそれだけは私の目から言えます。

「お父さんは結構大きいのね」

「随分強い遺伝子なのね」

それもあるでしょうけれど。とにかく。

「女の人全員小さいっていうのも」

「一番高い人で一五四よ」

大体一五五ないと小柄ですよ。私の血筋は女の人でそこまである人は一人もいません。私なんかそれこそもう少しで一五〇ないところでした。

「一番低い人で一四八ないかも」

「一四八っていったら」

彼女はそれを聞いて首を傾げながら言ってきました。

「あれ？魚住りえアナと同じ位よね」

「多分」

あの人かなり小さいですね。だから何か凄い好きなんですけれど。

「一六〇は欲しかったのに」

「ささやかっけ言うのかしら。贅沢っけ言うのかしら」

「私にとっては贅沢よ」

自分ではそう思っています。

「背のことは。十センチ、せめて六センチ」

「本当に切実なのね」

「これで子供まで小さかったら本当にどうすればいいのよ」

言っても仕方ないことですけれど言わずにはいられません。

「小さい小さいって子供の頃からずっと言われていたのに」

「高校の制服着ていないと今でもやばいしね」

「小学生みたいってこと？」

「はつきり言えばそうよ」

これもずつと言われていました。中学校時代から。

「悪いけれどね」

「小学校の頃は幼稚園だったわよ」

四年生まで言われていました。

「そこまで幼く見えるのかしら」

「見えるわね、実際に」

「うっ……」

反論ができません。そこまではつきり言われたら。

「童顔だし本当に小さいし」

「否定できないのが……」

「制服だっけ何か丈が長く見えるしね」

「そうかしら」

「見えるわよ、実際に」

また言われました。

「けれどそれが似合ってるのよ」

「そう言ってもらえると嬉しいけれど」

似合っつて言われたらやっぱり嬉しいです。とりあえずは。

第十二話 制服その十

「それでもね」

「何かあるの？」

彼女にまた尋ねます。

「色が白いから」

「色がなの」

「ちっちゃって色白じゃない」

これも昔から言われます。そのかわりそれこそ日焼けしたら、ですけれど。

「だから余計に似合うのよね」

「そうなんだ」

「そうなんだじゃなくてそれっていいことじゃない」
「こうも言われました。」

「色の白いのは七難隠す」

よくある言葉ですよ、これって。

「男の子が放っておかないわよ」

「男の子ってまた」

何かこればかり話しているみたい。東寮だとファッションとかも全然見ることができないから当然って言えば当然なんですけれど。

「そっちに話がいくのね」

「悪いかしら」

「何か他のことないのかしら」

言ってもどうしようもないですけれどついつい思っでしまいます。

「何かこの学校って色々催しも多いけれどね」

「夏のあれとか？」

「そう、おぢばがえり」

これが一番のイベントだったりします。夏は。

「やっぱりそれよね」

「何かそれで夏かなり忙しいのよね」

「ああ、そうよね」

私の方を見て言ってきました。

「だってちっちゃって吹奏楽部だから」

「色々しないといけないらしいのよ、これが」

もう先輩から聞いています。それが何か色々不安だったりしますけれど。どんなに忙しいのか大変なのかって。どうなんでしょうか。

「それこそ修羅場だって」

「もって大変な人もいるわよ」

そうしたらこう言われました。

「専修科の人達なんか」

「あつ、そうか」

専修科は簡単に言うと天理教の専門学校みたいな場所です。天理高校から行く人は少なくて天理教付属高校や親里高校から行く人が多いんです。この二つの学校が合併するらしいですけど。

「そうだったわね」

「ちっちゃの知り合いには専修科の人いないの？」

「ええ、ちよつと」

その質問には首を横に振ります。

「いないわね」

「私もなのよ」

彼女もこう答えてきました。

「看護学校の人はいるけれど」

「やっぱりいないわよね」

「少ないからね。それに第二専修科はもつと」

そういう学校もあるんです。専修科は二年ですがこの第二専修科は何と五年もあります。それこそ軍隊みたいだって聞いています。

「厳しいらしいし」

「どんなのかしら」

「それこそあれみたいよ」

彼女の言う言葉が少しおどろおどろしいものになってきました。

何かつのだじろう先生の漫画に出てきそうって言ったらそれこそ思い出して夜寝られないですけど。

「東寮よりまだ厳しいんだって」

「想像がつかないけれど」

「かつての海軍兵学校よりはましらしいけれど」

「海軍って」

どんなところだったんでしょう。何でも聞いた話では仮面ライダーの昔のプロデューサーさんは予科練から特攻隊に入っておられたそうですけれど。予科練を思い出してしまいました。

「幾ら何でもそこまでは」

「やっぱりないかしら」

「ここは天理教よ」

間違っても海軍ではありません。

「どうしてそうなるのよ。全然違うじゃない」

「周り山だしね」

本当に見渡す限り周りは山です。あまりにも木が多くてそれが紫に見えたりもする時があります。これはこれで非常に綺麗で私は気に入っているんですけど。

「やっぱり海って場所じゃないわよ」

「そうよね」

「そういうこと。ところでさ」

「何？」

「そろそろゴールデンウィークだけれど」

「部活三昧よ」

他には何もありません。正直部活の青春です。

第十二話 制服その十一

「ちっちもでしょ」

「ええ。それにそれが終わったら」

もう学生の定番です。

「中間テスト」

「ああ、聞きたくないわ」

それにはすぐにこう言い返されました。

「その言葉だけは聞きたくはないわ」

「何よ、その凄い反応」

「だってそうじゃない」

私にとっては何を今更って感じでした。

「テストがない学校なんてないわよ」

「辛子のついてないフランクフルトはあるのね」

「いえ、それもあまりないわよ」

それにケチャップは絶対にありますよね。やっぱりフランクフルトにはケチャップがないと私的には嫌です。フランクフルト好きだから言いますけれど。

「とにかく。テストよ」

「わかってるわよ」

彼女も遂に観念してきました。

「わかってるけれどね」

「それでも嫌なのね」

「そういうこと」

まあ普通は好きな人もいないでしょうけれど。寮って勉強するの結構大変ですから。

「とにかく勉強はしてるの？」

「一応はね」

心もとない返事が返ってきました。

「してるけれど」

「勉強に慣れないとか？」

「寮での勉強って結構大変じゃない」

「彼女も私と同じことを言います。」

「それで。色々」

「困ってるのね」

「どうしようかって思ってるのよ」

「話が真剣なものになってきました。」

「実際のところ。このままじゃ勉強も思うように進まないし」

「図書館でしたら？」

「私は彼女にこう提案してみました。」

「図書館で？」

「そうよ。あそこでしたらどうかしら」

「また言います。」

「結構いいわよ」

「図書館ねえ」

彼女は私の話を聞いて考える顔を見せてきました。

「それっていいかも」

「そうでしょう？じゃあお休み終わったらすぐに行きましょう」

話が纏まってきました。

「私は今すぐでもいいけれど」

「いえ、それはいいわ」

けれどそれははつきりと断ってきたのでした。

「それはね」

「そんなに早くから勉強するつもりはないのね」

「とりあえず最低限の点が取ればいいんだから」

それが彼女の考えでした。

「今のところはね」

「大学とかは考えていないの？」

「ううん、今のところは」

「どうやらそうらしいです。」

「あまり。考えていないけれど」

「そうなの」

「それよりはね」

そして私に言うのでした。

第十二話 制服その十二

「高校卒業したら一旦実家に帰ろうかなっても考えているし」

「実家になのね」

「ええ、とりあえずはね」

「そう言うのでした。」

「そう考えているのよ」

「実家に帰って何するの？」

「多分よ」

「ここで彼女は言うのです。」

「私も多分教会の人と結婚するし」

「それはわからないじゃない」

「私はそれはどうかな、と言いました。」

「これからのことなんてね」

「それはそうだけれどね」

「彼女はこう答えながらもまた言うのでした。」

「それでも。周りはそういうのばかりだし」

「確かに多いけれどね」

「だからよ。本当にそうなくてもおかしくないし」

「彼女はそれを予想しているのです。」

「だから一応は考えておいているのよ」

「私も。どうなるかしら」

「どっかで年下の子でもゲットしたら？」

「どうしてそうなるのよ」

「何かいつもいつも私は年下の子が話に出ます。本当に困ります。」

「私はやっぱり年上の人がいいのに」

「だってちっちゃってお姉さん気質だから」

それを言われると何となくわかります。私が長女だからです。それはいつも頭にあります。それでも妹達にお姉さんぶった記憶はな

いんですけれど。

「だから皆言うのよ」

「お姉さんねえ」

「弟さんいなかったわよね」

「ええ」

それを彼女にも答えます。

「妹が二人よ」

「じゃあ弟さん一人持てばいいのよ」

「弟って」

あまり面白くない話です。

「私はそんなのは別に」

「いいじゃない、今更一人位」

「一人位ってね」

余計に話が私にとって面白くなりませんでした。本当に「冗談じゃありません」。

「私はそんなの全然欲しくないんだけど」

「彼氏でも？」

「だから私は」

また彼女に言い返しました。

「結婚する人としか駄目だしそれに」

「ちつちには年上の人は似合わないわよ」

そういう設定に皆からされています。皆からです。

「何度も言うけれど」

「何度言われても無駄よ」

私はむっとした顔でまたまた言い返しました。

「そんなことは」

「そうだけれどね。それでも」

「何よ」

「彼氏は欲しいわよね」

「ええ、まあ」

それはまあ。否定できないです。

「見つけたらいいのよ。何か色々と幸せになれるらしいわよ」

「見つけようと努力はしているわ」

何かと制約の多い学園生活ですけどそれでも一応は。けれど向こうからも誰も声がかからないですし。

「けれどね」

「努力しなさいって」

「わかったわよ。勉強と一緒にね」

「またそれが出るのね」

そんなこんなのゴールデンウィーク前のやり取りでした。何かお休み前でもどうにも。気持ちはあまりいつもと変わりはしないのでした。

第十二話

完

2008・1・10

第十三話 詰所へその一

詰所へ

何だかんだでゴールデンウィークになりました。けれど殆ど部活です。

部活が終わったら寮に戻って。何かいつもと全然変わりません。

「何かこれって」

「いつもと変わらないって言いたいよね」

「そうなんです」

そう高井先輩に言葉を返しました。帰り道で一緒になったんです。

「三年間こうですよ」

「はつきり言えばそうよ」

あまり聞きたくなかったこの言葉。

「私も最初の一年は凄くしんどかったし」

「はい、しんどいです」

正直言っただけのものです。

「部活もそうですけれど」

「けれど別に美紀はそんなに厳しくないでしょ」

長池先輩の御名前です。何か名前までよくて。

「怒ったら怖いけれど」

「先輩が怒ってるところなんて見たことないですよ」

私は見たことがあります。それどころかこんなに優しくいいのかな、なんて思ってしまったりする程です。

「そうなの」

「はい。全然です」

こつこつ答えました。

「それで私凄く有り難いと思ってるんですよ。怖い人じゃなくて」

「あれで怖いよ」

けれど高井先輩は言っただけでした。

「怒ると凄くね」

「そんなに怖いんですか」

「顔が綺麗じゃない」

「はい」

これは高井先輩もそうなんですけれど。とにかく本当に。

「だから余計に凄いのよ。それこそ」

「それこそ？」

「般若なのよ」

あのお面を思い出しました。天理教の教会ではあのお面は普通は置いていないですけど実は私あしたお面が凄く苦手なんです。他には人形とかこけしとかも。

「般若、ですか」

「それでもちつちには怒らないのね」

「ですからとても優しくて」

「あれで案外怒りっぽいんだけどね、美紀って」

それは初耳なんですけれど。確かに同級生からはあの先輩で大丈夫？とか怖い感じの人とかは時々言われたりしますけれど。

「そうなの。じゃあいいわ」

「そうですか」

「ところでね」

ここで高井先輩は私に言ってきました。

「何でしょうか」

「今時間あるかしら」

「えっ!？」

「だから。時間あるの？」

また私に尋ねてきました。時間があるかどうか。

「部活終わったけれど。どうなの？」

「ありますけれど」

寮に帰ってもすることないですし。とりあえず商店街に行こうと思っていました。今は二人で神殿の前を歩いています。

「そう。じゃあ悪いけれど付き合って」

先輩は商店街の方を歩きながら私に言ってきました。

「詰所まで行きたいから」

「先輩の詰所っていうと確か」

「ええ、駅の向こうにあるのよ」

天理教の詰所は大教会ごとでありまして天理市のあちこちにあります。駅の向こう側にもかなりの数があつて高井先輩の実家が所属されている大教会の詰所もそこにあるんです。

「それでそこまで行くのにな」

「一緒にですか」

「駄目だったらいいけれど」

そう前置きしてきました。

「けれどよかつたらね。駄目？」

「いえ、私でよかつたら」

何もすることがないので先輩に御一緒させて頂くことにしました。実は私も先輩の詰所を見てみたかったですし。

「そう、じゃあ悪いけれどね」

「はい。ところで先輩の詰所って」

「何かしら」

話はそちらにいました。

「結構建物は新しいですよ」

「そうね。そんなに古くはないわね」

先輩は少し考える顔をされてから私に答えてくれました。その横顔がとても綺麗で。長池先輩もそうですけれどこれで街なんか歩いたらすぐに声をかけられそうです。

第十三話 詰所へその二

「改築したのが少し前だから」

「いいですね。私の詰所なんて」

「何言ってるのよ、奥華っていつたら」

「ここで私のいる大教会の詰所について言われました。」

「神殿から歩いてすぐだし商店街の側だし」

「場所。いいですか」

「凄くいいわよ。私なんていつも駅越えるのよ」

「歩けばかなりの距離です。天理市の商店街ってかなり長いですし。」

「それ考えたら。羨ましいわ」

「羨ましいですか」

「子供の頃は本当にそう思っていたわ」

先輩は岡山の方の教会の娘さんです。大教会は大阪の方にありますけれど。岡山にしろ兵庫にしろ広島にしろ美人さんが多いんですよか。

「いいなあ、って。おぢばがえりの時なんかも」

「おぢばがえりですか」

「おぢばの夏って滅茶苦茶暑いじゃない」

盆地なので。私もそれは知っています。

「だから。神殿まで行くのに汗だくになっていたのよ」

「そんなに大変だったんですか」

「もう大変よ。冬だって」

夏になってすぐに冬に。会話の中では季節の移り変わりは速いです。それこそあつという間です。

「お正月の寒い中を神殿までだったし」

「それでおせちのお雑煮を食べて」

「お父さんはおとそを飲んでね」

お正月はおぢばでお雑煮とおとそが振舞われます。それが一年の

はじまりなんです。

「それであつたまるけれど。ただ修養科の人なんか大変よね」

「歩くだけでかなりですからね」

「だから神殿の側にある詰所の人が羨ましかったのよ」

少し口を尖らせて仰います。

「いいなあ、って」

「そうだったんですか」

「けれど。それでもお家みたいなものだしね」

先輩の表情がぱつと明るくなりました。

「だから中に入ればほつとするのよね」

「そうですね。詰所って」

そつといえば私もそれはそうです。

「いたらやっぱり落ち着きますよね」

「馴染みの場所だしね」

多分これが大きいんだと思います。いつも知っている人がいますしそれに子供の頃、いえ赤ちゃんの頃から通つていて泊まつたりしていますから。だからだと思います。

「私も。あそこにはお腹の中にいる時からみたいだし」

「私もですよ。多分」

「お父さんとお母さんがね。結婚して私がお腹にいる時も帰つていたそうだから」

こつしたことも普通にあります。私達と詰所の関係つてそこまで深いんです。

「それを考えたらやっぱりつながりは深いわよね」

「ええ。だから何だかんだで私詰所好きです」

高校に入ってからよくそこで集まつたり二十六日の月次祭にはお父さんやお母さんと会つたりしています。本当に馴染みが深いです。

「先輩もやっぱりそうですね」

「これで近ければ本当に最高なんだけれど」

「あつ、それはそうですか」

「ええ。やっぱりね」

けれど距離についてはどうしてもそうはならないようです。

「歩くだけで疲れるわ。本当におぢばがえりが怖いわよ」

「この商店街も人が多くなりますしね」

「あの多さはねえ」

先輩も困った顔になりました。

「凄いものがあるわよね」

「ですよ。そつえばですね」

「何？」

ここで私はふと感じたことを先輩に言いました。

「先輩の大教会も大阪ですよ」

「ええ、そうよ」

大阪の繁華街にあります。そうした大教会もあるんです。

「丁度近鉄とＪＲと南海が一緒になる場所からすぐだから。行き来するのは楽よ」

「私はそれが羨ましいですよ」

「何言つてるのよ」

けれど先輩はまた困った顔で私に言うのでした。

第十三話 詰所へその三

「私家岡山よ」

「はい」

「それも岡山とかじゃなくて瀬戸内海の方の」

「海のすぐ側なんですネ」

「そうよ。だから大教会まで行くのも結構大変なのよ」

「何か先輩は行き来に結構苦労されているみたいですよ」

「岡山から大阪まで。時間がねえ」

「私も。実家は神戸なんです」

「大教会は大阪です。しかも大阪市じゃないのでこれが結構」

「行き来大変なんですよね」

「どうしてもね。場所が離れている教会ってあるわよね」

「ですよネ」

「これは仕方ないことです。全国に教会がありますから」

「ちつちのところの奥華って岐阜とか広島にも教会多かったですわよね」

「はい、特に広島ですね」

「奥華は広島にも結構系列の教会があります」

「多いですよ」

「うちも広島に系列の教会あるけれどね。それで海はよく連れて行ってもらったわ」

「海ですか」

「中学校の時からかしら。海行ったら大変なのよ」

「先輩は眉を顰めさせちゃいました。それで仰ることは」

「男の子があれこれって声かけてきて」

「ああ、やつぱり」

「わかります。先輩みたいな人が海にいたら。海だとやつぱり」

「水着ですよネ」

「ええ、それかラフな格好だけねど」

「だからですよ。絶対に来ますよ、それって」
それを先輩にも言いました。

「先輩胸だつてあるし背だつて」

「そんなに大きいかしら」

「私から見ればありますよ」

何か高井先輩にしる長池先輩にしる背も結構あるように私からは見えます。実際のところは女の子としてはあまり大きくはないそうですけれど。

「普通に男の子寄つてきますよ」

「そうなの」

「だつて普通におぢば歩いていても目立ちますから」

長池先輩と一緒に歩いていたらそれこそ。美人二人で目立つことこの上なしです。

「それで水着とかになったらナンパしてくれって言ってるようなものです」

「私、そういうのに慣れていなかったから」

「そうなんですか!？」

「小学校の頃はよくブスだつて言われていたのよ」

全然本当のことには思えません。嘘じゃないかつて本気で思いながら聞いています。

「そう……ですか？」

「唇が厚いから。それに声だつて」

「綺麗な声ですよ」

私は何かいつもアニメ声だつて言われますけれど高井先輩の声って高くて綺麗で。所謂ソプラノで凄い目立つ声なんです。

「本当に」

「そう言ってもらえると嬉しいけれどよくからかわれたのよ」

「それって目立つからじゃないんですか？」

私にはそうとは思えません、はい。

「だったらいいけれど。あまり顔とかは気にしないようにしている

の。何か考えたらそれだけ子供の頃のことか思い出しちゃうし」

「わかりました。ところでですね」

「ええ」

ここで私が話を変えると先輩はそれに乗ってくれました。

「先輩のところはゴールデンウィークは何されていますか？」

「信者さんを教会にお招きしたり」

「やっぱりそういうことが多いみたいです。教会に休日とかお話に来られる方が多いんです。」

「お話を聞かせてもらったりしているわね」

「それで何もなければ」

「そう、遊びに行ったりね。岡山とか倉敷に」

「桃とか黍団子は」

「ちっちゃって甘いもの本当に好きなのね」

「ここで先輩にくすりと笑われちゃいました。」

「それ言うと思っていたけれど」

「あっ、すいません」

「謝ることはないわ。それも結構食べてきたから」

「やっぱりそうみたいです。」

「教会とかに信者さんのお子さん達集まるわよね」

「はい」

これは私の教会でもあることです。そこで皆さんに色々と振舞うんです。

「その時にね。一緒に食べたりしていたのよ」

「ゴールデンウィークもですね」

「そういうこと。今思えば懐かしいわ」

先輩の顔が綻んでいました。笑顔もすっごい綺麗です。

「夏休みなんかはスイカとか」

「それかアイスクリームか」

何か話が弾んできました。夏はやっぱりスイカとかですよ。

第十三話 詰所へその四

「そういうのですよね」

「ええ。音楽なんかかけてね」

「T Mレボリユーションとかですか？」

「ちっちそれが好きなの」

「はい、結構」

他にも色々聴きますけれど夏はやっぱり。TUBEもいいですよ。そのTUBEのことを頭の中で考えたら先輩が早速。

「私はTUBEが好きよ」

「夏はですか」

「やっぱり実家の教会が海の側にあるじゃない」

「これが大きいみたいです。」

「だから夏はそれを聴いてつてのが多かったわ」

「そうなんですか。私のところは」

「ちっちって神戸の何処？」

「長田です」

神戸の下町です。地震の時は大変でした。

「そこなんですけれど」

「じゃあ海水浴場とかは近くよね」

「はい、須磨まで行けば」

「それです。子供の頃よく行きました。」

「そうよね。私はもう本当に近くだから」

「それで海なんか見ながらですよ」

「貴方の腕の中で少女をつてね」

さよならイエスタデイですね。何気にお母さんはジャニーズとかチエッカーズが好きなんでそっちの曲がよく出ますけれど。お父さんの前でミセスマーメイド歌ってふそくに思われたりしたこともあります。何かその曲は自分の前では歌わないで欲しいって言って。

「よく砂浜で聴いてスイカ食べて」

「凄くいい感じですね」

「これも教会のお勤めだからね」

「どうやらそれが理由みたいです。」

「それに連れて行かれたし」

「お勤めですか」

「子供って大事じゃない」

天理教では子供の存在がかなり大事です。神殿なんか行っても小さな子供が笑ったりしているのがよく見られます。天理教は飾らないんでそうした風景も普通なんです。

「だからね。私も兄弟も」

「先輩も兄弟の方おられるんですね」

「当たり前でしょ」

今の言葉には苦笑いで返されました。

「何人もいるわよ、そりゃ」

「そうだったんですか」

「だっておみちって」

ここでおみち独特の話になります。

「子供多いじゃない。四人も五人もって普通でしょ」

「確かに」

先輩の一人には八人兄弟の方もおられます。流石にこれには驚きましたけれど。

「ちっちゃだっているじゃない」

「はい、私は」

「弟さんだったっけ」

何故かここで全然存在もしない男兄弟のことが出ます。何故でしょう。

「確か」

「妹ですよ」

私はそれに少し反発する顔で言いました。

「妹が二人ですけど、私って」

「あら、そうだったの」

何故か先輩は驚いた顔になられます。

「てつきり弟さんがいるかなって思ってたんだけど」

「どうしてそうなるんですか？」

「あつ、何となくよ」

何となくって。よく言われるような。

「そんな気がするのよ。ちっちを見ているとね」

「それ皆から言われるんですよ」

「そうなの」

「はい。それで凄く不思議に思ってもいるんですけど」

「いんねんかもね」

先輩はその綺麗な顔をくすりとさせて言うのでした。

「やっぱりそれが」

「いんねんって」

「だから。それで皆から言われるのよ」

こうも言われました。やっぱり先輩も同じことを。

第十三話 詰所へその五

「私も多分あるしね、そういうのは」

「先輩ですか」

「誰だつていんねんはあるわよ」

先輩のお言葉です。

「それこそ私にだつて。ほら」

「ほら？」

「美紀にだつて」

長池先輩のことが出て来ました。

「あるわよ、やっぱり」

「長池先輩にもですか」

「あれでね、美紀も」

商店街の信号の前まで来ました。昔は信号は一つでしたが今は一つになっています。道友社のギャラリーを挟んでそうになっているんです。

「色々と悩んでいたし」

「一年生の時ですか？」

「二年生の時も。色々あったのよ」

「そうだったんですか」

「それわかったかしら」

不意に私にそれを尋ねるのです。

「美紀のことは」

「あつ、そういえば」

そう言われると長池先輩とお話したことを思い出しました。

「時々ちらりつて昔のことをお話される時に」

「そうでしょ。それなのよ」

高井先輩も言うのでした。

「詳しいことは言えないけれど。クラスや寮で何日も凄く泣いて。」

大変だったし」

「そうだったんですか」

「私ね」

先輩はまた話してくれました。

「ずっと美紀と同じクラスだったのよ」

「そうだったんですか」

「寮でも一緒じゃない」

結果としてそうなります。東寮では横のつながりが凄いできます。特に同じクラスの女の子達だとそれがかなり強くなるんです。

「だから。色々と見てきたけれど」

「長池先輩もいんねんに苦しんでおられたんですね」

「いんねんは返って来るわよ」

ここできついお話が。

「それは覚えておいてね」

「わかりました」

「本当にね。自分でも気付かないし」

「ですよね」

これは子供の頃からお父さんやお母さんからだけじゃなくて本当に色々な人から聞いていることです。だから余計に気をつけないといけない、それでも気付かないものだって。

「自分じゃわからないけれど親神様は御存知じゃない」

「はい」

ここに答えがあります。自分では気付かなくても親神様は御存知なのです。

「だから。親神様の思し召しをよく見ていれば」

「わかるんですよね」

「そうだけれどね。これは気付かないのよね」

先輩はこう仰って首を傾げてしまいました。

「美紀だって。私だって」

「先輩もですか」

「人の態度が急に変わる時ってあるじゃない」

「ええ」

確かに・そういう時もあります。

「そういう時が一番わかりやすいんだけどね」

「そうなんですか」

「人と人の付き合いが一番わかりやすいわよ」

先輩はこう仰います。

第十三話 詰所へその六

「ちつちもその辺りはよく見ていてね。私は鈍いからそれで気付かなかったけれど」

「先輩は。そんな」

「私って駄目な人間よ」

急に寂しい笑みになりました。

「正直言つて。意地悪だし」

「そんな。先輩は」

「嫌いな相手はとことんまで意地悪して虐めてだったし。だから」
「だから？」

「高校に入つてそのいんねんを見せて頂いたのよ」

商店街をまだ歩き続けます。二度目の信号も越えました。

「色々だね」

「そうだったんですか」

「皆。ここで見せて頂くのよ」

先輩はじつと前を見ておられます。そこに見ておられるのは何なのかしらと思うのですが先輩にしかわからないことだと思います。

「おぢばだね」

「私ですよね」

「勿論よ。美紀だつてそうだったし」

「長池先輩も」

「一年の時。大変だったから」

また長池先輩のお話になりました。

「最初ね。付き合っていた男の子と喧嘩してね」

「はい」

「それで別れて。クラスで本当に大泣きして」

「先輩がですか」

「皆で必死に慰めたけれどそれでも泣き止んでくれなくて」

本当に凄かったみたいです。

「それで早退して寮でも泣いてばかりで。誰もどうしようもなかったのよ」

「あんな綺麗な人なのに」

「あのね、ちつち」

先輩の声が優しいですけれどとても悲しいものになりました。

「人って外見じゃないのよ」

「それはわかってるつもりですけど」

「心なのよ」

先輩は私の顔を見てじつと言うのでした。

「大切なのは」

「ですよ」

「美紀って。実はね」

それでまた長池先輩のお話になります。

「すつごくきついところがあつてね」

「それよく同級生から言われますけれど」

「そうでしょ？怖いとか言われない？」

「はい、そうです」

本当にその通りです。何で皆そう言うのかわかりませんですけど。

「それ、本当によくわからないですけど」

「優しいことは優しいのよ」

それははつきりと頷くことができます。長池先輩はとても優しい方です。

「けれどね。ちょっとしたことで怒って」

「そうなんです」

「怒ったらまたきつくてその時間も長いのよ」

何か先輩の意外な一面です。そうしたところもあったんだと心の中で驚いていました。それでもその話を聞かずにはいられませんでした。

「それで一年の頃も」

「そうしたことになったんですね」

「他にもあつたし」

「色々あつたんですね」

「それは私もだけれど」

事情はかなり複雑みたいです。高井先輩も関わっておられたなんて。

「私も一緒に。そうしたことになったりしたわ」

「先輩まで」

「後になって気付くのよ。いつもね」

また悲しい顔になります。とても綺麗な方なのにそんな顔をされたらうんですけれど。

「何でもそうだけれど」

「何でもですか」

「だからね、ちucci」

これ以上はないって位優しい声で私に語り掛けてくれました。

第十三話 詰所へその七

「慎重に考えて喋ったりしてね。さもないと本当に後悔してもはじまらないから」

「わかりました」

先輩のその言葉にこくりと頷いて答えました。

「そうですね、やっぱり」

「ええ。ここでもね」

駅前です。天理駅から全部はじまるっていう感じです。コンビニもあつたりして便利な場所です。

「美紀と二人で歩いたり話したりしてるけれどね」

「いつも御二人ですよ」

「気が合うのよ」

それで美人ユニットって言われています。とにかく目立つんです。

「兵庫と岡山だけれど」

「大教会は大阪ですから何かそこは微妙ですよ」

「そうね。けれど大教会が遠いのってね」

そっちの話になるとまた苦笑いになる先輩でした。岡山と大阪の距離に困っておられるのは本当みたいです。私も神戸なんでこれは少しだけわかります。

「やっぱりしんどくて」

「詰所はどうですか？」

「そっちもよ」

先輩の悩みはおぢばでも同じみたいです。

「神殿から遠いのってやっぱり困るのよね」

「じゃあ私のところはやっぱり」

「正直恵まれているわよ」

やっぱりそうでした。さっきからの先輩とのお話通りで。

「羨ましいわね」

「ですか」

「さつきも言つたけれど。それにしてもね」

駅のガードレールの下を通ります。そこにもお店が幾つかあります。

「ここを通るのは嫌いじゃないのよね、昔から」

「何でですか？」

「ここを通るとね」

先輩の顔が綻んで目が細くなつて。食べ物のお店を見てです。

「子供の頃あれ食べたいとかこれ食べたいとかよく言つたのよね」

「そうだったんですか」

「詰所で色々食べたのに」

詰所では御飯も出ます。信者さんからのお供えのお菓子もあつたりします。

「それでもここに来るとあれ食べたいこれ食べたいってお父さんやお母さんにねだつたのよね」

「それ、私もです」

恥ずかしいですけれど。

「おぢばがえりの時とか屋台で」

「そうよね、屋台でもね」

月次祭やおぢばがえりの時なんかになると商店街に屋台が一杯並びます。そこでクレープとか焼き鳥とかを買って食べるんです。

「色々ねだつたのよ」

「それで買ってもらっていたんですね」

「ええ」

先輩の顔がさらに綻んで。何かとても素敵な笑顔です。

「そうよ。あれだけ食べてもお腹壊さなかったのが不思議な位ね」

「私もです」

本当によく食べました。今もですけれど。

「それでも」

「またそれね」

先輩も私が何を言うのか御存知でした。

「大きくならなかったのね」

「やっぱり遺伝ですかね」

「まあまあ」

しよげる私を慰めてくれました。

「そんなに気にすることはないわよ」

「そうですか」

「ええ。私だってね」

けれど先輩は私より背が高いんです。ガードレールの下をくぐって先輩の詰所に向かう時もやっぱりお店が並んでいます。おうどんとかラーメンの。

「そんなに高くはないし」

「ですか」

「それにね」

「それに？」

「それがいいっていう男の子もいるわよ」

何か話がマニアックになってきました。

「小さいってというのがね」

「そうなんですか？」

何度言われても実感できない言葉です。

「そういうことよ。それにしても」

「はい？」

今度は私の方をちらちらと見ての御言葉です。

「中学生にも見えるわよね」

「それもよく言われます」

無意識のうちに慚然となっちゃいます。

第十三話 詰所へその八

「昔からずっと小さく」

「まあそれも気にしないでね。それに」

「それに？」

「やっぱりお腹空かない？」

先輩の顔がまた苦笑いになります。

「部活の後だし歩いていたら」

「そうですね。そういえば」

私事です。天理高校の吹奏楽部って凄いハードですから。

「何か私も」

「じゃあ決まりね。詰所に着いたらね」

「はい」

「私のお父さんとお母さんがいるから」

「先輩のですか」

そういえば高井先輩はお母さん似だって聞いていますけれど。何かそれを考えるとすごい美人母娘なんです。お父さんは羨ましがられているんじゃないでしょうか。

「そうよ。だから何か御馳走してもらいましょう」

「何かそれって」

けれどそれはやっぱり。

「悪いですよ」

「いいのよ」

その綺麗なお顔で微笑まれると。男の子だったら間違いなくノックアウトだと思います。

「そういうのは気にしないで」

「そうなんですか」

「だって折角だし」

こつこつ仰います。

「ここまでついて来てくれたじゃない」

「それはその」

「詰所にお菓子もあるし」

お菓子がですか。それを聞くとそれだけで。

「うつ・・・」

「ちucci甘いもの好きよね」

「それはまあ」

嘘はつけません。特に甘いものの前だと。

「だったら無理しないの。私だってそうなんだし」

「ですか」

「さっ、見えてきたわよ」

ここで前の右手に見えてきました。それが先輩の大教会の詰所で
す。

「何があるかしらね。多分」

「多分？」

「黍団子は絶対にあるわ」

岡山だとしてもこれになるみたいです。そういえば岡山って
いえば桃太郎だけじゃなくてあの星野仙一さんの出身地でもあるん
ですよ。

「あとは何かしら」

「桃でしょうか」

「またそれ？」

先輩に思わず苦笑いされてしまいました。

「ちucciも好きね」

「違いますか？」

「確かに桃はよく食べるわ。マスカットもね」

「はい」

やっぱり食べることは食べるみたいです。

「けれどね。それだけじゃないから」

「他のものですよね。やっぱり」

「神戸でも明石焼きばかり食べないでしょ」

「ええ、まあ」

確かに。しかも私実家は長田ですし。

「そういうことよ。お菓子なら」

「お菓子なら？」

「チョコレート菓子があるかしあ」

「チョコレート、ですか」

自分の目が動くのがわかりました。実はチョコレートも大好きなんです。何か好きなお菓子や果物が本当に多いと自分でも思っていますけれど。

「ちっちゃってチョコレートも好きなの」

「えっ、それはその」

「隠さなくてもいいわよ」

笑顔で言われました。

「甘いのが好きだっていうのはもう知ってるし」

「すいません」

「謝る必要はないし。それにね」

「それに？」

「女の子は皆甘いものが好きなのよ」

確かに。そういえば寮でも甘いものを嫌いな人っていません。学校でもお菓子食べたりしていますし。それで口の悪い男の子にそんなことしていたらフカキヨンみたいになるぞって言われた娘もいます。あの人は奇麗ですけど確かにちよつと肉感的な気もしないではありません。

第十三話 詰所へその九

「教祖へのお供えだつてあれでしょ？」

「いつもお菓子お供えしていますよね」

「そういうこと。食べ過ぎなければいいし」

「そうなんですか」

「それにしてもちっちは」

私の方をまたちらりと見ての御言葉でした。

「乳製品関係のお菓子を食べ過ぎじゃないかしら」

「それはその」

「だから小さいのは気にしないでいいの。おちばじゃ普通なんだから」

「まあそれはその」

返事に困っちゃいます。どうしても。

「背が低くても男の子はゲットできるし」

「それさつきも言われましたけれど」

「全部お引き寄せよ」

「こつちも仰います。」

「だからね」

「コンプレックスは持つ必要ありませんか」

「少なくとも外見には」

またおみちらしい感じの言葉になってきました。

「わかったわね」

「難しいですけど」

はつきりと言いますと。背も胸も気になって仕方ないです。

「何時かそれもまた」

「克服はできるしね」

先輩に言われても、ですけれど。本当に街歩いていたらアイドルの事務所から声がかかっても不思議じゃないような人ですから。

「少しずつ」

「ですか」

「まあ話はこれ位にして」

先輩はまた私に声をかけてきてくれました。

「何か食べましょう。私のお父さん達とお話しながらね」

「はい。そういえば」

ふと私は考えました。

「先輩って御兄弟は」

「いるわよ」

天理教の人は子沢山の人が多いんで。何人もおられるのが普通です。

「お兄ちゃんと弟と妹がね」

「四人兄弟なんですね」

「普通じゃない？」

天理教では普通です。もっと多い人だっています。

「これって」

「ですかね。私は三人ですけど」

「そうした話もしたいし。それじゃあ」

「はいっ」

私は先輩の詰所に入れてもらいました。そうしてその中でお菓子を頂きながら楽しいお話をしました。ゴールデンウィークの中の楽しい一日でした。

第十三話 完

第十四話 騒がしい中学生その一

騒がしい中学生

ゴールデンウィークの間は私のお父さんやお母さんもおちばに帰ってきてくれました。今度は私のいる大教会の詰所で会いました。「とりあえず元気そうだな」

「うん」

お父さんに答えます。お父さんは背が高いです。ついでに言えば顔は宮内洋さんにそっくりだって言われます。それってかなり個性的なような。

「東寮はきついでしょ」

「まあそれは」

お母さんの問いにはついつい苦笑いになります。

「きついつていえばきついし」

「お家に帰りたくなったりするでしょ」

「素直に言っていない？」

「こつお母さんに言葉を返しました。」

「ええ、いいわよ」

「正直に言わせてもらうとそうよ」

嘘はつけませんでした。けれどこれは皆そうです。

「何か。お家と全然違うし」

「詰所とも全然違うでしょ」

「ええ、全然」

これも本当のことです。部屋の雰囲気なんかは同じですけど。天理教の建物は部屋の構造は和風で大体同じなんです。ですからお布団なんです。

「先輩と一緒にだし」

「それは変わらないわね」

お母さんも天理高校出身なんです。しかも東寮にいたんでよく知

つてるんです。

「決まりとかも厳しいわよね」

「その通りよ」

私ははつきりと答えました。

「お母さんの言った通りだったわ」

「先輩によつて随分変わるけれどね」

「そうなの」

「千里の部屋の先輩はどんな人なの？」

「凄く優しい人だけれど」

勿論長池先輩です。この前も困っていたら助けて頂いたし。いつも穏やかですし本当に何から何まで助けて頂いています。

「しかも綺麗で」

「よかつたじゃない」

それを言ったら素直に喜んでくれました。

「いい人でね」

「そうね。やっぱりそれだと」

「部屋の人が優しい人でよかつたわ。お母さんそれが心配だったのよ」

「ふうん」

「お母さんの時は皆厳しかった記憶もあるけれどね」

お母さんの時はそうだったみたいです。お母さんが高校生の時って確か二十五年程前だったような。あれ、もっと後でしたっけ。

「おぢばもずっと寒かつたし暑かつたのよ」

「えっ!？」

今の言葉は何か意味がわかりませんでした。今よりずっと寒かつたし暑かつたって。一体どういうことなんでしょうか。

「それってどういうことなの？」

「だって。部屋に暖房も冷房もないし」

昔の方がそういう設備もないですね。そういうことみたいです。だからよ。寒くて震えていた時もあったわ」

「そんなに」

ここで何か先輩と後輩が肌寄せ合って、なんていうどっかの妖しい漫画みたいな話はないです。どいうわけかそういうの想像しちゃう人も多いみたいですけど。

「そうだったわ。けれど今は違うみたいね」

「まだ夏にもなっていないし」

校舎には扇風機もありますし。これが凄く有り難いです。

「まだ実感ないわ」

「冬はまだ厚着すればいいけれど」

神戸よりずっと寒いのは事実です。その寒さに泣いちゃう子供もいます。奈良県って神戸よりずっと寒いつてというのが私のイメージです。

「夏はそうはいかないわよね」

「ただでさえあれじゃない」

私はここで困った顔になりました。

「あの白いブラウスって下手したらブラが透けちゃうし」

「限界よね」

「ええ。それでも凄く暑いし」

冬は寒くて夏は暑い。完全に盆地です。

「おちばがえりは地獄なのね」

「しかも今度は働く側よ」

今までは遊ぶ側でした。それが完全に変わるんです。

「覚悟しておきなさい」

「ええ。何か今から大変そう」

「あとお正月も」

何気にすることが一杯ある学校です。

第十四話 騒がしい中学生その二

「わかつているわね」

「お餅よね」

お正月はお餅です。何と言ってもこれです。

「そのひのきしんもあるからね」

「あつ、それも聞いてるわ」

というか前から知っていました。お正月も毎年帰っていましたから。

「食堂の係よね、女の子は」

「ええ、そうよ」

天理高校の女の子のお正月のひのきしんはそれなんです。半被を着た綺麗な人達が接待してくれるってことで評判いいんです。

「それも頑張りなさいよ」

「先のこと言われてもわからないわよ」

「ふふふ、今からじゃそうよね」

お母さんもそれはわかつているみたいでした。

「けれど楽しみにしておきなさい」

「わかったわ。本当に先だけれど」

「それでこれからどうするの？」

話が一段落ついたところで私に言ってきました。

「これからって？」

「ええ。時間あるわよね」

「ええ、まあ」

お母さんの言葉に答えます。ゴールデンウィークですし。

「だったら何か食べる？」

「何でも好きな言ってみたらいい」

お父さんも言ってきました。二人共久し振りなんで随分優しくしてくれている感じです。

「おぢばにあるものだけな」

「おぢばにあるだけのものなの」

「当たり前でしょ」

お母さんがまた笑ってきました。

「ないものは仕方ないじゃない」

「そうね。けれど不意に言われても」

「考えられない？」

「うん。おうどんとかお好み焼きとかかしら」

「そうか。じゃあそれだな」

お父さんは私がおうどんとかお好み焼きを出したところで頷いてくれました。

「お好み焼きにするか」

「ええ、それがいいわね」

お母さんはお父さんの提案ににこりと笑って頷きます。話がこれで決まりました。

「千里もそれでいいわよね」

「うん」

お好み焼き好きです。私はお好み焼きは大阪派です。奥華は広島にも教会が多くてお好み焼きの話をするとちよつとややこしいんですけれど。

「じゃあそれでね」

「行くか」

こうして三人で詰所を出ました。行くお店は少し歩いたところにあります。

「烏賊でも海老でもいいのよね」

「何ならミックスでもいいわよ」

お好み焼きに入れるのは何でも好きです。モダン焼きも好きですけれど今はお好み焼きを食いたい気持ちです。

「何でもね」

「じゃあミックスね」

私はお母さんの言葉に頷きました。

「それ御願い」

「よし、じゃあお父さんもそれだ」

「お母さんもよ」

家族全員がミックス焼きを注文することになりました。話が決まるのが凄く早いです。

第十四話 騒がしい中学生その三

注文するものを決めてからお店に入ります。それで三人で食べながら楽しく話をしていくと。

「何かこのお店よさそうだよな」

「最近御前天理によく来るよな」

「そうか？」

急に騒がしい子がやって来ました。

「どうしたんだよ、今まで八木とか桜井で遊んでいたのに」

「この街ってよくね？」

私達から少し離れた場所に中学生に見える男の子二人が座ります。

それで賑やかに話をしています。一人の子が結構背が高いです。

「いいか？あまり遊ぶところもないしよ」

「商店街だって長いし食う場所だってあるしさ」

「そんなの何処にもあるだろ」

「それだけじゃないんだよ」

その背の高い子の言葉は続きます。

「女の子だって綺麗だしな」

「御前の趣味だろ、それって」

「ああ、そうさ」

その子は悪びれずに答えています。

「そうだけれど悪いかな？」

「いや、悪くはないけれどな」

「天理高校の人なんかさ。小さくて綺麗な人が多いし」

小さい。また嫌なこと話してます。

「僕あれだよ。学校は天理受けるよ」

「天理か？」

「綺麗な先輩多いし制服も好きだし」

制服も好きなんですか。地味な制服だと思いますけれど。

「ああ、制服は女の子のが好きなんだぜ。男はどうでもいいから」
「いいのかよ」

「詰襟なんか何処にもであるだろ？」

確かに。八条学園じゃ詰襟だけでも何種類もありました。あの学校は制服を好きに選べるので。それで私も選ぶのに考えました。

「そんなの別にどうでもいいんだよ」

「そうか」

「そうだよ。それにあの高校にいたら甲子園だって行けるしな」

何かそれで天理高校は凄い有名なんです。私はその間阪神が甲子園使えないんでどうにかならないのかしらって思う時もあるんですけど。

「いい話じゃないか」

「けれどあれだぜ」

相方の男の子がその背の高い男の子に言います。

「天理は私立だぜ」

「えっ、そうなんか!？」

知らなかったみたいです。

「しかも宗教学校だしな」

「そういえばこの街って天理教の街だったよな」

「まあ宗教都市っていうらしいな」

どうもおみちのことはあまり知らない子みたいです。天理高校が公立だって思っている人も本当にいたりしますけれどこの子もでした。

「だからあの学校も天理教の学校なんだぜ」

「だから寮があったのか」

「ああ、そうだぜ」

相方の子がそう教えています。

「知らなかったのかよ」

「そうか、私立だったのか」

そのことに考える顔になっています。

「公立とばかり思ってたよ」

「あの瓦の屋根でか？」

思いきり突っ込まれています。

第十四話 騒がしい中学生その四

「何でそう思えるんだよ」

「ああ、変わった屋根だよな」

凄い感想です。普通あの屋根を見てそれだけで済むんでしょうか。私も子供の頃あの屋根を見てこんな学校があるんだって唾然ってなつたんですけれど。その時お父さんとお母さんに私が将来行くかも知れない学校だって言われました。実際に今通っています。

「そういえば」

「それだけかよっ」

爆笑問題の突っ込みみたいです。私あの御二人は好きではないですけれど。

「だって色んな学校あるしよ」

「御前、ある意味凄いな」

聞いていて本当にそう思います。こういう子だと三銃士のアラミスや上杉謙信が女性であっても全然驚かないと思います。私は驚きましたけれど。

「まあそれだけだな。でよ」

「ああ」

連れの子はその子のペースに完全に入っていました。

「ここのお店のお好み焼きだけれどさ」

「美味いか？」

「ビール欲しいよな」

「えっ!？」

今の言葉には私だけじゃなくてお父さんもお母さんも思わず声をあげてしまいました。特に私は今の言葉は聞き捨てならないものがありました。

「凄い子ね」

「そうだねえ」

お父さんはお母さんの言葉に唸りながら応えています。

「見所があるね」

「大物ね、どうやら」

「何でそうなるの!？」

そのお父さんとお母さんの言葉に思わず突っ込みを入れました。私も何か人に突っ込むタイプの人みたいです。今自覚したところです。

「男の子はあじゃないと」

「かえって駄目なんだよ」

「女の子はどうなのよ」

そうお父さんとお母さんに聞き返します。お好み焼きを焼किながら少し慥然とした顔になっているのが自分でもわかります。

「女の子はそんな男の子を支えてあげるのよ」

「日様だから？」

「そういうことよ」

にこりと笑ったうえでのお母さんの言葉でした。

「わかってるじゃない。だったらいいのよ」

「わかってるっていうか」

私は今程自分の感情が言葉に出ているのを感じたことがあります。私では。本当に今までは。

「女の子損じゃないの？」

「そうじゃないのよ」

けれどもお母さんは私のその考えは否定します。

「いい、千里」

「うん」

お好み焼きを切りながら二人の話になります。ソースに鰹節に青海苔にマヨネーズに。お好み焼きはどれが一つ欠けても駄目ですよ。ね、やっぱり。

「女の子は赤ちゃんを産むのよ」

「それはわかってるけど」

「だったら身体をしつかりしていないと駄目じゃない」

「それなのね」

「だから日様なのよ」

話が少しわかりにくくなってきました。私にとっては。

「いつも健康で何があっても大丈夫なようにね」

「男の子は違うの」

「男の子は月様じゃない」

ここが天理教独特の考えというか何か日本独特の考えらしいです。普通は男の子が日様で女の子が月様らしいです。私には違和感あるんですけれど、男の子が日様っていうのは。

「だから。照らされるから」

「別にいいのね」

「そうなのよ。誰かを照らす為にはいつも丈夫じゃないと」

「千里も飲むのなら二十からな」

お父さんもここで言うてきました。

「わかったな」

「男の子はいいのね」

「男の子は中学生に入ってからこつそりとだ」

どうもお父さんはそうしてきたみたいです。それってかなり悪いと思うんですけど。

「わかったな」

「わかりたくないけれどわかったわ」

一応はそう答えはしました。

「女の子にとって損だと思うけれど」

「女はおみちの土台よ」

またお母さんの言葉です。

「それはいつも言うてるじゃない。おみちは女の人あつてこそよ」
「ええ」

寮でも結構言われます。本当に教会とかだと女の人の方がかなり大変です。お父さんはあまり何もしてお母さんばかり動いて。

女の人が会長さんやっておられる教会も多いんですよ。

「だからね。しっかりしないと」

「ええ。それにしても」

またあの子をちらりと見ます。

第十四話 騒がしい中学生その五

「よく食べるわねえ」

「いいことじゃないか」

「そうよね」

お父さんとお母さんはお好み焼きをおかわりしてどんどん食べているその子を見てまた笑っています。

「男の子はたっぷり食べないとな」

「これは女の子もそうよ」

「食べてるわよ」

お好み焼き好きですし。普通に二枚食えることだってあります。けれどあの子は。

「おばちゃん、もう一枚頂戴」

「おい、阿波野」

あの子の名前らしいです。

「もうこれで四枚目だぞ」

「いいんだよ、四枚でも五枚でも」

お好み焼きを五枚って。

「何枚でも食べられるしな」

「何でそこまで食って太らないんだ？いつも思っただけだよ」
「身体動かしてるからだよ」

そっぴいえはあの子。スタイルいいです。

「だからだよ。ここの商店街だっけかなり長いしな」

「まあそれはな」

「だから。食って体力をつけておくんだよ」

それでも食べ過ぎだと思えますけれど。

「何枚もな」

「それでまた後で食うんだろ？」

「ああ、回転焼きな」

炭水化物ばかりのような。おぢばの商店街には回転焼きもあります。これがまた凄く美味しくて病み付きになっちゃうんです。私も大好きです。

「二個位貰おうかな」

「本当に食うんだな」

「当たり前だろ。お腹が空いて仕方ないんだからさ」

「いや、それでも」

私も同じことを思います。力士かレスラーの人みたいな食べっぷりですから。

「よくそれだけ入るよ」

「まあ気にするなよ。ところでな」

「ああ」

男の子達の話が変わりました。

「あのでっかい神殿っていつも人がいるよな」

「そりや当然だろ」

本部の神殿のお話になっています。今度はまともな話かも。

「それも大勢な」

「あそこがな。人間を創った場所らしいんだ」

「へえ、あそこでか」

「そうさ。あの参拝する場所あるだろ」

「ああ」

相方の子は随分わかりやすさを注意して話しています。私もおぢばについて説明する時にはいつも考えて話すようにしていますので参考になります。

「あそこの中央に。ほら」

「あの台か」

「そうそう、それぞれ」

何か未来で時々聞くかも知れない言葉で応えています。今の仮面ライダーはかなり個性の強い脚本家の人が書いているそうですがその人の言葉回しにも似ています。

「あの台がかんろだいつていうんだ。あそこが中心なんだよ」

「へえ、そうだったんだ」

「天理教ではそう教えているんだ」

どうも相方の子も天理教の子みたいです。説明がかなりいい感じ
です。

「あそこを四方八方から参拝するんだ。だから四つ礼拝場がある
んだ」

「成程な。それでああなっているんだ」

「御前参拝したことあるよな」

ここで相方の子はその子に問い掛けます。

第十四話 騒がしい中学生その六

「確か」

「一応な。とんでもなく大きくてびっくりしたけれどな」

「まあ確かに大きいな」

それは皆言います。普通のお寺や神社とは比較にならないです。奈良にはかなり大きなお寺や神社も多いんであまり目立たないかもですが。

「歩くだけでも大変だったよ」

「参拝している人達はとうだった？」

「それも驚いたな」

あの子にとっては驚くことばかりみたいです。最初の方は皆こう仰います。

「熱心に参拝しているよな。僕の周りってそういうのないからな」

「宗教関係とは無縁なんだな」

「ああ、全然」

そういう人も多いですよ。私は教会の娘なんでそれこそ生まれた時から縁があるんですけれど多分そうした人は少ないと思います。だからここに来てびっくりしたんだよ」

「そうか。そんなに」

「だってよ。街の人が皆はっぴ着てるし」

天理教の黒いはっぴですね。おぢばでは皆着ています。私達も外出の時はそれを着ていつも外出です。それで何処の人かもわかりません。

「すげえよなあ、ここは」

「御前の食欲と胃袋もそうだな」

これはあの子に同意です。心の中で頷きながら聞いていました。

「ただ。いい街だよな」

「気に入ったか？」

「落ち着いた雰囲気だし優しい感じだしな」

それがわかるなんて。中々筋がいい子なのかしら、とも思いました。言葉に出すことはできませんでしたが。黙って聞くだけです。

「また来るぜ」

「天理高校に入ったら毎日だぜ」

「ああ、それいいな」

何か話が妙な方向にいつています。

「綺麗な人も多いしな」

「そうか？」

相方の子はそれには違和感を見せてきました。

「あまりそうは」

「女の人は顔だけじゃないんだよ」

急に大人な発言になりました。

「心だよ。まずはそれだよ」

「まあ優しい人は多いよな」

「だからいいんだよ」

見ているところは見ているんでしょうか。彼の話聞きながら考えます。

「優しい年上の先輩の彼女なんてかなりいいじゃないか」

「御前……」

相方の子は今の発言にかなり引いていました。それが私の目にもはつきりと見えます。私はそれを聞いても何も思いませんでしたけれど。

「年上がタイプだったのか」

「僕長男でお姉さんとかいないし」

何かそこは私と同じかも。

「だからそういう人に憧れるんだ」

「そうだったのか」

「そうなんだよ。まあ優しくて綺麗な人だったら誰でもいいんだけ

れど」

「第一条件は優しいことか」

「顔はその次だよ」

どうやら結構見ているところは見ている子みたいです。私もそうありたいと話を聞きながら心の中で思ったりします。外見は軽い感じの子なのに。

「まずは心。僕は顔に関しては守備範囲広いし」

「広いのか」

「そうさ、横浜ベイスターズの古木みたいにね」

「そりゃ狭いっていうか酷いっていうんだろ」

何か古木選手の守備がとんでもないっていうのは聞いています。あとチャンスに弱くて左ピッチャーを全然打てないっていうのも。

第十四話 騒がしい中学生その七

「間違えた。小坂だよ」

「また随分とマニアックだな」

ロッテのショートの人ですね。かなり小さいので私は好きです。

「とにかく。顔とかはそんなに」

「そうなのか」

「性格は顔に出るしね」

中々わかつてるような。ひょっとして案外いい子なのかも知れないかしらと思ってみたり。外見とか話し方からはそうは思えないものがありますけれど。

「だからさ。顔は二番目」

「それでも二番目か」

「だから。性格は顔に出るんだよ」

またそれを言います。とにかく性格にこだわる子です。

「だからそれがよかつたらね」

「何か御前って案外真面目なところあるんだな」

「そうかな」

自分ではそれを否定しちゃっています。

「自覚はないけれど」

「自覚はなくてもな。そう見えるぜ」

「ふうん」

「まあいいことだけだな」

私もそう思います。人間やっぱり性格です。性格美人は顔も美人になる、っていうのは私も子供の頃から言われています。実際にそうだと思います。

「それでだ」

「今度は何？」

「これから回転焼き食ってそれから神殿だよな」

「そのつもりだけれど」

まだ食べるつもりなのは変わらないみたいです。本当に五枚食べちゃっていますし何処に入っているのかって不思議ですけれど。

「どうかな、それで」

「俺も付き合うよ」

相方の子はその子に言いました。

「ついでだしな」

「悪いね、一緒に来てもらえて」

「御前参拝するのはじめてだったかな」

「うっん、今日で二回目」

どちらにしろはじめてに近いです。

「一応知ってはいるけれどね」

「それでもまあ一緒にな」

相方の子はそれを聞いたうえでまた言うのでした。

「行こうぜ、いいよな」

「皆あの神殿に行きたがるよね」

不意にこんなことを言い出してきました。

「やっぱり信仰ってあるんだ」

「あるよ。それも知らなかったのか」

「うん。どうしてもね」

首をぼんやりと傾げて答えています。

「家にも学校にもそうしたことはなかったし」

「それだったら仕方ないか。じゃあ今かなり戸惑っているよな」

「いや、あまり」

凄く図太いような。今の言葉って。

「慣れてきてるし、もうね」

「早いな、適応が」

相方の子も呆れています。私もですけど。

「二回目でかよ」

「慣れるの早いんだ」

それでも異常に早いと思いますけれど。

「だからさ。平気なんだ」

「そうか」

「じゃあこれ食べたら行こうな」

「これってもう」

見たら。もう殆どありません。

「御前五枚目でもそんなのかよ」

「悪いかな？」

「悪いかっていうよりな」

私も同じ意見です。どれだけ食欲があるのか。今まで色々な人をそれなりに見てきたつもりですけれどこれだけ食欲のある子はいはじめてです。しかもあんなに細いのに。

「馬かよ、御前は」

「よく言われるよ」

けれど全然気にしていない調子です。神経も本当に凄いです。

「まあ食べたらね。行こうよ」

「ああ、わかったよ」

相方の子も頷くしかありませんでした。何はともあれそんな話をしている騒がしい子に会った一日でした。

「いや、面白い子だよな」

「そうね」

お好み焼き屋さんを出てからおぢばのあちこちを三人で回りました。といっても商店街とお墓地だけなんですけれど。お墓地には教祖のうつしみが置かれているお墓地やその御家族に歴代の真柱様、本席であられ飯降伊蔵先生のお墓地もあります。他にも色々な方のお墓地もあります。奥華の大教会長さんの御先祖様のお墓地もあります。

第十四話 騒がしい中学生その八

私達は今そのお墓地へのお参りを済ませて坂道を下っているところでした。このお墓地は山から作ったものなんです。それで木々が周りにあります。お父さんとお母さんはその坂道を下りながらあの子の話をしています。

「あれだけ食べるのもいいけれど」

「元気がいいしね」

「そうかしら」

私はお父さんとお母さんのその話にはどうも賛成できませんでした。疑問符をつけた顔で首を捻るしかありませんでした。

「私はそうは思わないけれど」

「千里もそのうちわかるわよ」

お母さんはにこりと笑って私に言ってきます。

「男の子はあれでいいのよ」

「それはお店でも聞いたけれど」

「それがわかるのとわからないのとで成人が違っわよ」

心の成人です。これもおみちの言葉で成長することをこう言っています。

「いいわね、それは」

「何かわからないんだけど」

「また首を傾げてしまいます」

「そうなのかしら」

「おいおいわかるさ」

お父さんも言ってきました。

「少しずつな」

「特にね」

またお母さんが私に言ってきます。

「うちのいんねんだと千里も」

「私も？」

「多分年下の御主人貰うだろうし」

「つまりお婿さんよね」

教会は私が継ぐことになっていますんで。会長さんを迎えるわけですがそれは私の旦那様でもあるんです。できれば信仰心があつて優しい人がいいです。そりや顔は格好いいに越したことはないですけどやっぱり一生二人でいるんですから心が大事ですよ。

「だったら余計にすっかりした人が」

「すっかりするのは女の仕事よ」

天理教ではそうした考え強いです。女はおみちの土台だからです。

「だから千里もすっかりね」

「凄い不公平みたいなんだけれど」

「そうかしら」

何で自覚ないんでしょう。本気で理解不能です。

「男の子を照らしてあげないといけないのに。そんなこと言ったら駄目じゃない」

「駄目って言われても」

「そのかわり。女は明るく」

「明るく!？」

「そうよ、明るくね」

また言われました。

「わかったわね、それは」

「明るくないと駄目なの」

「お日様は明るいでしょ」

それはまあ言われるまでもなく。明るくないとやっぱり困るものです。けれどそれはもう言うまでもないことなんじゃないかな、って思いますけれど。

「だから。千里も明るくね」

「わかったわ。男の子を照らすのね」

「あの子なんかいいかも」

「そうだよな」

何でこんなに絶好のタイミングでお父さんまで頷くんでしょう。幾ら二十年近く夫婦やってるにしろこのタイミングはありません。

「千里にお似合いだな」

「何で年下の子を」

「千里はお姉さんよ」

お母さんがまた言います。何かお母さんはこうした話で私の味方をした記憶がありません。

「だから。もう一人弟をね」

「お母さんにとっては息子になるのよ」

私の旦那様ですから結果としてそうなります。こんなことはそれこそ言うまでもないことだと思いますけれどどうしてお父さんもお母さんも平気な顔なんでしょうか。

「それでもそんなに加減な子でいいの？」

「それはさつき言っただじやない」

あっさり切り返されました。完敗です。

「男の子はある程度はそれでいいから」

「ある程度って」

そのレベルがあんまりにも大きいような。

「あの子かなりみたいだけれど」

「そうかしら」

「普通だよな」

この二人は。私の両親とはいえ。

「肝心なのはおみちに沿っているかどうか」

「心さえしっかりしていれば問題はないんだよ」

「そうなの」

私は何事もちゃんとしないと駄目だと思いますけれど。駄目だったらそれこそ徹底的に教えてあげて。そうしてあげないとやっぱり駄目なんだと思います。

「そうよ。自然に沿ってくるから」

「長い目で見てな」

「長い目で見るのはわかるけれど」

それはわかります。けれどそれでも。

「そんなにおおらかなと何か」

「おみちはおおらかなものよ」

今度はこう言われました。

第十四話 騒がしい中学生その九

「だから。ゆつくりと一つずつ」

「夫婦揃ってな」

「夫婦揃って」

よく言われることですけれど。まだ高校生ですし。それでもまあ一応は考えはしています。

「だから千里は旦那様を照らすのよ」

「日様になって」

「そういうこと。それが肝心なんだから」

「女の子が日様なら」

「何？」

ここでふと思うことがあります。私はそれもしました。

「何か天理高校って日様が少ないような」

「それは気にしないの」

これで終わりでした。

「女子青年や婦人会もあるし」

「婦人会ね」

「そう、婦人会よ」

天理教では婦人会はかなり大勢の人達がいいます。教会長さんや信者さんの奥さんやお母さん達です。うちのお母さんもそうですけれど物凄い力があります。

「だからいいのよ」

「そういえば天理教って他の宗教より女の人の割合多いしね」

確かめたことはいきなり半分以上でしょうか。おぢばを歩いている女の人の方が多いんじゃないかしらって思ったかもしれません。

「だから。教祖は女の方よ」

「ええ」

このことがやっぱり大きいんですけれど。女の人が強い宗教なのは。

「だからそれでいいのよ」

「女の人が多くて」

「少ないのは学校だけだし」

それもそうです。先生は女の人もかなりの割合です。やっぱり確かめたことはないですけど半分位でしょうか。そんな感じです。

「大学は多いでしょ」

「ええ、まあ」

天理大学は女の人が目立ちます。それも綺麗な人が。

「天理高校だけだからね。それは」

「そうなのね。それじゃあ」

「わかったらその女の子のところへ帰りなさい」

それを言われると急に気分が暗くなります。お父さんやお母さんと別れるだけじゃなくて東寮に帰るというのが。これは東寮におられたことのある方なら誰でもおわかりですね。

「暫くしたらね」

「あまりそれは」

「ふそくは言ったら駄目よ」

お母さんもその東寮にいたことがあるのでわかっていますけれど。そのお母さんにこう言われました。わかったうえで、でした。

「いいわね」

「うん。それにしても」

「辛いでしょ、かなり」

「あれでかなりリベラルになったの？」

「そうよ、かなりね」

また言われました。

「私のいた頃よりもね。かなりだと思っわ」

「そうなの」

「そうよ。あの時は本当に軍隊みたいだったわ」

「軍隊って」

「それも帝国海軍よ」

海軍のことはよく知らないんですけど何故かとんでもなく怖い響きを感じます。

「凄かったんだから。特に二部はね」

「ああ、二部はきついつて聞くけれど」

これは本当によく聞きます。二部というのは所謂夜間の部です。私達はお昼で一部と言われます。二部にはおみちの子しか行けないです。一部は普通に高校から天理教を知ることになる子も入る事ができます。奈良から通っている子は天理中学出身の子の他は大抵そうです。

「昔は特にそうだったのね」

「そうよ。私達だって凄かったけれどね」

「ふうん」

「まあ今でもあれよね。毎朝四時半起きで朝御飯食べるのも必死でしょ」

「うん、そうなの」

本当のことですから隠したりはしません。

「凄いところよ。まだ慣れていないところあるし」

「それも一年の時だけだけれどね」

その一年が凄く長いんですけど。いえ、本当に。

「二年からはかなり楽になるわよ」

「そうかしら」

とてもそうは思えません。だってあんまりにも厳しいから。一見すると校舎みたいな東寮ですけどその中は監獄だって言われていたとか。

「そうよ。だから頑張りなさい」

「まあ私の部屋は先輩も優しいけれど」

「だったら最高じゃない」

長池先輩にはこうした面でも凄く感謝しています。

第十四話 騒がしい中学生その十

「一緒の部屋の先輩が優しくしたらそれだけで天国なのよ」

「そうよね。じゃあ私はやっぱり」

「御守護頂いてるのよ。感謝しなさい」

「うん。そうさせてもらうわ」

「だから後は旦那様だけね」

何でいつもそっちに話がいくんでしょう。先輩もクラスメイトも寮の皆もお母さんまで。私ってそんなに男の子が欲しいように見えるんでしょうか。

「お父さんみたいな人見つけなさいよ」

「ちょ、ちよっとお母さん」

私が言う前にお父さんが慌てて言ってきました。

「そんなこと言ったら」

「これだっと思ってたからよ」

完全にお母さんのペースになっています。どうもお父さんもお母さんには弱いです。何でも恋愛結婚でお父さんは年上のお母さんに完全に弟みたいに扱われていたそうです。それって今と全然変わらないんじゃないかしらっとも思ったりするんですけれどどうなんでしょうか。

「声をかけたのは」

「そうだったのか」

「ええ、そうよ。だから千里もね」

また私に話を振ります。

「いい人見つけなさい。いいわね」

「いい人って言われても」

「きつと見つかるから。お引き寄せでね」

またここでおみちの言葉が出ました。人と人の出会いもお引き寄せなんです。全て親神様の思し召しなんです。

「わかったら頑張りなさい。まずは寮に戻って」

「わかったわ。けれど寮でいい人は見つからないわよね」

「女の子同士は駄目よ」

勿論私にもそんな趣味はありません。同性愛って何なのか全然理解できませんし。やっぱり一緒になるのなら男の子がいいです。

「わかってるわよね」

「それは。私だってそうした趣味は」

「まあ別に否定はしないけれど」

「しないの」

「それは人それぞれ。それでも結婚は駄目よ」

っていうか女の子の人と結婚はできないんですけれど。けれど私が女の子だったら確かに長池先輩や高井先輩とは結婚したいな、って思うかも知れません。

「浮気も駄目だけれど」

「それは絶対に駄目よっ」

私もそれは同じ意見でした。

「そんなことしたら駄目に決まってるじゃない」

「そういうところは昔からね」

お母さんは私の言葉を聞いて微笑んできました。

「千里は。浮気とか不倫とかは本当に嫌いね」

「当たり前よ、そんなの」

本気です。それは絶対に駄目だと確信しています。

「何があってもそれだけは」

「そうよね。いつもそれを聞いて安心するのよ」

「そうなの」

「浮気をさせないことも大事だけれど」

これははじめて聞いた言葉でした。浮気をさせない。

「そこも気をつけなさいね」

「浮気をさけないの」

「そうよ」

そこをまた言われました。

「それも大事だから。気をつけてね」

「何かよくわからないけれど」

また首を傾げてしまいました。

「そんなのどうするの？」

「だからここでも暖かさが大事なのよ」

それも出て来ました。

「男の人を照らす暖かさがね。それがあれば」

「やっぱり違うの」

「ええ。男の人は月様だから」

これをまたまた言われました。お母さんは何かというと日様月様について話をします。それに凄じくだわりを見せてさえいます。

「照らされていないと駄目なの。照らされていないと」

「浮気するの」

「そう。だからいつも暖かい光を出してね」

それが大事だそうです。

第十四話 騒がしい中学生その十一

「照らしてあげなさい。いわね」

「照らすのは男の子だけ？」

「ここで急にそれに気付きました。」

「他の人はどうなのかしら」

「勿論他の人もよ」

私の疑問にすぐに答えてくれました。

「照らすの。いいわね」

「お友達もなのね」

「そう。後輩にしる家族にしる」

本当に誰でもみたいです。

「照らさないと駄目よ。わかったわね」

「わかったわ。そうなるわ」

「寮の先輩もそうじゃないかしら」

「あっ」

言われるとすぐにピンときました。そうです、長池先輩です。

「千里も照らされてるんじゃないの？」

「うん、確かに」

自分のことに置き換えて考えてみるとはつきりとわかりました。

「そうよね。言われてみれば」

「周りをよく見てね」

今度はお説教めいた言葉でした。

「そうしたらそれも見えてくるわよ」

「そうよね。そうしたこと」

「わかったのならいいわ。ただ」

「ただ？」

お母さんはまた私に言ってきました。

「日様は最初から輝けるわけじゃないのよ」

「どういうこと？」

「最初は。光なんてないのよ」

また随分とおかしなことを言うのね、って思いました。太陽が輝かないで何が輝くんでしょう。お母さんの話の中でこれが一番わかりませんでした。

「けれどね。努力しているうちに」

「輝けるようになるの」

「そうよ。そういうことよ」

「そうだったの。じゃあ私も努力して」

「いい日様になりなさい」

にこりと笑って私に言うのでした。

「皆を照らすようなね」

「ええ。そんな立派になれるかはわからないけれど」

「そこまで自信はありません。けれどやることはできますから。」

「先輩みたいに。なりたいわ」

「あの先輩の人？」

同じ部屋の長池先輩のことはもうお母さんに話しています。とても奇麗で優しくて素敵な人だって。女の子の私から見ても本当に素敵なんですから。

「ええ。あの人みたいにね」

「目標を持つことはいいことよ」

「今度の言葉はこうでした。」

「目指していけばね。きっと」

「立派になれるのね」

「そうでもあるわ。だからね」

「ええ」

お母さんの言葉ににこりと微笑んで頷きます。そして。

「いさんでいくわ」

「そういうこと。じゃあ東寮にも」

「それはちょっと」

けれどここでは苦笑いになっちゃいました。あつてあんまりにも
きついんですから。一年生の時は何事もとても大変なんです。

第十四話 完

2008・2・14

第十五話 中間テストその一

中間テスト

ゴールデンウィークが終わって暫くすると中間テストです。高校ではじめてのテストです。

普段は広い図書館もテスト前になると少し狭くなります。天理高校の図書館は特別に校舎にもなっていてとても広い図書館になっています。中に置かれている本もかなりの数です。

「こんなに色々な本があるなんて」

「思わなかったわよね」

クラスメイトの女の子の一人とテスト勉強の為に中に入ったのですが実ははじめてでした。中の本の数を見てまずはとても驚きました。

「私の通っていた中学校も凄かったけれど」

「そうなの」

私の通っている中学校はまた特別ですけれど。八条学園の図書館の蔵書は何でも世界屈指だそうです。天理大学の図書館もかなりのものですけれど。

「ここも凄いわね」

「やっぱりこの学校は何か違うわよね」

設備がとにかく凄くて。図書館もその一つというわけです。

「本が一杯」

「それに席だって」

ちゃんと個人で使える席になっていてしかも周りから見えないような造りになっています。ちゃんと何人かで並んで座れる席もあります。配慮まで感じられます。

「ちよっとした図書館みたいよね」

「ええ。じゃあ勉強する？」

「うん。けれどちよっと待って」

「どうしたの？」

「ほら、ここ」

図書館の本棚の一つを指差すとそこにあったのは。

「芥川の全集あるわ」

「あつ、太宰も」

作家の全集も揃っています。

「川端康成もあるし」

「森鷗外も。源氏物語もあるわね」

「何か本当に色々な本があるわよね」

「ええ。芥川なんか何種類もあるし」

こんなに本があるなんて。

「とりあえずさ。芥川はテストに出るじゃない」

「ええ」

教科書の定番ですね。他にも太宰とか志賀直哉とかも。

「一応読んでみる？」

「読む必要はないんじゃないの？」

けれど私は彼女にこう答えました。

「そこまでは」

「読む必要はないか」

「結局テストでいい点数取ることが大事じゃない」

私はそこを指摘しました。

「だったらそこまではね」

「そういえばそうか。けれど作品を幾つかは押さえておかないとね」

「それはね。ええと」

ここで芥川の作品を少し頭の中で出してみました。実際に言葉にも。

「芋粥に鼻に地獄変に」

「初期の作品だったっけ」

「ええ。何か末期になると凄くなるそうね」

「先輩の話だと頭がおかしくなっただって」

芥川は自殺していますね。何か聞いた話では薬をやっていたんじゃないかって言われているそうですね。随分大変な状況だったみたいです。

「頭が」

「まあテストには関係ないけれどね」

「そうですね。あとは作品の要点よね」

「そうそう、そこよ」

話はそこにもいきました。

「羅生門だし」

「座りましょう」

「そうですね」

まずは座って教科書を開いてそこから勉強に入りました。

第十五話 中間テストその二

「ここがこうで」

「そこがそうなるのよね」

まずは現国からでした。それから古文をやつて。とりあえずは国語系統からでした。一通り終わった頃にはもういい時間になっていました。

それで寮に帰ってから勉強で。普段から少しずつしていますけれどやっぱりテスト前ですから特に念入りにしているつもりです。つもりですけれど。

「頑張つてゐるわね」

部屋で長池先輩が私に声をかけてくれました。

「有り難うございます」

「その分だとテストいけるんじゃないの？」

「どうでしょうか」

けれどやってみないとわからないのでこれには答えることはできませんでした。

「それはまあ」

「それでも赤点は大丈夫なんじゃないの？」

自信なさげな私にこう言ってくれました。

「大体はわかつてるでしょ」

「ええ、まあ」

「だったら大丈夫よ。ああ、そうそう」

ここで先輩はまた私に言ってきます。

「一年生だからまだまだ先だけれど進路はどうするの？」

「進路ですか」

「ええ。やっぱり天理大学受けるの？」

「そのつもりですけれど」

家が教会ですからそのつもりです。それで大学でもおみちのこと

を勉強させてもらうつもりです。そうなたらまたおぢばに住まわ
せてもらうことになります。

「だったら英語勉強しておきなさい」

「英語ですか」

「そうよ、天理大学はまず英語」

それを言われます。

「だから重点的に勉強しておくといいわよ」

「そうなんですか。それじゃあ」

「実はね」

先輩はにこりと笑って私にまた言ってくれます。すつごく綺麗な
笑顔で。この笑顔を見せられたら多分どんな男の子も参ってしまう
と思います。

「私も天理大学受けるし」

「先輩もですか」

「ええ。やっぱり大学でも勉強したいし」

真面目な先輩らしいお言葉だと思いました。

「どちらにしろ卒業してからもおぢばには残るつもりよ」

「じゃあずつと会えるんですね」

「東寮じゃないけれどね」

それはわかっています。幾ら何でも高校を卒業してもこの東寮に
残るなんてことは有り得ません。やっぱりここにいるのは三年が普
通です。幹事の先生方も。

「だからまた色々だね」

「はい、その時また御願います」

「それにしてもあれじゃない？」

今度はあれと言われました。

「あれ？」

「ちっちゃかなり根つめてない？」

「そつでしようか」

「頑張るのもいいけれど無理はしないでね」

「はい」

「何だかんだで留年なんて滅多にないし」

まあそうだと思います。何だかんだで高校で留年する人は私も見たことがあります。ある格闘ゲームでいい加減に卒業しろ、って言われている短ランの人がいますけれど。

第十五話 中間テストその三

「人によつてはある程度だけ頑張るって人もいるしね」

「あつ、みたいです」

別に天理大学行かない人もいます。大学に行かなくても天理教の色々な場所で働くことができるからです。これもまたおみちを通るってことなんです。

「海外布教とかね」

「海外ですか」

「ちっちはそういうの考えたことある？」

「いえ、それは」

それは正直考えたことがなかったです。家の教会を継ぐことは考えていましたけれど。

「天理大学に合格するわね」

「はい」

「それで卒業して」

何か凄い未来な感じです。

「その後はどうするの？」

「一応家に帰ろうかと」

あまり考えていないですけど。そう考えています、一応は。

「それで仕込みを」

「そう。ちっちは教会の娘さんだしね」

やっぱりそれが大きいです。

「そつえば潤もあれよ。教会の娘さんだから」

「どうされるんでしょうか、高井先輩は」

「高校を卒業してから暫くはおぢばに残るんだって」

「えっ、そうなんですか!？」

高井先輩が残られるなんて。優しくて綺麗な人ですから嬉しいです。

「私もそのつもりだしね」

「長池先輩も」

「だから時々になるけれど会えるわね」

「はい、嬉しいです」

「嬉しいって」

私が笑顔になると何か先輩は苦笑いになりました。そのお顔でまた仰います。

「大袈裟よ。私達が残ることがそんなに嬉しいとは思えないけれど」
「やっぱり。知っている方ですから」

「そうなの」

「そうなんです。先輩はおぢばで何をされるんですか？」

「一応大学に行くつもりよ」

勿論天理大学のことです。

「だから三年になったらちっちゃと会うわね」

「隣ですから時々御会いできますよね」

「そうね。詰所に置いてもらうことになるし」

「詰所ですか」

それを聞くと何か少し違和感を感じました。それは今私が東寮にいるせいでしょうけれど。

「何かおかしい？」

「詰所に住まわせてもらえることもありなんですよね」

そのことを先輩に確かめるようにして尋ねます。

「そつえば」

「そつよ、何言ってるのよ」

先輩はおかしそうな笑顔になりました。

「当たり前でしょ。その為の詰所なんだから」

「そうですよね。私何言ってるんだろ」

「まあ気にしないで。それでね」

話が変わりました。

「ちっちゃもおぢばに残るのね」

「はい」

これはもう私のなかでは決まっていることです。

「大学に受からなくてもここにいさせてもらいたいです」

「そうなの、じゃあ当分ここなのね」

「ええ。ですからまた先輩と御会いできますね」

「私なんかと会っても何もないわよ」

先輩は私にこう笑ってきました。

「それでもよかったですね」

「それでも御願います」

私もこう言葉を返しました。

「先輩がいてくれると凄く心強いですし」

「わかったわ。じゃあ私でよかったです」

「ええ。それで御願います」

そんなやり取りの後でまた勉強です。いつもよりもずっと勉強漬けで遂にテストの日です。テストの日はそれが終わったらすぐに下校なんでまた図書館にです。

「ちっちゃって勉強は図書館派だったのね」

「落ち着くしね」

こうクラスメイトに答えます。

「ほら、寮だとね」

「それはね」

寮はとても忙しいですし学習時間もありますけれど部屋によってはシャーペンの芯を出すのも部屋の外でしなければいけないとしても大変ですから。だから図書館で勉強することが多いんです。私は中学校の頃から図書館で勉強することが多いんですけれど。

第十五話 中間テストその四

「仕方ないわね」

「この図書館使い易いし」

しかもこうした理由があります。

「いいと思わない？」

「そうね。あんまり居心地がいいから寝ちゃいそう」

「こらっ」

気持ちばかりますけれどね。

「寝たら駄目じゃない。何でそうなるのよ」

「だってテスト中でも寮は変わらないし」

「それは仕方ないじゃない」

今更言つても、つて感じです。

「それはそれ、これはこれでね」

「わかったわ。そうなのね」

「朝早いのは慣れてないの？」

この娘も教会の娘さんなので。

「朝のおつとめで」

「それでも毎日四時半よ」

本当は五時半ですけど一年生は実質こうなんです。一時間早く起きて部屋のお掃除にスリッパを揃えて。朝の点呼までにしておかないといけないんです。

「今までなかったわよ」

「まあそうだけれど」

「二年になったら変わるかしら」

「さあ」

実感できません。正直言つて。

「どうかしら。そもそも二年になること自体考えられないけれど」

「それを言ったらおしまいよ」

おぢばなのに寅さんの言葉になりました。

「留年しなければ大丈夫だし」

「それはそうだけれど」

「実感としてないのは確かよね」

とても感じられません。今一年生としてひいひい言っているんですから。それでどうして実感が持てるというんでしょう。とってもこれって小学校や中学校でも同じだったんですけれど。どうしてもその時のことで一杯で後でどうなるのかってわからないですよ。どうしてもね」

「そういうこと。だからね」

また私に言ってきます。

「それを言ってもね」

「そういうことなの」

「そういうこと。それでね」

話がここで変わりました。

「今日のテストどうだったの？」

「まあ一応は」

とぼけることもできますけれどそういうの好きじゃないんで。それでこう答えました。ただあまり答えとしてはどうかと思いますけれど。

「書けることは書けたわ」

「書けるのは誰だってできるんじゃない」

「ええ。それはね」

こう切り返されました。意外と手強いというか。

「まあそうよね」

「できたかどうかなのよ。そこんとこどうなの？」

「とりあえずは大丈夫……だといいわね」

あまり自信のある性格ではないんで。こう答えました。

「正直なところ」

「そうなの」

「ええ。正直返って来るまでわからないわ」

本当にそうですよね。自分ではできたと思っていてもできていなかったり。そういうことがあるからあまり断言したりはしないんです。

「欠点じゃないとは思いますが」

「だったらいいじゃない。それで済むんだから」

天理高校に通っているところした考えになっってしまうみたいで。テストは四十点を下回らなければそれでいいや、って考えてしまうようになるんだそうです。これが天理高校生の悪い癖なんだと先生によつてはばやかれることもあります。その先生も出身は天理高校なんてことはざらなんであり強くは言えないみたいですけれど。

「そうですよ」

「それを言ったらおしまいよ」

今度は私がこの言葉を使いました。

「けれど実際そうなのよね」

「それでもちっちはできてるんじゃないの？」

「何でそう言えるの？」

「だっていつも勉強してるじゃない」

それが理由みたいです。

「だからよ。安心していいと思うわ」

「そうなの」

「継続は力なり」

ここで諺が出て来ました。おみちでも結構言われる言葉です。おみちの言葉じゃないですけどこれを守っておきなさいということ

第十五話 中間テストその五

「そうでしょ」

「何かお母さんみたいな言葉ね」

「それは言わないでよ」

「どういうわけかこう言われると困った顔を見せてきました」

「よくおばちゃん顔って言われるし」

「そうなの」

「そうなのよ。それこそ子供の頃からよ」

「あらあらそれは、聞いていてかなりのものだと思いました」

「それで困ってるのよ」

「そんなふうには見えないけれど」

「ちつちとは違うのよ」

私は童顔だって言われます。小柄なせいで余計にそう言われるんです。

「私背も高かったし」

「高かったのね」

「そう、高かったの」

今は普通なんです。女の子って背が伸びてもすぐに止まったりしますよね。私は小学校どころか幼稚園の頃からずっとクラスで一番前でしたけれど。

「今はこんなだけねどね」

「背って伸びないのよね」

「ちつちは特にね」

「否定できないわね」

凄く残念なことに。それにしても高校に入ってからずっと背のことばかり考えて話しているような。気のせいじゃなくて本当に。自分でも困ったことです。

「それは」

「低いのは事実だしね」

「そうなのよ。おみちの女の人ってそういう人が多いし」

「背の高い人は少数派？」

「多分そうよね」

私の家なんてお母さんもお婆ちゃんも叔母さん達も妹達も。皆が皆背が低いんです。私が一番低いらしいんですけれど。これは一族の皆から言われます。

「修養科の人達を見ても」

「元々日本人って背は低いんだけれど」

「最近高くなつたし」

天理高校では男の子は何か結構大きいんですけれど。何で女の子はそれで低い娘が多いの？っていうのは不思議なんですけれど。

考えれば考える程わからないところがあります。

「私なんて牛乳飲んだり必死に頑張ってるのよ」

「それでも伸びないのね」

「全然よ」

遺伝なんでしょうか。

「一五五は欲しいのに」

「あまり高い望みじゃないわね」

「高望みはしないの」

これは私の考えです。そういうのは好きじゃないんです。

「特に背のことは」

「そうなの」

「そうなの。それでもあと五センチだけでも」

「やれやれ。ちっちもコンプレックスあるのね」

「ない人なんているのかしら」

私は背のことで。他にも色々なことでコンプレックスを持っていますよね。そうしたことでお父さんやお母さんのところに来る人も多いんでそれは知っています。

「正直なところ」

「いないんじゃないの？」

実に正直な返事でした。

「そんなのって」

「そうでしょ？だったら私だって」

私自身のことを肯定します。背が低いのだって。

「別にいいじゃない」

「そうよね。もてる材料にもなるし」

「えっ!？」

今の言葉には思わず声をあげました。

「もてるって？」

「だから。小柄な女の子ももてるのよ」

そう言われました。これもよく言われることですけれど。

「ちっちなんかは特にそうかもね」

「小さい小さいってよく言われるけれど」

それも何ていうか。言われる度に困った顔になっちゃいます。

「それでもそれは」

「まあまあ。それにちっちは確かに小さいけれど」

「否定しないじゃない」

「けれどいいじゃない。可愛いんだし」

「そうかしら」

ブスって面と向かって言われたことがあります。子供の時ですけれど言われた瞬間に大泣きしてそれでその日は一日中泣いていました。

「可愛いわよ。それこそアイドルになれる位ね」

「お世辞言っても回転焼きも鯛焼きも出ないわよ」

「それは月次祭にはお父さんとお母さんがいつも買ってくれるからいいわ」

「じゃあ天津甘栗も出ないわよ」

少しムキになって言い返しました。月次祭になると商店街に出店が並んでそこに鯛焼きだのが売られるんです。私もよく買ってもら

いました。

第十五話 中間テストその六

「別にいいわよ。自分でも買っし」

「うっ……」

「けれど可愛いのは事実よ」

「そうかしら」

自覚ないんですけれど、それは。

「私だけが言ってるんじゃないかって皆が言ってることよ」

「皆が？」

「そうよ、皆」

こつも言われます。見れば彼女の顔は少し真面目です。

「特に男の子がね」

「自分の顔がそんなにいいとは思わないけれど」

「自分ではわからないものよ」

そうなんでしょうか。自分だからこわかることだと思っんですけど。けれど彼女の言葉だとそうじゃないみたいです。何か不思議な言葉です。

「だからちっちはそれには安心していいわ」

「うっん」

頷くことはできませんでした。どうしても実感できないことでしたから。

「そうなのかしら」

「自覚できないならそれでいいけれど。さて」
話が変わりました。

「勉強に戻りましょう」

「ええ、そうね」

また勉強に戻りました。そんな数日間が終わってテストが帰ってきました。結果はとりあえず赤点とは全く無縁で私としても満足のいくものでした。とりあえずはよかったです。

ところが。テストが終わって一息つく間もないんです。何故なら。

「ねえ、今度ね」

「あつ、あれね」

私は用木コースにいます。それで何かと急がしのですがひのきしんが入ったのです。ひのきしんとは強いて漢字で書くと『日の寄進』と書くそうです。簡単に言うとボランティアでの勤労奉仕です。

「おぢばがえりの話が出てるんだけれど」

「えっ、もう!？」

それを聞いてびっくりです。まだ五月なのに。

「まだ五月だけれど」

「それでもよ」

何かもうその話が出ているそうです。何と早い。

「といつてもまだ打ち合わせの段階だけれど」

「でしょうね」

「ただ。それに合わせて色々とお掃除するところはあるみたい」

「お掃除って今からなの」

何かそれでも話が異常に早いような。どうなってるんでしょうか。

「倉庫とかだけれどね」

「倉庫を」

「ええ。それでね」

話が動く段階に入りました。

「今日からちよつとお掃除で忙しくなるわよ」

「やれやれね」

話を聞いて少し溜息です。

「ってふそく言ったら駄目なのね」

「そういうこと。是非共やらせてもらわないとね」

「ええ。それじゃあ」

「あつ、あとちっち」

今度は私自体に話が向けられました。

「何？」

「テストどうだったの？」

話はそっちでした。

「できたの？どうなの？」

「まあ一応はね」

こう答えることにしました。

第十五話 中間テストその七

「満足はしているつもりよ」

「そう、よかったわね」

この娘は私の口からこの言葉を聞いてまずはにこりと笑ってくれました。

「私も何とか後々まずいようにはならなかったわ」

「よかったわね、お互いに」

「ええ。それにしてもね」

ここで問題がありました。

「寮で勉強するのって中々慣れないわね」

「それはね」

これは私も同意です。

「図書館は勉強し易いんだけれどね」

「そうね」

「大学の図書館はどうかしら」

お隣の天理大学の図書館について考えました。あの凄く大きい。

「あそこは勉強するには物々しくない？」

「それもそうね」

言われてみれば確かに。大き過ぎます。

「じゃあやつぱり高校の図書館がいいわね」

「ええ。それによく考えたら」

ここでちよつと危ない確信の事実が。

「うちの図書館ってテスト前でもあまり人が多くないわね」

「あつ、そういえば」

言われて私も気付きました。

「そういえばそうよね」

「皆あまり勉強してないとか？」

「自宅生は自分のお家でするしね」

天理高校の生徒は大きく分けて二つなんです。奈良にいて自分の家から通っている子と私達みたいに地方にお家があって寮から通っている子。代々半々って割合でしょうか。

「寮で勉強する子もいるしね」

「それはあまり考えられないけれどね」

「人それぞれっていいことでしょうね」

私はこう考えることにしました。

「そのところはね」

「そういうもののなね」

「そういうものよ。さて」

ここで私が言いました。

「今度はひのきしんね」

「そういうこと。頑張りましょう」

「ええ」

今度はそっちに話に向かいました。本当に天理高校は何かとやることが多いです。大変です。けれど何か慣れてくると。お父さんもお母さんもおいなくて寂しいことは寂しいけれど充実してきた感じですよ。

第十五話 完

第十六話 色々大変ですその一

色々大変です

ひのきしんに部活に寮生活に学校に。順番が滅茶苦茶になつていくかと思いますがとにかく何を取っても天理高校での生活は本当に大変です。体重が減ったみたいな。

「体重が減っても背が伸びないのよねえ」

「自分で言つてどうするのよ」

佐野先輩に言われました。小柄でショートヘアの人です。可愛い感じですが特に印象的なのはその目です。垂れ目ですぐにわかるんです。広島教会の娘さんです。時々広島弁が出ることも。

「けれど一年の時は皆そうよね」

「ハードですから」

「一年は皆じゃけえね」

ここで広島弁が出ました。最初聞いた時は私もびっくりしました。綺麗な人が急に凄い言葉出すんだなつて。けれど慣れてみるとそれ程でも。おぢばでは方言を聞くことも多いんです。

「それはね。けれど二年になればね」

「違うんですか」

「三年になればもう全然よ」

こつも言われました。佐野先輩も三年生です。長池先輩や高井先輩と一緒に。それにしても思ふんですが私にしる私の周りの人達にしる何か名前が変に決まっているような。何年か前から中村つていう私の名前から『ノリ』つて言われたりします。近鉄が優勝した時は大騒ぎでした。あと長池つて阪急の選手がいたそうです。私はそこまでは全然知らなかったりするんですけれど。

「平気になるからね」

「そうなんですか」

「私も一年は大変だったしね」

やっぱり先輩もそうだったみたいです。

「けれど一年だけだからね」

「わかりました」

皆から言われます。殿上人扱いの三年生の人からの言葉です。

「二年生になれば随分変わるわよ」

「学校では全然それはわからないですよね」

「寮だからわかるのよね」

「はい」

本当にその通りです。寮がメインになっています、明らかに。

「ところで美紀はどう？」

「長池先輩ですか」

「そうよ。優しい？」

それを尋ねてきました。何か長池先輩についてはいつもこう聞かれます。その度に同じ言葉を返しているんですけれど。本当にいつもです。

「怖くない？」

「怖くなんかないですよ」

私はいつもの返事をしました。

「とても優しいですよ」

「そう、よかったわ」

佐野先輩はそれを聞いてほっとしたように笑いました。

「美紀もね。短気なところがあるから」

「いえ、全然ですけれど」

これもよく言われます。どうしてかわからないですけど。

「けれど優しいのね。よかったわ」

「親切ですし。それにとっても綺麗で」

「綺麗よね、本当に」

そう言う佐野先輩もかなり。何か先輩には綺麗な人が多いと思います。宮城から来たっていう真木先輩なんかもとても綺麗です。

「色白いし目キラキラしてるし」

「スタイルもいいですし」

「私なんかよりずっと背が高いし」

これは私も同感です。本当に羨ましいです。

「羨ましいわ」

「先輩ですか」

「ええ、ちつちもなのね」

背の低い者同士。それはとても感じます。

「背が低いのは」

「そうですね。物凄いコンプレックス感じて」

「まあそれを言うのは止めましょう」

先輩からストップがかかってきました。

「言っても仕方ないしね」

「そうですね。努力はしてるんですけど」

「私だってあれよ」

先輩はその垂れた目に困った色を見せながら仰います。

「バナナだっていつも食べてたけれど」

「バナナをですか」

「ええ、バナナをね」

バナナを食べると背が高くなるんでしょうか。初耳です。

「いつも食べていたんだけれど。授業中でも」

「それはまずいんじゃない」

幾ら何でも授業中に何かを食べるのは。そういえば高井先輩もそんなことを仰っていたような。

第十六話 色々大変ですその二

「見つかつて怒られたわ」

「そうでしょうね」

それはわかります。やっぱりっていうか。

「立たされたわ」

でしょうね。そんなことしたら。

「ちっちも気をつけなさいよ」

「はあ」

「うちの先生は厳しいしね」

「厳しいですか？」

「そうよ、厳しいわよ」

それ以前の問題じゃないかしらと思うんですけど先輩は違うお考えみたいです。それにしてもこの先輩も色々苦労されているんだと思いました。背のことで。

「何かとね」

「寮は厳しいですよね」

「あそこは自衛隊よ」

何か凄い表現ですけど否定できませんでした。

「厳しいってレベルじゃないわよ」

「昔はもつと凄かったんですよね」

「海軍みたいだったらしいわね。私実家広島じゃない」

「ええ」

広島といえば海軍です。江田島がありますから。他には広島東洋カープとか牡蠣ってイメージがあります。広島には奥華の系列の教会も結構あつて行くことが多かったんです。

「だからよく聞いたのよね」

「それで海軍っていうとどんなのですか？」

「鬼ね」

一言でした。

「滅茶苦茶凄かったんだって」

「東寮よりもですか」

それを聞いても実感できません。東寮よりもずっときついつて何なんでしょう。

「ずっとみたいよ」

「うわ……」

話を聞いてびっくりです。何か海軍つて名前を聞いていて凄く厳しいんだっていうのは感じたりしていたけれどそれでもです。

「凄かったんですね、本当に」

「正直東寮もかなりだけれどね」

「北寮より厳しいみたいですよ」

「ああ、それね」

これは先輩も御存知でした。

「男同士より女同士の方が凄くなるのよね」

「ですよね」

「これって男の子からは信じられないそうよ」

私にはここがわかりません。男の子の方が厳しいんじゃないかしらって思っんですけれど実際は違います。女の子の方が何かときついんです。

「まあ北寮も先輩は凄いらしいけれどね」

「そうらしいですね」

それでも、です。

「それでも東寮よりはましよ」

「東寮に耐えられたら何処でもいけるそうですね」

「それは私も言われたわ」

言い換えればそこまで厳しいってことなんですけれど。

「だから頑張れって。一年の頃は毎日泣いていたけれど」

「毎日、ですか」

「そう、毎日だったわ」

これもよくある話で。私の友達にもよく泣く娘がいます。

「それこそね」

「そうだったんですか」

「中学校出ていきなりよ」

そう、本当にいきなりなんですよね。氣分的にも時間的にも。

「寂しいの何のつてなかったわ」

「どうしてもそうなりますよね」

私もやっぱり寂しくて仕方ないです。それは否定できません。

「三年ですか」

「もつといるんじゃないの？」

「もつと！？」

「だから。高校出た後よ」

かなり未来のことを言われた気になりました。そんな未来のことを言われても今一つ実感が無いっていうのが本音なんですけれど。

「やっぱりあれでしょ？おぢばに残るつもりよね」

「天理大学受けるつもりです」

正直にこう言いました。

「じゃあやつぱり」

「ちつちの実家の教会って神戸だったっけ」

皆それを知っています。佐野先輩の広島よりも近いですけどそれでもそうそう簡単に通える距離じゃないです。そこところは大阪の人達が羨ましかったりします。

「はい、そうです」

「だったらここに残るわよね」

それをまた言われました。

「東寮から出ても」

「詰所に入るんでしょうか」

私は自然とこう考えました。詰所はその為にある場所ですし若しおぢばに残るとなったらやつぱりそこに入ることになります。これは皆そうです。

「それだと」

「そうなるわよね、やっぱり」

「詰所だったらまあ」

私はそれは抵抗がありませんでした。それこそもう子供の頃から何度も泊まっていますし知っている人ばかりです。あそこだと全然平気です。

「抵抗ないです」

「やっぱり詰所は落ち着くのね」

「はい」

先輩の言葉に頷きます。

「東寮はやっぱり厳しいですし」

「それがあるのとないのとで全然違うわよね」

「先輩に言う言葉じゃないですけど」

そうなんです。あの規則の厳しさが特になんです。

「そうなんです」

「詰所によって違うけれどね」

大教会ごとにあるんで本当にそれぞれです。私のいる奥華のそれは皆ざつくばらんで過ごし易いです。だから私も落ち着くんです。

第十六話 色々大変ですその三

それで私は言いました。

「ですよ、やっぱり」

「私の詰所はね」

佐野先輩の大教会の詰所は。

「よく考えたら元々あれじゃない」

「あれっていいですよ」

「奥華の別れじゃない」

大教会の下の大教会が大きくなってそこが大教会になることをこう表現します。奥華は佐野先輩の九花の元の大教会ということになります。

「といつても私が生まれる前に別れたんだからね」

「そうですね。じゃああの詰所に行かれたことは」

「悪いけどないのよ」

「やっぱりそうでした。」

「いつも九花だけよ、行くのは」

「そうですね。そういえば私も」

他の詰所に行くことはまずないです。

「同じです」

「そうしたものなのよ。結局他の詰所には行ったりしないわよね」

「そうですね」

「けれどお付き合いはあるけれど」

所属の大教会が違ってこれもあります。

「学校だとそれは殆どないしね」

「ええ。私もこんなに他の大教会の人とお付き合いしたことってないです」

「教区でしょ」

「はい」

天理教は大教会の他に教区といって今いる都道府県で分けられていたりもします。この単位を教区と呼びます。私は兵庫に入ります。「何か全然違うお付き合いになっていきます」

「私もそれで言葉が変わったし」

「あつ、そういえば先輩の広島弁って」

「結構消えてるでしょ」

「奈良弁というか天理弁は入ってきていますね」

「自然とこうなるのよ」

「やっぱりいたらこうなりますね。二年も三年もだと。そういうことみたいです。」

「おふでさきだって天理の言葉で書かれているわよね」

「ええ。それで結構」

「おふでさきとは教祖が書き残された和歌形式のお言葉です。そこには色々な教えが書かれています。天理教の重要な教典の一つです。」

「苦労しました」

「関西人のちつちもそうでしょ？私なんかそれこそ」

「苦労されたんですね」

「結構ね。関西弁に慣れていなかったから」

「広島ですか」

「私の中のイメージでは広島弁は大阪のそれに近いっていうのがあるんですけどそれはどうも違うみたいです。先輩のお話ですと。」

「広島は。ほら」

「先輩の顔が苦笑いになりました。」

「ヤクザ言葉だから」

「ヤクザ言葉!？」

「そう言われてもあまりピンと来ないです。」

「何ですか、それって」

「ああ、ちつちって東映の映画とか知らないのね」

「東映は特撮とかアニメなら」

「知ってはいますけれど他は知らないです。」

「知ってますけどそういうのもあるんですか」

「あるのよ。仁義なき戦いとかね」

「ああ、それなら」

その映画は聞いたことがあります。有名ですね。

「知ってます。けれどあれって東映だったんですね」

「そうよ、東映よ」

「そうだったんですか」

はじめて知りました。私は時代劇も好きなんですけれど東映はそれと特撮ってイメージが強いですから。ヤクザ屋さんの世界には興味ないですし。

「意外だった？」

「意外っていいですか」

こう先輩に答えます。

「全然予想もつきませんでした」

「東映ってそっちも有名なんだけれどね」

「はあ」

「まあいいわ。それで結構広島って言われるのよ」

「ガラ悪いっていうのですか？」

「そうなのよ。広島は確かにあの筋の人が多いけれど」

これは本当に有名です。神戸にいる私どころか日本中で有名です。から。奥華でも広島に教会が結構ありますからよく聞いてきています。

「普通の人だって多いのよ」

「ですよ」

言うまでもないことですけれど何故か先輩は異常にこだわっています。

「私がいるのはそっちの方じゃないし」

「広島市内じゃないんですか」

「呉でもないわよ」

呉の方にも奥華の系列の教会がありますけれどやっぱりそうした

人が多いらしいです。呉名物は自衛官とそっちの筋の人だそうです。

第十六話 色々大変ですその四

「福山の方なの」

「福山ですか」

「そうなの。だから違うのだけれど」

「それでも言われます?」

「言われるわ」

先輩の顔が憮然としたものになりました。

「一年の頃はそれで言われたし」

「そうなんですか」

「やっぱり言葉でね。あとは」

「あとは?」

「お好み焼き」

今度は食べ物話が出て来ました。

「いい、ちっち」

「はい!」

急に言葉も顔も真剣なものになってきました。

「お好み焼きは一つしかないのよ」

「一つしか、ですか」

「そう、広島だね」

何か急に気迫まで感じてきました。雰囲気も全然違います。先輩はその目のせいかかなり穏やかなオーラを感じるんですけど。もつとも先輩達のお話だと佐野先輩は所謂かなり『やんちゃ』で元気な人らしいですけど。それはよく知らなかったりします。

「広島のお好み焼きしかないのよ」

「大阪のはどうなんでしょうか」

「邪道よ」

はつきりと言ってきました。

「あんなのはお好み焼きじゃないわ」

「やっぱり広島ですか」

「あれこそがお好み焼きよ。特に」

「特に？」

「もんじゃ」

これが出て来ました。私は食べたことがないですけど。

「あんなのは絶対に食べないわよ」

「絶対にですか」

「あれって巨人の歌聴きながら食べるのよね」

「えっ!？」

これはかなりびっくりでした。幾ら東京でもそれは。

「巨人はこの世で一番嫌いなものよ」

「広島でもそうなんですか」

「潰れてしまえばいいのよ」

どうやら本当に嫌いらしいです。

「あんなチーム。何が球界の盟主よ」

「そうですね」

それは同意です。そんなこと言ってやってることっていったら。

何処かの独裁国家と同じだと思います。マスゲームが練習じゃないかしらって思ったこともあります。

「あんな最低最悪のチーム、日本からなくなって欲しいわよ」

「悪いんねんばかり積んでいますよね」

「そのうち大変なことになるわ」

そうなって欲しいです、是非。

「人気もなくなって新聞も売れなくなって」

「はい」

「最下位ばかりになってね。今だって変な補強ばかりしてるじゃない」

「あのオーナーが駄目なんでしょうね」

「でしょうね」

日本の誰もが知っていて嫌っているあのオーナー。私もお爺ちゃ

んお婆ちゃんや年輩の信者さん達にあんな人間とは一緒にならないようにって言われています。誰があんな人間と。

「とにかく東京は大嫌いよ」

「大嫌いなんですね」

「巨人ももんじゃもね。何もかも」

「東京に行かれたことあるんですか？」

「一度だけあるのよ」

そうらしいです。

「お父さんが信者さんの都合で行った時に。まだ子供だったけれど」

「どんなのでした？」

「寒かったわ」

眉を顰めさせての言葉でした。

「何か底冷えして風が冷たいし」

「おぢばよりですか」

「そうね、おぢばよりね」

何かかなり寒いみたいです。私は神戸の人間なんで冬は風に苦労しますけれどどうやらそれよりもまだ風が強いみたいです。

「寒いし東京ドームはあるし」

また巨人が出ました。

「新聞は巨人贖身だし」

「それは凄く嫌ですし」

「美味しいものはないし物価も高いのも」

「いいことないじゃないですか」

「やっぱり広島が一番よ」

そこまで言うてにこりと笑う佐野先輩でした。

「それとおぢばがね。ここも慣れるとね」

「いいんですか」

「落ち着かない？」

確かにそれはそうです。

「人情もあるし穏やかだしね」

「そうですね。それは」

とりあえず東寮は置いておいて。確かに人は優しいですし穏やかです。

「だからいいのよ。野球は阪神ばかりだけれどね」

「広島じゃなきゃ駄目ですか」

「やっぱりあれね。江夏の二十一球」

聞いたことがあります。何でもこれを実際に見てはいないのにずつと心に残っていて一生忘れられない人までいるそうです。そこまでの名場面だったとか。

「あれを見ずして野球はないわ」

「ですか」

「ちっちはやっぱり阪神ファンかしら」

「ええ、そうですけれど」

それこそ一家代々の阪神ファンです。それを誇りにすら思っています。

第十六話 色々大変ですその五

「じゃあ江夏といえば」

「やっぱり阪神時代ですよ」

それこそお父さんもお爺ちゃんもお母さんもお婆ちゃんもそう主張します。あと田淵は阪神の田淵なんだと物凄く言われてきています。

「背番号は二十八で」

「二十六じゃなくてなのね」

「ええ、私もそう思います」

やっぱり江夏豊といえど背番号は二十八ですよ。他には考えられません。私の好きな数字でもあります。他には十、十一、二十二、三十一、特に四十四が好きです。

「江夏っていったら関西じゃそうですよ」

「広島とは全然違うのね」

「ですよ。あと違うっていえど」

そこで思い出したのは。

「お好み焼きとかもですよ」

「お好み焼きは広島ね」

いきなりこう定義付けられました。

「他は駄目よ」

「駄目なんですか」

「そう、大阪風ってあるじゃない」

何かお話が江夏豊とか野球のよりも白熱してきました。おぢばにもお好み焼きのお店がありますけれどやっぱりそれは大阪風なんです。関西ですから。

「あれは駄目よね。やっぱり広島風じゃないと」

「はあ」

「おぢばでもねえ」

先輩は困った顔になりました。私と同じことを考えているみたいです。

「普通にお好み焼きはあるけれど」

「大阪風だから駄目なんですか」

「お好み焼きじゃないわ」

「こうまで仰います。」

「広島にもおみちの人多いんだからそこは工夫してくれないかしら」
「はあ」

「たこ焼きはいいとして」

「ちなみに神戸じゃ明石焼きなんていうのもあります。たこ焼きをおつゆにつけたものでうちのお父さんの大好物だったりします。」

「お好み焼きだけは広島よね」

「それで先輩」

「私はそう主張して止まない先輩に尋ねました。」

「ええ、何かしら」

「先輩はお好み焼きの時は飲み物は何ですか？」

「コーラかしら」

「少し考える顔になってから答えてくれました。」

「やっぱり」

「そうですね、先輩はコーラですか」

「ちっちは何なの？」

「私はサイダーです」

「コーラも嫌いじゃないですけど。」

「ただ」

「ただ？どうしたの？」

「炭酸飲料はできるだけ飲まないようにはしています」

「どうしてなの？」

「あれって骨に悪いですよ」

「子供の頃からよく言われています。骨を溶かすって。」

「だからあまり飲まないようにはしています」

「そうなの」

「背が伸びなくなるんで。それだと」

「また背なのね」

「はい。そのかわりにできるだけ牛乳とか野菜ジュースとか豆乳にしています」

「何かそれって」

先輩は私の言葉を聞いてふと考えた顔になります。それから私に言ってきました。

「プロ野球選手みたいね」

「スポーツ選手ですか」

「そう。しかも広岡監督の時のプロ野球選手みたいよ」

また随分昔のお話です。私はあまり知りませんけれど。

「豆乳なんて」

「豆乳は身体にいいですよ」

私は豆乳大好きなんです。身体にもいいですし。

「それに美味しいですし」

「まあそうだけれど。ただ」

「ただ？」

「私が言うのもあれだけれど」

急に様子が変わってきました。腕を組んで首を捻っておられます。

「それで伸びるの？」

「背、ですか」

「ええ。伸びるの、豆乳で」

「多分」

私も凄く自信ないですけどこう答えます。

「多分伸びると思います。私だってまだ十五ですし」

今年で十六になります。成長期はまだありますよね。

「ですから。多分」

「どうかしらね。私だってね」

先輩の顔がまた変わります。まだ急に。

第十六話 色々大変ですその六

「背は欲しいのだけれど」

「背がですか」

「そうなのよ。小さい小さいってずっと言われていたし」

「それってやっぱり嫌ですよね」

「勿論よ」

ここでの先輩と私の意見は完全に同じでした。先輩も背が低くてそれをコンプレックスにしておられます。ただ先輩は顔が可愛いんでそれが私との大きな違いです。

「あと十センチは欲しいのだけれど」

「十センチですか」

「そうすれば一六二センチだから」

つまり先輩は一五二センチです。私より二センチ高いということになります。

「凄い高いわよね」

こう私に言ってこられます。

「どうかしら」

「一六二センチですか」

確か深田恭子さんがそれ位だったような。あの人も最初と今では雰囲気全然違うように思えます。好きな女優さんではありませんけれど。

「普通じゃないんですか？」

「普通かしら」

「はい、世の中だと多分」

つまり私達が低過ぎるわけで。自覚せざるを得ません。

「そうなんじゃないかなって思っんですけれど」

「そうかも。けれど認めるのは」

認めたらそれこそチビだってことですから。それはやっぱり。

「江戸時代じゃ私の背が男の人の背だったらしいのだけれどね」

「えっ、そんなに小さかったんですか」

「そうらしいわ」

それはまた随分と小さかったんだと。お話を聞いてびっくりです。ということはです。立教が天保九年十月二十六日ですからその時の方々は。

「だとすると秀司やこかん様は」

御二人とも教祖のお子様です。教祖伝では物凄い色々と活躍されているお姿が書き残されています。私はこかん様がとても大好きです。

「今の人から見たら小さかったのだと思うわ」

「そうなんですか」

「時代によって人の背って変わるそうだし」

初耳です。というか考えたことなかったです。

「昔は一六〇あったら女の人じゃかなり高かったそうよ」

「へえ」

「私やちっちでも高かったそうだから」

「私ですか」

何か夢みたいな言葉です。

「そっだけ昔になりたいわよね」

「そうですね。私が大きいつて」

「ちっちつてあれ？」

ここで私に話を振ってこられました。

「はい？」

「子供の頃から一番前だったのかしら」

「そうです」

答える時に俯いてしまいました。

「伸びないんです、本当に」

「私もなのよね。幼稚園の頃から一番前で」

「ですか」

「それで今も。伸びないままなのよ」

「大きくなったら背も伸びるって言われませんでした?」

「お父さんとお母さんに言われたわ」

「やっぱりそうでした。ちなみに先輩は八人兄弟だそうです。それで皆美男美女だとか。確かに先輩も可愛いですし。もてない筈がな
いと思うんですけれど。」

「それでもね。広島弁はかなりなおっても」

「背はですか」

「何食べたらずかかったのかしら」

「またしてもここで食べ物の話です。」

「背が伸びるには」

「私もそれ知りたいです」

「紛れもない私の本音です。」

「伸びなくて、本当に」

「わかってれば私も大きくなっていると思わない?」

「うっ……」

「それを言われると。」

「この話止めない?絶対に答えでないわよ」

「そうですね。それじゃあ」

「そういうこと。それにしても東寮に来た時ねえ」

「何かあったんですか?」

「正直方言が凄かったのよ」

「広島弁ですね、それってやっぱり。」

第十六話 色々と大変ですその七

「今は私って言うてるじゃない」

「はい」

「これがうちだったのよ、最初は」

「うち、ですか」

「そう、広島って女の子の一人称がうちってなるのよ。それ使う娘が多いわね」

「へえ、そうなんですか」

それは初耳です。広島弁がどんなのかは少しだけイメージでわかっ
てはいたんですけれど。一人称にも特徴があったんですね。

「それ言われたわね。じゃけえって言葉と一緒に」

「うちって言葉もですか」

「男はわしのよ」

何かお爺ちゃんみたいです。

「若い子でもわしって言うわ」

「若い人でもですか」

「そう、広島を舞台にした漫画があつたけれど」

はだしのゲンでしょうか。

「はだしのゲンとか」

やっぱりそれでした。けれどそれだけじゃありません。

「あとBADBOYSね」

「BADBOYS?」

「暴走族の漫画よ。そういうのは見ないのね」

「暴走族嫌いですから」

「私も嫌いだけれど。そうよね、やっぱり」

「はい。先輩は?」

「私だって不良とかヤクザ屋さんとかそういうのは好きじゃないわ
よ。広島には履いて捨てる程いるし」

そんなにいるんですか。何か話を聞いていると広島って物凄いくらいじゃないかしらって思えてきました。ヤクザ屋さんに暴走族が普通にうようよいるって。

「けれど広島が舞台だから知ってるのよ」

「そうだったんですか」

「そうなのよ。その漫画でも男は皆わしで女はうち」

「そうらしいです。何か物凄い世界みたいですけど。」

「それで私もそうだったけれど」

「変わったんですね」

「かなり言われたし」

「ここで顔が少し憮然としたものになっておられました。」

「私の広島弁」

「ですか」

「大阪弁と比べてそんなに変わってるかしら」

私にはあまりわからないですけど。私も結構頭の言葉が出てるって言われています。

「どうかしら」

「どうなんでしょ」

「やっぱりあまりわかりません。」

「私はそんなに思わないですけど」

「そうなの」

「ええ。それよりもですね」

ところで今私達は神殿の前を歩いています。売店が立ち並んでいて楽しい場所ですけどここで前から三人の年輩の女の人達が来ました。ところが。

「んっ!？」

先輩が顔を急に顰めさせました。

「ちっち、今のって」

「ですよ」

私も先輩と同じことを感じました。これは。

「わかる!？」

「わからないです」

二人で小声で囁き合って話をします。

「何て言ってるのかしら」

「それよりも先輩」

私は先輩に言いました。驚きを隠せない顔で。

「あの言葉ってまさか」

「そうかもね」

先輩は私に答えてくれました。私と同じ顔で。

「あそこにも大教会あるから」

「ですよ。じゃあ」

「待って。ほら」

その人達をここで見ます。その前から来る女の人達です。三人共半被を着ています。ですからその所属がわかります。半被は本当に便利です。

「半被見ましょう」

「ですね。それじゃあ」

私達は何気なく装って擦れ違うことにしました。その時に女の人達の半被を見るとそこには。青森の方の大教会が書かれています。

第十六話 色々と大変ですその八

「やっぱりそうだったわね」

「はい」

擦れ違った後で先輩に答えました。

「東北の方だったのね」

「最初はひよっとしてって思いましたけれど」

話には聞いていましたけれどあそこまでなんて。物凄くずうずう弁でした。

「青森のあそこ辺りって本当にあんな方言なんですネ」

「そうなのね。私もはじめて聞いたわ」

「あつ、先輩もなんですか」

これは少し意外でした。もう二年もおぢばにおられるから。

「そうなのよ。実はね」

「はあ」

「だから驚いているのよ」

驚きを隠せないのは私もですけど。実は半分以上あの人達が何を話しているかわかりませんでした。本当に凄い方言でした。

「あれがあそこの言葉なのね」

「戦前に活躍したあの作家いましたね」

「自殺した人ね」

「ええ、その人です」

教科書に必ず出て来る人です。それであまりにも有名です。

「あの人の故郷ですよね」

「そうだったかしら」

あれ、習った筈じゃあ。

「覚えてないけれど」

「教科書に載っていませんでした?」

「テストが終わったら忘れたわ」

「そうですか」

そういうことって多いですけどそれでも実際にやるのは。私も数学とかはあまり得意じゃないんで数学の公式を忘れることは多いですけど。

「そうなの。けれどそういえばそうね」

「でしたよね」

「方言って多いのよね、ここ」

全国から人が集まりますから。

「凄くね」

「東北の言葉だけじゃないですよね」

「ええ、勿論」

私だって神戸からですし。先輩だって。

「潤だって岡山じゃない」

「はい」

高井先輩のことです。そういえば一緒の部屋の長池先輩は私と同じ兵庫です。

「九州の子も四国の子もいるし」

「名古屋の方も多いですよね」

「あちこちにあるのよ、教会は」

「でしたね」

それこそ日本全国に津々浦々と。一万七千も教会があります。海外にもあるんでそれを抜いても本当に沢山の教会が日本にあります。

「だからそれだけ方言も」

「多いってことですね」

「一番凄いののはさっきの青森の言葉と」

「あとは？」

「鹿児島よ」

確か鹿児島の方にも大教会がありました。

「特に昔の薩摩弁だけれど」

「どんなのですか？」

「全然わからないわ」

こう言われました。

「何を話しているのか全然ね」

「全然ですか」

「そう、本当に凄いのよ」

真剣な顔で私に説明してくれます。

日本語とは思えない位にね」

「日本語にはですか」

「そうした言葉もあるのよ。覚えておいたらいいかも」

「はあ」

世の中って本当に広いんですね。そんな凄い言葉もあるなんて。さっきの青森の言葉だけじゃないっていうのも驚きですけど。

「あとは。外国の人も」

「あつ、はい」

色々な国から来られています。台湾や韓国といったかつて日本だったところの方も多いんです。

「ですよ。だから外国語も」

「私も考えているんだけど」

ここで先輩は首を捻って考えられます。

「海外布教部に入ろうかしら」

「海外ですか」

「ちよつとそんなことも考えたりね」

天理教は海外布教も盛んであちこちに布教していますけれどこれはまた。先輩がそんなことを考えておられるというのも驚きでした。

「どうしようかしら」

「それで何処にですか？」

私はそれが気になりました。先輩が何処に行かれるのか。

第十六話 色々大変ですその九

「ブラジルなんかいいかしら」

「ブラジルですか」

「日系人の人も多いしね」

「ええ」

これは私も聞いています。プロレスラーのアントニオ猪木さんも元々はブラジル移民だっというのをお父さんから聞いたことがあります。お父さんは猪木さんのファンなんです。

「でもあるし」

「そうなんですか」

「天理大学も勉強して受けようかしらって思ってるけど」

「まだ決めておられないんですか」

「ええ、実は」

そうみたいです。といっても先輩は高校三年生なんですけれど。

「どうしようかしらね」

「ブラジルですか」

「ブラジルって治安が」

これは私も聞いたことがあります。ストリートチルドレンとかも。

「悪いらしいですけど」

「それも承知のうえでよ。日本だって最近はあるじゃない」

「そうですね」

特に地震があつた後の神戸は酷いものでした。一番頭に來たのはあるニュースキャスターが神戸の有様を見て温泉街とか言ったことです。テレビにその人が出たらうちではすぐにチャンネルを変えます。何でテレビで良識派になっているのか不思議なんですけど。

「それにそれを乗り越えてこそね」

「布教なんですネ」

「そう考えだしているんだけどね」

先輩は考える顔で仰いました。

「本当にどうしようかしら」

「他の国はどうですか？」

私はこれを提案してみました。

「台湾とか韓国は」

「それもいいかも知れないわね」

先輩は私のお話にも乗ってくれました。

「本当にどうしようかしら」

「おぢばを出られるんですか」

「そうね。そうなるかも」

それも否定されません。かなり本気みたいです。

「けれどそうなくてもね」

「いいんですね」

「ええ。全部御導きだから」

おみちの言葉が出ました。

「それも受けさせてもらうわ」

「そうなんですか」

「じゃあ。ちっち」

「はい」

「その時まで宜しくね」

「あっ、はい」

急に畏まられてびっくりです。そんな急に。

「こちらこそ。御願います」

「じゃあ。これからね」

今度は私ににこりと笑われてきました。それで。

「参拝しない？」

「参拝ですか」

「ええ。丁度神殿の前だし」

右手には神殿が。前には商店街が。そんな場所に今います。

「どうかしら」

「そうですね。それじゃあ」

そして私も先輩のその言葉に乗らせてもらいました。

「御願います」

「それじゃあ。そういえばね」

ここで先輩はまた気付かれたように仰ってきました。

「何ですか？」

「一年生だから参拝するところは西の礼拝場よね」

「ええ、まあ」

その通りです。そこでいつも参拝しています。

「そうですけれど」

「そうよね。あの頃が懐かしかったり」

「懐かしいですか」

「二年や三年になったらわかるわ」

また笑顔で私に話してくれます。

「その辺りもね」

「そうなんでしょうか」

「そうよ。またね」

「はあ」

「実感ないでしょうね」

今度も笑って仰ってきました。

「まだね」

「やっぱり二年か三年になってからなんですね」

「そういうことよ。そういえばね」

ここで先輩は何かに気付かれたようです。

「はい？」

「礼拝場の階段って大きくないかしら」

不意にこんなことを仰ってきました。

「階段がですか」

「ええ」

それまで笑顔だったのが消えて。暗い顔になっています。

「ほら、礼拝場に入る階段」

私にその礼拝場に入る階段を見るように促しながらお話します。

「あそこ。大きくない？」

「ですよ。確かに」

そして私もそれは同じことを感じました。

「上から見上げられると怖いっていうか」

「そういえばこうも言われているのよ」

不意にまた話が変わりました。

「こうもって？」

「上から見上げる女の人は美人だってね」

「そうなんです。それじゃあ」

低いなりにやってみようかしらって思ったりしました。そんなことを考えながら佐野先輩と二人で参拝したのでした。その西の礼拝場で。

第十六話 完

2008・3・8

第十七話 梅雨ですその一

梅雨です

遂に梅雨です。休みがない六月です。高校に入ってこの六月のしんどさを痛感しました。

おぢばはとても暑いです。盆地なので暑さがこもります。それで大変な目に遭います。冬服から夏服に衣替えしてもその暑さは健在っていう状況です。

その暑さの中で起きて参拝して学校に行つて。それだけでもう充分な暑さです。

「暑いわねえ」

「ほんと」

そんな話を教室で皆でします。それで気が晴れるわけじゃありませんけれどそれでも話をせずにはいられないというのが本当のところなんです。

そんな話をしているところに。男の子の一人が。

「あのさ」

「何かあつたの？」

「ああ、ここ扇風機あるだろ」

「ええ」

天理高校の校舎には扇風機があります。教室の上に二つずつです。青い昔ながらの扇風機がちゃんと置かれているんです。

「俺その他の学校の奴に話したんだよ」

「他の学校？あつ」

ここで私はあることに気付きました。それは。

「そうだったわね。それはね」

「公立だとそんなのないだろ」

「ええ、まあ」

そうなんです。私中学も私立だったから気付かなかったですけれ

どそうですよね。普通の学校には扇風機なんてないんですね。天理高校はそれがあるだけでも随分と違います。

「贅沢言ったって怒られたよ」

「そうよね、やっぱり」

言われて納得です。実はこの男の子は自宅生なんで他の学校の子とも付き合いがあるんです。寮にいとすることも忘れてしまいます。

「ふそくになるわよね、やっぱり」

「ああ、ふそくって言うんだ」

おみちの言葉にもまだ慣れていない感じです。それもわかります。

「そういえばそうか。こういうのって」

「そうなのよ。そうよねえ」

自分で自分に納得しました。私だけで。

「天理高校って随分恵まれているのね」

「滅茶苦茶恵まれていると思うよ」

彼にも言われました。

「設備なんかも凄いいしさ。俺田舎の中学校から来たからよくわかるよ」

「田舎？」

「奈良だよ」

何か奈良県は田舎らしいです。私のイメージでは違うんですけれど。

「奈良の田舎なんだよ」

「そんなに田舎なの？」

「鹿出るぞ」

それって奈良じゃ当たり前じゃないでしょうか。奈良県っていえば鹿ですよね。私にはそんなイメージがあるんですけれど。あの大人しくて可愛い鹿ってイメージです。

「あの憎たらしいな」

「鹿が憎たらしいの？」

「滅茶苦茶憎たらしいよ」

顔を歪めてこう言ってきました。

「あんなの。奈良公園のだけでも腹が立つのに」

「そんなに嫌いな」

「嫌いだよ。当然じゃないか」

当然とまで言っています。本当に何があつたんでしょか。

それでついつい気になって。彼に尋ねてみました。その間私も彼も下敷きを団扇に使っています。とにかく湿気が気になって。そのせいで暑いですから。

「どうして鹿が嫌いな？」

「奈良県民だから」

何か変な返事が返ってきました。

「だからだよ」

「奈良県民だから嫌いって？」

「だからさ。奈良の鹿って酷いんだよ」

今度はこう言われました。鹿が酷いって。

「とてもね。凶暴だし」

「凶暴なの？」

初耳っていうかあの可愛い鹿がですか。聞いていて目を丸くさせちゃうことしきりです。本当のことかしらうって思ったりもします。それ程まで信じられないお話です。

第十七話 梅雨ですその二

「あの鹿が」

「凄いよ。何でも食べるし」

「草食性だった記憶がありますが。」

「子供のお弁当だって雑誌だってね」

「そうなの」

「嘘みたいなお話です。本当に信じられません。」

「食べるし襲い掛かってくるし」

「うわ……」

本当にかなり悪質みたいです。話す彼の顔も顰められて雰囲気まで醸し出しています。見れば表情が少し暗いというかそんな感じにもなっちゃっています。

「そんなに酷いの」

「ちょっと悪戯したら隙を見てやり返してくるしね。悪質なんだよ」それはこっちも悪い気がしますけれど。それでも私がイメージしていたのとはかなり違うのがわかります。聞きたくなかったお話です。

「そんなに」

「だから。嫌いなんだよ」

「あらためてそれを言われました。」

「鹿はね。その鹿の野生のやつが出る程田舎なんだよ」

「そうなの」

「山に行けば熊だって出るしね」

「六甲の奥みたいです。これもまた信じられないことでした。」

「無茶苦茶凄いんだから」

「ううん」

「そんな場所に住んでいるんだ」

「またあらためて言われました。」

「だから正直あれだよ。ここが結構都会に見える時もあるよ」

「ここで都会なの」

また別の子が話に入ってきました。女の子です。この娘も自宅生ですけれど彼女は中学校が天理中学でした。ですから彼とは結構事情が違います。

「ここだつて商店街を離れたら凄いんだけれどね」

「それでも俺が住んでる場所よりはずっと凄しさ」

だそうです。どんなのなんでしょう。けれど鹿の話を聞いてそれが嘘だとは思えなくなっています。

「鹿だぜ、鹿」

「わかるわ、鹿って聞くとね」

彼女も頷くことしきりです。本当に同感なのがわかります。

「同じ奈良県民としてね」

「そうだよ。しかもな」

ここで話が変わりました。

「猿とか熊も出る」

「猿に熊!？」

ちよつと。考えられないお話でした。そんな場所だったなんて。神戸ではそんなのは絶対に生まれません。お猿さんなんてそれこそ動物園とかでだけしか見たことないです。

「そんなのも出るの!？」

「出るさ。猪もな」

「そうなの」

びつくりしたなんてものじゃありません。おぢばじゃ絶対に考えられないことです。当然神戸でもです。本当に凄い場所なんだってことがわかります。

「田舎だつてわかるだろ？杉も多いしな」

「花粉大変でしょ」

「滅茶苦茶大変だよ」

その自宅生の娘に応えて言っています。私は花粉症ではないです

けれどそれでも花粉症はかなり辛いつて聞いています。それで教会に相談に来られる信者さんもおられます。

「見えるんだから。花粉が風に吹かれて」

「うわっ、それはまた」

「そんなのだからな。何かと大変でな」

「困った場所みたいね」

「冬はここよりずっと寒いしな」

またしても衝撃の言葉でした。おぢばより寒い場所があるなんて東北とかならともかく同じ奈良県でそんな場所があるんですね。これも驚きです。

「夏は涼しいかな」

「そうなの」

「ああ、雨は同じだぜ」

ただこう付け加えてきました。

「同じだけ降るからな」

「そうなの」

「それでも。ここよりは幾分涼しいからな」

そう言いながら上を見上げています。そこにあるのは扇風機です。暑い時はやっぱり助かります。けれどこれがない学校も多いって思うと複雑な気持ちになります。

「助かるよ」

「ここじゃ困るのね、やっぱり」

「痛いところ言うな、おい」

彼女の言葉に苦笑いになっています。

「こんなに暑いなんて思わなかったよ、正直」

「夏もつと暑いわよ」

私は彼にこう言いました。今まで聞いていましたけれどこれは自然に言葉が出ました。

「もつとね」

「えっ、そうなんだ」

「だって。夏は梅雨より暑いものよ」

まあ当然ですけど。本当におぢばの夏は。

「それこそ。うだるみたいに」

「そんなに・・・・・・」

私の話を聞いて絶句してしまいました。悪いことしたのかも。

「おぢばがえりの時なんか特にね」

「そうよねえ」

自宅生の彼女も私の言葉に頷きます。

「凄いななんてものじゃないから」

「湿気も凄いし」

「夏が嫌になってきたよ」

もうこんなお話になっちゃいました。おぢばの夏を知っているとこの言葉が余計に響きます。とにかくうだるみたいに暑いんですから。

第十七話 梅雨ですその三

話をしていると。教室の窓には。

「うわっ、言ってる側から」

「降ってきたわよ」

「えっ!？」

二人の言葉を聞いてすぐに窓に顔を向けるとそこには。もっと嫌な嫌な気持ちになりました。

「何よ、あれって」

「雨じゃない」

「見ればわかるだろ」

「そういうことじゃなくて」

私が言いたいことはそういうことではありません。問題は雨が降っている。そのことなんです。どうして言っているその側からこんなことに。

「傘、持って来てないのに」

「そうだったの」

寮に置いてきたんです。失敗でした。

「それなのにどうして」

「それってまずいんじゃないの？」

自宅生の女の子の言葉です。

「ここから東寮までって結構距離あるわよね」

「ええ」

その通りです。少なくとも雨の中を歩くには嫌な距離です。簡単に濡れてしまう位の。その距離のことを考えるだけでまたいや々な気持ちになります、本当に。

「下校までに止んでくれたらいいけれど。さもないと」

「さもないと？」

「夏服じゃない」

問題は濡れるだけじゃないんです。それもかなり問題なのは言うまでもないことですけれど。

「だから濡れたら」

「ああ、そうね」

女の子は私の言葉で察して納得した顔で頷いてくれました。けれど男の子の方は何が何なのかわからないといった顔できょとんとしています。

「！？何が？」

「ああ、わからなくていいわよ」

彼女が彼に言ってくれました。

「別にね」

「そうなんだ」

「そういうこと」

上手くこの場をフオーしてくれました。まさか濡れたらブラウスが透けちゃうなんて。何があっても男の子に言えることじゃないです。そういうことです。

「とにかく。また降るなんてね」

「昨日もその前の日も」

雨だったんです。雨ばかりみたいなの。

「降ったのにな。本当に奈良県って雨が多いな」

「ぼやいても仕方ないけれどね」

それはその通りです。こればかりはどうしようもありません。

「まあ雨ってね」

彼女が言いました。

「これはこれで。お米が育つし」

「飲み水にもなるわね」

私もそれに合わせて相槌を打ちました。

「そういうこと。降ってくれないと困るものよ」

「そうなのよね。何か昔のおぢばは」

これは聞いたお話です。

「降らない時は全然降らなかったらしいけれど」

「そうなんだ」

「ほら、教祖伝にもあるじゃない」

おつとめをしてそこだけ雨が降ったっていう不思議なお話があります。奈良県は雨が多いイメージがありますが必ずしもそうではないみたいです。

「だからダムだつてできたしね」

「そんなに困つてたんだ」

「あんた、天理市は住んでいないのよね」

自宅生の娘が彼に問い掛けました。

「そういえば」

「だから奈良のと田舎だつて。ここに来たのだって高校受験の時がはじめてなんだよ」

「だから知らないのね」

「ああ、悪いけれどな」

別に悪くはないですけど。ただ奈良県ってそんなに地域ごとによつて違うんでしょうか。結構大きな都道府県だつてイメージはあるんですけど。

「最初にここに来て何て長い商店街だつて思ったしな」

「あそこはね」

自宅生の通学路でもあります。とにかく長いんです。

「また特別にね」

「あそこ通つて二日かけてテスト受けてな」

その間私みたいな子は詰所に泊まって受けていました。それを考えると地方から帰る子というのはかなり手間がかかります。これが北海道や沖縄になるとそれはもう、です。

「これで落ちたら洒落にならないなつて思ったよ」

「それでも受かったのね」

「ああ。ついでに思ったことはな」

「何なの？」

今度は私が彼に尋ねました。

「いやな、ブスが多かったらどうしようかなくて」

「多いうて言ったらはったおすわよ」

自宅生の娘の言葉です。顔は少し笑っていますけれどそのオーラも目も本気のものでした。本当にはったおすつもりなのがわかります。

第十七話 梅雨ですその四

「だから。美人が多くてよかつたら」

「宜しい」

お世辞かも、ですけどこう言われて誰も悪い気はしません。

「素直、正直はいいことよ」

「女の子とレディーとお婆さんには嘘はつかないんだよ」

つまり女性全般には、ということですね。凄くわかりやすいです。

「だってよ。天理教って」

「何？」

「女の人かなり強いんだろ？それは聞いた話だけだよ」

「事実よ」

自宅生の娘が彼にはつきりと告げました。そう、これって本当のことなんです。

「だって。教祖が女性の方だし」

「だよね」

「婦人会に女子青年に。それに」

「天理高校でも女の子強いよなあ」

数はあまり多くはないですけど。何故か女の子の力が強いってイメージがあるみたいです。実は私にもそのイメージはあるんですけれど。

「逆らったら生きていけないって雰囲気を感じてるよ」

「また大袈裟な」

「大袈裟じゃないよ」

こう反論してきました。

「だって本当に。凄い力あるじゃない」

「そうかしら」

「特にね」

ここで何故か私の方に顔を向けてきました。どうしてここで私な

んでしょうか。それが心の中でふそくを感じさせるものになりましたけれど内緒です。

「東寮の人達はね」

「私達なのね」

「そうだよ。団結力凄いじゃない」

「そうかしら」

それを言われても首を傾げるだけしかできません。だって私にはその実感がありませんから。東寮の中でも色々とありますから。

「自覚ないの？だって一人に嫌われたら百人に嫌われるんでしょ？」

「百人って」

また何か。変な動物みたいに。大体東寮で百人といえbaumうかなりの数なんですけれど。一年全体でもそこまできいるかしら、って思う位です。

「そんなに嫌われないわよ」

「そうかな。俺この前さ」

「何したの？」

「ええと、三年のさ」

まさかとは思いますがけれど三年の人と何かあったんでしょか。だとするとかなり怖いことなんですけれど。東寮じゃ先輩、特に三年の方って凄い力ありますから。

「髪が茶色でふわふわした感じで」

「ええ」

茶色ですか。とりあえずこう思ったただけでした。

「色が白くてね」

「色白なのね」

何かどうかで聞いた気が。彼の話を聞いて思いましたけれどこれも口には出しませんでした。

「目が垂れ目気味できらきらした感じで。綺麗な人だったけれど」

「長池先輩じゃない」

ここで出て来るなんて。どんないんねなんでしょう。まさかと

は思いましたけれど。

「ああ、長池先輩っていうんだ、あの人」

「そうよ。私と一緒に部屋の人なのよ」

「そうだったんだ」

今度は彼が驚く番でした。これは信じられないって感じで。

「けれどそれでだったんだ。ちつちと仲良くしてあげてね、って言われたのは」

「長池先輩に？」

「うん、実は昨日さ」

お話が昨日に関するものに遡ります。それで場所は。

「商店街の本屋で立ち読みしていたらさ」

「駅に近い方？」

「そうそう、そこそこ」

あそこのお店ですか。かなり古い本屋さんで色々な漫画があります。何か男の子達が聖闘士星矢とか懐かしい漫画を読んでいるのをよく見ます。

「それでさ。ゴルゴ13読んでたら御会いして」

「ゴルゴなの」

また渋いと思いました。あの主人公が他の人の漫画に出たら絶対変ないじられ方をしているのは気のせいでしょうか。それが大好きなんですけれど。

「ちつちを宜しくねって言われたんだよ。俺の名前も出されてね」

「名前まで」

「俺のこと寮でも有名になってるの？」

今度はこう尋ねてきました。

第十七話 梅雨ですその五

「いえ、別に」

それは否定しました。本当のことですし。

「それはないわよ」

「そうなんだ」

「けれどあれよ」

ここから話すことは本当のことです。何か隠す必要もないことなのでお話させてもらいました。

「男の子のことも結構話すわね」

「そうか、それでなんだ」

「まあそうかも。男の子のことならあれよ」

これはかなり重要です。東寮には言うまでもなく一年生から三年生までが揃っています。つまり全部の学年が揃っているわけです。それはつまり。

「全部の学年の話になってるから」

「全部の学園なんだ」

「そうよ、全部を」

それをまた伝えます。

「私はまあ。聞いてるだけだけれどね」

「じゃああれなんだな」

彼は私の話を聞いて腕を組みました。それから考える顔をしながらの言葉になりました。

「俺のことだけじゃなくてクラスの皆のことも」

「全部のクラスの男の子の話になってるわよ」

「誰がいいか誰が悪いかな」

「まあそうなるわね」

女の子が集まれば何のお話をするか。それはもう言うまでもありませんよね。女の子だって人ですから。男の子のことが気になるん

です。

「それで先輩も知っておられたのよ」

「そうだったんだ」

「それにあれじゃない」

もう一言言い加えました。

「あれって？」

「クラスの徽章でわかるじゃない」

それを教えさせてもらいました。天理高校も徽章で学年やクラスがわかるようになっていいるんです。私もそれをよく見て何処の誰かチェックします。

「だからよ。わかったのよ」

「千里ちゃんと同じクラスなんだって」

「そういうことね」

自宅生の女の子がここで私の言葉に頷いてくれました。グッドタイミングです。

「よく考えたら名前以外はすぐにわかることね」

「そうよね。ただ」

それでもふと気付きました。あることに。

「先輩顔まで知っていたんだ」

「チェック深い人なんだな」

その知られていた彼自身の言葉です。

「男前は逃がさないって？」

「馬鹿言いなさい」

自宅生の娘の容赦ない突込みがすぐに入りました。切れ味も見事なものです。

「たまたまでしょ。悪事で有名でなければ」

「そうかね」

「そうよ。長池先輩のことは私も聞いてるけれど」

彼女も何気に。情報が早いです。

「綺麗な人らしいわね。怖いっても聞くけれど」

「怖くないわよ」

それは私が否定しました。

「凄く優しい方よ」

「そうか？」

「そうよ。何か誤解されてるっぽいけれど」

「綺麗な人だけだな」

それは彼も認めていました。とにかく先輩ってお綺麗で。最初見た時はお人形さんみたいって思いましたし本当に芸能事務所からスカウトされそうなんです。

「それでも。冷たい感じがするし」

「そう？」

そう聞いてもわかりません。私はそうは思えないんで。

「私はそれは」

「感じないんだ」

「一緒に部屋にいるのよ」

まずはこれを前提にしました。ですから先輩のことはそれなりに知っているつもりです。一緒に部屋にいと色々なことがわかりますから。

第十七話 梅雨ですその六

「それでわからない筈ないじゃない」

「そうだよ。そういえば」

「そうよ。優しくて静かな方よ」

「聞いた話だと結構騒がしいところもあつて怖いってことだけれどな」

「そんなのないけれど」

「また言われましたけれどやっぱりわからなくて首を傾げます。」

「どうしてそんな話になるのかしら」

「俺に言われても」

「他の子もそんなこと言うし」

「どういうわけかそうなんです。先輩みたいな優しい方が一緒の部屋でよかつたつて思っているんですけれど。誤解を受ける人でもないですしそれが不思議です。」

「どうしてかしら」

「誤解も広まることがあるからね」

「彼は今度はこう私に言ってきました。」

「だからさ。仕方ないんじゃない？」

「それでもよ」

「私は今度は腕を組んで顔を顰めさせてから首を捻りました。」

「先輩がお気の毒よ」

「お気の毒って」

「だってそうでしょ？」

「また彼に言います。」

「誤解されて。本当の先輩を知って欲しいのよ」

「まあまあちつち」

「ここでもう一人いる自宅生の女の子が私に声をかけてきました。何？」

「そんなに気にすることはないわよ」

「こう言ってきたのでした。」

「どうして？」

「だって。誤解なんですよ」

「それを私に言ってきました。」

「それだったら。何時か晴れるわ」

「誤解がなのね」

「そうよ。だから誤解なのよ」

「これが彼女の言葉でした。」

「だってあれじゃない。天理教も最初は随分誤解されたわよね」

「ええ」

明治の頃政府から色々弾圧されたんです。これは私が思ったことですけどその内容が言い掛かりみたいなので。大変だったのがわかります。

「それはね。酷かったわよね」

「そうよね。けれど誤解は」

「私はそれでも言いました。」

「何時かきつと晴れるものだしね」

「じゃああれなんだ」

「彼がここでまた言ってきました。」

「その長池先輩への誤解もなんだ」

「私はそう思うけれど」

「それをはつきりと言いました。」

「だから。本当に優しい人なんだから」

「そうかなあ」

「一度お話してみたら？ 凄く繊細な人だし」

「いいところばかりだな、何か」

彼は私の話を聞いてこう呟きました。けれど私が見る先輩は本当にそうなんです。二ヶ月同じ部屋にいるからかなりわかってるつもりです。

「長池先輩って。まあ綺麗だけれど」

「そこなのね」

「まあそれは」

その話を振られると困った顔になってきました。彼も。

「気にしないで。スルーってことで」

「スルーって」

「それに綺麗なのはいいいことじゃない」

「確かに先輩凄い綺麗な方だけれど」

「それを褒めるのが悪いことなのかい？」

それをまた言ってきました。何か少し居直っている感じです。

「綺麗なのはいいいことじゃないか」

「顔じゃなくて性格が綺麗だったらもっと思っただけけれど」

私はそれをふと思いました。言葉にも自然に出ます。

「そこはどうなの？」

「それは勿論」

わかっているみたいです。それを聞いて少しひっとしたのは事実です。

「ちゃんとわかってるよ」

「わかってるのならいいけれど」

「それでもあれだろ」

それでもここで反論してきました。私に。

第十七話 梅雨ですその七

「心が綺麗なのはそう簡単にはわからないだろ」

「それはまあ」

確かにそうです。顔だつてぱつと見てもハンサムじゃないのによく見ると、っていうのはありますよね。私もそれで俳優さんの好みが変わったりもします。

「そうだけれど」

「だから大変なんだよ。その長池先輩だつてな」

「まだ綺麗だつてわからないって言いたいよね」

「そういうことさ。ちっちはいい人だつて言うけれど」

「一度会ってみる？それじゃあ」

「いや、それは」

「いいって言います。拒む感じです。」

「別にさ。いいよ」

「けれど会わないとわからないわよ」

「会わないとか」

「だから。御会いしてみる？」

それをまた彼に提案してみました。

「よかつたらだけれど」

「ああ、別にいいよ」

けれど彼はまたそれを断ってきます。何か話が堂々巡りになってきたような。

「それはさ」

「そうなの」

「ああ。気持ちは有り難いけれどね」

「わかつたわ。それじゃあ」

話はこれで終わりました。それでふと教室の窓を見てみると。やっぱり雨が降っています。あまり強くはないですけど降っている

ことには変わりません。

「今日は一日中こんなのかしら」

「体育は体育館かビデオね」

「そうね」

「ラグビーのビデオかな」

彼はふとこう呟きました。

「今日も」

「ラグビーの？」

「うちの学校っていえばラグビーじゃない」

「ええ」

天理高校ラグビー部は野球や吹奏楽と並んで全国クラスです。真つ白のユニフォームがトレードマークです。けれど部員の体格は普通です。

「だからよく観るんだよ」

「そうだったの」

「まあ体育の時間女の子見ても面白くないしね」

「それってどういうこと？」

「だって。ジャージじゃない」

それを言われました。天理高校では体育の時間は男の子も女の子もジャージなんです。スパッツとかそうしたものはありません。昔からブルマーなんてのもなくてそういう手の変な人達の視線や盗撮を気にする必要はないのです。確かに私はともかく先輩達がそんな格好したら大変なことになってしまいうけれど。これは女の私でもわかります。

「見ても面白くとも何ともないよ」

「随分本音を出したわね」

「嘘は言わないよ」

どうなんだか。それを聞いて心の中で思いました。

「こういうことにはね」

「限定なのね。それにしても湿気が強いし」

次に考えたのはそれでした。

「何かと大変なことになりそうね。汗で」

「蒸すからね。この季節」

自宅生の娘がこう言ってきました。

「水泳だったらよかったのに」

「そうよね。泳ぐのって気持ちいいし」

「そうそう」

「ここのプールって設備いいしね」

また彼が言ってきました。

「雨でも泳げるし」

「水着もいって言われているわ」

私はこう彼に答えました。

「実際に着てみたら。けれど」

「けれど？」

無意識のうちに顔を曇らせた私にすぐに突っ込んできました。

「あの水着、私はちよつとね」

少し困った顔をして答えました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5967c/>

おちばにおかえり

2010年10月13日13時35分発行